

研

究

紀

要

発達連続性をふまえて経験の意味を問う

よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方



平成25年度

高知大学教育学部附属幼稚園

はじめに

「雨ってすごいね。ボクのお目目はこんなに小っちゃいのに、ちゃあんと入って来れる！」—これは、4歳の子どものつぶやきです。園外保育で寒い雨が降り出し、教師が子ども達を近くの建物に誘導している時、ぼかんと空を見上げていた子どもから出た言葉でした。この言葉をきっかけに、子ども達は次々に空を見上げ、「本当だあ」と言い始めました。子ども達が寒かろうと、気忙しく働きかけていた大人も、ふと立ち止まり、子ども達の会話に耳を傾けたことでした。

このたびの本園の研究テーマは「発達の連続性をふまえて経験の意味を問う—よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方」です。本研究に取り組む前に、私達は「よく考えて行動する子どもを育む園生活のあり方」について検討し、「よく考えて行動する子ども」に育つ幼児期の姿を、3つの側面と3つの段階の計9枠から捉えました。そして、その9枠をふまえて、たくさんの事例やエピソードを検討し、あらためて、よく考えて行動することに対する芽生えの発話や行動を確認することができました。

上の発話は、そのうちのひとつです。自分なりに身近なものに対してその性質やしくみについて感じたり考えたりする4歳児らしいつぶやきであるように思います。つぶやきの内容もさることながら、それが発せられた局面やタイミングなどについても、私達教師はしばしば驚かされました。そのような事例の研究を楽しんだものです。

今回の研究テーマは、そのような研究を土台にし、さらに焦点を“行事”に絞りました。行事は園生活の節目やハレの場にあたるものとして、園生活において重要な位置にありながら、ともすると、日頃の幼稚園生活とは切り離して捉えられがちです。しかし、幼児は、日常的な生活と非日常的な行事が組み込まれた教育課程で学び、成長していきます。とすれば、それぞれの学年に応じて、あるいは次の段階に向けて、日常と非日常のそれぞれの経験の意味と連続性を捉えていくことが重要でしょう。

このような観点から、私達は5年間にわたって、「よく考えて行動する子ども」という大きなテーマのもと、幼稚園における日常生活と行事の関係を見通しつつ、エピソードを検討してきました。本研究をご覧いただき、主体的に園生活を送りながら、学年に応じて“行事”を誇らしくやりとげていく子ども達の姿を見ていただければ幸いです。

最後になりましたが、本研究にあたり、上田淑子先生（現甲南女子大学）をはじめ、ご指導・ご助言いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

高知大学教育学部附属幼稚園
園長 山中 文

目次

はじめに

第1部 研究の概要	1
第1節 研究の動機	
第2節 研究の目的	
第3節 研究の方法	
第4節 研究の経過	
第2部 行事のエピソード	9
新入園児の出迎え	9
水遊び・プール遊び（プール参観日）	15
・年少組	
・年中組	
・年長組	
運動会	41
・走る	
・投げる	
・引っ張る	
・競技	
・ダンス	
お店屋さんごっこ	69
・年長はと組	
・年長さくら組	
・年中うさぎ組	
・年中うめ組	
・年少もも組	

クラスのみinnで表現遊び（最後の参観日）	101
・年少もも組	
・年中うさぎ組	
・年中うめ組	
・年長はと組	
・年長さくら組	

卒園に向けて	137
・レストランごっこ	
・お別れ遠足	
・お別れ会	
・卒園式	

第3部 研究の成果と今後の課題	169
-----------------	-----

第1節 研究の成果

第2節 今後の課題

おわりに

第1部

研究の概要

第1部 研究の概要

発達連続性をふまえて経験の意味を問う

～よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方～

第1節 研究の動機

理論の具体化へ

本園では、平成13～16年度、“道徳性の芽生え”に視点をあてた教育課程の作成を行いました。それにより、入園から卒園まで子どもが育つ道筋を大まかに捉えることができ、長期の育ちを見通したうえでの援助や環境構成について明らかにすることができました。そして、教育課程や月別指導計画にもとづいて、個々では日々の保育の計画・反省を行っていくことができました。しかし、その反面、教員相互で保育について振り返り、子どもの姿や援助や環境構成はどうだったのか、今日の経験がゆくゆくはどのような育ちにつながっていくのかなど、日々の保育について具体的に話し合う機会が少なくなっていました。

また、あわせて、教育目標を見直し、「よく考えて行動する子どもを育てる」と設定し、めざす子ども像も「よく考えて行動する子ども」と置きましたが、そのような子どもとはどのような姿を指すのか、またどのようにすればよく考えて行動する子どもを育むことができるのか明確にできていませんでした。

そこで、平成17～20年度にかけて、入園から卒園までの間にどのような道筋でよく考えて行動する子どもが育つのか、そのためにどのような援助をし、どのような環境構成をすればよいのか、改めて研究することにしました。そのなかで、教員間で、育ちにあった“よく考える”とは何かということについて、共通理解をすることができました。そして、よく考えて行動する子どもを育てるために、各時期に応じて何を大事にすればよいのか、大まかなポイントがわかりました。しかし、今後それぞれの教員のよさを生かしつつ、附属幼稚園らしい保育をすることができるように、幼児理解や援助、環境構成などについてさらに研究したいと考えました。

以上から、本研究においては、これまでの教育課程やめざす子ども像等の理論的枠組みの研究をふまえ、さらに、課題となっている、日々の保育への具体化やそれらの教職員間の共有化をはかりたいと考えました。そして、日々の保育の中で子ども達の遊びにはどのような経験の意味があり、ゆくゆくはどのような育ちにつながっていくのか、発達連続性をふまえ、経験の意味を捉えた具体的な保育実践のあり方を研究していくことにしました。

“行事”の経験の意味を見直す

日々の保育をもっと具体的に話し合いたい、経験の意味や発達連続性を明らかにしたいと考えているとき、浮かび上がってきたのが毎年行う“行事”でした。これまでは、教職員会で行事の役割分担、スケジュールなどを、綿密に提案したり、行事の後には反省したりするものの、どちらかという段階

取りのなことに終始してしまい、行事ひとつひとつのねらいや、年少、年中、年長とそれぞれの学年での経験がどのように育ちにつながっていくのかといったことについては、あまり話し合われていませんでした。「なぜ、この行事を行うのだろうか」「行事のねらいや内容はこれでよいのだろうか?」「行事が“かたち”だけつながるのではなく、年少、年中、年長に受け継がれていく“経験の意味”を考える必要があるのではないだろうか」といった意見が出されました。

そこで、行事のあり方を見直していくなかで、年少、年中の行事で経験していることが、年長の経験にどのようにつながっていくのか、あるいは年長の行事でこのような育ちが見られるためには、年少、年中でどのような経験をするべきなのかというふうには、発達の連続性をふまえたうえで、行事のなかでの経験の意味を明らかにすることにしました。

その際、本園のめざす子ども像である“よく考えて行動する子ども”について大事にしたいと考え、研究テーマを“発達の連続性をふまえて経験の意味を問う～よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方～”としました。

第2節 研究の目的

- ◇行事のねらいを年少、年中、年長と発達の連続性をふまえて見直し、保育を実践し、エピソードを記録、検討し、再度、行事のねらいを見直していくようにすることで、行事の経験の意味を明らかにしていく。
- ◇“よく考えて行動する子ども”をめざして、行事の経験の意味をふまえた具体的な環境構成や援助を明らかにする。
- ◇本園の行事のあり方を再確認したり、明らかにしたりする。

以上を、教員間で共有化していくことを研究の目的としました。

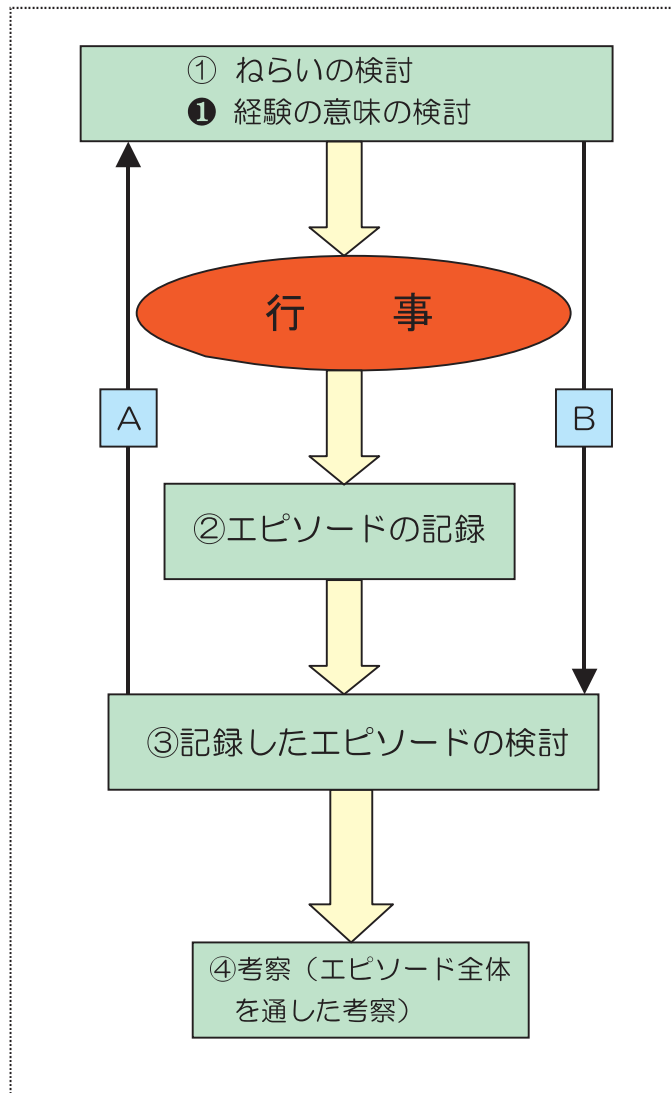
第3節 研究方法

(1) 行事を分類・数値化し研究計画を立てる

まず、年間行事を表①の項目に分類しました。そして研究計画を立てるにあたって、子どもにとっての経験の重さや検討する優先度合いを表す数値を10点満点でつけていきました。その結果、新入園児の出迎え、水遊び・プール遊び（プール参観日）、運動会、お店屋さんごっこ、クラスのみんなで表現遊び（最後の参観日）、卒園に向けて（レストランごっこ、お別れ遠足、卒園式など、卒園に関連する行事をまとめたもの）の6つを研究することにしました。

表一① 〈年間のおおよその行事〉

	通年	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運動する楽しさを広げる行事						水遊び・プール遊び(プール参観日)	運動会					
大きくなった自信や誇りをもつ行事	誕生会	新入園児の迎え(年長)		お泊り幼稚園(年長)					お店屋さんごっこ(年長)		レストランごっこ(年長)	卒園式(年長)お別れ会(年長)
年長組に憧れや感謝の気持ちをもつ行事									お店屋さんごっこ(年中・年少)		レストランごっこ(年中・年少)	お別れ会(年中・年少)
季節の行事			こいのぼり		たなばた夏のお楽しみ会				冬のお楽しみ会	親子もちつき 焼き芋	豆まき	雑祭り
自分の身体や健康に興味をもつ行事	弁当		耳鼻科検診 内科検診 歯磨き教室 身体測定	歯科検診 内科検診	身体測定		身体測定	歯磨き教室	身体測定		身体測定	
安全に関する行事	避難訓練	保護者交通教室	交通教室						交通教室(年長)		防犯教育	
家庭と連携を深める行事		PTA総会	家庭訪問 クラス会 自由参観日	日曜参観日		祖父母参観日(年長)		参観日 クラス会	個人面談		クラスのみんなで表現遊び(最後の参観日)(年長・年中)	クラスのみんなで表現遊び(最後の参観日)(年少)
園外の自然や地域社会にふれる行事			親子遠足	芸西村収穫体験(年長)		祖父母への手紙を出す		遠足・芋掘り街路市(年長)		高知県警察年頭視閲式		お別れ遠足
節目としての行事		始業式 入園式			終業式	始業式			終業式	始業式		修了式
絵本に親しむための行事	絵本の貸し出し				絵本屋さん				絵本屋さん			
四附属校園連携行事							附属小運動会参加(年長)	附属小学校への一日入学(年長)	附属まつり	親子もちつき(特別支援学校高等部と一緒に)		



図一① 〈研究方法のおおまかな流れ〉

(2) エピソード研究 (図一①参照)

(2) - 1 ねらいを立ててエピソードを記録する

はじめに、行事のねらいを検討 (①) しました。そのねらいをもとに、行事に取り組み、その後でエピソードを記録 (②) しました。そして、記録したエピソードに、教師としての意図、子どもの気持ちの捉え、反省など (文中では“エピソードより”と表記) を付け加えて、ねらいをもとに全員で検討 (③) を行いました。

エピソードを検討するなかで、ねらいを見直したり (A)、反対に、ねらいからエピソードを見直すと、援助や環境構成がどうだったろうかと検討したり (B) しました。

(2) - 2 ねらいを詳しく、“経験の意味”として表す

研究を始めた21年度は、ねらいは箇条書きで表していましたが、研究を進めるうちに、なぜ、そのねらいを立てたのかについて、背景をふまえて詳しく説明する必要があることに気づきました。そこで、本園では、子ども

の育ちをどのように捉えて、行事のなかで何を大事にして、どのような経験をさせたいのか、“経験の意味”として、行事毎の最初（ねらいの手前）に表記する（①）ことにしました。このようにすることで、ねらいの背景となる内容を具体的に表すことができ、研究テーマ（“発達の連続性をふまえて経験の意味を問う～よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方～”）が見直しやすくなりました。

(2) - 3 行事ごとに考察をする

行事ごとの経験の意味、ねらい、エピソード、エピソードの反省すべてを含めて、行事のエピソード全体を通じた考察（④）をしていきました。そのなかで、各クラス、学年ごとで取り組んでいる行事が、園としてどのようなことを大事にしていくべきか確認したり、行事の取り組み方を見直したりするなど、大きな視点で考察するようにしました。

第4節 研究の経過

平成21年度

研究テーマ設定 研究の計画

最初に研究テーマを設定し（P1参照）、行事を分類・数値化し、研究したい行事を選び、研究計画を立てました。（P2～P4参照）

行事の検討(表-②参照) ・こいのぼり

どのようにエピソードをとり、研究を進めていくか探るために、5月に取り組んだこいのぼりについて、エピソードを記録し、全員で検討を加えていきました。

・運動会

運動会について、これまで立てられていたねらいを検討し、新たにねらいを考え直し、エピソードを記録していきました。

平成22年度

行事の検討 ・こいのぼり

前年度に取り組んだこいのぼりの製作についてのエピソードが、こいのぼりの取り組み後にエピソードをとることが決定したので、子どもの姿が具体的に表せていなかったという反省をもとに、もう一度、こいのぼりについて、エピソードを記録し、検討を行いました。（その後、こいのぼりのエピソードについては、製作についての取り組みがほとんどであり、園の参考資料としてはよいが、研究資料としては向かないということになり、紀要には載せないことにしました。）

・水遊び・プール遊 び(プール参観日)

水遊び・プール遊び(プール参観日)について、まず、指導計画や教育課程などを参考にねらいを立て、そのねらいを検討するためのエピソードを記録していきました。

・運動会

運動会については、前年度に立てたねらいでは具体性がなく、実際にどこまでねらったらよいのかわかりにくかったので、種目ごとにねらいをたてました。そして、そのねらいをもとに保育を行い、エピソードを記録し、学年の枠を外して種目ごとにエピソードをまとめるようにしました。前年度のエピソードの中から、ねらいに見合ったものをいくつか取り入れるようにしました。

平成23年度

行事の検討

・新入園児の出迎え

新入園児の出迎えについて、エピソードを記録し、検討しました。

行事ごとの経験の意味を表す

・水遊び・プール遊び
(プール参観日)

水遊び・プール遊び(プール参観日)については、記録したエピソードやねらいを検討するなかで、「ねらい・内容」に具体性がないことや、ねらい自体も、自分達が保育のなかで大切にしていることと合致しているのかといった疑問点が出されました。そこでもう一度、「ねらい・内容」を見直し、「ねらい・内容」を説明する文章を“経験の意味”として付け加えることにしました。(以降、紀要に載せている6つの行事には、すべて“経験の意味”を文頭に載せています。)

・運動会

運動会については、高知県教育委員会よりご指導をいただき、種目ごとのねらいについて見直しました。

・クラスみんなで
表現遊び(最後の
参観日)

クラスみんなで表現遊び(最後の参観日)については、経験の意味を検討してから、エピソードを記録、検討するようにしました。

平成24年度

行事の検討

・クラスみんなで
表現遊び(最後の
参観日)・運動会

クラスみんなで表現遊び(最後の参観日)について、引き続きエピソードについての検討を行いました。また、運動会の経験の意味についても検討を行いました。

・お店屋さんごっこ
・卒園に向けて

お店屋さんごっこと卒園に向けてについては、経験の意味及び「ねらい・内容」を検討し、エピソードを記録、検討しました。

行事ごとに考察を 付け加える

行事ごとの考察がなされていなかったため、最初に水遊び・プール遊び(プール参観日)について、エピソード全体を通じた考察を行いました。

平成25年度

行事の検討とまとめ

お店屋さんごっこ、卒園に向けてについて、引き続きエピソードの検討を行い、エピソード全体を通じた考察についても検討を行いました。また、新入園児の出迎え、クラスのみんなで表現遊び（最後の参観日）、運動会について、エピソード全体を通じた考察について、検討しました。

研究の成果
今後の課題

“研究の成果”と“今後の課題”について、検討を行いました。

表一② 〈研究の流れ（行事のみ）〉

	新入園児の出迎え	水遊び・プール遊び (プール参観日)	運動会	お店屋さんごっこ	クラスのみんなで表現遊び (最後の参観日)	卒園に向けて
平成21年度			・ねらいの検討 ・エピソードの記録及び・検討			
平成22年度		・ねらいの検討 ・エピソードの記録及び検討	・エピソードの記録及び検討 ・種目ごとのねらい検討			
平成23年度	・エピソードの記録 ・経験の意味検討	・エピソードの記録及び検討 ・経験の意味検討	・種目ごとのねらい検討		・経験の意味検討 ・エピソードの記録・検討	
平成24年度		・エピソード全体を通じた考察の検討	・経験の意味検討	・経験の意味検討 ・エピソードの記録及び考察・検討	・エピソードの記録・検討	・経験の意味検討 ・エピソードの記録及び考察・検討
平成25年度	・エピソード全体を通じた考察の検討		・エピソード全体を通じた考察の検討	・エピソード全体を通じた考察の検討	・エピソード全体を通じた考察の検討	・エピソード全体を通じた考察の検討

第2部

行事のエピソード

エピソードの中の名前は
すべて仮名です。

新入園児の出迎え

新入園児の出迎えの経験の意味

本園では、年長児が小さい組のお世話をすることで自信や喜びの気持ちをもったり、小さい組への思いやりの心が育まれたりするために、毎年、新入園児を門で出迎え、保育室まで連れて行き、朝の身支度の手伝いをするという取り組みをしています。4月いっぱいをめどにし、その後も出迎えを続けていたい人は続けるというふうにしています。

年長児は、門のそばにあるベンチに座って新入児を待ちます。門を入るとすぐにベンチに座って待っている子どももいれば、仲よしの3人が一緒になって「3人で一緒に（お迎え）する」と言って待っている子ども、どうやって小さい組に声をかけたらいいのだろうと少し緊張気味の子どももいます。

新入児が登園してくると、門のところにいる副園長が「小さい組さん来たから、お願いね」と年長児に声をかけ、手をつなぐように促します。「何組さん？」と元気に声をかけて連れていく年長児もいれば、新入児が手を出してから、おずおずと手を差し出す年長児、勇気を出して手を出したのに「お母さんがいい」と手を後ろに回して母親にくっついてしまわれて戸惑う年長児もいます。「じゃ、お母さんと3人で行こうか」と副園長が言葉を添えると手を出し、3人で行くこともありますが、それでも一緒に行くことをいやがられてしまうこともあります。自分は親切のつもりで、どきどきしながらしたことが拒否されるということは、年長児にとっては大きな戸惑いだと思われれます。逆に、出



迎えはしたくないなという様子だった年長児が新入児のかわいい手に触れ、うれしそうにされて、誇らしげに連れて行くこともあります。

このように新入児を出迎えるなかで、子ども達一人一人の心情が垣間見えますし、様々な心のゆれの経験もします。教師はつい「お迎えありがとう。また明日もお願いね」とどの子どもに対しても同じようにかかわりがちですが、年長児にもそれぞれにいろいろな思いがあること、お迎えをされる新入児もうれしいばかりではないなど、一人一人が経験しているであろう心情に思いを寄せた、きめ細やかな声かけ等の援助が大切だと思います。



Episode

平成23年度

エピソード① 出迎えをするにあたって

入園式の翌日、明日から年長児が出迎えを始めるということで、降園時に担任からその話をすることにした。まずは、自分が年少や年中だった頃（新入時）、年長のお兄さんお姉さんに、手をつないで自分の保育室まで連れて行ってもらったことを思い出させ、どんなことをしてもらったのか、どんな気持ちだったかを聞いてみた。「手をつないでもらった」「エプロン（本園の制服）を脱がせてくれた」「うれしかった」などと言う言葉が返ってきた。そこで今度は自分達が小さい組の出迎えやお世話をする番であることを伝え、「小さい組の新しいお友達をお部屋まで連れて行ってあげたら、何してあげるかなあ」と聞いてみた。すると、「シール帳にシール貼る」「エプロンはずしてあげる」「タオルを掛けてあげる」など朝自分達がしていることが次々と出てきた。「シールは貼ってあげるの？」と聞き返すと、「貼るところを教えてあげたらいい」と言っていたので、「タオルも掛けてあげる？」

と聞くと「掛けるところを教えてあげる」と返ってきた。「小さい組のお友達が、自分でできるように、やさしく教えてあげようね」とみんなで話した。

その後、クラス全員で年中組保育室へ、明日から始める年長の出迎えの紹介をしに行った。少し照れくさそうな子ども達であったが、年長になった喜びを感じていたころなので、紹介することがとてもうれしそうであった。

<文責 中屋>

エピソード②「世話しちゃん（しない）」と言いながら

出迎えが始まってから、最初は年長児もどこまでお世話してあげたらいいのかわからなかったようで、うめ組（年中組）の靴箱の前まで送って自分の保育室に行ってしまうことが多かった。しかし、1週間たつ頃にはだんだん年中の保育室まで入るようになった。そして、シールを貼るときに、「今日はどこに貼るが?」「今日はここだよ」とその日に貼る場所を指差しながら教えたり、かばんの中にタオルなどが入っていたら、「タオル出してあそこにかけるがで」と声をかけたり、エプロンの脱ぎ方がわからない子どもにはやさしく脱ぐのを手伝う姿が見られた。お兄ちゃんやお姉ちゃんと朝、一緒に保育室まで行けることがうれしい子どももいて、ニコニコで手をつないでくる子どももいれば、お母さんと一緒に行きたい子どももいて年長児とは手をつなぐ、母親にくっついて行く子どももいた。



年中児のマサシ（進級児）を年長児の仲よしのユウダイが保育室まで連れてきていた。保育室で荷物を片付けているときにユウダイは「おれは、前マサシにいやなことされたき世話しちゃん」と言い、マサシをからかうような素振りを見せた。マサシはつられるように遊んでいたが、ユウダイに「タオルはここに掛けるがぞ」と言われ、少しまだ遊ぶ姿はあったが、遊ぶことをやめタオルをタオル掛けに掛けていた。ユウダイはマサシにいやなことをされて、世話するのいやな気持ちもあったかもしれないが、年長で幼稚園の中で一番のお兄ちゃんであるということやちゃんとわかっているのだと感じた。そのことがユウダイはうれしく、「お世話をしあげよう」という気持ちに変わったのだと思われる。

<文責 富田>

エピソード③ 自分もドキドキしながら

年長児のコウヘイがうさぎ組（年中組）のヒロシをお世話してあげたときのこと。ヒロシをうさぎ組（年中組）に連れていったものの、緊張気味のコウヘイはあまりしゃべらず、ヒロシを一步離れた後ろから見守りながらついて行っていた。タオル掛けの場所では、ヒロシのかばんからタオルを出してあげたが、どうやって手伝えてあげたらいいか悩みながら、そーっとタオルを差し出す。その後も、かばんやエプロンを掛けたりするのを常に後ろから見守り、でも抜かりがないように真剣な表情で確認してあげていた。ヒロシが片付け終わり、好きな遊びをし始めると、コウヘイはうさぎ組の教師の顔を見てニコッと笑い、部屋から出て行った。

<文責 矢田>

エピソード④ お母さんになったつもりで

年長児のナオが、年中児のサトルをうさぎ組（年中組）に連れて行った時のこと。何かからすればよいか迷っているサトルに、ナオがまるでお母さんのように、「タオル、やったの?」「次はエプロン（を掛ける）でしょ」とひとつずつすることを教えてあげていた。すると、ナオのアドバイスを聞いてやっていたサトルが、お家での会話のように、「津波、来るでしょ?」と聞いた。それを聞いたナオは、またお母さんのように、「大丈夫でしょ!」とサトルに力強く言い、全ての片付けが終わると満足そうに自分の部屋へ戻って行った。

<文責 矢田>

エピソード⑤ 妹を世話するように

雨の日に、年長児のリウノスケが年少児を玄関で迎えてあげた時のこと。傘をさして登園して来た年少児に、リウノスケは「傘、たんじゃうき貸しや」と言って受け取り、クルクルと巻いてあげた。年少児も、本当のお兄さんに言われたような感じだったのか、何の戸惑いもなく渡し、その次に、「長靴、脱ぎにくい? 荷物持ちちょっとうき（持っておいてあげるから）、はい」とリウノスケが手を差し出すと、手に持っていた上履き袋をリウノスケに預けて長靴を脱いだ。無事玄関に上がると、2人は手をつないでもも組（年少組）へ行った。

<文責 大野>

エピソード⑥ お世話の仕方を考えて

出迎えの初日、多くの年長児が手をつないでもも組（年少組）まで、年少児を連れてきた。その中でもことさら年長児のタイチの困惑した表情が目立った。年少児のモモを連れてきているが、年少組に着いた後は、モモの後をついて歩くだけで、どうしたらいいのか困っている様子が見られた。教師は、モモとタイチに声をかけ、タイチには「連れてきてくれてありがとう」とお礼を言うと、少し照れたような顔をした。モモには、「どこにシール貼ったらいいか聞いてみようか?」と言うとタイチの方を振り返って見た。タイチは「13日」と言って教えたのだが、モモにはその場所がわからない。教師は、「年少組さんは、数字も読めないから指で差して教えてくれる?」とタイチに言うとうなずき、無言でシールを貼る場所を指差した。



その1週間後、タイチが年少児のマユコを連れてきた。タイチの困惑した表情は1週間前とはそう変わらない。立ったままマユコの上靴を履く様子を見ていたが、ほかの年長児が年少児に靴を履かせているのを見て、自分もマユコが靴を履くのを手伝った。言葉少なではあったが、シール帳を出すことや、シール帳へ貼るシールの場所などを、マユコにもわかるように教えていた。

1週間前はどうしたらいいのかわからなかった様子だったタイチが、まわりの様子を見て考えることで、自分なりにやり方がわかり、行っている様子がよくわかった。

<文責 大野>

エピソード⑦ タイミングが合わなくて

年長児のシンがかたい表情で、新入児のユウタをうさぎ組（年中組）へ連れてきた。ユウタは靴を保育室前にある靴箱へ片付け、上靴を履いている。シンは（次はどうしたらいいんだろう）という表情で立っていたので、「お兄さん、連れてきてくれてありがとう。じゃあ、シール帳にシールを貼るところ、教えてあげてくれる？」と言うと、シンはうなずき、ユウタのかばんの外ポケットに入っているシール帳をさっと取り出した。同時に、教師の言葉でシールを



貼ることを思い出したユウタが、シールを貼る台の方へ行った。シンはユウタのシール帳を手を持ったまま、戸惑った表情を見せていたので、「ここでシール貼るところ、教えてあげてね」と促した。

ふだんから自己主張をあまり強くせず、初めてのことに緊張の強いシン。おそらく、シールを貼るお世話をすることなどは知っていたと思うが、どのようなタイミングでかかわったらよいかわからなかったのではないだろうか。

<文責 鎌倉>

エピソード⑧ 出迎えを終えて

出迎えが終わった年長児に、保育室で「おはよう。今日も出迎え、ごろうさん」と言って担任が迎えても、特に自分から出迎えのことを報告する子どもはいなかった。教師が「何組につれて行ってあげたの？」と聞くと、「〇〇組に行った」と。その声を聞いた子どもが「ほくも〇〇組に行った」「わたし、また〇〇組だった」と答えるが、どんなことをしたのかは話に出てこない。「どんなことをしたの？」と聞いてみると、「あのね、シール貼るところ教えてあげた」と少し話すだけであった。子ども達は、出迎えは当然行うべきこととして、捉えているのだろうか？（年によっては、「やりたくない」と言う子どももいる）。そんななか、いつも友達や小さい組の子どもにもやさしくいろいろと教えてあげたりしているヨウコが、「（出迎えで）クラスの中まで連れて行って、シールとかのお世話をするけど、本当はドキドキしているの」と家で話していたと保護者から報告を受けた。表情や態度に出さなくても、出迎えを通して、いろいろな気持ちを経験しているんだなあと感じた。



<文責 中屋>

“新入園児の出迎え”のエピソード全体を通じた考察

年長としての自信や誇りがもてるように

エピソード④のナオ、エピソード⑤のリュウノスケのように、お世話の仕方がわかっていて、相手の気持ちやその時の状況に応じて、タイミングよく小さい組のお世話ができる子ども達もいる。弟や妹がいたりするなど、これまでの経験からお世話の仕方を心得ているのかもしれない。一方、エピソード③のコウヘイ、エピソード⑥のタイチ、エピソード⑦のシンのように、どんなお世話をしたらいいのか内容はわかっているものの、大変に緊張し、戸惑いながら小さい組のお世話をしようとする子ども達もいる。エピソード⑥で、タイチが初めて年少組を保育室まで連れて行き、戸惑っていた時、タイチは年少組担任に「ありがとう」と言われ、照れたように笑った。この時、タイチは年長組として

の自信をもったり、誇りを感じたりしたことだろう。エピソード③のコウヘイは、緊張気味に小さい組の状況を押し量りながらお世話をし、見守っていた年中組の教師にニコッと笑った。これは、“自分もお世話できた”という達成感から生まれた笑顔かもしれない。

エピソード⑧にあるように、年長児は、出迎えが終わった後、出迎えの感想を担当に知らせる姿は、毎年ほとんど見られない。小さい組をお世話したことに達成感があって、あえて担任に言う気持ちがないからなのか、友達と遊ぶことに気持ちが向っているからなのか、出迎えを義務として感じているからなのか、理由ははっきりわからない。出迎えの時期は、入園したばかりで不安いっぱいの子ども達を丁寧に受け入れていく時期でもあるので、年少・年中組の教師が、保育室まで連れてきてくれたり、お世話をしてくれたりする年長児の様子をしっかり捉えたり、声をかけたりすることは難しい。しかし、少しでも、年長児にお礼を言ったり、年長児がどんな様子だったか心にとめておき、年長担任に知らせたりすることが大事になってくる。また、年長担任も、年少・年中担任から子ども達の姿を聞いたうえで、特に戸惑っていた子どもには「〇〇してくれたんだって？ ごくろうさま」と心を込めて言葉をかけることで、ねらいである年長としての自信や誇りをもつことにつながっていくと思われる。

家庭と連携して

子ども達のなかには、エピソード⑧のように、教師には言わなくても、「本当はドキドキしているの」とお家の人に自分の思いを言っている子どももいた。エピソードにはないけれども、「出迎えいやだ」と、お家の人にもらしている子どももいた。そんな子ども達ほど、年少・年中組の教師から「ありがとう。助かるよ」と声をかけてもらったり、年長担任からも認める言葉がけをしたりすることで、“ドキドキしたけど、がんばった”“いやだったけど、やってみたら、よかった”という気持ちになり、年長組としての自信や誇りにつながると思われる。また教師が子ども達の気持ちを理解することで、進級当初のこの時期に、教師と子ども達との信頼関係をつくることにもつながっていくだろう。そこで、家庭とも連携して、子ども達の気持ちを探っていくことが必要になってくると考える。

今後の課題として～心のゆれを大事に～

もう6年ほど前ではあるが、出迎えが今のように4月いっぱいをめどにするのではなく、最初に1週間ほどをめどにし、後はやりたい子どもにお願いしていた時期のことである。年長組の男児が6月頃になって、正門で何やら躊躇している姿が見られた。副園長が声をかけると、小さい組の出迎えをしようと思ったが、どのようにしたらよいかわからなかったらしい。この男児はこれまで出迎えをしていなかったが、心のなかではゆれていたようだ。

このように、以前は、毎年数人ずつではあるが、6月を過ぎても出迎えをしようとする子ども達も見られていた。ところが、ここ数年4月いっぱいみんなが出迎えをし、その後は出迎えをしたい人がするようにしていると、5月に入った途端、ぱたりと出迎えをしようとする子ども達がいなくなっている。

4月いっぱいという長い期間なので、子ども達も満足しているのか、義務感でやっていたからなのか理由はわからない。けれども、子ども自身が、“どうしよう…。出迎えたら小さい組は喜ぶだろうな”と逡巡する経験も大事にしたいところであり、出迎えの期間も見直していく必要があるかもしれない。



水遊び・プール遊び
(プール参観日)

年少

水遊び・プール遊びの経験の意味

水に親しんで

チョロチョロと流れる水をじっと見たり、足をジャブジャブすると飛び散るしぶきを作ることに夢中になったり、日向に置いてあるビニールプールの温かさに気持ちよくなったりと、子ども達は水が変化することに大きく心動かされています。年少組では、まずプール遊びの前に、水遊びの経験を十分することを大切にしたいと考えています。水遊びをすることで、子ども達は少しずつ水の性質や魅力を知り、水に親しんでいきます。

子ども達の水とのかかわりは家庭での経験によって大きく違いがありますが、体が水に濡れるのが気になる子どもでも、ペットボトルに差したじょうごに水を移す楽しさに思わず心動かされたり、少し温かいプールに入り「お風呂みたいだね」「気持ちいいね」といった水の心地よさを感じたりする時があります。このように子どもなりのペースで水に親しんでほしいと思います。

水の動きに心動かされて、心ゆくまでかかわる

水をくんだり、移し替えたりするだけのことで子ども達の目は輝いています。容器に入った水を振り撒く楽しさや心地よさを感じたり、ペットボトルに花はじきをひとつずつ入れながら、そのゆらゆらほわほわと沈んでいく様に見とれたり、子ども達は遊びの素材としての水に心動かされ、何度も繰り返してかかわっています。

また、「雨降ってこ〜い」と何度も何度も声を揃えて、教師がホースで散らす水を体で受け止めてハラハドキドキしながら、水の感触を感じたり、プールで教師と亀の親子になって、教師の背中に乗るごっこ遊びをしたり、一緒にワニになって水に浸かりながら進んだり、全身で水の心地よさを味わったりします。このような遊びで水と親しむなかで、水の感触や変化に心動かされたり、水の心地よさを自然と感じてほしいと考えています。

ねらい・内容

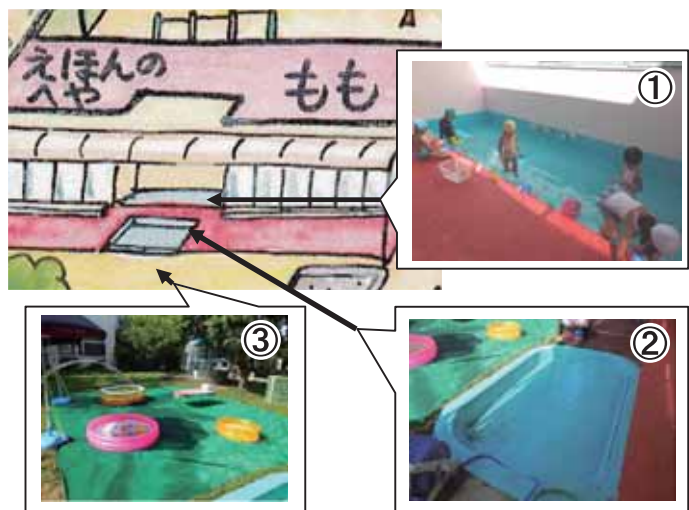
- 水に親しむ。
- 水の感触や変化に心動かされながら、心ゆくまで水で遊ぶ楽しさを味わう。
- 水をくんだり、移し替えたり、流してみたりするなど、心ゆくまで繰り返してみる。
- プールに浸かってみたり、シャワーやホースなどのやわらかい水を浴びたりして、全身での水の心地よさを感じて遊ぶ。
- 先生やまわりの友達と一緒に、水の中でごっこ遊びを楽しむ。

環境と援助

したい遊びが心ゆくまでできる環境構成

水遊びやプール遊びでの水とのかかわりでは、子ども達が自分のしたい遊びを心ゆくまで繰り返すできるように、様々な場と道具を用意しています。

年少棟には、水遊びができる場がいくつかあります。ひとつは、ゆったり遊ぶなかで徐々に水に慣れていくようにという配慮のもとに作られた年少児専用のプール（①）です。さらに、一人一人の子ども達がそれぞれのペー



スで遊ぶことができるように、足洗い場(②)、前庭(③)を水遊びの環境として広く利用しています。

前庭ではビニールプールを2～4つほど用意して水をため、子ども達が心ゆくまで水とかかわって遊べるようにしています。また、水にも慣れ、ダイナミックな水遊びが展開されてきた頃に、年長棟西側にある大プールにも出かけていきます。

遊びに使う道具

道具類は、大きなたらい、洗面器、ひしゃく、ペットボトル、プリンカップ、ペットボトルで作ったすくい網や金魚、牛乳パックやペットボトルで作ったシャワー、ペットボトルの舟(2ℓ×3本組)そして、花はじき、魚やカニの形をしたカラフルなスポンジ状の水に浮くおもちゃなどを用意しています。これらは友達の真似をしたい年少児にとって十分な量があることももちろんですが、子どもがかかわってみることで、多様な動きをしたり、水の変化を生み出したりするものを主に選んでいます。

それらの場所や道具については用途が決まっているわけではなく、子どもの発達状況や興味関心に応じて出したり、使ったりしています。また、年少児の子ども達には「○○をしてみよう」といった目的や見通しが多くあるわけではないので、より教師の願いや環境が大切だと考えます。

年長棟近くの大プール(7×11m)では、プールに入るのが少し不安でプールサイドから離れられなくても、ペットボトルの舟(2ℓ×3本組)につかまることで安心感を得てプールサイドから離れてプールの中を歩いたり、洗面器にカニのスポンジを入れて舟と乗組員に見立てることで、プールに探検へ出かける勇気がわいたりします。いろいろな道具を組み合わせることでごっこ遊びの幅も広がります。

これらの道具は子どもの興味、関心、水とのかかわりの経験を考えながら、必要なものを十分足りるように出しています。また、道具や場所だけでなく、水と心ゆくまで親しみかかわることができるように、十分な時間もとる必要があると考えています。

水遊びが楽しいと思える援助

子ども達の水の経験は個人差が大きくあるため、プールに入ったり、水が身体にかかることについて抵抗があるならば、水のかからないところで、水の入ったペットボトルに花はじきを1つ1つ入れ、ゆらゆらと沈んでいく遊びに誘ったりしています。

また、水遊びが大好きで積極的にプールへ入ったり、少しぐらい顔に水がかかっても平気な子どもは、水の感触が全身で味わえるようスプリンクラーのまわりで跳んだり、ジョウロで水を振り撒いたりする遊びに誘うこともあります。

しかし、どの場合も決して無理強いすることなく、子どもが水とかかわっている姿をまずはそのまま認めることで、水とのかかわりに安心感が生まれたり、満足感を得たりし、水とのかかわりがより楽しいものであると感じられるように援助していきます。そして、どの子どもも心ゆくまで水とかかわることができるように教師が予想した遊びでなくても、子どもが繰り返し、繰り返し心ゆくまでしている遊びがあるならば、その水遊びの楽しさはどこにあるのだろうと見極める目をもち、その場に合った援助をすることが大切であると考えています。

Episode

平成22年度

エピソード① あふれ出る水に心動かされて(初めての足洗い場での水遊び) 5月20日



5月に入って涼しい日が続いていたが、この日は久しぶりに日差しがきつくなり、少し汗ばむ陽気であった。砂場では、10数名の子ども達が補助教諭と一緒に、砂や水の感触を味わいながら裸足になって遊んでいた。保育室でもままごとや剣作りなど、思い思いに遊んでいる子ども達がいるなかで、ヒロシが今ひとつ遊べていない様子であった。砂遊びなど、いろいろな遊びに誘って

るものの「いやだ」という返事が返ってきた。

教師は、暑くなったこの日、子どもの様子やタイミングを見て出そうと用意していた水遊びの道具を出して、ヒロシを足洗い場での水遊びに誘ってみた。この日初めて道具（ボウル、ペットボトル、ジョウゴなど）を出したこともあったか、砂遊びなどには気持ちが向かなかったヒロシが、すんなりと水遊びを始めた。ヒロシの様子を見て、保育室で遊んでいた子ども達や、砂遊びに満足し、手足を洗いに来た子ども達が、「ぼくもしたい」と仲間入りしてきた。



養護教諭と一緒にいることでほっとしていることが多いセイジも、水遊びには、ずっと仲間入りしてきた。足洗い場には直径5cmほどの水道管が渡っていて、そこに3cm間隔で穴が50開いており、その穴から水が流れ出るしくみ（水道の栓は教師が調節）になっている。子ども達（7～8名）は、穴から流れ出る水をボウルにためたり、ためた水を流してみたり、ボウルからあふれ出る様子をじっと見つめたりして遊び始めた。教師は、水を繰り返し入れる楽しさや、水がたまっていく様子を楽しんでほしいと思い、「先生、おもしろいことするよ」と、洗剤用スプーンで汲んだ水を、ペットボトルに挿し込んだジョウゴに、「ジャー」と言いながら流し入れてみた。すると、真似をして遊び始める子ども達もいた。

しばらくして、教師が水遊びの様子を見ると、ジョウゴの挿してある2ℓのペットボトルをヒロシとセイジ、イクヤ達が取り囲み、ボウルで繰り返し水を流し入れていた。そして、水がジョウゴの上から勢いよくあふれ出てくると、ヒロシ達は「わあ〜」と目を輝かせて歓声を上げていた。そして、ペットボトルにジョウゴを挿したセットをいくつも作り、繰り返し、ジョウゴの上から水があふれ出る様子を楽しんでいた。

翌日から、毎日のように水遊びがしたいという声上がり、ヒロシやセイジも進んで水遊びをしていた。年長組や仲よしの女兒に遊んでもらうことが多い男児も、「お水遊び、楽しいねえ」と言いながら、毎日のように水遊びをしていた。

<エピソード①より>

この遊びは、水の心地よさを味わってほしいこと、繰り返し水をためたり、流してみたりするなかで、心ゆくまで水と遊ぶ楽しさを味わってほしいこと、ゆくゆくは多少、顔に水が散っても平気になるくらい水と親しんでほしいことを見通したうえでの、最初の水遊びとして提案してみた。



ちよろちよろと足洗い場に流れ出る水がボウルにじわじわたまっていく様子や、ジョウゴから入れた水が細くなって、ペットボトルにたまっていく様子をじっと見つめる姿から、言葉には表さないけれども、何かしら心が動いているのだろうと思われた。水をためること、流してみること、別の入れ物に移し替えてみることなど、目的や見通しがあるわけではないけれども、“興味をもったこと”を“繰り返しやって”みて、やってみた結果、その“形が変わることに、とても心を動かされる”のだなあと思った。

とりわけ、ジョウゴから水が勢いよくあふれ出てきた時の「うわあ」という驚きと喜びの入り混じった子ども達の表情と、あまり遊べていなかったヒロシとセイジが、その後、夢中になって水遊びを繰り返していたことを考え合わせると、ジョウゴから水があふれ出てきたことに、よほど心が動かされたことが推察される。

年少児は友達のしていることに興味をもち、真似てみたくなるので、足洗い場に水が流れ出る穴がいくつもあって、何人もの子どもが同時に満足できるしくみであったことが、まずは大きな環境だと思う。また、水の勢いを強くせず、水がじわじわたまっていく様子を楽しめる程度の勢いにしておい

たので、思いがけず水が飛び散ったりすることなく、ゆったり遊べたように思う。また、砂遊びなど戸外遊びやままごとなどの室内遊びなど、いつもの流れを大事にしながら、ふだんの遊びのひとつとして水遊びを提案したことで、少人数の遊びとなり、初めての水遊びをゆっくり楽しむことにつながったのではないだろうか。

いろいろな水遊びの道具があるなかで、この日はペットボトル、ジョウゴ、ボウル、洗剤用スプーンだけを出していた。ふだんの遊びも大切にするために、砂場にも道具も出して遊んでいたため、片付けが大変になってくると、全体として落ち着かない状態をつくることになると考え、道具の種類は絞り、同じ物がほしい子ども達に数を多めにしておいた。道具の種類を絞ったことでジョウゴから水を入れることに興味集中し、水があふれ出る喜びを数人で共有できたことも、心を動かすことにつながったのではないだろうか。(この日以降は、子ども達の様子に合わせてジョウゴなど、水遊びの道具を増やしていった)

援助としては、水を繰り返し入れる楽しさや、水がたまっていく様子を楽しんでほしいと思い、ジョウゴの使い方を知らせたことが、心を動かす直接的な援助になったと思われる。

＜文責 鎌倉＞

エピソード②「雨、降ってこ〜い」 6月15日

プール開きの2日前、気温が上昇し、湿度も高くなって、じっとしていても汗が出るほど、高知の夏らしい暑さになった。水に触れずにはいられない暑さは、プール遊びが始まる前に、より水と親しくなるチャンスだと考え、ホースの水を子ども達に散らして遊ぶことにした。

足洗い場で水遊びをしている子ども達に、「今から雨が降ってくるよ」と声をかけた。そして、顔に散ることがいやな子どももいるだろうし、歓声をあげてホースの水から逃げるには広さがあるだろうと思い、足洗い場近くの芝生においでと誘った。この遊びは初めてだが、教師が手にしているホースで次に何が起こるか予想しているのか、期待半分、ドキドキ半分の顔で、数人の子ども達が集まった。そこで「いくよ〜」と、子ども達の頭上から、ホースの水を散らすと、「わあー」



「きゃー」と歓声を上げながら、ホースの水が届かない場所まで逃げていった。ホースの雨が降り止むと、教師の様子をうかがいながら、じりじりと近づいてくる。教師は「もっと近くまで、きいや(おいで)。大丈夫、まだ雨降らんで」と声をかけ、数人が2mほどに近づいたところで、またホースの水を頭上から散らした。何度か繰り返すうちに、砂場や小山のモニュメントで遊んでいた子ども達も仲間入りし、10数名になった。

教師が一方向的に声をかけるよりも、子ども達とのやりとりがあった方がより楽しく、年少児なりにまわりの友達との一体感も味わえると思い、子ども達に「『雨、降ってこ〜い』って言ってよ」と声をかけた。そして、子ども達が「雨、降ってこ〜い」と言っても、すぐには水をかけずに、ちょっと間合いをもたせてドキドキさせつつ、おもむろにホースの雨を降らせてみたり、「雨、降ってこ〜い」という声がばらばらだと、「気持ち合ってたき(から)、もういっぺん言って。せ〜の」と子ども達に声をかけたりした。教師が「雨はもうやんだよ。おしまい」と言うまで、子ども達はハラハラ、ワクワクした表情で教師に近づき、雨が



降っては逃げて…を繰り返した。

翌日も子ども達のリクエストに応じて、ホースの水を散らして遊んだ。この日は避難場所のようなものを、太鼓橋にビニールシートを掛けて作り、水が苦手な子どもも参加しやすいように、また水がシートにあたる音や感覚も楽しめるようにした。

<エピソード②より>

プール遊びの前に水により親しんでほしい、全身で水の心地よさを味わってほしいと考え、提案した遊びである。子ども達の様子を見てみると、水の心地よさを全身で味わう開放感とともに、「雨降ってこ〜い」といった教師とのやりとりをまわりの子ども達と一緒に楽しむことで、クラスみんなで知らず知らずに心を合わせる楽しさも味わえていたように思う。

<文責 鎌倉>

エピソード③ 水のなかで花はじきが動く様子に心動かされて 6月下旬

6月17日のプール開き以降、様々な水とのかかわりを楽しむことができる道具を増やし、いろいろな水とのかかわりができるような環境を整えた。また、スポンジ製の浮く動物のおもちゃを使って教師と一緒にごっこ遊びをしたり、ワニになった教師の背中に乗ってみたり、教師と一緒にカエルになってジャンプしてみたりするなど、プールならではの水遊びも楽しむことができるようにしてきた。最初は、ほとんどの子ども達がプールを楽しみにしていたが、水着を持ってきていても「今日はプールお休みする」と言ったり、プール遊びを始めてもすぐに「もうやめる」と言ったりする子ども達も出てきた。例年より涼しいので、子どもによってはプールの水が冷たく感じる（毎日入れ替えているので）ことや、思いがけず顔に水が散ることが理由にあるようだった。そこで、プールを休む子ども達でも少し水に触れて遊べるようにと、用意していた花はじき（花の形をしたプラスチック製のおはじき）が、プール遊びをしている子ども達にも人気だったので、プールでも遊べるように出していくことにした。



花はじきは、自由に取れるようにしておくのと、みんなあるだけ持ちたくて、足りなくなってしまうので、子ども達のリクエストに応じて、教師が少しずつ手渡していった。ヨウタ、タロウ、ヒロシはプールに入って、プールサイドに置いた水を入れたペットボトルに、花はじきをぼちゅん、ぼちゅんを入れていた。ふわふわ、ゆらと花はじきが沈んでいく様子を目で追いながら、手元の花はじきがなくなるまで、繰り返し入れていた。

イクヤは、花はじきを入れたカップに、足洗い場からちょろちょろ出ている水をためてみて、水流で花はじきが動く様子を見て、それはうれしそうに「動いた〜」と教師に知らせた。コユキは水を入れた洗面器に花はじきを入れて、かきまぜてみて、水流で



花はじきがぐるぐるまわる様子を見て、「追いかけてこしゆう」と実習生に知らせた。色とりどりの花はじきをペットボトルに入れて「ジュースができた」と言う子どもに「何ジュース?」と実習生が尋ねると、少し考えて、「ミックスジュース」と答えた子どももいた。フミオとカズは、水と花はじきを入れたペットボトルを逆さまにして、水と花はじきがじゃーっと流れ出る様子を、歓声をあげながら見ていた。

<エピソード③より>

花はじきを水の入ったペットボトルに入れてみて、ゆらゆら、ほわほわと水の中をゆっくり沈んでゆく花はじきの様子が、子ども達の心を捉えているように思った。その様子に心魅かれて、繰り返し花はじきを入れてみているのだろう。そこには、「〇〇を試してみよう」という目的や見通しがあったわけではないと思う。たまたま、そこにペットボトルがあったので、入れてみたくなったのだろう。それは、花はじきの入ったカップに、足洗い場からちょろちょろ流れ出る水を入れてみて、「動いた」と驚いていた姿や、ペットボトルに入れた花はじきを出してみようとして、水とともにペットボトルから流れ出る様子に喜び驚いていた姿からも、年少児がたまたまやってみた



ことで、物が変化する様子にいかにも心を動かされているのかがわかる。



花はじきは色もカラフルなので、水に入れてみて「きれいだな」と感じられること、また、色自体から様々に見立てられるところにも、子ども達の心が動かされていると思う。最初にジュースを作ろうと思ったわけではないのだろうが、ペットボトルに水と花はじきを入れてみて、色とりどりの花はじきが水のなかで揺れている様子に心を動かされ、(ジュースみたい)と思ったのだろう。

<文責 鎌倉>

エピソード④ 身体いっぱい水の心地よさを味わって 大プールへ 6月27日

もも組(年少組)のプールでの水遊びを1週間ほど経験した頃、気温も水温も十分温かい日を選び、もも組のプールより広々とした大プールに行くことにした。前日、年長児が大プールで遊ぶ様子を見せていたこともあってか、ほとんどの子ども達が「大プールへ行くことを楽しみに、着替えたり、ダンスをしたりした。プール遊びを楽しむ時間を確保しようと、年中組がプールから上がる前に、腰洗いやシャワーをすませ、日陰で年中組がプールで遊ぶ様子を見るようにしたが、みんな初めての経験だからか、圧倒されたように年中組の様子を見ていた。年中組の順番が終わり、水慣れをし、プールにじわじわ入っていった。まるで、初めての「大プール」を身体で確かめているような様子で、少し進んでみては、ぬるめのお風呂にでも入ったように「うわあ」といった表情で笑顔になっていた。教師は「気持ちいいねえ」と共感しながら、「ほら、ぼよ〜んぼよ〜ん」と軽くジャンプしながら進んでみた。すると、教師のまわりにはいる子ども達(半数ほど)もうれしそうな表情で教師の真似をしていた。

また、いろいろな水の心地よさを身体いっぱい味わえるようにと思い、これまで親しんできた「あぶくたつた」(おぼけから逃げるのではなく、おぼけを捕まえる、もも組バージョン)をして、おぼけの教師にくっいたりして遊んでみたりした。半分以上の子ども達はここに仲間入りしていたが、補助教諭のまわりにはいると安心している子ども達の姿も見られたので、「ともこ先生(補助教諭)まで、よういとな」と言うと、歓声を上げながら、大好きなともこ先生のもとへほとんどの子ども達が集まって行った。ともこ先生のまわりが子ども達でいっぱいになると、今度は「なおこ先生(補助教諭)まで、よういとな」と言うと、また、大好きなおこ先生へ向かって、それはうれしそうに集まっていった。

プールの底には、魚の模様が並んでラインとなっているので、教師が「先生、お魚食べよう」と、魚を採って食べる真似をしたり、「お魚ふんじゃうよ」と魚のラインの上を渡ってみたりして遊んでみた。まわりにいた子ども達もぱくぱくと食べる真似をして、魚のラインの上を歩いてみたりしていた。10分ほど遊んだ頃、次の年長組がプールに来たので、「あがろうね」と声をかけて、その日はおしまいとなった。

大プールはとても楽しかったようで、その後も「大きいプール行かんが?」「お魚(プールのライン) 食べんが?」と教師に言ったり、年少児用プールでは水遊びをしたくないと言った子ども達も、「大プールに行くよ」と言うと、進んで着替えようとしたりする姿も見られた。この日以降、2回大プールに行ったが、“ぼよ〜ん”ジャンプや“先生までよういとん”や“お魚とり”は、大プールで子ども達の好きな遊びとなった。

<エピソード④より>

子どもが大プールに入った時、もも組のプールよりも深さはあるが、平均して子ども達のおへそくらいの深さだったので、抵抗感なく入ることができたのだと思う。また、プールが広いのでまわりの友達との間隔が広く、思いがけず顔に水が散ることも少なく、水が散っても冷たくなかったので、あまり気にならなかったのだと思う。気温、水温ともに温かい日に、年少児だけで大プールに入る機会をもらったことが、まずは大きな環境構成だと思う。

大プールに入った時、じんわりと笑顔になった様子から、大プールに入るだけで、心が動かされているように思えた。水温、気温ともに高かったので、身体を包む水の感覚が心地よかったのだろう。そして、教師を真似て「ぼよ〜ん」とジャンプしてみることや、ジャンプすることでゆるやかな波がおこり、自分も動いているのだけれど、自分の身体がほわほわと揺らされる感覚が心地よく、心が動かされているように思った。

年少児は、プールに入ってみて、水の心地よさを感じて、それが表情や態度に表れるまでに時間がかかる。プールだけでなく、年少児には“年少児タイム”とも呼べるような、年少児なりのゆるやかな時間の流れがある。そのゆるやかな時間の流れを感じとり、この子ども達のテンポに合わせなければと瞬時に判断した結果、カエルのような元気なジャンプではなく、年少児のテンポに合わせた「ぼよ〜ん」ジャンプに誘ってみることにしたのではないかと、じっくり振り返って気がついた。これまで、もも組のプールでカエルごっこなどをしてきたが、テンポが早く、まわりに水が散ったりして、年少児のゆったりした世界にはあまり向かなかつたかもしれないと反省した。

教師がいることで安心する子どもの姿を捉えて、「先生までよういとん」と遊びに誘ったことや見立ての上手な子ども達に「お魚食べよう」などと投げかけたことも、水の中での様々な感覚を楽しむことにつながる、心を動かす援助であったと思う。「先生までよういとん」は、好きな教師に向かってみんなが同じ方向に進むので、多少水が散っても顔にかからないことも、よかったのではないかと考えた。教師目線ではなく、子どもの目線になってみて、遊びを投げかけると子どもの心は動き、「また、大きなプール行きたい」という満足感や意欲につながるのだなと思った。

<文責 鎌倉>

エピソード⑤ 「鯛、食べて」 プール参観日当日 9月3日

プール参観日は、ふだんの様子も見てもらう日と位置づけている。そこで、保護者にはプールや水遊びの様子だけでなく、水着に着替える様子なども見てもらい、「洋服が脱げない時や水着を自分で着るのが難しい時などに、『先生やって』と言っているのか、先生が気づいてくれるのを待っているのかなど、思わず手伝いたくなるような時も見守って下さい」と手紙などで具体的にお願した。また、もも組の参観日が9月3日と、夏休みが明けて間もない時期であること、たくさんのお家の人に囲まれ、ふだんとは違う雰囲気であることから、戸惑いを見せることもあるので、そんな時は子どもさんの気持ちを受けとめてあげてくださいとお願いした。以下は、プール参観日当日に見られたエピソードである。

子ども達みんなの着替えや準備体操が終わり、いざ大プールへ。シャワーや水慣れをして、そっと大プールに入り、“ぼよ〜んジャンプ”に誘うと、ほとんどの子どもがにこにこ教師のあとを追っ

てきた。(夏休みで水に親しんだから、前より水が平気になっているな)と思って、以前は怖がる子どももいたのでやめていた“あぶくたった”(教師を追いかける遊び)を“ぼよ～んジャンプ”のすぐ後に提案すると、これもほとんどの子ども達が喜んでいて。その後、“先生までよういとん”は1回行ったが、それぞれが自分なりに水とかかわる様子が楽しそうなので、それ以上はしなかった。

せっかくお家の人に来てくれているからと思って、いつも行っているお魚とり(プールの魚の形をしたライン)を「お家の人にとった魚を食べさせよう」とまわりにいる子ども達に提案すると、セイジは父親に「鯛、食べて」と渡していた。

エピソード⑥ 「プールいや! お母さんがいい」

ほとんどの子どもが着替えや準備体操代わりにダンスをするなか、ヒロシは着替えの時から母親にくっつき、離れようとしなかった。準備体操代わりにダンスでは、いつもはりきって踊るミサが、父母の方をちらちらと見、踊ろうとしなかった。大プールに行っても、ヒロシもミサもふだんは大プールも大好きなのに、いつもの楽しそうな姿が見られなかった(ヒロシは降園後、「たくさんの人に囲まれて、恥ずかしかった」と、母親に言ったそうだ)。イクヤもプールサイドから、ほとんど離れようとしなかった。イクヤの大好きなウルトラマンになると、少しでも元気になるかなと思って、教師が怪獣になって水をかけられるような遊びを投げかけると、ウルトラマンになって教師に水をかけてきた。元気のなかった3人だが、翌日から、ヒロシ以外は、もも組での水遊びをいつも通り楽しんでいた。

ココロは、水着に着替え、水に入ってはみたものの、少し顔に水が散ると「プールいや! お母さんがいい」と泣いて、その後は全く水に入ろうとしなかった。不意に顔に水が散るのがいやで、もも組でのプール遊びをいやがる姿もあったが、大プールは気に入って、夏休み前には笑顔も見られていたのだが…。夏の間、家庭用ビニールプールで、父母と一緒にたっぷり水には親しんだようだが、友達が水で遊んでいる姿を見ると、不意に顔に水が散る恐怖感がよみがえってきたのだろうか。翌日、母親から、おみやげの金魚ちゃんを喜び、お風呂で遊んでいると聞き、少しほっとした。

<エピソード⑤・⑥より>

ほとんどの子ども達が、夏休み前のプール遊びの時よりも、水が平気になっていて、“あぶくたった”や“ぼよ～んジャンプ”を喜んでいて。夏休みに水に親しんだ経験が生かされているのだろう。

一方で、ふだんとは違って、プール遊びをいやがる子ども達もいた。プールサイドでじっとしているイクヤや遊べないヒロシを見ると、身体いっぱい水で感触を楽しむことをねらいに考え、道具をプールには持って行かなかった(道具を運ぶのも大変だったため)が、せめてペットボトルの舟やスポンジ製の浮くおもちゃなどがあれば違っただろうかと、夏休み中のプール開放の時、自分の浮き輪でほっとしていたイクヤの姿を思い出して反省した。

また、年中組に進級を控えた3月、この時期を振り返ってみると、ヒロシやココロ達がプールをしようとしなかった理由は様々であったと思う。プールをしなかったからと援助をあせるのではなく(プールをすればOKというわけではないので)、長いスパンで子どもの気持ちを理解し、一人一人が自分を発揮できるように援助していくことが大事だと思った。

<文責 鎌倉>

参考資料

参考までに、本園のプール参観日の取り組みを学年ごとに記載いたします。

【年少組】**プール参観日当日のねらい(○) 内容(■)**

(大プールで)

○全身で水の心地よさを味わう。

■先生やまわりの友達と一緒に、プールの中を歩いてみたり、軽くジャンプしてみたり、ごっこ遊びをしたりする。

■大好きな先生まで、“よういとん”をする。

(年少棟のプールで)

○水の感触や変化に心動かされながら、心ゆくまで水で遊ぶ楽しさを味わう。

■水をくんだり、移し替えたり、流したりするなど、心ゆくまで繰り返してみる。

■花はじきを水に入れてみて、ふわふわ動く様子を楽しんだり、食べ物などに見立てたりする。

■カエルやカニ、ペンギンなどの浮くおもちゃで、ごっこ遊びを楽しむ。

■舟(ペットボトル2ℓ×3本組)を動かしてみたり、乗ってみたりする。

■お家の人に手伝ってもらいながら、“金魚ちゃんすくい”や花はじきを拾って、おみやげにする。

*金魚ちゃん…ペットボトルの蓋に赤いビニールテープを巻き、尾びれ部分としてビニールテープに三角の切り込みを入れ、目や口を描いて金魚に見立てた物。

プール参観日の流れ

9:00～

着替え

保育室内で体操を兼ねたダンス

<大プールで>

9:30～9:45

身体いっぱい、水の心地よさを味わいながら遊ぶ。

<年少棟のプールで>

9:45～

好きな遊びをする

- ・いろいろな道具を使って、水の変化を楽しみながら、心ゆくまで遊ぶ。
- ・保護者に手伝ってもらいながら、金魚ちゃんすくいや花はじき拾いをする。
大プール最後のお楽しみで、金魚ちゃんや花はじきはおみやげにする。
- ・水遊びに満足した子ども達から、着替えて好きな遊びをする。

年中**水遊び・プール遊びの経験の意味****たっぷり遊ぶなかで満足感を味わう**

教師に向かって水を喜々として散らしてくる子どものいたずらな表情、教師の背中に乗ったり、抱っこしたりしてもらったりしながら水の中を進む子ども達の満足そうな表情、片手にジョウロをもち、水の感触を味わうように水の中を歩いている子ども達のほんわりとした笑顔…。そんな子ども達の表情を見ていると、早く水に慣れさせよう、泳がせようとするよりも、子ども達が自分なりのやり方で水とたっぷり遊び、満足感を味わうことが大切であると思います。

年少組の頃には、教師やまわりにいる友達の真似をして水遊びを始め、水の動きに心を動かされな

がら心ゆくまで遊んでいた子ども達も、年中組では“自分で”水へのかかわり方を選んで、“自分なりに”水にかかわってみるなかで、水の感覚や心地よさを味わったり、“自分なりに”試したり、気づいたりするようになります。教師は子ども達一人一人の“自分”を大事にしながら、水への親しみを見極めたうえで、適切に援助をしていくことで、子ども達は水とたっぷり遊び、満足感を味わうことができます。こうした“満足感”は自己充実につながり、次の遊びや生活への意欲につながると考えます。

こうした満足感を土台に、水に苦手意識がある子ども達も、徐々に水に慣れていき、「顔に水が散っても平気になった」「ちょっと水に顔をつけることができた」と、その子どもなりに水に慣れることも大事にしたいと考えています。

気づきや発見を

水は子どものかかわり方によってその姿を変え、子ども達に様々な気づきや発見を誘発します。水を入れたペットボトル（2ℓ）をプールの中へどぼんと落としてみて沈み方に驚いたり、とても暑い日は水道水が冷たいことに気づき、教師にざぼっとかけて反応を喜んだりすることもあります。台所用洗剤の空き容器やペットボトルで作った水鉄砲で、どの位の力を入れるとどれくらい水が飛ぶのかなどに気づきます。また先生の背中や舟に乗ってみることで、ふわっと浮く感覚に気づいたり、先生を追いかけてみるなかで、水中で足を動かす抵抗感に気付いたりします。

このように自分なりに水とかかわるなかで、水の性質を感じながら気づきや発見に心を躍らせ、繰り返し試してみようとする姿も大事にしたいと思います。

水遊び・プール遊びのねらい・内容

○自分なりの楽しさを見つけて遊ぶなかで、水とたっぷり遊ぶ満足感を味わったり、水の性質や水ならではの感覚を味わいながら、様々な気づきや発見を楽しんだりする。

■ペットボトルの舟につかまって進んだり、先生の背中に乗ったり、先生の引っ張るフープにつかまったりして遊ぶ。

■先生と水のかけ合いっこや追いかけっこをしたりして、開放感を味わいながら遊ぶ。

■先生や友達と一緒に様々なごっこ遊びを楽しみ、水に親しむ。

■水遊びの様々な道具を使って、自分なりに繰り返し試して遊ぶ。

環境と援助

子ども達が自分なりの楽しさを見つけて遊んだり、気づきや発見を促したりする環境

プールサイドには様々な水遊びの道具やおもちゃを用意しています。ペットボトル製の舟（2ℓ×3本）は、水が苦手な子どももそこに身体を預け、進んでいるだけで心地よく、時に教師や友達とのごっこ遊びの道具ともなります。なかには、舟を形作っているペットボトルのふたを開けて水を入れ、沈んでいくこと気づいたり、逆さまにして水が3箇所から流れ出ることが楽しくて、繰り返し試してみたりすることもあります。

2ℓのペットボトルを横半分に切って穴を開け、取っ手をつけて作ったシャワーでざぶっと水をくんで流れ出る様子を楽しんだり、500mlのペットボトルのふたに穴をあけて作った水鉄砲をびゅっと押しつけて、弧を描いて水が出てくることを楽しんだりします。洗面器は探検ごっこの舟になったり、時には教師に冷たい水や強い勢いの水をかける道具になったりします。

浮くおもちゃ（動物や様々な形）や沈むおもちゃ（貝や魚などの形）は子どもの遊びのイメージを引き出し、ごっこ遊びの大事な道具になったりします。

以上のように、子ども達が自分なりの楽しさを見つけたら、気づきや発見を促すことができたりする道具やおもちゃを用意しています。

子どもの水への親しみ具合に応じた援助

水がまったく平気な子ども達には、教師がフープを乗り物などに見立てて、子ども達を数人つかま

らせ、勢いよく引っ張ってみたり、水をかけ合ったりするなど、水と思いきりかかわって遊ぶなかで、満足感が味わえるようにしています。

顔に水が散るのがいやな子どもには、浮くおもちゃ（動物や様々な形）や沈むおもちゃ（貝や魚などの形）やペットボトル製の舟（2ℓ×3本）など、子ども達からイメージが生まれやすい物を使って、その子どもの興味・関心に応じたごっこ遊びに誘ったりしています。また、少々顔に水が散っても平気になるように、子どもの表情を見ながら、やわらかい水をかけてみたり、目に入らないように後ろから水をかけてみたりし、「すごい、水をかけても大丈夫なんだね」と言葉を添えています。

プールに入ることすらいやな子ども達には、ビニールプールや水遊びの道具を用意し、安心してゆったり遊べるようにしておきます。そして様子を見ながら、プールに誘い、身体はプールに浸かりながらもプールサイドで水遊びができるようにしています。そして時折、教師が背中から水をかけてみたりして、「すごい、平気なんだね」と声をかけたりします。

以上のように、水とたっぶり遊ぶ満足感を味わうためには、子どもの水への親しみ具合を見極めようとして、一人一人の興味、関心に応じた援助が必要だと思われまます。また、教師が子ども達がつかまっているフープを乗り物に見立てたりして、楽しそうに引っ張ったり、水のかけ合いを本気になって楽しんだり、スキンシップを楽しみながら子ども達を背中に乗せてワニ歩きしてみたり、子ども達とともにイメージの世界を共有しながらごっこ遊びを楽しんだりすることも、“プール楽しかった”と思えるための、必要な援助であると思われまます。

Episode

平成22年度

エピソード① 先生をやっつけろ（前庭にて） 6月

年中棟の前庭には、ミニプールや足洗い場を利用して、水遊びができる環境を設定していた。ホースを使って水を思い切り出して遊んでいた時、ホースの水で教師をねらう遊びが始まった。子ども達はひとつのホースを一緒に持って、逃げ回る教師の動きに合わせるように走り回っていた。どの子どもの表情もはじけるような笑顔で、逃げている教師もニコニコと一緒に遊んでいた。教師がホースの水から身体をかばうように、黄色いビニールシートで体を覆うと、子ども達はさらに熱中して教師にホースを向けていた。



<エピソード①より>

毎年プール遊びの前には、水に徐々に慣れていくことができるように、前庭で水遊びをしている。この遊びでは、ホースを使った水遊びを楽しんでおり、いつの間にか教師が水をかける的になって、教師や友達と一緒に、水とふれ合う楽しさや開放感を味わうことへとつながっていった。

教師が的になることで、友達と一緒にホースを持ったり、みんなで追いかけてたりして、自然と子ども同士のかかわりも深まっていったように思う。



<文責 都築>

エピソード② 大好きなフープ 6月

プールでは、子どもが自由に使えるように、水遊びの遊具のひとつとしてフープを置いている。使い方によっては危険なこともあるので、事前に使い方なども丁寧に知らせている。水に入ってフープをかぶり、電車にして楽しんだり、子ども達が「乗せて～」と声をかけ合って一緒に遊んだりする姿も見られた。

教師が水の中にフープを縦に沈めて、その中を子ども達がかぶって遊ぶイルカショーでは、フープの高さを「高くして」「私は低くして」と言って、かがんだり、恐る恐る通ったり、思い切りもぐって通ったりしていた。

<エピソード②より>

フープというひとつの遊具から、電車に見立てたり、イルカショーをしたりして、子どもの興味に合わせて多様な楽しみ方ができることがわかった。自分なりのやり方を見つけて、水遊びを楽しむ年中児のねらいから考えると、ねらいに応じた教材であると思った。

<文責 都築>

エピソード③ ペットボトルに乗りたいな 6月28、29日

前回のプールの時にペットボトルの舟(2ℓ×3本組)より大きなものがほしいと男児が言っていたので、12本のペットボトルとカラー布ガムテープを用意し、登園後、プールの準備をすませた興味のある子ども達と作った。子ども達がガムテープを貼り始めた時に、一部分しか貼られていないのを見て、きっと壊れるだろうと思ったが、ここで教師が知らせるのではなく、自らがしたことを実際に体験してみて考えてほしいと思った。教師は口を出さずに作っている様子を見ながら、プールに入るのを楽しみにしている思いに共感していった。

プールに持って行くと作った子ども達だけでなく、それを見ていた子どもも「乗りたい」「一緒に(つかまって)浮かびたい」と集まってきたが、一部分しかテープが貼られていなかったため、すぐに重さに耐えきれずバラバラになった。それを見て、子ども達は「もっとテープを貼らんといかん、今度は丈夫に作ろう」「もっと大きい舟が作りたい」と口々に言っていた。

29日には前日みんなで作ったものより大きい舟になるよう、16本のペットボトルを用意した。前日作った男児達が集まってきて、作り始めたが、前日のことを思い出してか、「先生小さいのみに、3つずつぐるぐる巻いて」と言ってきたので、「こうやって巻くが?」と聞きながら巻いた。子ども達は3本ずつ束ねたペットボトルを全部合体させようと、「こっち持ちよって」「ここ押さえて」と声をかけながら、お互い押さえたり、テープの両端を持ったりしながら協力した。その後、さらに壊れないようにと、カケル、タイチ、ナオキ、セイタロウ、ディスクはガムテープをちぎり、「ここまだ、くっついてないね」などと言いながら、弱そうな部分を貼って補強していた。補強されたペットボトルは接続部分がほとんどわからない状態になり、ひとつの大きな塊に見えた。男児達は作った後も、ペットボトルを囲んで「上に乗れるかな?」と言い、床に置いて実際に座ってみて「3人やったら乗れるで」「楽しみ」などと話をしていた。

プール遊びが始まると、作った子どもはペットボトルのまわりに集まり、上に乗って遊ぼうとしていた。3人が乗ることのできる大きさであることは、部屋で乗って知っているのだから乗ろうとするのだが、プールでは同じようにはいかず、3人乗ると沈んでしまったり、バランスがとりづらく、片側が沈んだりしてしまう。乗っている子どもは、さらに乗り込んでくる子どもに「乗らんとって」などとは言わずに、ペットボトルが沈むのさえ楽しそうに



「沈む～」と叫び、自分が滑り落ちる時も、「落ちる～」と喜んでいて。そのうち、遠巻きに見ている舟作りにかかわらなかった子どもも、一緒につかまったり、乗ったりして遊んでいた。



遊んでいるうちに、真中あたりから、折れて半分になってしまったが、誰にも残念という感じはなく「あははは、壊れた～」と楽しそうに遊んでいた。教師は自分達が作ったものが壊れたのにずっと笑顔なのに驚いた。

プールの片付けになり「ここに（プールサイドに）置く？」と聞くと「部屋に持って帰りたい」と言ったので大切に置いておいて、また使いたいということだろうと考え、保育室に持って帰った。

<エピソード③より>

子ども達はプールの時間に毎回ペットボトルの舟（2ℓ×3本組）で繰り返し遊んでおり、舟を使うと体が浮いてゆらゆらと揺れるのが楽しく、その水ならではの感覚が子ども達の心を捉えていたようだった。その心地よさを今度は大きな舟の上に乗って体全体で味わいたいと考えて舟作りが始まったのだろう。子ども達は自分達なりに考え製作したが、実際に浮かべて試してみると一度目は失敗した。しかし自分達で作って成功させたいという気持ちがとても強く、またその過程を非常に楽しんでいたため、失敗しても楽しさや意欲が損なわれることがなかったのだろう。

年中の水遊びのねらいでもある自分なりの楽しさを見つけて遊ぶなかで、水の性質や水ならではの感覚を味わいながら、様々な気づきや発見を楽しんだりすることがペットボトルの舟作りによってできたのではないかと考える。

<文責 大野>

エピソード④ 年長組から刺激を受けて 7月

年長組の子ども達が、プールサイドでプールに足から飛び込んで遊んでいた。教師が見守る中で自分で飛び込んだり、教師が子どもを抱っこしてプールの中に放り入れる遊びで、年中組の子ども達は最初はじっとその様子を見ていた。

キコが「あたしもやりたい」と言うので、年長組の先生にお願いして、放り入れずに抱っこしたままプールサイドからプールの中に入れて遊ばせてもらった。その様子を見た他の子ども達も「ばくもやりたい」「私も」と言って、次々とその遊びを楽しみ始めた。

次の日からは何人もの子どもがその遊びを楽しむようになり、新しい遊びのひとつとなっていた。

<エピソード④より>

年長組の子ども達と一緒にプールで過ごしたことで、新しい刺激をもらって遊びが広がっていったエピソードである。勢いよく飛び込む年長組の姿に憧れを感じて、自分なりにチャレンジしてみると水とのかかわりがダイナミックになっていった。

<文責 都築>

エピソード⑤ プールの中で探検ごっこ 7月16日

子ども達と、探検ごっこ（洗面器を船に、スポンジでできた動物を乗組員に見立て、プールを1周するという遊び）をしようという話になり、いつもは洗面器に入れるのだが、他の子が使っていて洗面器もスポンジもなかったため、教師が「じゃあ先生が、ワニになろうかな～」と言うとナオコが眉間にしわを寄せた。顔に水のかかるのがとてもいやなナオコは、ワニ歩きはしたことがない。水が苦

手なケンタも少し困ったような表情をした。そこで、教師が「ワニのお母さんになるき、子どもは上に乗ったり、つかまったりして、えいきね。お母さんワニは子どもを守るき」と言うと、ナオコがすぐに笑顔になり、背中へと乗ってきた。ケンタも教師の肩にしがみつ、他の子ども達も乗ったり、くっついたりしてきた。

教師がプールの脇に生えている木を見て「バナナだ～」と言ったり、補助教諭を「くじらだ～！」と見立てると、子ども達から笑い声がたくさん出て、補助教諭を「怪獣だ！」と言う声が上がった。すると、その声を聞いた補助教諭が怪獣の真似をして、こちらに来る素振りを見せたので、子ども達は「きゃー」と声を上げた。プールの反対側端まで進んで行くと、他のところで遊んでいたカケルがきて「先生見て見て、泳げるき」と言うので、止まって、カケルが泳ぐところを見た。するとカケルが思い切りバタ足をしたので、教師とまわりの子ども達全員の顔にいきなり水がかかった。

教師は子ども達を背中に乗せているため、一人一人の表情はほとんど見えないのだが、プールが苦手なナオコやケンタは、泣きそうになっているのではないかと心配した。カケルがこちらを振り向いたので「すごいね～。カケルくんイルカみたいやだね」と言うとカケルはにこにこ笑顔になった。「でもね、カケルくん、バタ足いきなりしたき、みんなの顔に水がかかったみたいで」と子ども達を背中から降ろしながら伝えた。するとケンタが「けど、見てほしかったがでね、わざとじゃないき、かまん」とカケルと教師に向かって言った。横で顔をぬぐっていたナオコまでもがうん、うんとうなずいている。ぬぐった後はニコニコと笑っていた。「そうか、わざとじゃないもんね、かまんよね」とケンタに向かって言うと、まわりの子ども達も相槌を打った。見てもらって満足したのか、去っていかうとするカケルに向かって「バイバイ、イルカさ～ん」と言うと、カケルがゲラゲラ笑い、子ども達も「バイバイ、イルカさ～ん」と笑いながら手を振った。

出発地点まで戻ると、いつもなら教師がそばを離れると、すぐにプールサイドに上がってしまうケンタとナオコは、その日は最後までプールの中で遊んでいた。

<エピソード⑤より>

探検ごっこは水遊びが苦手な子どもも教師や友達と一緒に、楽しい雰囲気の中で安心して遊んでほしいと願って誘っていた遊びである。特にプールを自由に歩けるように考えた遊びで、手に浮くものを持っていると安心するという点と、顔に水がかかりそうな時には洗面器でブロックすることができるということから、洗面器を舟に見立てていた。この時は、たまたま洗面器もスポンジもなかったもので、ワニになった教師の背中に乗ったりしながら行くことになったが、子ども達はさぞかしドキドキしただろうと思う。プールの半分まで来たところで、顔に水がかかり、もう子ども達は探検ごっこをいやがるのではと教師は思ったのだが、子ども達の反応は意外とも思えるもので、カケルに対して、すぐに注意した自分が恥ずかしくなった。水をかけたのがケンタやナオコと仲のよいカケルだから、「かまん（かまわないよ）」と言ったのだろうか？ それとも水が少し平気になったのだろうか？ 一体どちらなのか、または両方なのかわからないのだが、この探検ごっこの後もプールから上からず遊んでいたことを考えると、この探検ごっこを通して、子ども達の中で、水への意識が少しずつ変化していると考えられる。

<文責 大野>

エピソード⑥ 夏休み明けのプール遊び 9月1日

夏休みが明けて最初のプール遊び。2学期初日には着替えなどもふだん通りのペースで行うことができ、プールを楽しみにしている様子が全体からも感じられた。ミナコは入る前から「泳げるようになったき、見せちゃおきね！」とはりきっている様子だった。

プールに入ると、ミナコはさっそく体全体を水につけ、自信たっぷりに泳いで見せてくれた。平泳ぎとクロールが混ざったような体の動きで、ちゃんと前に進んでいた。「すごいね！」と教師が伝え、満足そうに笑い、何度も見せた。

<エピソード⑥より>

夏休み中には家族で海やプールに出かけている子ども達が多く、夏休み明けには水とのかかわり方がダイナミックになっている。幼稚園での水遊びの経験だけでなく、家庭での経験を教師が理解し、成長を受けとめる援助が大切である。

<文責 都築>

エピソード⑦ 張りきって遊ぶ子ども達 プール参観日当日 9月4日

これまでに夏休み中にできるようになったことを見てほしいという姿がたくさん見られており、参観日当日も、顔つけやフープくぐり、ワニ歩きなどをしながら「先生見て」と声をかけてくる子ども達が多かった。

なかでも、顔つけができるようになったユウコは「11まで顔をつけれるき数えてよ」と言って、顔をつけて見せてくれた。それを見ていたミナコやカナが同じように真似をして、順番に顔をつけたりまわりにいた子ども達が数を数えたり、同時に顔をつけて競争したりして、とても意欲的に顔つけに取り組む姿が見られた。保護者に「見て」と言って見せている子ども達もいた。

<エピソード⑦より>

参観日当日には、ふだん子ども達が楽しんでいるプール遊びの様子を保護者に見てもらっている。保護者が見てくれることで、子ども達の意欲も一段と増しており、保護者が見てくれることが子ども達にとっては意欲につながるがよくわかった。

また、自分なりに取り組んでいる子ども達の姿を見もらうことで、一律に泳げるようになることを目指しているのではなく、子ども達一人一人の水とのかかわり方を受けとめて、個々に応じて深めているという保育内容を伝えるきっかけになっていると感じた。

<文責 都築>

エピソード⑧ 「探検ごっこしよう！」 プール参観日当日 9月4日

教師は子ども達に「先生遊ぼう～」と声をかけられたので、「何して遊ぶ？」と尋ねた。プールの苦手な子ども達だったので、教師はいつものように「晩ごはんぁにごっこ」(子ども達数人と輪になって集まり、晩ごはんに見立てた、魚介類や動物の重り付きスポンジを、プールに落とし、「せーの、晩ごはんぁに?」のかけ声と共にプールの中から拾って、お互いに見せ合って食べる真似をする遊び)をしようと返事が返ってくるだろうと思っていた。ところが、「探検ごっこしよう！」とケンタが言ってきた。今まで教師の誘いでしかしたことがなかった探検ごっこを、ケンタ自らが誘ってきたのは驚きだった。おまけに、一緒にいたナオコまでもが「用意したで」と言ってカエルやウサギの型のスポンジを集めていた。近くにいたセイタロウやカケルも一緒にすることになった。教師はいつもカエルやウサギを乗せるのに使っている洗面器が無いことに気付き、人数分持って、プールに入った。ケンタに渡そうとすると「いらん」と言われた。「えっ? ケンちゃんいらんが?」と思わず念を押して聞いてしまった。ケンタからは、「うん、いらんよ」との返事。今まではこれがないと、安心してプールの中央へ行くことができなかった。まわりの子どもにも「洗面器いる?」と聞くとみんなも「いらん」と答えた。「すごい、お舟なしで探検に行けるんやね～」と言いながら、子ども達と探検ごっこに出発した。

<エピソード⑧より>

“晩ごはんぁに”は水の苦手な子ども達にも教師と一緒にごっこ遊びをして楽しむことによって、少しずつ親しんでほしいと願っていた遊びだった。プールの1番浅い(南と北で深さが20cmほど違

う) 所で遊ぶことで、水の苦手な子ども達でも、プールの縁で安心して身体を水につけたり、水の中の物を拾いながら、水の気持ちよさや、水遊びを楽しんでほしいと願ってプール開きの頃から誘ってきた。この遊びはプールの時間の始めに教師からの誘いで始まり、7月に入ると子ども達から声があがってすることが多かった。しかし、今回はその“晩ごはんなあに？”ごっこではなく、水の苦手な子どもには行くのに勇気のいる探検ごっこを自らがしようと言ってきたのに驚くとともに、さらに洗面器をいらないと言ったことで、水に対する苦手意識が変化していることや、なくても大丈夫という自信がついたことを感じた。

プールが始まったばかりの時期には、プールバックを持って来ることさえいやがり、水着への着替えもしなかったケンタが、最後の日には「探検ごっこしよう」と自らがしたい遊びを選んで自信をもってできるようになったことは、大変うれしかった。

＜文責 大野＞

参考資料

【年中組】

プール参観日当日のねらい(○) 内容(■)

○最後のプールを存分に楽しむ。

■これまで楽しんだ遊びを思いきりする。

■宝探しやジュース拾いをする。

■保護者に見てもらったり、ジュースを一緒に飲んだりする。

○来年のプール遊びを楽しみにする。

■年長組でのプール遊び(水鉄砲など)を教師から聞いたりする。

プール参観日の流れ

9:00～ 着替え・ダンス

*準備運動を兼ねたダンスなどを行い楽しみながら、準備運動をする。

9:25～ 水慣れ・ダンス

*ダンスをしながら、水の中で走ったりジャンプしたりすることで、水の中での感覚を味わう。

9:35～ 好きな遊び

*いろいろな道具を使って、自分なりに楽しんで遊ぶ。水との親しみには個人差が大きくあるため、一人一人がゆっくりと水に親しんでいけるようにする。

宝探し(1個)

*水の中に沈んだ宝(※1)を、潜ったり顔をつけないように手や足でつかんだりなど自分なりの方法で拾い、保護者の所へ届けて入れ物に入れる。自分の力で取ったことを保護者に認めてもらうことで達成感を味わう。

10:10～ ジュース拾い

*プールに浮かべたジュースを拾い、楽しかったプール遊びを思い出しながら、家の人や友達と一緒にプールサイドでジュースを飲んで年中のプールをおしまいにする。

※1 アクリルアイス：タテ3cm×ヨコ2cmの色付きの透明な物。(赤・ピンク・青・水色・黄色・緑など、様々な色がある。花き販売店にて購入)

年長

プール遊び・水遊びの経験の意味

自分にとって難しいことに挑戦してみる

子ども達は年中組のプール遊びで、自分なりの楽しさを見つけて遊ぶなかで、水とたっぷり遊ぶ満足感を味わい、水に対して苦手意識がある子ども達も、個人差はありますが、少々水が顔に散っても平気になります。年長組のプール遊びでは、まわりの友達の様子にも目が向くようになり、「今まで怖かったけれど、飛び込み（教師が見ているところで足から）やってみようかな」「〇〇ちゃんみたいにもぐってみたいな。顔つけしてみよう」などと、心が動くことが多くなります。また、年中組のときから水が平気な子ども達も、「フープをもっと高くして！（フープをイルカのようにジャンプしてくぐるために）」「もっと向こうまで泳いでみるぞ」といった挑戦意欲がより湧くようになります。

このように、年長組のプール遊びでは、年中組の頃同様、水とたっぷり遊ぶ満足感を土台にしながらか、自分にとって少し難しいことに挑戦しようとすることで、その子どもなりの自信や達成感、満足感を味わってほしいと考えます。

ダイナミックに水とかがわる経験を

年中組では自分なりに水とかがわる経験を大事にしてきましたが、年長組では、渦巻き作りやクラス対抗風船落とし（水鉄砲）ゲームなど、自分一人の力では味わえない、みんなと力を合わせるからこそ経験できる、水の性質や水ならではの感覚、またダイナミックな水とのかかわりも楽しんでほしいと思います。またクラス対抗ゲームは、今後、運動会など様々な行事などを通して、クラスのみんなと力を合わせる経験の最初であり、チーム意識の芽生えるこの時期ならではの遊びとしても、大事に捉えています。

水の性質を楽しみながら

年中組では、自分なりに水とかがわってみて、水の性質から生じる感覚が楽しく何度も繰り返してみる姿が見られます。年長組では、これまでの水とのかかわりを通して、水の性質を理解し、目的や見通しをもって水とかがわる姿がよく見られるようになります。砂場では離れたところにある水道の蛇口から砂場まで高低差を考えながら樋をつなげる姿もよく見られます。また、水鉄砲では的を倒すために水の吹き出し口を変えてみたり、友達とタイミングを合わせて的をねらったりすることもあります。このように年長組では、これまでの経験を生かして、友達と一緒に水の性質を楽しみながら、考えたり工夫したりする経験も大事にしたいと思います。

プール遊び・水遊びのねらい・内容

○自分にとって少し難しそうなのに挑戦したり、水の性質や水ならではの感覚をダイナミックに楽しんだりするなかで、自信や達成感、満足感を味わう。

【プール遊び】

- 水の中でいろいろな動きに挑戦してみる。
- 集団ならではのダイナミックな水とのかかわりを楽しむ。

【水遊び】

- 水の性質を楽しみながら、友達と一緒に考えたり工夫したりして遊ぶ。

環境と援助

年長組では、子ども達が自分にとって難しいことに挑戦したり、ダイナミックに水とかがわったりすることで、自信や達成感、満足感を味わうことができるようなかかわりや、環境構成を心がけています。

自分にとって難しいことに挑戦できるように

飛び込み（足から）では、子ども達の声に応じて、安全に飛び込みができる場をつくり、飛び込ん

で満足そうに振り向く子どもに「やったね」などと声をかけます。フープくぐりでは、フープをもぐってくぐりたい子どもや、イルカのようにジャンプしてくぐりたい子どもなど、それぞれの子どもの要望に応じてフープの高さを変えています。水の中に投げてほしい子どもには、「なるべく遠くに投げて」「ねじるように投げて」などと要望を聞いてから、着水するまでかかえて投げ込んだりしています。もぐることが楽しくなってきた子ども達も多いので、魚貝の形をした沈むおもちゃをもぐって拾う遊びや、子ども達の心を捉える宝物探しに誘ったりしています。

水が平気な子どもがいる一方で、水に顔をつけることには抵抗がある子ども達もいます。そんな子ども達は、教師の背中に乗せてワニ歩きをし、途中で「波が来た～」などぐるりと方向転換をして、子ども達の顔にざぶんと水がかかるようにし、楽しみながらも水が平気になるようなかかわりも心がけています。また、水のかげ合いや追いかけてこなども、年中組のとき同様、一人一人の水への親しみ具合を見極めながら、行うようにしています。

水とのダイナミックなかかわりを大事にしたいので、年中組のとき用意していた水遊びの様々な道具（特にプールサイドでのままごと遊びにつながりそうなカップなどの道具）は、子ども達の水へ慣れ具合を見ながら、種類を絞ったり、出さなかったりしています。ペットボトルの舟については、浮く感覚を楽しんだり、水に少し苦手意識がある子ども達もペットボトルの舟があることで安心してプールの中でダイナミックに動いたり、浮くことそのものに達成感を感じる子ども達もいたりするので、年中組のとき同様、プールサイドに用意しています。

みんなと力を合わせてダイナミックな水とのかかわりを

渦巻き作りでは、学年の子ども達みんなが、プールの中を同じ方向へ円を回って走ろうとします。教師自ら率先して、ジャバジャバと一生懸命水の中を走り、子ども達も教師を追いかけたり、つられるように走ったりすることで、水の中では思い通りに身体が動かないもどかしさ、おもしろさを全身で味わいます。そして、教師の合図で走ることをやめてみると、水流が自分の身体を押してきて、自分が動かなくても身体が流されていく感覚も味わいます。

クラス対抗風船落としでは、プール開き前から楽しんできた、年長組になったらもらえる個人持ちの水鉄砲で、竿の先に紙テープでつけた風船を打ち落とします。プールの両サイドに別れ、風船を打ち落とすとき、自分の顔にも水がたくさん落ちてきますが、相手クラスより早く風船を打ち落としたい一心で、ほとんどの子ども達が顔にかかる水をものともせず、果敢にトライします。

このような遊びは、年中組で水とたっぷり遊ぶ満足感を味わい、顔に水が散っても平気になっているからこそ、提案できる遊びです。また、風船落としゲームは、チーム意識も芽生えているこの時期だからこそ、子ども達の挑戦意欲がよりかきたえられるのだと思われます。

以上のように、年長組では、ダイナミックに水とのかかわることができるように、学年みんなと力を合わせるからこそできる遊びも提案しています。

友達と一緒に考えたり工夫したりできるように

プールでは水とのダイナミックなかかわりを大事にしていますが、砂場や保育室前のテラス、前庭などで、これまでの水とのかかわる経験を生かして遊ぶことができるような環境（船作り、樋、ペットボトルとチューブをつなげて遊ぶ物など）を子どもの実態に応じて用意しています。

プラスチック製の水鉄砲は、毎年、個人持ちで購入するようにしています。年少、年中組の時にマヨネーズの容器やペットボトルに穴を開けた物を水鉄砲にし、柔らかな水の勢いを楽しんできました。年長組の水鉄砲はとても勢いよく飛び、少々顔に水が散っても平気になっているので、ダイナミックに水のかげ合いを楽しむことができます。「せーの一で」と心を合わせて遠くまで水を飛ばしたり、的を倒すために友達と一緒に考えたり工夫したりすることができます。プールではクラス対抗の風船落としゲームなどで水鉄砲が生かされます。

このように年長組では、水の性質を楽しみながら、友達と一緒に考えたり工夫したりできるプール以外の環境構成も大事にしています。

エピソード① 「水鉄砲する～」6月11日・14日

教材用の水鉄砲が届いた週末(6月11日)に、水鉄砲をしようと前庭に水をためた大きなたらいを準備した。前日に水鉄砲を見せていたので、子ども達は登園するなり「先生、水鉄砲する～」「水着持ってきたよ」と言って楽しみにしているようだった。みんながそろったところで、自分の水鉄砲とわかるようにマークを描いた。そして、目や耳などはねられないなど、子ども達と一緒に考えたルールを確認した。子ども達は、早速テラスに敷いたござの上で水着に着替え始めた。水着を準備していなかった子どもも、そのまま洋服で参加したり、パンツ1枚になったり自分の思い通りの装いで参加した。

友達同士で水鉄砲の打ち合いをするなかで、顔に水がかかることもあるのだが、それをぬぐってまた打ち始め、いつの間にか2チームに分かれて打ち合いをする遊びになっていった。教師が隣にいたユウキに水をかけると、「先生、俺と同じチームやき」と言って、向こうチームをねらって打つように教えてくれた。また水がなくなったら、「水をためるぞ」と、ホースを自分達で持って来て、たらいの中に水を入れていた。久しぶりに暑くなり、ビショビショになった子ども達もとても満足した様子だった。

14日、気温は低かったが、先週末楽しかったことを覚えていて今日もほとんどの子ども達が水鉄砲をしようと朝から水着に着替え始めたり、下着になったりして前庭に飛び出していった。水鉄砲で



激しい遊びを展開する男児とは対照的に、女兒は大きなたらいの中や周辺で水鉄砲から出る水の様子を楽しんだり、体にかけていたりしていた。なかには台の上に用意していたペットボトルを倒して遊ぶ子どももいた。しばらくすると、その場から少し離れたところでもまごととドッキングして、水と土を使ったお料理作りへとつながっていった。

<エピソード①より>

この水鉄砲の遊びは、水の性質を楽しんだり、のちのプール遊びで友達と一緒にダイナミックな遊びにつなげてほしいという教師の思いから提案した。

遠くに離れた友達に向かって、ダイナミックに水をかけ合っている男児とは対照的に、一か所にかたまって水をかけ合ったり、水鉄砲から出る水の様子を楽しんだりしている女兒は、穏やかに遊んでいた。かかってきた水のお返しに、遠くに水鉄砲で水を飛ばす女兒もいたが、すぐに自分達が楽しめる水鉄砲遊びを始めていた。それでも楽しそうであったが、もう一つたらいに水を汲んで女兒達が遊ぶ場も作れたら、自分達の遊びをもっと充実させることができたのではないだろうか。ビーチボールやペットボトルなどの水鉄砲で遊べる道具も、もう少し準備しておくとうよかった。しかし、水鉄砲で遊ぶことによって、プールの前に、水の感触をそれぞれの子どもに合った形で味わうことができたように思う。

<文責 中屋>

エピソード② いつも勝つのはさくら組 7月1日

お泊り幼稚園の時、前庭で水鉄砲で打ちながらビーチボールを転がし、サッカーゴールへ入れるゲームをとでも楽しそうにしていたこともあって、プールでも水鉄砲で『クラス対抗のビーチボール転がし』を行うことにした。いつものようにさくら組は北側、はと組は南側のプールサイドに座り、水鉄砲を準備して教師の合図を待っていた。教師はビーチボールをプールの真ん中に集めて動かないように押さえ、スタートと同時に手を離れた。ビーチボールを相手チームのいるプールサイドに、たくさん押し込んだ方が勝ちなので、子ども達は相手のいるプールサイドへ、ビーチボールを流そうと一生懸命に水鉄砲で打っていた。1分位たったところで止めの笛の合図。ビーチボールが、どちらの組側にいくつ流れ着いているか子ども達と一緒に確認し、勝敗を決定していた。ところが、いつも勝つのはさくら組。はと組の子ども達からは「さくら組の方が（人数が）多いき、ずるい」等の声が上がっていた。



数日ゲームを続けていたが、やはり毎回さくら組が勝っていた。ある日子ども達の中から「風ではと組の方に（ビーチボールが）行きゆう」との声が上がり、場所を交代してみることになった。すると、今度ははと組が勝った。はと組の子ども達が大喜びするなか、子ども達はやはり風が吹いてビーチボールを動かしていることに気づき、このゲームはその日で終わることとなった。

<エピソード②より>

両クラスとも、ビーチボールを打つ楽しさを味わうと同時に、勝ちたいという思いが強く、相手チームにビーチボールがいくようと、水鉄砲の準備をするときから、「ストレートにかえた方がいいよ」「こっち（ストレート口）の方が（ビーチ）ボールがあっちに行くき（行くから）」など友達同士で声をかけ合う姿もあった。いつもは、喧嘩になったりする子どもも、クラス対抗となると、自分達が勝つように、やり方を友達同士で教え合う姿があった。いつもさくら組が勝っていることで、はと組の子ども達からも、どうにかして勝ちたいという思いから、“風”という気づきにもつながったのだろう。このことからチーム意識が高くなっていることがうかがえる。

<文責 中屋>

エピソード③ 「先生、ハルコねえ、浮いたの」 7月8日

ふだんのプール遊びでは、ペットボトルの舟（2ℓ×3本組）をお盆のようにし、上に貝や魚を置いて、歩いていろいろな場所へ行くことを楽しんでたハルコが「先生、ハルコねえ、浮いたの」とにこにこうれしそうに話しに来た。「ハルコがねえ、足でポンと蹴ったら、ふわってしたの」とうれしそうにときどき足を底から離し、浮くことを楽しんでいる様子だった。

<エピソード③より>

ハルコは、まわりの友達がしているのを見て、自分もやってみようと思い、ふわっと浮くことができたのではないだろうか。まわりの友達のしていることから刺激を受けて、自分もやってみよう、できるかもしれないと、自分のペースで挑戦してみることで、できた時の喜びも大きいのではないだろうかと考える。教師は、子ども達一人一人のその芽を大切に、温かく見守りたいと思った。



<文責 中屋>

エピソード④ 年中児にいいところを見せたかったユウスケ 7月16日

ふだんのプール遊びは、子どもの様子や経験させたいことの違いなどから、年中組と年長組とで時間を分けてプールに入っているが、どちらの学年もすいぶんプールに慣れ親しんできて、ちょうど他の行事でプールの時間が重なったので、年中組と年長組合同でプールに入った時のことである。

年長児が教師に支えてもらいながら水の中に飛び込むのを、興味をもって見る年中児の姿がよく見られた。中には、年長児に交じって果敢に挑戦する年中児もいた。ふだんは自分で、または友達同士で「こんなふうに乗ろう！」とめあてをもってしている年長児達も、この日は年中児が「すごいな～」という表情で見ているので、いつもとは違う誇らしさも感じているようだった。

年中組の担任が合図して、ひと足早く年中児が出ることになった時、これまで自分からは飛び込みをしようとはしなかったユウスケが教師の所に来て、出ようとしている1人の年中児に向かって、「おい、〇〇、こっち見ろや！」と大きな声で言った。その後すぐに「先生、(僕を)投げて」と身体をあずけてきたので、教師もタイミングを逃すまいと即座に水の中に飛び込ませた。水の中から顔を出したユウスケは、呼んだ年中児の方を向いてうれしそうに手を振っていた。

<エピソード④より>

今回のように、自分にとって少し難しそうなことに挑戦しようとする姿が見られた時には、その気持ちのタイミングを逃さないようにしたい。そして、教師はその姿に共感して認めていたり、まわりの子ども達にも知らせていたりすることで、その子どもが他の誰かにも影響を与え、自分も自信や達成感、満足感を感じられるようにしたいと感じる。

<文責 矢田>

エピソード⑤ 手をつないで一緒に飛び込み 7月19日

プールに(足から)飛び込みたいという子ども達のために、飛び込む場を設けており、危険のないよう教師が援助したり、見守ったりできるようにしていた。子ども達は遠くに飛び込むことを楽しんだり、ちょっと怖いけど勇気を出して飛び込んでみたり、教師が手を持つことで少し勇気が出てきて飛び込むことができたりする姿があった。今日も活発な男児を中心に飛び込んでいた。ユウキとヒデアキとユウスケも、始めはいつものように一人一人が飛び込みを楽しんでいたが、そのうち、3人で一緒に飛び込む姿が見られ始めた。そしてその後、男児3人が飛び込んだ場所と対角の場所で、ユキとミクとイクミが、3人で手をつなぎプールに飛び込んだ(担任が近くで安全確認済み)。活発に遊ぶユキが、真ん中でリードして飛び込んでいるようだった。その横で手をつないで飛び込んだミクは、年中組の時からプールサイドに道具を出して遊んだり、プールに入っても穏やかに遊んだりすることの多い子どもであった。年長になってから水の中の感触を昨年度よりは楽しむ様子が見られていたが、飛び込んだことは一度もなかった。教師が「すごい」とほめると、ユキは「もう一回やろう」と2人に言い、2人ともにここにこしながらうなずいて、もう一度飛び込んでいた。



<エピソード⑤より>

ユキと手をつないで飛び込んだミクも、ユキに押されながらも、自分の意思で飛び込むことができた。自分1人では勇気を出しにくいことも、友達のユキと一緒にならと勇気を出すことができたのではないかと思われる。そしてそこには、男児3人の飛び込む姿を遠くから見て、自分もあんなふうにしてみたいという思いがあったのではないだろうか。教師が「やってみる？」と誘うこともあるが、こ

うして友達同士で声をかけ合って挑戦することで、自分でできたという達成感をより強く感じる事ができるのではないだろうか。

<文責 中屋>

エピソード⑥ 「こんだけとれた」 9月2日

プールの中に顔をつけたり、もぐったりすることができるようになった子どもが増えたこと、また、プール参観日で、宝拾いを予定していたこともあって、近くにいた子ども達と一緒に宝探しを始めた。キラキラと光る宝にひかれ、「なにになに？」とどンドン子ども達が集まってきた。始めは色のはっきりした赤を取っていたユリだったが、見えにくい色を取って来て、教師と「すごいねえ」と話している別の子ども様子を見た後は、水色やピンクなど、水中では見えにくい色をたくさん取って来て「先生、こんだけとれた」とうれしそうに持って来て見せた。「見えにくい色ばかり、いっぱいとれたね。見えたの？」と聞くと「うん」と得意気に答えていた。



<エピソード⑥より>

たくさん取ることを楽しんでたユリであったが、友達が拾いにくいものを拾っていることがわかると、自分も挑戦してみたくなって、見えにくい宝拾いにも挑戦したのだろう。その後も何度も挑戦しては教師に見せに来ていた。教師に褒められ、友達からも認められることで、自信をつけてまた挑戦できるのだと感じた。

<文責 中屋>

エピソード⑦ 「コースみたいにしたらいい」 9月3日

前日プール遊びをしている時に、シンジが「まっすぐ泳ぎたいのに、友達にぶつかってできん」と言ってきた。シンジだけではなく、他にも「先生、泳げるようになったき見て」と言う子ども達はいたが、いざ泳ぎ出すと、まわりにいる友達に進路をふさがれて立ってしまうことが多かった。そこで次の日の朝、教師はシンジと一緒に、まっすぐ泳げるようにするにはどうしたらよいかを、同じ年長のさくら組の教師に相談しに行った。さくら組の教師は、ちょうど近くにいたカイトに、どうしたらよいかを聞いてみた。するとカイトは、「泳ぐ所を作ったらいい」と言い、さくら組の教師が「どこに作ったらいいと思う？」と続けて聞くと、「魚（プールの底に描かれている）がある所で区切ったらいい」と答えた。さくら組の教師とカイトのやりとりを聞いた後で、はと組の教師が、シンジに「そうする？」と聞くと「うん」と答えた。そこで、早速その日から、プールの底にある魚の絵に合わせて水面にホースを張り、話のなかにシンジやカイトのエピソードを交えながら、ホースを張っている1コース分は泳ぐコースであることを他の子ども達に伝えた。夏休み明けということもあり、水に浮くことができるようになった子どもや、少し泳げるようになった子どもも増えており、コースの中で順番に泳ぐことを楽しむ様子が見られた。

<エピソード⑦より>

シンジは、夏休みの間にいろいろな形で水に親しむ経験をして、夏休み明けには、泳ぐことに自信を感じているようだった。それを、幼稚園のプールでもぜひ実現しようと思ったのだろう。しかし幼稚園のプール遊びは、たくさんの友達と一緒に、自分のできることを試したり楽しんだりしていく形式なので、シンジは自分のしたいことを十分にはかなえることはできていなかった。

教師はシンジからその思いを聞いた上で、本園における年長組のプール遊びのねらいが「プールの

中で自分にとって少し難しそうなことに挑戦したり、水の性質や水ならではの感覚をダイナミックに楽しんだりするなかで、自信や達成感、満足感を味わう」であることをおさえ、“泳ぐことに自信がついてきて幼稚園のプールでもそれを発揮したい”と感じている子ども達が、シンジを含め他にもたくさんいることを考えて、その思いが幼稚園のプールでもかなえられるようにしたいと思った。そこで教師は、シンジと一緒に隣の年長担任に相談するなどして、まわりの意見や考えにもふれていけるようにし、自分の思いをかなえるためにはどのような工夫すればよいかをシンジが考えていけるようにした。

<文責 矢田>

エピソード⑧ 「あのひものところをねらったらいいが(いいよ)」 9月3日

クラスみんなで力を合わせて、水鉄砲で風船を打ち落とす“クラス対抗風船落とし”に初めて挑戦した。1本の竿に紙テープ1本で付けた風船を3個貼ったものを2組用意した。水鉄砲を準備するときには、ほとんどの子ども達が、ストレートの口に付け替えて準備している。そして、さあ始めるぞという時、見学してプールサイドにいたヒデアキが「あのひも(紙テープ)のところをねらったらいいが(いいよ)」とクラスみんなに聞こえるように言った。スタートの合図と同時に一齐にストレートの水鉄砲によって風船が落とされていく。この日は10秒程で両クラスとも風船が落ち「これ簡単!」との声も聞かれた。

そこで降園後、少し難しくするために、1つの風船と竿を3本の紙テープで貼り付け、紙テープを3本切らなければ1つの風船が落ちないようにした。次週それで挑戦してみると、風船を落とすのに、さらに1、2回水鉄砲に水を入れ替えないと全て打ち落とせない程難しくなり、より難しくなったことで挑戦意欲も増し、子ども達も真剣に、集中して撃ち落とすようになった。



<エピソード⑧より>

子ども達は、用途によって水鉄砲の吹き出し口を替えている。以前行ったクラス対抗のバケツ水入れでは、実習生の頭の上に置かれたバケツにたくさんの水を入れるために、「シャワーがいいぞ!」とシャワー口に替えていたこともあったが、今回はねらいを定めるためにストレートに替えて紙テープのところをねらっていた。それぞれの場で、どちらがいいのかをよく考えている様子が見られる。クラス対抗ということで、どうしたら勝てるかを考え、みんなに伝えることで、同じめあてに向かっている子ども達の姿が頼もしかった。

<文責 中屋>

エピソード⑨ “みんなで”の意識がよく見られた参観日 プール参観日当日 9月7日

この日は、お家の人が見に来てくれていることもあって、ふだんよりもはりきっている感じがよく伝わってきた。プール前の体操では、ふだんであればあまりやりたがらない様子の子もいるが、当日は、全員がはりきって体を動かしており、体操の中のかけ声や表情も生き生きとしている子どもが多かった。また、水鉄砲の風船落としなど、みんなでする遊びでも、勝つために(そのよりよい自分の姿を見ってもらうために)お互いに声をかけ合ったりする姿もふだんより見られた。

プール遊びの最後の宝探しでも、教師が「年中組の時は(拾えるのは)1つだけだったけど、年長組のみんなは水にうんと慣れてきたから3つ拾えます。でも水の中で見えにくい色もあるから、困っている友達がいたら手伝ってあげてね」と、始める前に知らせると、拾い始めてしばらくした頃から、友達に見つけてあげる子どもの姿が見られ、教師が「〇〇ちゃんが、水色のクリスタルを探してます!」

とアナウンスすると、まわりの子ども達がバシャッと潜って探してあげるような姿もよく見られた。

＜文責 矢田＞

エピソード⑩ 「先生見よってよ」「そこおってよ」 プール参観日当日 9月7日

1学期、水深の低い方から入水したり、顔に水がかかることが好きではなかったヒナが、「先生見よってよ」と少し泳いで見せてくれた。1学期の様子からは想像できなかったもので、驚き、「すごい」と抱きあげて褒めた。すると「先生、そこおってよ」と今度はもう少し離れた所からもやって見せた。夏休みにいっぱい練習したことも話してくれ、見に来てくれていた母親の顔も横目で見ながら、その表情は、喜びと自信に充ち溢れていた。

＜エピソード⑩より＞

夏休みやその後のプール遊びで挑戦してできるようになったことを、見せたいという気持ちが強く感じられた。できるようになったことで自信をつけ、さらに教師にも見てほしいと思い、見せに来たようだった。教師にも認められることが自信につながった様子で、その後も何度も泳ぎに挑戦したり、すでに泳ぐことのできる友達に声をかけて、一緒に泳いでみたりする姿もあった。できた喜びや認められるうれしさは、子ども達をより向上させるのだと改めて感じた。

＜文責 中屋＞

参考資料

【年長組】

プール参観日当日のねらい（○）内容（■）

○できるようになったことを、友達や先生、お家の人に見てもらい、喜びや誇らしさを感じる。

■水に顔をつけてみたり、もぐってみたり、水の中へ足から飛び込んだり、先生に水の中に投げてもらったりする。

■いろいろな高さ（※1）のフープをくぐったり、宝（※2）や水底の遊具（※3）をもぐって取ったりする。

■先生の背中に乗ったり、先生の引っ張るフープにつかまったり、先生や友達と水のかけ合いっこや追いかけっこをしたり、ペットボトルの舟につかまって泳いだりする。

○クラスみんなで力を合わせる喜びを味わう。

■身体をいっぱい動かして、学年みんなで渦巻き作り（※4）をしたり、水に身体が流されることを楽しんだりする。

■クラスのみんで力を合わせながら、水鉄砲を使った“クラス対抗風船落とし”をする。

※1 フープを水に沈めたり、水面より上に持ち上げたりして高さを変える

※2 アクリルアイス：タテ3cm×ヨコ2cmの色付きの透明な物。（赤・ピンク・青・水色・黄色・緑など、様々な色がある。花き販売店にて購入）

※3 魚介の形をした沈むおもちゃ

※4 プールの中で同方向に円を回して走って水流をつくる

プール参観日の流れ

9：15～ 保育室内での体操を兼ねたダンス

9 : 35 ~ 水慣れ

渦巻き（流れるプール）作り

*みんなで同じ回りの向きに動いて、円を描く大きな流れをプールの中に作る遊び。

1人では決して作ることのできないもので、しかも大量の水を動かすにはみんなで息や力を合わせて動かなければならない。ひとたび水に流れがつくと、その中でフワッと身体が浮いて流れていく、水特有の心地よい感覚を味わうことができる。

ねことねずみ

*プールの中でクラス毎に、ねことねずみのチームに分かれてする追いかけっこ。追いかけて逃げたりしながら、ダイナミックに動くことで、ふだんとは異なる水の中での感覚を感じることができる。

好きな遊び

*できるようになったことを、友達や家の人に見てもらって遊ぶ。

10 : 30 ~ 水鉄砲を使っての“クラス対抗風船落とし”

*水鉄砲競争では、どうすればより早く風船を落とせるかを友達と考えて、「せーの！」とタイミングを合わせたり、時には顔に水がかかったりもするけれど、目的に向かってこらえながら頑張ったりして、みんなで味わう達成感を感じてほしいと思い行っている。

宝探し（3個）

*水の中に沈んだ宝を潜ったり、顔をつけたり、手や足でつかんだり、自分なりの方法で拾い、拾ったものはお家の人の所へ届けて入れ物に入れ、おみやげにする。

家の人や友達とジュースを飲む

*最後に、楽しかったプール遊びを思い出しながら、家の人や友達と一緒にプールサイドでジュースを飲んで、幼稚園でのプール遊びを終える。

“水遊び・プール遊び（プール参観日）”のエピソード全体を通じた考察

“満足感” “気づき 発見 考える”

エピソードを記録、考察し、経験の意味を見直すなかで、あらためて水遊び・プール遊び（プール参観日）のそれぞれの学年のねらいを明らかにしていった。各学年のねらいは、年少で“…心ゆくまで水と遊ぶ楽しさを味わう”、年中で“…水とたっぷり遊ぶ満足感を味わう”、年長で“…自信や達成感、満足感を味わう”である。年少では用語こそ使用していないが満足感を含めており、全体として水遊び・プール遊び（プール参観日）においては満足感を第一義に置いている。

満足感を第一に置いたのは、本園のプールが、ひと学年最大56名が入っても、一人一人が身体全体でたっぷり遊ぶ広さに恵まれていることにも依る。プールシーズンは、天候の許す限り、毎日プール遊びができるようにしている。暑くて水が心地よい時期だからこそ、開放感を味わいながら身体いっぱい水とかかわって遊ぶ楽しさを味わってほしいという願いが根底にあり、豊かな環境を活かして“満足感”というねらいにつなげたいと考えた。

さらに、各学年のねらいにおいては、年中組のねらい（○）で“…水の性質や水ならではの感覚を味わいながら、様々な気づきや発見を楽しんだりする”、年長組の内容（■）で“…水の性質を楽しみながら、友達と一緒に考えたり工夫したりして遊ぶ”というように、水の性質を活かした遊びを通じた気づきや工夫におけるねらいを設けることができた。

本園教育目標との関連

水は、子ども達がかかわることによってその形を変え、それにより子ども達の心を動かし、子ども達により水とかかわってみようとする意欲をもたらす。年少では水とかかわって心が動かされると、

“心ゆくまで”繰り返してみようとする。年中では、水とかかわって気づいたり発見したりしたこと（心が動かされたこと）を“自分なりに”試してみようとする。年長では“これまでの経験から”水の性質がわかり、友達と一緒に水の性質を楽しみながら、友達と一緒に考えたり、工夫しようとしたりする。

上記の“心ゆくまで”“自分なりに”“これまでの経験から”は、本園の教育目標である“よく考えて行動する子どもを育む経験の道筋”のキーワードでもある。（本園20年度紀要参照）これまで水遊び・プール遊び（プール参観日）は、必ずしも本園の教育目標とのつながりで捉えられてこなかったが、今回の研究から、水の性質から遊びを分析し、経験の意味とのつながりを捉えることができた。

一人一人の気持ちを丁寧に見ていき、育ちにに応じた援助をする

年少組では、水が楽しいと思えるように、心ゆくまで遊ぶことができるように、年中組では自分なりの楽しさを見つけることができるように、年長組では自分にとって少し難しそうなことに挑戦できるように、育ちにに応じた援助をしていかなければならない。そのためには、子ども達がどのような思いで、どのように水とかかわっているのか、一人一人の内面を探っていかなければならない。ふだんの保育でも子ども達の内面を捉えて、一人一人の育ちにに応じた援助をすることは当然のことであるが、水遊び・プール遊び（プール参観日）のねらいを確認したことで、一斉的な活動になりがちな水とのかかわりにおいても意識することができた。

プール参観日の位置づけが明らかに

これまでのプール参観日では、前年のプール参観日の内容を形だけ参考にすることが多かった。内容にどのような意味があり、これまでの水遊びやプール遊びとの連続性や、年少・年中・年長とどのように発達の連続性をふまえているのかといったことなどは、全員で話し合われることはなかった。この度、プール参観日を経験の意味から見直すなかで、手前の水遊び・プール遊びの経験とのつながりでプール参観日を捉えることができた。活動内容のみを羅列することが多かったプール参観日にも子ども達一人一人を育てる視点が共通理解され、保護者に参観の意図、保育のなかで大事にしていることを伝えやすくなった。

今後の課題

こうして経験の意味が明らかになると、逆に十分でないことも明らかになった。年長組では、水とダイナミックにかかわる経験をしてほしいので、プールサイドに水遊びの道具を置いていない。その分、年長の内容（■）に表しているように、“【水遊び】■水の性質を楽しみながら、友達と一緒に考えたり工夫したりして遊ぶ。”という経験ができる環境を意識的に保育の中に取り入れていかなければならない。しかし、現在、年長の水遊びのエピソードが水鉄砲のみであることからわかるように、水遊びを通して考えたり、工夫したりする環境構成は十分とは言えない。

また、天気の良い日は毎日プール遊びをしているが、その分プール以外の遊びをたっぷり経験する時間が限られ、遊びの連続性が途切れることがある。また他の行事、他の学年のプールの時間との兼ね合いもあり、プール遊びもたっぷりさせようと思うと、プール前に子ども達をせかしてしまうこともある。自園にプールがある利点を生かしつつ、子ども達の様子を見ながら計画的に保育を組み立てていく必要がある。



運 動 会



運動会の経験の意味

本園では運動会を通して、運動って楽しいなと感じたり、進んで運動しようとしたり、「できた、やったあ」という自信や達成感を味わってほしいと考え、次のようなことを大事にして運動会に取り組んでいます。

運動会ごっこ

本園は、“運動会のために” “運動会に向けて” 仕上げるという運動会を目指していません。子ども達の日頃の運動遊びの延長線上で“お家の人が見に来てくれる運動会”を楽しみにするという位置づけにしています。そこで、運動会までの運動遊びを、“練習”と捉えずに、“運動会ごっこをしよう”と子ども達を誘っています。また、子ども達がお兄ちゃんお姉ちゃんの運動会を見たり、地域の運動会に参加したりして、運動会のイメージをふくらませてから、運動会ごっこができるように、運動会を10月中旬にしています。

残暑もやわらぎ、涼しくなってきた9月下旬から、前庭や園庭で、やりたい子ども達を誘って運動会ごっこを始めます。綱引きは、クラス対抗や男女対抗で行ったり、年中組が始めた綱引きに年長組が入ったりすることもあります。自分のチームが負けると、仲間を呼びに行くこともあります。かけっこは先生や好きな友達と走ったり、男の子や女の子に分かれて走ったりし、繰り返し走る楽しさを味わいます。年長組のリレーでは、教師がやりたい子ども達を誘って、エンドレスのリレーを楽しみます。そうして運動会への楽しいイメージがふくらんだ9月の終わるか10月の最初に、園全体で小運動会①(※1)を行います。準備体操のダンスやかけっこ、玉入れ、綱引きを幼稚園のみんなで楽しみ、運動会への期待をもたせるようにしています。そして10月初めから、学年ごとに時間を割り振って、クラスまたは学年みんなでの運動会ごっこを始めます。これは、クラスや学年のみんなで運動会ごっこを楽しむとともに、運動会のときに、見ている人にとっても楽しく、応援しやすいように、ダンスの踊る位置や、かけっこや綱引きの並び方などを知る機会にもしています。

このように、最初から練習という形で運動会に取り組むのではなく、遊びのひとつとして“運動会ごっこ”に誘うことで、繰り返し運動遊びを楽しみ、運動会へのイメージをふくらませ、運動会を楽しむにできるようにしています。

※1 小運動会①の他に、ダンスと綱引きをする小運動会②と、保護者競技や未就園児対象の競技を除いて、すべての競技を行ってみる小運動会③を行っています。

子ども達の興味や関心、イメージを大切に

子ども達はごっこ遊びが好きで、憧れているキャラクターなどになりきって遊びます。こうした子ども達の特性を生かし、絵本や子ども達が遊びのなかでイメージしていること、楽しんでいることを大事に、運動会の競技を組み立てています。例えば、年中組で運動会のダンスに孫悟空のダンスを取り入れたときは、ダンボール製の“金閣、銀閣”をボールで倒す競技を取り入れたこともありました(56ページ参照)。また年少組で探検ごっこが流行ったときは、遊びのなかで子ども達のイメージから出てきた“緑おばけにミートボールをあげる”という遊びを親子競技に取り入れたこともありました。年長組では、子ども達がふだんの遊びのなかで楽しんでいたボーリングや魚釣りを親子競技に取り入れたこともありました。

以上のように、子ども達がイメージをふくらませながら、進んで、楽しく運動しようとする気持ちを大事にしています。

自ら挑戦しようとする気持ちを大切に ―チャレンジ競技を通して―

年長組は22年度からチャレンジ競技を始めました。これは縄跳び、跳び箱、竹馬、高下駄、一輪車など、自分の選んだ種目にチャレンジして、家の方に見てもらおう競技です。子ども達にとって少し難しいことに挑戦することで、自信をもったり、達成感を味わったりし、自己肯定感をもつことで、より意欲的な子どもにしたいと考えて、取り組みを始めました。

このチャレンジ競技では、上手にできるようになることよりも、その子どもなりに頑張ろうとすることを大事にしています。そして、運動会が到着点ではなく、運動会は運動への興味が膨らむひとつのきっかけとも捉えていますので、チャレンジしたことが、運動会後も子ども達自ら挑戦していくことにつながることを期待しています。実際、運動会で竹馬にチャレンジし、数歩乗ることが精一杯だった子どもが、運動会後も毎日のように竹馬にチャレンジし、乗れる歩数を伸ばしたこともありました。運動会で一輪車を選ばなかった子どもが、運動会後に毎日一輪車にチャレンジして乗れるようになった様子も毎年見られます。

このように、チャレンジ競技を通して、子ども達が自分なりにめあてをもって、進んで挑戦しようとする気持ちを育んでいます。

以下は、チャレンジ競技のねらいを示した、保護者への手紙の抜粋です。

年長組だより

『運動会で育てたいこと』

運動会で大事にしていること

運動会では、運動遊びが大好きになること、進んで運動しようとする気持ちを育てること、運動を通して自信や達成感を味わえるようにすることをねらいとしています。特に年長組では、リレーや綱引きなどを通して、クラスみんなで心や力を合わせる喜びを味わうこともねらいとしています。

チャレンジ競技では…

2学期から取り組んでいるチャレンジ競技では、子ども達にとって少し難しいことに挑戦することで、自信をもったり、達成感を味わったりし、自己肯定感をもつことで、より意欲的な子どもにしたいと考えて、取り組んでいます。

私達教師は、上手にできるようになることをねらいとしているのではなく、その子どもなりに頑張ることを大事にしていますし、頑張る姿勢そのものに成長があるのだと信じています。例えば跳び箱で、おしりが台にかかっている、「すごい！昨日より上手！やったね」と褒めています。その時の子ども達の何とも言えない表情から、その子どもの自信が見られます。お家の方も、上手にできることよりも、日々頑張っているところを認め、応援してあげてください。運動会当日も、緊張なども手伝って、できないこともあると思いますが、温かく受けとめてあげてほしいと思います。運動会は到着点ではなく、運動への興味が膨らむひとつのきっかけとも捉えていますので、今回チャレンジしたことが、運動会後も子ども達自ら挑戦していくことにつながることを期待しています。（昨年度は運動会後も、一輪車などにトライする子どもが多かったです）※チャレンジをできるようになりたくて、頑張っているものの、なかなかできなくて戸惑っている子どももいるかもしれません。お家の人に愚痴を言った時などは共感するとともに、応援しているという温かいメッセージをお忘れなく。そして、担任までお知らせください。



学年・種目ごとのねらいについて

運動会の経験の意味を見直すなかで、発達の連続性を意識し、育ちに応じた運動会にするために、かけっこ、綱引き、ダンスなど、それぞれの種目ごとのねらいを学年ごとに立てました。

運動会の目標 ○運動することを楽しむ ○進んで運動しようとする ○自信や達成感を味わう

		年 少	年 中	年 長
学年のねらい		○体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。	○体を動かすなかで、自分の力を発揮する楽しさを味わう。	○自分の力を精一杯発揮する楽しさや充実感を味わう。 ○チームの意識をもって友達と力を合わせたり応援したりする。
種 目 ご と の ね ら い	走る	・先生や友達と一緒に、大好きな人などを目指して、楽しく走ってみる。	・先生や友達と競い合っ て、ゴールを目指して 直線やカーブを力いっ ぱい走る。 ・勝ってうれしい、負け て悔しい気持ちを味わい ながら、次への意欲を もつ。	・自分なりに走り方を工夫するな どして、出せる力を全部出して 一生懸命走る。 ・バトンの受け渡しや全力で走る ことを通して、思いをひとつに する喜びや達成感を味わう。
	投げる	・お手玉をいろいろなものに見立てて投げ入れてみる。	・お手玉やボールなどを 的に向かって投げるこ とを楽しむ。	・鈴わりの鈴を早く割るために、 工夫を凝らしてねらいを定め、 お手玉を思いきり投げる。
	引っ張る	・引っ張る感覚、引っ張られる感覚を楽しむ。	・綱を力いっぱい引っ張ることを楽しむ。	・チーム全体で息を合わせて、力 いっぱい綱を引っ張る。
	競技	・楽しそうなものに誘われたり、先生や友達の真似をしたりしている いろいろな動きを楽しむ。	・よじのぼる、とびおりる、くぐりぬけるなど、 少し難しい動きに挑戦 してみて、できるよう になったことを喜ぶ。	・難しいことにも自分なりのめあ てをもって、挑戦する。そのな かで、友達と励まし合ったり、 できるようになったことを喜び 合ったりする。 ・親子競技では、保護者と気持ち を合わせて、縄跳びの2人跳び をするなど、親子で共通の充実 感を味わう。
	ダンス	・先生や友達と一緒に、音楽にのって踊ることを楽しむ。	・音楽やリズムに合わせて、先生や友達と一緒に動くことを楽しむ。 ・音楽から自分なりのイメージをふくらませて表現してみる。	・憧れていた年長組の踊りを誇らしさや自信をもってみんなの前で踊る。 ・リズムに合わせて、難しい振りやポーズなども頑張ってみようとする。 ・クラスや学年のみんなと息を合わせて踊り、一体感を味わう。

以下の文章は、運動会前の園だよりからの抜粋です。

〈年少組〉

先生や友達と一緒に、走ったり、引っ張ったり、踊ったりすることが大好きです。かけっこでは、先生の「よーい どん」の声に待っている子ども達までつられて走りだしたり、一等賞でもびりっこでも「1番やった！」とにっこりしたり…。順番にはこだわらず、大勢と一緒に走ることが楽しいようです。先生や仲よしを楽しそうにダンスしている姿に誘われて自分も踊り始めたり、綱引きでは“あれ？ 反対向きに引っ張ってる？”ということも…。やってみたら“わぁ楽しい！”。年中や年長のお兄さん達の姿を見て、“あんなのしてみた～い”と憧れて真似っこをすることもあります。ほんわかした年少ならではの育ちを大切に、体を動かすって楽しいなという気持ちを育てていきたいと思えます。

〈年中組〉

友達と一緒に思いきり走ったり、跳んだり、引っ張ったり、投げたりなど、体を思いきり動かすこと楽しめます。一等賞へのこだわりも強くなってきて、1番になれないと泣いてしまったり、走ることがいやになったりすることもあります。また、大勢の前でダンスすることも、ちょっとりぢすかしくなったりします。幼稚園では、1番になることよりも、一生懸命自分の力を出しきることの楽しさを、また、友達と一緒に音楽に合わせて踊る楽しさなどを味わってほしいと考え、それぞれの子どものよさを認めていくようにしています。

〈年長組〉

思いきり走ったり、跳んだり、投げたりなど、自分の力を精いっぱい発揮する楽しさや充実感を味わうようになります。ちょっと難しそうなこと（縄跳び、高下駄、跳び箱、一輪車等）も、友達の刺激を受けて頑張ってみようようになります。また、ひとつのことができるようになると、それが自信や意欲になって、他のことにもチャレンジしてみたりもします。幼稚園では、何かができるかできないかということではなく、できるようになりたいと頑張る気持ち、何かができるようになった時の充実感や達成感を大切にしたいと思えます。

また、年長になるとチーム意識も強くなってきて、リレーや綱引きなど、クラス対抗の競技で、友達と力を合わせたり応援したりします。勝つためにいい方法はないか情報を集めたり、話し合ったり、試してみたりもします。結果的には負けてしまうこともありますが、クラスのみinnで共通の目的に向かって頑張る気持ちを大切にしたいと思えます。

Episode

平成21年度 平成22年度 平成23年度 9月～10月

走る

年少 走る

ねらい ○先生や友達と一緒に、大好きな人などを目指して、楽しく走ってみる。

エピソード① かけっこ運動会 ～平成22年度～

1学期から、子ども達は、教師がオオカミのお面をかぶって鬼になる“オオカミ鬼ごっこ”や、“あぶくたつた”などの追いかけっこを楽しんできた。暑さがやわらいできたこの日、小運動会が翌日にあるので、かけっこに誘ってみることにした。

前庭に出てきた女の子達を“かけっこ”に誘ってみたが、「？」という表情。女の子達は家族ごっこをしていたようで、イメージの世界に入っていて教師の言葉が耳に入らなかったようだ。何人かに

声をかけて、ようやくその気になった数人の子ども達と、かけっこを始めた。スタートラインの代わりに砂場遊び用に使っていた青い板(30cm×118cm)を敷き、5mほど先にあるヤマモモの木をくるとまわり、スタート地点に戻ってきてゴールするかけっこにした。

子ども達にとって初めてのかけっこなので、「ほら、青いところ(板)に立って、あの木まで行くよ～。ようい、とん」と、最初は教師が子どもをリードするように先を走り、ヤマモモの木をくるとまわり、「待て～待て～」と子どもの後を追いかけるようにした。子ども達はにこにこした表情でゴールし、口々に「やったあ」「1番」と言っていた。何回か繰り返すうちに、庭で遊んでいた子どもや保育室にいた子どもも仲間入りしてきたので、もう1枚板を敷いた。教師の「ようい、とん」の合図も待たず、「ようい」で飛び出したり、ヤマモモの木をくるとまわらずに、途中でUターンしたりする子ども達もいたが、子ども達からは「だめ」の声はあがらない。教師が一番うしろから子ども達を追いかけては「うわあ～〇〇ちゃん、速いなあ」と残念がった。そして「もういっぺんしよう」の子ども達の声に応じて、何度も何度も繰り返した。

かけっこも好きだが、それよりも“オオカミ鬼ごっこ”が好きで、運動会までも、その後も、「先生、(オオカミの)お面かぶって」とよくリクエストされた。オオカミをつかまえて警察に連れて行ったり、「夜中の12時」になったら出てきたり、ごっこの世界を楽しみながら、わくわくしながらオオカミを追いかけることが楽しいようだった。

<エピソード①より>

教師は、翌日の小運動会①で、運動会のイメージができてから、子ども達をかけっこに誘うかどうか迷ったが、せっかく涼しくなった1日なので、誘ってみることにした。最初はかけっこという言葉も知らない子どもがほとんどだったので、誘ってもぴんとこない様子だったが、数人の子ども達とかけっこを始め、楽しそうな雰囲気ができると、次々と子ども達が仲間入りしてきた。

初めてなので、「ラインのところに並んで」「『ようい、とん』で、走るよ」などのルールを徹底するより、とにかく“走ることが楽しい”という経験をさせたかった。そこで、砂場用に使っていた板をスタートライン代わりにした。また、ゴールテープは子ども達だけに持たせるのは難しく、28名の子ども達を見るのには大変になってくるし、スタートとゴールを同じ場所にしたほうが「もういっぺんやろう」という楽しい雰囲気がまわりに伝わりやすいと思ったので、木のまわりをまわってくるようにした(運動場で行ったときには、大好きな先生目指して直線を思いきり走るかけっこにした)。子ども達は息を弾ませながら、何度も「もういっぺんしよう」と言っていたので、楽しい雰囲気が伝わっているんだな、また、“みんなが1番”であり、幸せな時期であるなどと思った。

〈文責 鎌倉〉

年中 **走る**

ねらい ○先生や友達と競い合って、ゴールを目指して直線やカーブを力いっぱい走る。
○勝ってうれしい、負けて悔しい気持ちを味わいながら、次への意欲をもつ。

エピソード② かけっこが楽しくなるように ～平成21年度～

運動会の雰囲気を知ったり、楽しみに待ったりするための小運動会①を翌日に控えていた10月1日、年中2クラスの子供達に、「かけっこしようよ」と声をかけ、「やりたい」と気持ちが動いた子ども達とかけっこを行うことにした。

うめ、うさぎ両クラスの担任に誘われて、スタートラインには、40名くらい(60名中)の子ども達が集まっていた。進級児は昨年の運動会の経験があるし、新入のほとんどの子ども達は、前の園

での経験があるので、かけっこのイメージはできていると思われた。しかし、急に始めるより、まずは今から楽しいことが始まるよという雰囲気をつくろうと思い、「かけっこ運動会するよ～、エイエイオー」と声をかけた。すると子ども達からも「エイエイオー」と張り切ったかけ声が返ってきた。ゴールの位置には隣のクラスの担任に立ってもらい、「えりこ先生まで『ようい、とん』しようか。えりこ先生にタッチしてよ」と声をかけた。教師がゴールテープを持つことも考えたが、そうすると、子ども達がゴールテープを持ちたくなることが予想された。それよりも思いきり走る楽しさのほうを経験させたいと考え、えりこ先生へのタッチをゴール代わりにした。そして、勝ちたくて思わず近道をしたくなるだろうと考え、白いライン上にコーンを並べ、「白いラインより外を走ろうね」と声をかけた。

さあ、いよいよスタート。子ども達も期待顔で待っている。3mというトラックの幅から考え、1回につき4～5人までがゆったり走ることのできる人数とは思ったが、たくさん的人数も待っているし、仲よしで並んでいる子どもの気持ちも考え、多くて7人ほど並ぶことにした。いろいろな子どもと走る経験ができるように、「うさぎチームにしようか」「次は男子チームにする？」などと、毎回違った組み合わせで並べていくようにした。仲よしと走ることが安心する子どもや「〇〇ちゃんと走りたい」という子どもには、その思いに応えるようにした。

「足を線から出さないでね」「『ようい』で用意して、パワーためてよ～。『ピー』で出るがで」と知らせて、次々とスタートしていった。ふだんの動きから、走ることに苦手意識をもちそうな子どもが並んでいる時は、教師も仲間入りしてその子どもを追い抜かないように「待て待て～」と言いながら後を追いかけた。

ほとんどの子どもが2回目以降も並び、繰り返し繰り返し走った。スタートする時に、どうしても気がはやって、「ようい」でスタートしようとする子ども達が多く、その度に「まだだよ～」とやり直しをすると、とび出したり、並んだりしている子ども達から「えへへ」と笑い声がおこった。また、えりこ先生がゴールでにこやかに迎えてくれ、子ども達もうれしそうにタッチしたり、友達を声援したりするなど、全体に楽しそうな雰囲気が流れていた。その雰囲気に誘われるように、途中から仲間入りする子ども達もいた。やはり順位は気になり、「1番だった」「おれ、2番」という声もよく聞かれた。アイは「わたし、最後になっても泣かんかった」と言っていた。

この日以降、教師から誘ったり、子ども達から「かけっこしよう」と声が上がったりして、やりたい子ども達と一緒に繰り返しかけっこをした。そのときはゴールに誰もいなかったが、スタートまで戻ってきては、互いに教師の真似をして「おかえり～」とタッチをし合っていた姿が印象的だった。隣のうめ組のかけっこによせてもらうこともあった。また、学年そろって2回かけっこをした。全員で行う時には「もう1回」という声は聞かれなかったが、子ども達から自然と「〇〇ちゃん、がんばれ～」という声があがっていた。

<エピソード②より>

かけっこを、全員集めて行くと60名いるので、待ち時間が長くなり、もっともっと走りたいという気持ちがそがれてしまう。それよりは待ち時間を短くすることで、もっと走りたいという気持ちを十分満たし、次への意欲をもつことができるようにしたいと考えた。

ゴールでえりこ先生にタッチしてもらったのは、ゴールテープは1番2番と順位を強調するところもあるので、それよりは、えりこ先生を目指して走り、温かく迎えてもらえるという経験のほうが、何度も走りたいという気持ちにつながり、かけっこの導入としては望ましいように思った。

子ども達は順位がとても気になっていて、そのためにも、いろいろな友達と走って、いろいろな順位にもなり、次もがんばろうという思いになるように、並び順を固定せず、かつ、7人程並んだこともよかったのかもしれない。(ただし、運動会当日には、4～5人でのゆったりスタートが望ましいし、ゴールテープは必要だと思う)

かけっこをやりたい子ども達から順番に誘ったときに、仲間入りして来ない子ども達もいた。その

とき他の遊びに夢中だったり、園庭が広くてかけっこの様子が目に入らなかったりしたこともあるだろう。しかし、どうして参加しなかったのかな？とその子どもの気持ちを把握しておくことが必要だと思った。それは次のエピソードから感じた。

〈文責 鎌倉〉

エピソード③ 心のゆれを感じて ～平成21年度～

エピソード②と同じ日、弁当の時間、「(午前中の) かけっこ楽しかったね」「ぼく、先生に勝った」「わたし、1番だった」とかけっこの話を子ども達とし、「お弁当終わったら、かけっこしようね」と午前中していなかった子どもを中心に声をかけた。すっかりその気になった子ども達は、弁当が終わると園庭に出かけて行き、教師も子ども達が使ったテーブルなどを片付け、中型積み木で1人で遊んでいるカズテルに「先生かけっこ行くけど、カズテル君もせん？」と声をかけた。すると「カズくん、行かんもんね～」と言ってきた。そういえば、午前中かけっこに誘った時にも「いやだあ～」と、教師をからかうように、にやにやしなながら言っていたなと思い出し、「走ったら楽しかったよ」などと数回誘ってみたが、かわらず「いやだもんね」と言った。そこで、つい「先生に負けるのがいやなんかなあ」と、「そんなことない。かけっこする」という返事を期待して言ってしまった。すると、さっきまでの、にやにやが消え、途端に表情が沈んだ。ひょっとして、本当に負けるのがいやで、でもその気持ちを正直に出すのもいやで、ふざけて言っていたのかなと思い当たった。カズテルに申し訳ないと思い、元気が出ることを願ってかかわった。その日の帰り、カズテルの母親にあったことを告げると、家でも同じで、公園で母親とサッカーをしようと誘っても、負けるのがいやで絶対にしないそうである。

年中組全員でダンス運動会ごっことかけっこ運動会ごっこをした日、カズテルはいやと言わず、走っていた。見ると、一番最後だった。そこで教師はカズテルに「最後までがんばって走ってえらかったね」と他の子どもに聞こえないように耳打ちした。カズテルはこっくりうなずいた。

〈エピソード③より〉

午前中のかけっこの時、それまで遊んでいた仲間が、みんなかけっこに行き、「いやだ」と主張したカズテルは、「寂しい、でもかけっこで負けるのいやだ」と葛藤していたことだろう。午後、同じような状況で、やはり葛藤していたことだろう。その気持ちに気づかず、教師がストレートにカズテルが言われたくない一言を言ってしまった。カズテルは身体も大きく、5月生まれでしっかりしているので、気持ちはまだまだ年中児なんだということをつい忘れてしまうことがある。

カズテルに限らず、「1番になりたいのになれない」など、どの子どもも少なからず葛藤していると思う。例えば、サイリはカズテルと同じように全くかけっこしようしなかった。初めてのことに緊張することや、負けず嫌いなことが原因であると思われる。タクトは、ある時は「かけっこで負けても最後まであきらめたらいかんって、〇〇先生が言った(スポーツ教室の先生だろうか?)」と言いながら、その言葉の端から「負けるのいやだ～」と泣きそうになったこともあった。

そんな葛藤や感情のゆれを教師はしっかり捉え、支えながら、思いきり走る楽しさや思い通りにならないことも乗り越える心のたくましさを身につけてほしいなと願ってかかわっている。

〈文責 鎌倉〉

年長 走る

ねらい ○自分なりに走り方を工夫するなどして、出せる力を全部出して一生懸命走る。

○バトンの受け渡しや全力で走ることを通して、思いをひとつにする喜びや達成感を味わう。

エピソード④ 負けないぞ（かけっこ） ～平成22年度～

9月に入ったある日、運動会を来月に控えていたこともあり、教師からかけっこに誘ってみることにした。教師の誘いの声に数人の子ども達が「する！ する！」と言って集まり、その子ども達と一緒に運動場に向かった。運動場に向かう途中で、「先生、ぼくうめ組の時1位やった！」とうれしそうに教師に話しかけたり、「〇〇ちゃん、一緒に走ろう」と言いながら仲よし同士で手をつないで運動場に向かったりと、走ることを楽しみにしている様子がかげえた。まだトラックの線を描いていない時期でもあったので、「走る場所がわからんねえ～」と言う誰かの声を聞いて、「先生、線、かいて！」と、倉庫にライン引きが入っているのを知っているスズが、そこを指差して言った。教師もすぐに倉庫を開けて、子ども達が慣れ親しんでいるトラックのラインとスタートラインを描いた。描いたと同時に子ども達はスタートラインに並び、スタートの構えをして待っていた。今にも飛び出しそうで、「先生！ 早く～」とスタートの合図をまだかまだかと待っていた。サトシは前に身体を倒して、走る先を見つめていた。ふだんの遊びのなかでは友達について遊ぶことの多いイクミも、サトシの構えを見てか、片方のひじをあげて教師を見つめ、スタートの合図を待っていた。「よーい、どん」という教師の合図に、子ども達は4人で走りだした。ゴール目指して走っていく姿は、にこにこ笑顔で友達と走ることを楽しんでいて昨年とは違い、友達に負けまいと、力いっぱい走る姿になっていた。子ども達は走り終わると、またかけっこの順番を待っている友達の後ろに並び、何度もそれを繰り返して、久しぶりにするかけっこで、思いきり走ること、友達と競争することを楽しんでいるようだった。あとから運動場に遊びに来た子ども達も友達がかげっこをしている様子を見て、一緒にしたいと列の後ろに並んで、かけっこを始めていた。

9月中旬、隣の高校の体育祭を見に行った。目の前で大きなお兄ちゃん達が全力で走る様子を見て、子ども達は「速～い」とその走りに目をうばわれ、一生懸命に手を叩いて応援していた。この後、かけっこ遊びの中で、「お兄ちゃんみたいに走りたい」と言って、友達を誘ってかけっこを楽しむ子どもも出てきた。高校生に刺激をもらった後、高校生の走り方を自分なりに真似て走っている子どもも、「お兄ちゃんみたいに走れた～」と言ったり、「こうやって走ると、お兄ちゃんみたいに走れる」と、腕の振り方を工夫したりする子どもがいた。高校生が全力で走る様子を見ることは、子ども達にとって“速く走りたい”“速く走ってかっこいい”と思えるよい経験だったようだ。



<文責 中屋>

エピソード⑤ リレーがしたい（リレー） ～平成22年度～

かけっこに親しんできたある日、子ども達から「リレーがしたい」という声が出てきた。保育室にいる友達に声をかけたり、リレーをしようと運動場に向かっている途中で出会った友達を誘ったりした。また、サッカーを楽しんでいた子ども達が興味をもって寄ってきたりしたので、ある程度の人数が集まった。昨年度も運動会で年長組のリレーを見た後、遊びの中でリレーごっこをしていたこともあったので、三角コーンを2つ出すと、スムーズに並び



始めた。いつも遊んでいる友達と同じチームになりたくて同じ列に並んだり、仲よしの友達と一緒に走れるように前から何番目かを数えて、その友達に「ここに並んだら一緒に走れる」と伝えたりして並んでいた。リレーが始まると、子ども達は自分のチームを応援しながら、前の友達がいなくなるとスタート地点で待ち構え、自分がもらうバトンを持っている友達の方を向いて待っていた。バトンを持って走っている友達を応援しながら待つ子どももいれば、真剣なまなざしで待つ子どももいた。バトンを渡してもらおうと、走る方へ向きを変え、一生懸命に走っている。走っていない子ども達も、走っている友達の方へ体全体を向け、懸命に応援している。次の人にバトンを渡して走り終わった子どもは、また列の後ろに並び、何度も何度も走って、エンドレスのリレーを楽しんでいた。



ある日、今日もかけっこをしようと子ども達と一緒に運動場に行き、準備を始めた。男女で分かれることが多かったので、前と同じように赤と青のコーンを出した。すると、子ども達の中から、「はと(組)対さくら(組)でしたいき、青と緑(クラスカラー)にして」と言ってきた。2学期のプール遊びからクラスを意識した、クラス対抗の種目をいくつか取り入れてきたからだと思われる。この日はもちろん、自分のクラスを一生懸命に応援しながら、リレーを楽しんだ。

<文責 中屋>

投げる

年少 投げる

ねらい ○お手玉をいろいろなものに見立てて、投げ入れてみる。

エピソード① バイキンマンとドキンちゃんにお手玉ごはんをあげよう ～平成22年度～



“投げる”経験ができるように、保育室でジャムおじさんの絵の前にかごを置き、「ごはんをあげようか」とお手玉を投げ入れる場をつくった。すると、初めて目にするお手玉に心を惹かれたのか、ジャムおじさんに心を惹かれたのか、気がついた子ども達が、お手玉を投げ入れていた。何日か同じものを出していると、いつのまにか、お手玉がごっこ遊びの道具になっていた。また、広い場所でみんなが投げる経験ができるようにと考え、運動場で、バイキンマンやドキンちゃんの絵がついた玉入れのかごで玉入れを

行った。実習生に、子ども達が投げ入れることのできる高さで、バイキンマンとドキンちゃんの玉入れのかごを持ってもらい、「バイキンマンとドキンちゃんにごはんあげよう」と誘うと、子ども達はお手玉を拾ってはかごに投げ入れていた。その度に実習生が「おいしい」「ありがとう」と答え、かごがいっぱいになると、「バイバイ」と去っていくのを、子ども達はじっと見送った。

予想に反して子ども達から歓声が上がらなかったため、子ども達にとってあまり興味のある活動ではなかったのかなと考えていると、玉入れの様子を見てくれていた補助教諭に「バイキンマンにごは

んあげたで」とうれしそうに言ったり、運動場で行う運動会ごっここの時には「バイキンマンとドキンちゃんに、ごはんあげたい」と声が上がっていたので、子ども達にとっては楽しかったんだと思った。

〈文責 鎌倉〉

年中 投げる (競技)

ねらい ○お手玉やボールなどを的に向かって投げることを楽しむ。

エピソード② 投げる動きといろいろな動きを楽しんで ～平成23年度～



“投げる”動きを子ども達が好きになるためには、思わず投げてみたくなるような“的”が必要ではないか、また、年少組の頃よりダイナミックになった子ども達の動きを見ていると、ボールやお手玉を的にあてたり、かごに入れたりするよりも、ボールを的に向かって思い切り投げ、的を倒す動きがぴったりであるように思われた。そこで、ダンボール箱を縦に2つ重ね、子ども達に親しみのある絵本(めがねうさぎシリーズ)のおばけの絵を貼り付けたものを的にし、ドッジボールを投げて倒すようにした。ダンボール箱を2つ重ねたのは、ぐらりと倒れる様子が投げる達成感につながるのではないかと考えたからである。

“投げる”以外にも、いろいろな動きを経験できるように、また最終的には競技の一部に取り入れることも見通し、巧技台の1本橋(ビームの平らな面を上にしたもの)をスタートとし、巧技台(3段)でジャンプできるようにし、最後にボールで的を倒すコースを年中組の共通のテラスに用意した。(投げる場面が1本橋やジャンプに挑戦している子ども達から見えるように、スタートから投げる場所まで“Lの字”に配置した。)



9月下旬、教師がコースを用意すると、興味をもって集まってきた子ども達が、早速、挑戦し始めた。1回目ではおばけのダンボール箱が倒れないことが多かったため、その手前の1本橋は渡るというよりも、待つ場所ようになっていた。子ども達は、ボールを投げようとする友達に教師と一緒に声援を送ったり、おばけのダンボール箱がぐらりと倒れるたびに教師と一緒に拍手したり「大当たり」と言ったりしていた。最初、うさぎ組の子ども達と始めたが、楽しい雰囲気誘われるように、うめ組の子ども達も集まってきて、繰り返し挑戦していた。

教師は子ども達が達成感を味わいやすいように、また、待ち時間が長くないように、子どもの様子に合わせて的に前をしたり、要求に応じて的を後ろに下げたり、投

げる回数を調整したりした。最初は教師が的に直したり、投げたボールを拾ったりしていたが、そのうち子ども達がやり始めた。その後、午前中いっぱい、年中の担任2人が交替し合ってコースで援助し、楽しい雰囲気をつくって子ども達と遊んだ。弁当の後や翌日以降、コースを作っ



ておくと、教師がその場にいなくても、集まった子ども達だけで、投げる子ども、ボールを拾う子ども、的を直す子どもに自然に分かれて、繰り返しコースに挑戦する姿が見られた。

また、ボール投げに満足した後も、巧技台を子ども達で好きなように組み合わせてコースを作って遊ぶ姿がよく見られた。チームは重いので教師と一緒に運ぶことを約束したり、高さのあるところにはマットを敷くように教えたりするなど、安全面は配慮していった。ボール投げコースと同じく、うさぎ、うめ両クラスがどんどん参加し、日替わりのできるコースを楽しむ姿が、運動会後もしばらく見られた。いろいろな動きが経験でき、かつ自分でコースを考える楽しさやいろいろな友達とかわることもつながっていったように思う。

エピソード③ 運動会当日に向けて ～平成23年度～

運動会当日には、ダンスで“ピーマンマン体操”をすることにしたので、競技も“ピーマンマンになってカゼヒキキン（風邪ひき菌）をやっつけにいく”というイメージの世界を楽しみながら、これまで楽しんできた動きや経験させたい動きを組み合わせることにした。また、親子競技なので、親子で楽しむことができる動きも取り入れることにした。

まず、最初に子ども達の好きなジャンプができる場を、“カゼヒキキンをやっつけにいく山を登ろう”とイメージさせて、巧技台7段分用意した。自分で高さのある台に腕を使って上がってみること、また、高さのある台からジャンプすることの2つが子ども達にとっては挑戦課題になり、できたときの自信につながると思ったからである。

その次に緑のペンキで塗ったタイヤを、“野菜島”とイメージさせ、30cmほどの間隔をあけて4つ用意した。これは、運動会前、バランスを取りながら渡るといった経験につなげるために、年中組の前庭に並べてあった数十個のタイヤを、喜んで渡ったり、出会った友達とじゃんけんをする遊びをしたりする姿が見られたので、取り入れることにした。

タイヤの次に、投げる動きとして、これまで楽しんできたダンボール製のおばけの的をカゼヒキキンの絵に替え、倒れやすいように立方体（的のダンボール箱より小さい大きさ）の中型積み木の上に置いた。また、ボールを投げる台として50cmほど手前（誰もが投げて倒せたという達成感が味わえる距離）に巧技台のふたを置いた。



カゼヒキキンを倒した後は、ピーマンマンが飛んでいるイメージで、ダンボール製のそりに子ども達が乗り、取りつけてあるひもにつかまって、家の人にそのひもを引っ張ってもらいゴールするようにした。

以上、“巧技台7段にあがってジャンプ”“タイヤ渡り”“ボールを投げてカゼヒキキンを倒す”

“そりに乗る”の4つの動きを、運動会の2週間前から部分的に（全部を行うと待ち時間が長くなるし、高い台の側に補助も必要なので）保育に取り入れていった。当日は4つの動きができる場を4コース作り（1コースあたり6～7組の親子×4、合計26名）、待ち時間や運動会全体の時間が短くなるようにした。運動会当日、子ども達はそれぞれの動きを得意そうに行い、お家の人に引っ張ってもらうそりに乗って、うれしそうだった。



〈文責 鎌倉〉

年長 投げる

ねらい ○鈴わりの鈴を早く割るために、工夫を凝らしてねらいを定め、お手玉を思いきり投げる。

エピソード④ 玉入れ運動会 ～平成23年度～

9月の末、運動会の遊びのイメージがたくさん広がっていくように、保育室の床にビニールテープで大きな円を貼って作った。子ども達には、「部屋でもこの丸の中で運動会の楽しい遊びをするよ」と伝え、登園後すぐやお弁当の前に集まって全員で遊んでいくようにした。

9月29日、保護者に作ってもらったお手玉がたくさん集まってきて、子ども達も生活の中でお手玉を使って遊ぶ姿（2個でお手玉遊び・遠くに置いた小さなかごに入れるなど）が増えてきたので、「みんなで玉入れ運動会してみよう」と声をかけて、保育室の中で玉入れをすることにした。

運動会で座っている順番で、男女混合で4チーム（7人ずつ）づくり、入れ代わりながら玉入れをし、男女とも2チームの合計でどれくらいが入ったかを競うようにした。1チームだけでなく2チームの方が、人数が少ない分、投げる経験をたくさんすることができ、数える時も2チーム合計の方が、最後まで結果がわからないドキドキした共通の感覚を感じることができるのではないかと思ったためである。また、玉入れの始まりと終わりのタイミングを、子ども達が自分で意識して動くことができるように、子ども達がふだん楽しんで歌ったり踊ったりしている『マル・マル・モリ・モリ!』の曲をワンフレーズ分かけて、「(曲が) 始まったらお手玉を投げて、(曲が) 終わったら線に座ろうね」と声をかけた。

実際に玉入れを行うと、かごが低いこともあって、男女ともに一度に90個以上お手玉を入れることができた。かごに入れる際、かごが低いので、真下からお手玉をたくさん持って投げると入りやすいことに気づいた子どももあり、遠くからより近くからねらいを定めて投げていた。

その後、生活の中で引き続きお手玉遊びを楽しんでいけるように、20～30個のお手玉をプラスチックひもで編んだかごに入れて、保育室に置いておいた。すると、子ども達がこれまでの玉入れの経験を生かし、積み木で玉入れの環境を作って遊ぶ姿が見られた。子ども達が作ったのは、年長用の大型積み木を縦に積み重ね、ぐらつかないように布ガムテープで補強した上にお手玉を入れているプラスチックひもを編んだかごを置き、玉入れをするというものである。その玉入れでは、積み木の方がかごよりも大きいので、真下からねらって投げるといことが難しく、その上、かごの口の部分も見えにくいので、子ども達は少し離れた所からかごの口の部分をねらって入れようとしていた。このやり方は子ども達にとって相当に難しかったようで、何度かはする姿が見られたものの長くは続かなかった。



運動会当日、玉入れはなかったが、フィナーレで鈴わりを行った際、できるだけ鈴に近づき、お手玉をたくさん集めて鈴めがけて投げている子どももいたし、遠くからねらいを定めて投げている子どもも見られた。中には、鈴が開かないように留めている紙テープをねらって投げている姿や、「あの紙の所をねらえ!」とか、「あ、あそこの紙が切れた!」など、どこをねらえば割れるかがわかってそのことを口にしてしている様子もあり、少しの玉入れの経験の中にも、変化や成長が見られた。

〈文責 矢田〉

引っ張る

年少 引っ張る

ねらい ○引っ張る感覚、引っ張られる感覚を楽しむ。

エピソード① 「もも組の勝ち！」 ～平成23年度～

小運動会①で初めて綱引きを見たもも組は、やってみたくてたまらない様子で「ねえ、もも組も綱引きある?」「先生次はもも組さん?」と口々に聞いていた。年少組の綱引きの番になると、大喜びで綱の所まで駆け寄っていた。教師5名に対して綱を引く顔は真剣で、力いっぱい引いていた。審判の教師が「もも組の勝ち!」と宣言すると、両手をあげて大喜びだった。

運動会当日、もも組の綱引きになると、子ども達は期待に満ちた表情で綱の所に行った。今回は来賓との綱引きとなるため、子ども達は来賓をじっと見ていた。すると先頭にいた附属小学校の校長先生がファイティングポーズをして「負けなぞ!」と表情をつくって言い、その後ろにいた大学の教育学部長も同じく表情をつくりファイティングポーズをしたので、子ども達はがぜん色めき立ち、来賓に対して口々に「負けなよ!」「勝つもんね」と言った。始まる前に、子ども達はこぶしを突き上げて、とても力のこもった声で



「エイエイオー!」と勝どきの声をあげたので、教師は子ども達の士気の高さを感じた。そして、勝負の真剣さを演出してくれることで、こんなにも子どもの綱引きに対する期待感が高まるのかと感じた。

綱引きが始まると、教師相手の時とは違って、子ども達はかなり力を入れているのに綱は動かなかった。ともすれば子ども達が負けるような気さえた。しばらく引っ張ると、少しずつもも組の方に真ん中の印が動き始めた。子ども達は、綱が動いていることにあまり気づいていないようだった。勝負が終わり、審判の教師が「もも組の勝ち!」と宣言すると、子ども達は両手をあげて大喜びした。その時、来賓はとても悔しそうな表情をして、「強いなあ」等ともも組に声をかけていた。

綱引きが終わり席に戻っても、子ども達の興奮は続いており、「大人に勝ったね」「すごい、勝ったね」等と口々に話していた。強そうな男性に勝ったことが、自信につながったようだった。

運動会が終わった日から、綱引きは子ども達の大好きな遊びとなり、自分達で引っ張って楽しんだり、年長・年中児を誘って、綱引きをしたりして楽しんだ。

〈文責 大野〉

年中 引っ張る

ねらい ○綱を力いっぱい引っ張ることを楽しむ。

エピソード② 思う存分、綱引きを楽しんで ～平成22年度～

運動会が終わってから数日後、うさぎ組では、「綱引きをしたい」という声が出たのですることにしました。やりたい子ども達だけで集まったので、男女合わせて10人程度のため、綱は年少用の細いもの(直径1.5cm程のロープ)を使用することにしました。

自然と男女に分かれて綱引きを始めたのだが、途中から女兒が2人ほど多くなり、女兒の勝ちばかりが続くと、キョウイチが顔を真っ赤にして、両手をぎゅっと握りしめて「そっちの人数が多いすぎるい」と叫んだ。教師が「どうして多いとずるいが？」と聞くと「多いほうが勝ちゆう」と言ったので「そうか、どうしよう」と言うと、ショウタが「多いほうに行ったら？」と提案したので、そこからは、男女混合のチームになった。互いに勝ったり負けたりして楽しんでいたが、どうしても勝ちたいキョウイチだけは、始まる直前まで人数を数えて「待って、待って！」と言いながら、人数の多いほうに移動していた。

しばらく楽しむと、女兒達は他の遊びに行ったのだが、男児達はまだ綱引きがしたかったので、近くにいた年長の女兒に「綱引きしよう」と声をかけていた。誘いにのった年長女兒も加わり、すぐに綱引きが始まった。年中男児4人と年長女兒3人なので、そのまま学年別に分かれ、綱引きをすると、年中男児は年長女兒3人に負けてしまった。キョウイチは「もう！ 負けた！ なんで！」と地団太を踏んでいた。年中男児の方が人数が多く、また相手が年長であっても女兒ということで、勝るとふんでいたのだろう。しかし、やってみると負けてしまい、悔しかったのだと思われる。キョウイチの様子を見て、ナオキが「年長さん強いな〜」と笑いながら言った。キョウイチとは違い、負けても楽しそうにしていたナオキは、教師にとっても印象的だった。もう一度することになり、キョウイチは年長女兒のチームに加わりたと言ったので、みんなはそれを認めた。2、3度するとその度に年長女兒のチームが勝つので、ナオキが体を傾けながら、「先生また負けそう〜」と言ってきた。そこで、審判役をしていた教師も年中男児のチームに加わることにした。綱引きをすると年中男児が勝ったので、キョウイチが怒り始めた。「もう、先生が入ったき負けたやんか」と言ったキョウイチに対し、教師は「そうやねえ、でも人数は同じじゃない？」と尋ねると、キョウイチがお互いの人数を数え始めた。「1、2、3、4」と何度か数え、首をかしげている。その様子を見た教師は、同じ人数なのになぜ負けたのか気づいてほしいと願い、「同じ人数でしょう？」とキョウイチに声をかけた。するとキョウイチは、「そうやけど、そうやけど！」と叫んだ。すると年長女兒が「だってよ、先生の方が力が強いやんか、もう〜！」と言ったので、教師は「そうやねえ、ごめんごめん」と謝った。キョウイチも、なぜ負けたのか年長女兒の言葉で納得がいったようだった。

その後、教師が力を加減する約束で何度かすると年長女兒も綱引きに満足したらしく、他の遊びに行った。残りの3人で綱引きを楽しむことにしたが、2人对1人になってしまうので、頼まれてまた教師も参加した。組み合わせによって力の強さが随分違うので、キョウイチは予想に反して負ける度に怒っていたが、そのうちに段々と互いの力関係がわかり始め、常に勝つ方に回るようになった。その日の帰りまで思う存分綱引きをして、くたくたになったキョウイチ達は満足そうだった。

〈文責 大野〉

年長 引っ張る

ねらい ○チーム全体で息を合わせて、力いっぱい綱を引っ張る。

エピソード③ みんなで力を合わせて ～平成23年度～

運動会当日の綱引きの前、さくら組の子ども達は、小運動会ではと組に勝ち続けていたこともあって、「今日も絶対勝とうね」「さくら組は強いから勝てるよ」などと言っていた。競技を始めるため、綱の横に座ると、綱を持たない（間があいている）場所を見つけ、「〇〇君、ここを持って」と、声をかけて間があかないようにしたり、がんばるぞとばかり真剣なまなざしで前を見つめたりしていた。笛の合図で綱引きが始まり、担任のかけ声に合わせて綱を引くが、小運動会とは違って、なかなか

自分達の方に綱が引っ張れない。そして1回戦、初めて負けてしまった。子ども達は啞然とし、かなりがっかりした様子だった。しかし、気持ちを切り替えるのも早かった。後ろにいる友達を手招きして、もっと詰めるように声を掛けたり、「もっと力出そう」「次は絶対勝とう」などと声をかけ合ったりしている子どももいた。そして2回戦はさくら組が勝利した。子ども達は飛び上がって喜んでいて

〈文責 中屋〉

競 技

年少 競技

ねらい ○楽しそうなものに誘われたり、先生や友達の真似をしたりしていろいろな動きを楽しむ。

エピソード① いろいろな動きを楽しむために ～平成22年度～

教師の思い

親子競技を考えるにあたって、子ども達にいろいろな動きを経験させ、そのなかから、子ども達が目を輝かせているものを競技にしたいと考えていたが、今年はいろいろな戸惑いがあった。それは子ども達の運動経験の個人差が大きいこと、また、ちょっとした気持ちのすれ違いから、相手を押ししてしまう子どもがいること、初めて28名の年少組を担当していることであった。以上のことから、高さのあるところからジャンプしたり、はしごをよじ登ったりするような、安全を見るために必ず教師が1人ついていなければならないような内容は、運動を楽しむというより「だめ、危ない」「並んで」などの注意が多くなってしまいうだろうことが予想された。それよりも、みんなが楽しい雰囲気の中で、運動が楽しめるようにしたいと考えた。

思いきりパンチ

そこで体をいっぱい動かして戦いごっこをしたり、教師にも体全体でかかわってもらったりすることが大好きな男の子達をイメージして、バイキンマンの絵のついたダンボール（ダンボール箱を2つ重ねるとバイキンマンになる）を倒す遊びを提案してみた。バイキンマンを倒すまでのコースとして、パンチしているところが見えて応援したり、楽しみに待ったりできるようにスタート地点に長椅子（あまり高くないもの）を2台並べ、途中にケンパリングを置いて、そこから少し走ってバイキンマンにパンチをするコースにした。すると、子ども達は教師がついていなくても、長椅子に並び、ケンパリングでけんけんをしたり、両足跳びをしたり、ケンパリングはおかまいなしにバイキンマン目指して走ったりして、バイキンマンへのパンチを楽しんでいた。バイキンマンが倒れると、子ども達が競うように、嬉々としてバイキンマンを直していた。



保育室には、トンネルと、トンネルを出たところで3段の巧技台からジャンプして、タンパリンを叩く場をつくった。バイキンマンのパンチの場所だけでは、やりたい子どもがたくさんになった時に待ち時間が長くなり、心ゆくまで運動遊びが楽しめないと思ったからである。3段の巧技台からジャンプする遊びは、1学期からよく行ってい

て、子ども達も大好きな遊びであった。子どもの希望によってタンバリンを持つ高さを変えるので、巧技台にそんなに高さはなくても、3歳児なりの挑戦にもなるかなと考えた。子ども達はトンネルやジャンプ台を目にすると、歓声をあげながらトンネルをくぐり、タンバリンを持っている教師に「もっと、もっと上」など注文を付け、ジャンプしてタンバリンを叩き、「すごいね」と声をかける教師に「やった〜」といった表情を見せていた。そして、ほとんどの子どもが、またトンネルをくぐっては、ジャンプを繰り返していた。1学期よりもジャンプに力強さが出てきた。

〈文責 鎌倉〉

年中 **競技**

ねらい ○よじのぼる、とびおる、くぐりぬけるなど、少し難しい動きに挑戦してみて、できるようになったことを喜ぶ。

エピソード② いざ！^{てんじく}天竺へ ～平成22年度～

今年度の運動会のダンスで孫悟空をイメージしたダンスを取り入れたので、ダンスでふくらませた孫悟空のイメージを競技でも生かせないかと考え、取り入れることにした。そこで、孫悟空の冒険をイメージし、まず鉄棒の前回りとケンケンパをすることにした。保育室に鉄棒を出すと、子ども達は興味を示し、触ってみる子どもや、すぐに前回りをする子ども、近寄らない子ども、友達がしているのをじっと見ている子ども、自分なりのやり方で鉄棒を試みる子どもなどの姿が見られた。

前回りができるようになった子どもが増えていくなか、鉄棒に飛びつくまではできるものの、どうしても前に回れないユウコは、何度も何度も鉄棒に飛びつくが、体を前に倒すことに怖さを感じているようだった。教師や友達が手伝おうとしてもいやがり、どうしても自分でやりたいと言っていた。そんなユウコの気持ちを、まわりの子ども達は「がんばれ！」と励ましたり、見守ったりしながら、大切にしていあげていた。「ちょっとここまでできた」「先生見て」と、毎日のように体を前に倒す姿を見せていた。ちょっとずつ前に倒せるようになっていき、何日もたったある日、クルッと回ることができた。その日からはクル、クルと前回りができるようになり、見ている子ども達も「ユウコちゃんが出来た！」と一緒に喜んでいて、このようなエピソードはユウコだけでなく、シン、アサコ、スズ、ソラなどいろいろな子ども達に見られたエピソードである。

しかし、競技に鉄棒を取り入れてみると、ゴールまで早く行きたいという気持ちによって、走るスピードも速くなり、鉄棒もかなりの速さでまわる姿が見られ、とても危ないように感じた。鉄棒は本来慎重に丁寧に取り組む運動であり、スピードを求めるものではないと考える。そこで運動会では競技としては取り入れることを断念した。同じ理由からケンケンパも取り入れなかった。

実際の競技では『走る』『くぐる』『のぼる』『とぶ』『投げる』『触れ合う』という要素を取り入れることとなった。『走る』ではダンボール製の^{きんとん}金斗雲を身につけ、孫悟空をイメージして走る楽しさを味わえるようにした。『くぐる』ではクモの巣と名付けたネットをくぐるようにした。クモの絵を実際に貼り付けた途端、子ども達の興味が一気に高まり、ネットが取り合いになるほどだった。「クモに捕まらないように気をつけて！」という声かけをすると、キャアキャアと言いながら楽しんでくぐる様子が見られた。『のぼる』『とぶ』では巧技台（7段）を登ってとびおるようにした。孫悟空の住んでいた^{かかざん}花果山がイメージできるように、子ども達と一緒に山の絵も作って貼り付けると、意気揚々と取り組む姿が見られるようになった。『投げる』では、ボールを使ってねらって投げるという動きを取り入れ、金閣と銀閣のイメージにつなげた。勢いよく倒れる金閣銀閣の置物に子ども達は「やったー」という表情を見せていた。やりたくないという子どもがあまりいない取り組みでもあり、

鉄棒やケンケンパをいやがった子どもが金閣銀閣は意欲的に取り組むという姿が見られた。何度も取り組むうちに、ねらって投げるのが上手になったり、金閣銀閣の置物をいろいろな置き方をして倒すという新しい遊びを始めたりもしていた。最後の『触れ合う』では、孫悟空の宝物となる巻き物を取り入れ、最後の修行として、巻物の指示で“お家の人にだっこしてもらう”“おんぶしてもらう”“親子電車（フープで）をする”を取り入れた。巻物をもらうことを前日に知らせると、「早くほしい」「どの巻物がいい？」と友達とうれしそうに話したりする姿が見られた。

〈文責 都築・富田〉

エピソード③ 「高くても登れるよ」 ～平成22年度～

うさぎ組では、坂板（右の写真参照）や木登りの取り組みを1学期から行ってきたので、運動会ではそれらの動きを取り入れた競技を行いたいと思い、親子競技の中の1種目として巧技台を取り入れることにした。

初めて、巧技台を出した日に6段を用意した。子ども達は、登ってジャンプすることに喜びを感じている様子だった。「簡単、簡単」との声がナオキやショウタ達からあがったが、何人かは不安も感じていたようだった。1人で登れないナオやレイには、両側から担任と補助教諭が援助することで、全員が登ることができるようにしていった。

全員が一度登れば、今日は十分だと思っていたので、教師は全員が登ると「すごい、みんな6段が登れたね。すごいね～」と声をかけた。すると「まだ登りたい」という声が上がったので、教師は「みんなすごいね、じゃあ今度は8段にしてみま～す。すごく高いから、登れるかな～。登りたい人どうぞ」と言った。教師はどの高さまで登ることが可能か知りたかったので、少し高いと思える8段を設定したのだったが、教師の予想に反し「登れる！」との声が口々に上がった。6段を終えて、その場を離れた子ども達も、戻ってきて並んだ。8段という高いものには挑戦したいという意欲があるのだなと思いながら、この時期の4歳児の、強くなりたいたい、大きくなりたいたいという気持ちが、それぞれにしっかりと育っていることを大切にしたいと感じた。

うさぎ組の子ども達は全員がチャレンジするために列に並んでおり、運動が苦手な、ふだんは決して自分から坂板などには登らないナオでさえも、先ほど6段が登れたという自信からなのか、巧技台をまっすぐに見つめていた。

ナオの順番になると、先ほど6段を登る時につぶやいていた「登れん」などという言葉は全くなく、自分の力で必死に登り、援助してもらいながら登りきり、巧技台の上に立った。ナオは教師が今までに見たこともないような、満面の笑みを浮かべた。担任と補助教諭は「すごい！ ナオちゃん」「登れたね！」と声をかけた。ジャンプは少し怖がったものの、降りるとナオは嬉々としながら、もう一度登るために列の最後に走って並びに行った。ナオの満足感や充実感が伝わってきて、このような姿を大切にしながら、運動遊びに取り組んでいきたいと思った。

〈文責 大野〉



年長 競技

ねらい ○難しいことにも自分なりのめあてをもって、挑戦する。そのなかで、友達と励まし合ったり、できるようになったことを喜び合ったりする。

○親子競技では、保護者と気持ちを合わせて、縄跳びの2人跳びをするなど、親子で共通の充実感を味わう。

エピソード④ 「ほんとは少しこわかったけどね」 ～平成22年度～

年長組のチャレンジ競技を、初めて運動場で行った日、高下駄をすることにしていたアイは、年中組の頃からの経験や、コンクリートの通路など平らな所なら自分の思い通りに動ける自信などから、はりきって高下駄の列に並んでいた。

自分の順番が来て、いつものように高下駄に乗り、運動場のコースを歩いて行ったが、土の上ではふだん高下駄で歩いている平らな通路とは違う感覚を感じているようで、「簡単、簡単」と言いながらも、ふだんよりも下を向く回数が多かった。それでも一番高さがある高下駄にも挑戦して、「先生見て、これも乗れたで！」と自信や意欲を見せていた。

運動場から部屋に戻る時、アイは途中で会った年中組の教師に、今日した高下駄のチャレンジのことを話し、「(今日も、)簡単やったで」と話したうえで、「ほんとは少しこわかったけどね」と正直な気持ちをつけ加えた。

<エピソード④より>

高下駄は、ふだんは乗りこなせている子どもが多い遊具だが、運動場は、子ども達がふだん高下駄に乗っているコンクリートの通路とは違って土の地面で、その上小さな砂利も混じっているのと、とても歩きにくい感じになっている。さらに、チャレンジのコースは、巧技台のビーム（1本橋）や跳び箱の踏み切り板の坂道など、障害物のある難しいコースになっているので、(いつもは安定した感じで乗れていても)ここでは高下駄が難しい！という感覚に子ども達はなっていたと思う。その分気持ちを集中して行い、できた時の達成感やうれしさを感じたり、友達と一緒に高め合ったりしてほしいと感じる。

アイはその後、運動場でチャレンジの競技をする時には、自分が決めた高下駄に何度も何度も乗り、運動会の当日には土の地面でも、自信をもってできるようになっていた。

〈文責 矢田〉

エピソード⑤ 「35歩行けたで！」 ～平成21年度～

教師がサトルやコウタと高下駄の競争をした日、サトルやコウタに「サトル君すごい速いね！コウタ君も高下駄の動かしかた、負けてないで。先生追いつかんもん」と言いながら一緒にしていると、コウダイが近くにやってきた。教師は、「コウダイ君も一緒にやろうよ」と誘ってコウダイのそばに座った。(実はコウダイは、この時まで高下駄に自分一人で乗ることができず、競技の練習の時にも高さが2cmくらいの“ねんちゅう”と書かれた高下駄を使っていた。教師は今までも何度かコウダイに「一緒にやってみようよ」と誘っていたが、コウダイがその気にならないので、まわりの子ども達の姿をコウダイにも伝わるように認めたりしながら、乗れるようになりたいという意欲が出るまで待っていた。)

コウダイが「僕、立ってもすぐこけるがよね～」と言うので、教師は「そう？コウダイ君、前よりもかなりレベルアップしたと思うで(コウダイはドラゴンクエストなどのゲームの話をよくするので、イメージがわいて自信が出るような“レベルアップ”という言葉を使った)」と言いながら、コ

ウダイの背中をさりげなく支えて、順調に歩き出すまでの何歩かをスムーズに進めるようにした。するとコウダイは、「今10歩行けた！」とうれしそうに言って、その後も何度も繰り返すようになった。教師はその度にさりげなく背中を支えたが、その支えも少しずつ離していき、5～6回目くらいからは立つ時の一瞬だけで、ほとんど触らないようにした。コウダイは自分が歩きだせばどんどん行けるのがわかって楽しくなったようで、「先生、35歩行けたで！」と前回よりも数が増えたことをうれしそうに教師に伝えてきた。教師は、「コウダイ君すごいやか。もうコウダイ君のレベルはマックスよ！」と上達を一緒に喜んだ。

〈文責 矢田〉

エピソード⑥ 跳べるようになるまでがんばったユウキ ～平成23年度～

9月22日、今日も跳び箱をしたいという子ども達の声を聞いて、跳び箱を出すことにした。これまでも保育室に跳び箱を出していたのだが、今日はいつもよりも少し大きめの跳び箱を出してみた。すると、その大きな跳び箱を見て、挑戦したいという子どもが他にも集まってきた。まずは3段に挑戦した。みんな今まで小さい跳び箱（4段）で練習してきたせいか、大きな跳び箱に変えても、小さい跳び箱4段が跳べた子どもは、3段なら跳ぶことができることが多かった。なかには跳び箱にまたがる子どももいたが、恐がらず何度も挑戦していた。

ユウキも保育室に跳び箱を出す度に挑戦していた。この日も大きな跳び箱3段にすぐに挑戦し、始めは跳び終わる寸前で跳び箱にお尻が当たっていたが、そのうちきれいに跳び越えることができるようになった。何度か挑戦していると、他の子ども達から「先生、もう1個高くして」と言う声が上がってきた。ほとんどの子ども達が、跳べるようになっていたこともあって、4段にしてみた。しかし、4段はさっきの3段の時のようにはいかず、馬乗りになってしまう子どもが続出した。なかにはすぐにコツをつかんできれいに跳び越えることができるようになった子どももいたが、ほとんどの子どもは跳ぶことができなかった。ユウキも何度も挑戦しているが、この4段はなかなか跳び越えることができない。しかし教師が「今日はもう終わろうか」と言うまでは何度も挑戦していた。その後も何度か大きい跳び箱を出しており、その度に挑戦していたが、ユウキはなかなか跳べないでいた。

30日、ユウキは大型積木をしながら、横目で跳び箱に挑戦している友達の様子を見ているようだった。挑戦している子ども達の中にはいつも一緒に遊んでいるレンもいた。何度も挑戦しているうちに、レンがもう少しで跳べそうなところまで来た。「すごい！ レンくん。あとちょっとで跳べるよ」の教師の声に、ユウキも跳び箱に挑戦し始めた。そして、レンは見事に跳ぶことができるようになった。横で「ヤッター！」と言わんばかりの笑みでレンが跳べたことを喜んでいる様子のユウキだったが、仲よしのレンが跳べたことで自分も跳びたいと思う気持ちが強くなったのだろう。この日も跳べなかったが、跳び箱を片付けるまで何度も挑戦していた。それからは、毎日のように高い4段の跳び箱に挑戦するユウキの姿があり、跳び箱を出していないと「先生、跳び箱出して」と催促に来るほどであった。

そして、5日、お尻が少し跳び箱の端をかすめるが、ほぼ跳べる感じになってきた。「ユウくん、あとちょっとで跳べるよ」の担任の声ににこにことうなずきながら、また何度も挑戦し、ついに跳ぶことができた。「よし！」と小さくガッツポーズをしているユウキに、レンが近寄って“やったな”と言わんばかりに肩をたたいた。ユウキもうれしそうにしている。そして、できるようになったことを確かめるように何度も跳んでいた。



＜エピソード⑥より＞

できるようになりたいという思いが、とても強く感じられたユウキの行動は、他の運動遊びでは見られないものだった。跳び箱は、『跳べる』『跳べない』ということで、『できた』『できない』が明確であること、また、そこにセットしてあるだけで、何度も繰り返し挑戦することができることもあってか、やってみようと思う子ども達が多かった。また、保育室内にセッティングして挑戦することによって、保育室内で他の遊びをしている子ども達が触発されやすい環境にあったこともよかったのではないだろうか。

ユウキは、跳べるようになりたいと思う気持ちが強かったことに加えて、仲よしの友達が跳べたことで、僕も絶対跳びたいという強い思いに変わっていったことがうかがえる。

〈文責 中屋〉

エピソード⑦ 親子縄跳び（2人跳び）に挑戦！ ～平成23年度～

運動会で親子縄跳びを5回することを子ども達や保護者に伝えた。その後、保育室前のテラスでは、「先生2人跳びしよう」と声をかけてくる子ども達と一緒に、担任が親の代役で縄を回して縄跳びをすることが多くなった。始めは縄を回すのは担任ばかりで、縄の中に入るのを順番に待っていた子ども達であったが、そのうちに縄跳びを上手に回して跳べるようになった子どもが親役になり、子ども同士で2人跳びをする姿も出てきた。

家でも「昨日お母さんと縄跳びの練習をして5回跳べた」「お父さんとして18回いった」などと、練習の様子を聞かせてくれる子どももいた。またお迎えの際、担任が親子跳び用の長い三つ編みの縄跳びを3本持参し、園庭開放中に親子で練習できるようにもしてみた。子ども達はその縄跳びを手にして、自分の親のもとに行き、練習しよう誘ったり、親からも誘ったりして、運動会の競技に向けて親子で息を合わせて5回跳ぶことを目標に、励まし合ったり、できた喜びを一緒に味わったりする様子も多々見られるようになった。担任が縄跳びを降園場所に持っていかないと、園庭開放中にさくら組まで来て「先生、縄跳び貸して！」と縄跳びを借り、親子で練習する子どももいた。

親子で共通の目標をもって縄跳びに取り組むことで、親子の触れ合いの時間ができたこと、縄跳びを家でがんばっていることなど、保護者からもうれしい話が聞くことができた。また、このことをきっかけに縄跳びに興味をもち始め、自分から縄跳びを手にして跳ぶ姿が見られるようになった子どももいた。

〈文責 中屋〉

ダンス

年少 ダンス

ねらい ○先生や友達と一緒に、音楽にのって踊ることを楽しむ。

エピソード① 『忍者体操』に憧れて ～平成22年度～

忍者体操との出会い

9月1日、年長のはと組が踊っていた『忍者体操』を、数名の子ども達が「かっこいいねえ」と憧れのまなざしで見っていたことを、担任は補助教諭から教えてもらった。そこで、はと組担任に、『忍者体操』をもも組に見せに来てほしいとお願いした。すると早速、翌日、はと組の女兒7～8名がラジカセを持参して、もも組に来てくれた。



せっかくなので、広い場所を空け、長椅子を並べ、即席の舞台と客席をつくってみた。はと組の女兒が踊り始めると、客席で見ていた子ども達だけでなく、まわりで遊んでいた子ども達も手を止め、はと組のかっこいい『忍者体操』に見入っていた。次に『ラーメン体操』も踊って見せてくれ、ユーモラスな動きに、もも組の子ども達から思わず笑顔がこぼれていた。もう一度見たいというもも組のリクエストに応え、はと組が踊っていると、ふだんからダンスが大好きな子ども達が真似をして踊っていた。それから、何度かはと組

女兒がもも組に来てくれたり、『忍者体操』したい」「ラーメン（体操）したい」という子ども達の声に応えて、教師も子ども達と一緒に踊ったりした。忍者になりきって動くところや、特に「なろうぜ に～んじゃ、なれるぜ に～んじゃ」と歌うところが大好きで、踊っていない子ども達もまわりで歌うほどだった。あるときからは教師と一緒に踊らなくても、子ども達同士で顔を見合わせて、進んで踊るようになっていた。

1学期のプール遊び前の準備体操代わりに踊っていたダンスの時は、恥ずかしくて踊らなかつたヨシトが、「ぼく、ラーメン（体操）好き！」と進んでダンスに仲間入りしたり、『忍者体操』の時には「手裏剣がいる」と言ったりしていた。



手裏剣に興味をもって

9月の下旬、これまで好きな子ども達だけで踊っていたけれど、運動会もあるので、そろそろクラスのみんなで踊る雰囲気をつくってみたいと思い、弁当前の時間に、「みんなで『忍者体操』しよう」と誘ってみた。すると、ほとんどの子ども達が喜んで参加するなかで、1学期からダンスをする時に、恥ずかしそうにしていたヒロシやナナ達は踊ろうとしなかった。ただ、ヒロシは踊らないものの、一番大きな声で「なろうぜ に～んじゃ」と歌って参加していた。

しばらくしてサらが、家から折り紙で作った手裏剣を持ってきて、まわりの子ども達に配ったことをきっかけに、教師に「手裏剣がほしい」のコールがおこった。そこで、子ども達にできるところまで折らせたり、教師が手伝ったりして、手裏剣を作るようにした。ヒロシが「手裏剣を作って」と言ってきたので、「手裏剣を持つと、『忍者体操』のパワーが出るよ」と言ってみた。



子ども達が手裏剣に興味があふくらんだ頃、手裏剣を貼り付けた冠を用意した。そして、忍者体操をする時に、手裏剣の冠をかぶるようにすると、これまでダンスをしようとしなかったナナが冠を付けて、はりきって踊った。そして、ヨシトと一緒に、忍者ごっこをする姿が見られた。ヒロシも最初はしようとしなかったが、「手裏剣もらったから、忍者のパワーがあるよね」と半ば強引に誘ってみると、気恥ずかしそうな表情はしたが、いったん踊りだすととても楽しそうに踊り、以降、『忍者体操』の時は必ず踊っていた。男児達は特に手裏剣の冠が気に入り、これまでの探検ごっこに忍者が加わり、忍者になって、手作りの武器をもって、探検に出かけていた。

運動会前日、はと組の女兒が運動会の年長ダンス“よさこいカンフー”を見せに来てくれ、小運動会などで、年長組のダンスを憧れのまなざしで見ている女の子達は、早速、部屋にある鳴子を手に年長のダンスを真似ていた。(子ども達はよさこいも大好きで、もも組で鳴子を手に踊っていたこともある) ちょうど遊びに来ていたさくら組の男児も仲間入りして、楽しそうな雰囲気ができていた。

<エピソード①より>

運動会のダンスを何にしようかと考えている時に、3歳児らしいほのぼのとした振り付けで思わず身体が動き出すようなダンスを経験させたいと思い、『忍者体操』や『ラーメン体操』、よさこいと一緒に、様々なダンスを子ども達と一緒に踊ってみていた。しかし、子ども達の様子を見ていると、『忍者体操』が一番好きで、本当はダンスが好きだけれど人前で踊ることには抵抗のある子ども達が歌ったり、目を輝かせたりしている様子を見て、『忍者体操』を運動会ですることにした。



手裏剣の冠についても、教師も取り入れようと考えてはいたが、子ども達から手裏剣への興味がふくらみ、遊びとして広がっていた頃に冠をかぶるようにすると、ダンスの小道具としてだけではなく、子ども達の遊びになるんだと思った。

また、今回は、年長児のダンスへの憧れが、子ども達に忍者になりきるダンスの楽しさを味わわせることにつながった。補助教諭の「子ども達が、はと組の『忍者体操』を『かっこいいねえ』と見ていましたよ」という報告がなければ、今回のような活動にはつながらなかったと思う。

〈文責 鎌倉〉

年中 **ダンス**

- ねらい ○音楽やリズムに合わせて、先生や友達と一緒に動くことを楽しむ。
- 音楽から自分なりのイメージをふくらませて表現してみる。

エピソード② 孫悟空になりきって ～平成22年度～

年中のダンスは、何かになりきったりするのが好きな子ども達なので、イメージしたものをいろいろな動きで表現している子ども達の様子から、子ども達がイメージしやすいもの、イメージしたものを表現できるものがないと考えた。孫悟空の話は一連のストーリーがあり、内容は子ども達のイメージしやすいものでもあったので、運動会では『たいそうそんごくう』をアレンジして取り入れることにした。

紙芝居や絵本からイメージをふくらませる

まずは“孫悟空”という存在のイメージを子ども達のなかで膨らませることから始めた。紙芝居や絵本を読み聞かせることにより、孫悟空がどんな猿なのか、どのような経緯で天竺^{てんじく}をめざすことになったのか、金閣銀閣とのたたかひの様子などのイメージが伝わるようにした。子ども達は集中して紙芝居等を見ており、孫悟空への興味は強いように感じた。また保育室の絵本棚にも孫悟空の絵本を置いておき、いつでも見ることができるようしておくこと、朝来た時、遊んでいる途中、帰る前等、自分の好きな時にじっくりと見ている様子が見られた。

ダンスを踊ってみる

教師が『孫悟空』のダンスを踊ってみると、子ども達は教師の動きを見ながら、真似して踊り始めた。いつもはダンスをあまりしなかったシン、マサ、ヨシオも意欲的に踊っていた。最初は音楽を流して、踊って終わりにしていたが、音楽を口ずさむ様子が見られたくらいから（音楽が自分のものになったと思われた頃）、ダンスのひとつひとつの動きのイメージを子ども達と確かめながら踊るようにした。敵を探す仕草、金斗雲^{きんとん}に乗ってすばやく走るところ、金閣銀閣と戦う時の「かかってこい」

という大きなかけ声などを「どんなふうに孫悟空はするかな？」というような声をかけていった。子ども達からは「こうやってしたらかっこいい」「すごい早く走らないかん」「大きい声で言う」など、いろんな声が聞かれ、ひとつひとつの動きが子ども達のイメージとつながっていった。

イメージを膨らませる道具

ダンスを踊るときに、『孫悟空』のダンスを踊っていることが視覚的にも感じられるように、補助教諭に孫悟空の置物（孫悟空の絵をダンボールに貼り付けたもの）を作ってもらうことにした。だんだんと仕上がっていく孫悟空の置物を子ども達はよく見ており、「今日はここを塗っちゃう」「もうちょっとでできるね」とできあがりを楽しみにしているようだった。また、こわしたりたたいたりすることも予想していたが、こわそうとするよりも、上手に置物をよけて踊ったり、にこにこしてやさしくさわったりして、子ども達なりに大切に扱おうとしているのがわかった。

孫悟空の冠は、かぶるだけで孫悟空になりきれよさを生かすために、早くから作っておき、ダンスや遊びで使えるようにした。子ども達は喜んでかぶっており、ダンスをするときだけでなく、巧技台で遊んだりするときもかぶっていた。

最初の冠は黒い画用紙に黄色のクレパスで絵を描いただけのものだったが、運動会の3日前には黒い画用紙に金色の紙を貼り付けた本物のような冠を運動会当日用として用意し、子ども達と一緒に作るようにした。当日用の冠を見せると子ども達からは歓声が上がリ、輪ゴムとホッチキスで完成させるときも、集中して取り組む姿が見られた。

もうひとつの道具として選んだ如意棒^{にょいぼう}は、子ども達の期待感を膨らませたり自分達で作った道具という思いが生まれたりすることを予想して、両端につけるポンポンは各家庭で作ってきってもらうようにした。ポンポンを作ってきた子ども達は、「いつ如意棒ができるか?」「早く作って!」と、如意棒の完成を楽しみにしているようだった。ポンポンをつけてできあがった如意棒を手にした時はうれしそうで、さっそくダンスを踊ったり、自分の遊んでいるところに持って行ったり、誰かに見せに行ったりする姿が多く見られた。ダンスへの意欲もぐっと高まったようだった。

〈文責 都築・冨田〉

年長 ダンス

- ねらい ○憧れていた年長組の踊りを誇らしさや自信をもってみんなの前で踊る。
- リズムに合わせて、難しい振りやポーズなども頑張ってみようとする。
- クラスや学年のみんなと息を合わせて踊り、一体感を味わう。

エピソード③ 『キッズ・ソーラン』 ～平成21年度～

子ども達に本格的な漁師の動きを取り入れたソーラン節を紹介して、手の動きなどに意識して踊ることで、本物を感じて踊る誇らしさや自信を感じてほしいと願い、本年度の踊りを『キッズ・ソーラン』に決定した。

最初は子ども達に漁をしている漁師の動きをイメージしてほしいと思い、「かっこいい漁師さんの踊りなんだけど、何をしている動きかわかるかな?」と投げかけて、教師が子ども達に踊って見せた。

子ども達に踊りを見せると、今までの踊りとは違い、動きがダイナミックだったり、見慣れない動きだったりすることからか、網を揚げる動作や網を引っ張る動作などのところで笑い声なども聞かれた。教師は、「これは本格的な漁師さんの踊りだから、踊るのはとても難しいけど、年長組なら踊れると思うし、みんなが力を込めて踊るととてもかっこいいと思うよ」と言って、子ども達の意欲を期待する形で見せるのを終えた。

次の日も帰りの前に、「今日もかっこいい漁師さんの踊りを踊るよ」と子ども達に投げかけ、「踊れ
そんな人は、一緒に踊ってもいいよ」と誘ってみた。この日は男女含めて4、5人が、教師と一緒に
踊った。踊っている子ども達は、動きのおもしろさを感じて踊っているようだった。

3日目、同じように誘うと、この日は10人以上の子ども達が自分から参加してきて、教師と一緒に
踊った。教師の声に合わせて「ドッコイショ、ドッコイショ」とかけ声をかけている子どももいた
ので、「踊りだけじゃなくて、声もかっこいいね」と言うと、声を出す子どももぐんと増えた。

その次の日、部屋にみんなで集まった際に、「実は、小学生のお兄さんお姉さんが踊ってる『キッ
ズ・ソーラン』のDVDがあるんだけど見てみる？」と伝えて、子ども達にそのDVDを見せた。
「本当はとても難しい踊りだから、小学生もこうやって練習するんだろうね」と話すと、じっと映像
を見入って、それを見た後の踊りは、今までよりも本物らしく引っ張る動作をしたり、手足の動きを
丁寧にしたりする子どもも増えてきたようだった。

DVDを見て、踊りを引き続きするようになった頃から、踊りの時間になると、ほぼ全員の子
ども達が集まるようになったので、踊る際には見ている人に姿が見えるように（お客さんのことも意識し
て）、男女で1列ごとに並んで踊るようにした。続けていくうちに、少しずつ見ている人のことも意
識できるように、教師が感想を伝えていくと、入場の際に等間隔で並ぶことや、間奏で2クラスが
入れ替わるところも、自分達で意識して動くようになった。

〈文責 矢田〉

エピソード④ 「ステージで踊ってくる！」『よさこいカンフーハッ！ハッ！ハッ！』

～平成23年度～

昨年から持って踊るのが好きだった鳴子を使って、よさこ
いの踊り（『よさこいカンフーハッ！ハッ！ハッ！』）をする
ことにした。そのよさこいの踊りを踊った当初から、子ども
達は気に入った様子で、何度も「先生、踊ろう！」と誘いに
来ては、教師と一緒に踊り、覚えていく子ども達がいた。特
に女兒は大好きで、ある程度覚えると、年中の頃からよく踊っ
ている仲よし広場のステージにCDデッキを持って行き、踊り始めた。踊るときは必ず椅子を持って
ステージ前に並べていた。始めはほとんどいなかったお客さんも、そのうち集まり始め、一緒に踊り



始める小さい組の子ども達の姿も出てきた。
この日も「先生、ステージで踊ってくる！」と
ミホがCDデッキを、キホとレイが鳴子の入った
箱を持って行き、ミクが椅子を運んで並べ始めた。
それぞれが違う分担をしながら、一つの目標に向
かって準備をしていた。子ども達はステージでい
つものように踊り始めていたが、しばらく経って
みてみると、ステージの上には年中、年少の子ども達が上がってよさこいを踊り、ステージの下で年
長が踊っていた。また、小さい組の子どもにもわかるように、ステージの子どもに見やすい観客席の
後ろに立って踊っている年長児もいた。年長児は誰もが誇らしげでうれしそうだった。この姿はこの
後も運動会までよく見られた。

〈文責 中屋〉

“運動会”のエピソード全体を通じた考察

一人一人の心の動きを丁寧に見る

運動は、できる・できないがよく見える。たとえば「走る」では、足が速い、遅いのはっきりわかるため、「走る」のエピソードのカズテルのように、かけっこには参加したくないという思いをもつ子どもがいる。「競技」のエピソードのコウダイやユウキのように、できない経験をする、次へと気持ちが向かいにくいこともある。そのような状況の中で、教師が“できない、やりたくない”という子ども達の気持ちを汲み取り、タイミングを見計らって、心を支えたり応援したりする言葉や、その子どもの興味・関心に応じた言葉をかけて、やる気を起こさせたことで、子ども達が運動に挑戦しようとする気持ちにすることができた。

個人の運動能力がはっきり見える運動遊びにおいては、できないと感じる一人一人の気持ちを丁寧に汲み取り、運動会の目標である“運動することを楽しむ”“進んで運動しようとする”“自信や達成感を味わう”ことにつなげていくことが重要であることを再確認した。

経験させたい動きを具体的に

種目ごとのねらいを学年ごとに明らかにしたことで、運動会ごっこをするにあたって、学年ごとにどのような経験を大事にすればよいのか明らかになり、保育に取り組みやすくなった。

一方で、種目ごとのねらいが抽象的であることが課題としてあげられる。たとえば、種目のひとつである競技のねらいを、年中では“少し難しいことに挑戦して…”、年長組では“難しいことにも自分なりのめあてをもって、挑戦する。…”と設定したが、どのような動きがその学年にとって難しい動きであり、なお、発達に見合っているのかは必ずしも明らかではない。年少組の“…先生や友達の真似をしたりしていろいろな動きを楽しむ”というねらいも、いろいろな動きとはどのようなものが適切か、具体的ではない。

平成24年3月に出された文部科学省の「幼児期運動指針」では、年少組では「体のバランスをとる動き」や「体を移動する動き」、年中組では「用具などを操作する動き」、そして、年長組では年少組・年中組で経験してきた動きを「より滑らかに遂行できるように」と記載されている。上で述べた本園のねらいを、「幼児期運動指針」と照らし合わせ、今後、より具体的なねらいと経験を明らかにしていきたい。

運動会の意義をトータルで捉え直す（親子競技・チャレンジ競技で）

本園では、競技を行う側も応援する側も楽しい運動会にしようと考えている。特に、各クラスごとに行う親子競技では、子ども達の好きな絵本の題材を生かし、ストーリー性のある内容にするなど、競技内容に工夫を凝らしている。しかし、各クラスとも、ゴールテープもあり競争形式にしているが、ゴールを2カ所に設定しているため、勝敗がわかりにくく、見る視点が定まらない様子が見える。綱引き、鈴割り、かけっこなどでは、目を見張ったり、夢中になって応援したりしている子ども達が、親子競技になると、今ひとつ応援しようという気持ちにはなりにくいようである。年長組のチャレンジ競技においても、一輪車や竹馬など50名以上の子ども達が挑戦するので、他の競技より時間がかかり、憧れの気持ちで見ている子ども達もいる一方で、応援しようという気持ちにはなりにくい子ども達もいる。

応援する側のことだけを考えるなら、親子競技では、だるま運びなどスピード感のあるチーム対抗の競争を取り入れた方が応援しやすいだろう。また、チャレンジ競技の一輪車や竹馬などは、運動会ではなく、参観日など別の機会に行う方法もあるだろう。

一方で、運動会をふだんの保育の延長と捉え、いろいろな動きに挑戦させることや親子の触れ合いを重視するならば、今の本園の競技内容はそれにふさわしいと見ることもできる。

例えば25年度年中組では、親子でダンボール箱を2本の棒で運び、その後親の持ったフープの輪の中に向かってボールを投げ、最後に子どもが乗ったダンボールそりを、親が引っ張ってゴールする

という内容であった。これにしても、応援する子ども達のことだけを考えるならば、ダンボール箱を運んで競争するだけの方がスピード感もあり、応援しやすかっただろう。ただ、実際に競技を行う子ども達にとっては、ダンボール箱を運ぶだけでなく、ふだんの保育で挑戦してきたボール投げをし、保護者にダンボールそりを引っ張ってもらってスピード感やスリルを味わう方が、より楽しいだろう。また、25年度では、この競技で、見る側の楽しみとして、親子で運ぶダンボール箱のひとつひとつに絵の一部分を描いておき、運ぶにつれてダンボール箱が積み重なり、ひとつの絵が完成する、という演出をした。応援側にとって、競争という点では見る視点が定まらなかったが、演出の工夫により、完成する絵に対しては注目も集まっていた。

また、チャレンジ競技では、毎年運動会後に、年長組がチャレンジで行った内容を年中組が真似てやってみようとする姿が見られる（リレーやダンスも同様である）。年長組でも、運動会後に、運動会で行ったものとは違うチャレンジ種目に挑戦する子ども達も毎年見られる。このような状況からすれば、運動会でチャレンジ競技を行うことは、かけっこ等に見られるような積極的な応援は得られなくても、他の子ども達に憧れの気持ちをふくらませ、難しいことに挑戦してみようという動機付けになるとみることができる。25年度のチャレンジ競技では、22年度にチャレンジ競技が始まって以来初めてフラフープを取り入れた。年長担任の演出により、年中組、年少組はこれまでのチャレンジに比べて集中して見ていたように思われる。また、運動会後もフラフープに挑戦しようとする姿がよく見られていた。

25年度の運動会を終えて、親子競技やチャレンジ競技について、あらためて競技を行う側と応援する側の視点から見直したが、ふだんの運動遊びの延長上で捉えること、見せるという“ハレ”の場でいろいろな動きに挑戦すること、親子の触れ合いがあること、他のクラスや学年に刺激になること等の要素については各競技に適当なバランスで含まれていたと見ることができた。今後、親子競技やチャレンジ競技の趣旨は大切にしながら、見る側が思わず応援したくなる演出の工夫等をさらに検討していきたい。

自分で選んでがんばってみようとする（チャレンジ競技を通して）気持ちを重視する

平成22年度から始めたチャレンジ競技では、竹馬、高下駄、一輪車、跳び箱、鉄棒、フラフープなどの中から、その年の担任の判断で3つに絞り、年長児はその3つからやってみたいことを自分で選んで、自分なりに挑戦しようとするようにしている。教師から与えられるのではなく、自分で目標を決めることが、その後の子ども達の意欲を育てるにあたって意味があると考えているからである。

本園では、運動会が到達点ではなく、いろいろな運動にチャレンジしようとするのが大切と考えている（41ページ参照）ものの、願わくば、できるようになった子ども達の姿を運動会で保護者に見てもらいたい、そうすることで子ども達がより自信をもつことができるようにしたいと思っている。そこで、1学期からチャレンジ競技に少しずつ取り組み、運動会前は、毎日チャレンジ競技に取り組み時間をもつようにしている。子ども達のチャレンジ競技への取り組みは様々で、クラスや学年でのチャレンジ競技の時間以外にも、根気よく一輪車に挑戦している子ども達もいれば、いろいろと挑戦しているものの、チャレンジ競技の時間の終わりを待ちかねるように、自分のしたい遊びにうつっていく子ども達もいる。時には「どれもやりたくない」と言う子どももいる。

幼児期の遊びは、子ども達が主体的にかかわってこそ意味があると思われる。しかしチャレンジ競技では、やりたいことは子どもが選んでいるが、意欲的でない子ども達の姿を見ると、教師側がやらせてしまっているのではないかと、チャレンジ競技への取り組み方はこれでいいのだろうか、戸惑うこともある。しかしチャレンジ競技に意欲的でないように見えた子ども達が、運動会後に、まったく触れようとしなかった一輪車に挑戦しようとしていることも多い。チャレンジ競技に意欲的でない子ども達も、本当は“自分もできるようになりたい”という気持ちを抱えているのではないかと推察される。そこで本園では、「やりたくない」と言う子どもには「やってみようよ」と明るく励ましたり、できないままチャレンジ競技を早めに終えようとする子ども達には「もう1回見せてよ」と声をかけ

たり、一輪車で少しでも前に進んだり、竹馬で一歩でも前より進めるようになると、思いきりほめたりするような言葉がけを大切にしている。自分で選んだことをがんばってみようとすることで、自分に自信をもち、自分を誇りに思えるようにしたいと考える。また、チャレンジ競技の意図を保護者に丁寧に知らせ、チャレンジ競技に対する子どもの様子を保護者に知らせたり、家庭で園児がチャレンジ競技に対してどのような気持ちでいるのか保護者に尋ねたりして、保護者と一緒になって、子ども達の気持ちを支えていくようにもしている。

チャレンジ競技については、道具の出し入れなどの準備が他競技より多いこと、段取りなどに時間的にも追われ、リレーや綱引きなど他の競技を運動遊びの中で経験させることが充分ではないのではないかと考えられること等から、運動会であえてチャレンジ競技をしなくてもよいのではないかという議論もあった。しかし、他の学年への刺激や、運動会で下の学年や大勢の保護者が見守るなかでチャレンジすることで、緊張感とともに達成感や満足感を味わい、大きな自信につながっている状況を再確認した。今後、さらに個に応じた意欲を引き出す言葉がけを工夫・共有していきたい。

“運動会”を見直すなかで、新たに確認し合ったこと

年長組の縄跳びと親子競技

本園では9月下旬に、年長組の祖父母参観日があります。内容については担任にまかされていますが、祖父母と一緒に縄跳び作り（布を三つ編みにしたもの）をすることが恒例となっています。そして、10月中旬にある運動会の親子競技も担任が内容を決めますが、祖父母参観日からの流れで、祖父母と作った縄跳びを用いて親子で2人跳びをする競技を取り入れる年がよくありました。

“運動会”を見直していくなかで、行事の内容が各担任に任されることはその年の子ども達の実態や興味関心に応じるという意味ではよいけれども、経験内容によっては、行事を関連付けていき、毎年同じ経験をすることも、各学年の行事に子ども達がめあてをもつという点で大事ではないかということが話し合われました。

そこで、これまで多く取り入れられた内容でもあることから、年長組の祖父母参観日は、毎年祖父母と園児で三つ編みの縄跳びを作ることとし、運動会では、その縄跳びを使用し、チャレンジ競技のひとつとして取り入れること、親子競技で、親子での2人跳びを行うことを決定しました。（ただし、祖父母と作った縄跳びは子ども用の長さなので、親子で使用する縄跳びは大人用の長さの物を使用するようにしました）

発達連続性と運動会のおみやげ

本園では、運動会のおみやげは各学年とも、運動の経験を広げるものとしてしています。

年中組は縄跳び（既製品）です。これは、運動会で縄跳びの競技における年長組の姿を見せ、運動会後に年中組に縄跳び遊びを保育に取り入れていくことを見通して選んだおみやげです。年長組の縄跳びの経験を大事に捉えていくなれば、年中組の保育において、一人一人の縄跳びに挑戦しようとする気持ちをより大事に育んでいこうと話し合いました。

縄跳びに取り組む順番としては、三つ編みの縄跳びのほうが跳びやすかったという事例もあり、既製品の縄跳びよりも三つ編みの縄跳びを先に経験させるべきではないかということが、話し合いの中で頭を悩ませたところです。しかし、年長組で祖父母と手作りするというところに大きな意味があり、また三つ編みは年長組でないと難しいことも考慮し、現段階では年中組の縄跳びは既製品とし、跳びやすさを考慮して選ぶように話し合いました。

また、年少組ではおみやげは担任の判断に任されていましたが、年中組、年長組で高下駄を保育に取り入れることを確認し、毎年竹ぼっくりをおみやげにするようにしました。年長組はチャレンジ競技にがんばって取り組んだ達成感が味わえるように、金メダルをおみやげにしています。



お店屋さんごっこ

お店屋さんごっこ

お店屋さんごっこを見直すにあたって

お店屋さんごっこの経験の意味を見直すにあたって、位置づけそのものも考え直すことになりました。それまでは、子ども達が生活や幼稚園の遊びのなかで、子ども達が自然に、自分でまたは友達と一緒にお店を開いて、クラスの友達や小さい組の子ども達を招いたりすることがありました。また、3学期の参観日に、年長組では家の人対象にお店屋さんを開いて招待する取り組みをしたこともありました。家の人向けの店を準備するなかで、小さい組に自由に買いに来てもらうこともありました。

しかし、このようなふだんのお店屋さんごっこでは、全員がお店を開いたりお客さんになったりするわけではありません。子ども達全員がお店屋さんごっこを経験することで、その後の遊びが豊かになること、また、小さい組の時にお客さんを経験したことが、年長組になった時に生きてくるであろうことを考え、3学期の年長参観日(※①)に行くことが多かった家の人対象のお店屋さんごっこをやめ、平成21年度から、園全体の取り組みとして、年長組が小さい組を招待するお店屋さんごっこを12月上旬に行うことにしました。

(※①3学期の参観日については135ページ参照)

お店屋さんごっこの大まかな内容

年長の子ども達が自分達でやりたいお店屋さんを決めて、小さい組を招待する

附属幼稚園のお店屋さんごっこでは、どのようなお店屋さんをしたいか、クラスごとに話し合っ決めて決めます。いったん決めても、子ども達がやりたいお店屋さんが新たにできることもあるし、別のお店屋さんが魅力的になることもあるので、子ども達のその時の思いによってお店屋さんが増減したり、メンバーが替わったりしてもよいことにしています。お客さんは、年少組、年中組です。

お化け屋敷等も…

お店屋さんと言えば、いろいろなお店に商品が並んでいるというイメージがありますが、本園のお店屋さんごっこで、お化け屋敷やダンスショーなどもお店屋さんのひとつになることがあります。お化け屋敷については、毎年年長組のどちらかのクラスが行ってきたので、自然に引き継がれているところもあります。

遊戯室に商店街のように並ぶお店屋さん

各保育室でお店屋さんを開くこともありますが、24年度は遊戯室でお店屋さんを開きました。遊戯室で開くときは、北半分でさくら組のお店屋さん、南半分ではと組のお店屋さんを開くことにし、遊戯室をくると一周すれば、商店街のようにお買い物ができるようにしています。

お金は自分で好きなだけ作り、好きなものを自由に選んでお買い物をする

お店屋さんごっこでお買い物をする年少、年中組は、お買い物に必要なお金を好きなだけ作るようにしています。「たくさんお買物をしたい」「これで足りるかな」などと思ってたくさんお金を作る子ども達もいます。また、お金を作ること自体が楽しくて作っている子ども達もいます。

お店屋さんへ招待されると、自分の作ったお金で支払います。自分の作った額よりも、たくさんのお釣りが来ることもあるし、銀行でお金がもらえたりします。また、先生やまわりの友達と一緒にお店屋さんを見て回り、自分がほしいものは、数に限りがあることもありますが、好きなだけ手に入るようになっています。

お店屋さんの経験の意味

《年長組》

小さい組への思いやりの気持ちや年長組としての自信や誇りをもつ

小さい組はどんな物が好きだろう、品物はどうやって並べたらいいだろう、どうやって声をかけてあげたらいいだろう…など、小さい組の子ども達が喜ぶ姿を想像しながら準備をすること、そして、

お店屋さんごっこ当日に小さい組に買ってもらったり、小さい組の様子に合わせて声をかけたり、案内したりすることで、小さい組への思いやりの気持ちや年長組としての自信や誇りを育てたいと考えます。

友達と共通の目的をもち、考えを出し合ったり、力を合わせたりし、最後までやりとげようとする

ふだんの遊びのなかで、子ども達から生まれるお店屋さんでは、自分達がやりたくなった時に店を開き、品物がなくなれば店を閉め、お店屋さん満足すると別の遊びを始めるなど、子ども達のやりたい気持ちがふくらんだ時に行く、自由度の高いものです。しかし、行事としての“お店屋さんごっこ”では、日程も決まっています、年中組、年少組全員を招待（※②）するので、ふだんのお店屋さんのように、満足したからやめるというわけにはいきません。

小さい組を喜ばせようという共通の目的のもと、どんなお店屋さんにしようか、どうやって作ろうか、店構えはどうしようかなどと考えを出し合ったり、「私は値札を作るから、〇〇ちゃんは貼ってね」「いいよ」などと役割分担をしたりする経験をしてほしいと思います。そして、途中であきらめたり、やめたりすることなく、お店屋さんごっこ当日を迎え、小さい組の喜ぶ顔を見て、最後までやりとげる達成感を味わってほしいと思います。

（※②小さい組がそれぞれゆっくり買い物できるように、年中組が1日目、年少組が2日目にお店屋さんに行くように設定している。人数の少ない年少組の買い物が終わったあと、年長組同士が買い物できるようにしている）

クラスのみんで共通の目的をもち、力を合わせて活動に取り組む充実感を味わう

グループごとにお店屋さんごっこの準備を進めるなかで、「お金はどうしよう」「おつりは?」「カゴがあるといいかも」など、いろいろな疑問やアイデアが生まれることでしょう。それらのことを教師が拾い上げ、クラスのみんに投げかけることで、疑問が解決したり、より楽しいアイデアが生まれたりするかもしれません。1人やグループ毎の思いや考えを教師がみんなのこととして考えるようにすることで、小さい組に喜んでもらおうという目的のもと、クラスのみんで力を合わせてお店屋さんごっこをする充実感を味わってほしいと思います。

《年中組・年少組》

憧れの気持ちをもつ

年中組と年少組は年長組のふだんの遊びのなかでのお店屋さんでも大変喜び、お化け屋敷に繰り返し入ったり、買い物を楽しんだりしています。行事としてのお店屋さんごっこの日は、年長組2クラスがグループ毎にお店屋さんになるので、ふだんのお店屋さんとは違った驚きや喜びがあることでしょう。

お店屋さんごっこというと、「これ下さい」とお店での言葉のやり取りをすることをねらいとすることがあります。しかし、年長組2クラスの雰囲気圧倒され、自分からは「これ下さい」と言えない子どももいることでしょう。年長組には「何にしますか?」などと小さい組の気持ちに合わせて声をかけてほしいと考えますが、お店さんの雰囲気に戸惑っている子どもにまで、言葉でのやりとりをさせることは考えていません。むしろ、年長組に声をかけられ、指差しでも、教師に手伝ってもらいながらほしいものを伝え、好きな商品を手に入れること、年長組に「ありがとう」とやさしく声をかけられることを通して、年長組に憧れの気持ちをもつことの方を大事にしたいと考えます。そして、自分が年長組になった時に小さい組へやさしくしてみよう、すてきなものを作って売ってみようといった思いにつながればと考えます。もちろん小さい組が「これ下さい」「ありがとう」と言える様子なら、教師が促してやりとりを経験することも大切にしたいと思います。

遊びの刺激をもらう

お店屋さんごっこから帰ってくると、早速買ってきた商品でお店屋さんごっこを真似てみるがあります。年長組で見たお店屋さんごっこをしないと、教師に材料を要求してくることもあります。また、年長組になった時に、お店屋さんごっこで見た、年長組の保育室にしかない大型積み木で、真っ暗なお化け屋敷を再現することもあります。このように、年長組のお店屋さんが小さい組の子ども達

の遊びの刺激となり、遊びのイメージを豊かにし、経験を広げていくことも大事に考えています。

ねらい(○)・内容(■)

【年長組】

- 小さい組への思いやりの気持ちや年長組としての自信や誇りをもつ。
- 友達と共通の目的をもち、考えを出し合ったり、力を合わせたりし、最後までやりとげようとする。
- クラスのみinnで共通の目的をもち、力を合わせて活動に取り組む充実感を味わう。
- 小さい組が喜ぶものを自分なりに考えて、商品などを作ろうとする。
- 友達と一緒に、考えを出し合っ、看板や店構えなど店屋に必要なものを作ってみようとする。
- お店屋さんになって、小さい組の思いを聞きながら、商品を売ってみる。

【年少組・年中組】

- 年長組に憧れの気持ちをもったり、遊びのイメージを豊かにしたりする。
- お店屋さんごっこを楽しみにしながら、財布やお金などを作ってみる。
- 先生や友達と一緒にほしい商品を選んで買ったり、買ったもので遊んだりする。
- お店屋さんになって世話をしてくれる年長組さんのかかわりで、お買い物をしてみる。
- 年長組の店屋を真似て遊んでみる。

環境構成と援助

子ども主体で

子ども達がイメージしているお店屋さんが実現できるように、子どもの思いを引き出しながら、商品作りに必要な材料を用意するようにしています。子ども達のアイデアが広がるように、空き箱やカップなども、目に付く場所に置くようにしています。お店屋さんを使う台や場所なども子ども達と相談して決めていき、保育室からお店屋さんの会場まで自分達で商品や台などを運ばせるようにしています。そうすることで、自分達で考えを出し合ったり、力を合わせたりしてお店屋さんごっこをしているという充実感を味わってほしいと考えます。

また、小さい組への思いやりの気持ちがもてるように、看板の位置や商品の並べ方を、小さい組の視点に立って考えられるような言葉がけもしています。

長いスパンで育ちを見通す

お店屋さんごっこでは、「○日までに、品物がいくつぐらいいる」「あのグループは、まだここらあたりまでしか、進んでいない」などと、教師の方が焦ることがあります。どんどん店屋の準備を進めている子ども達もいれば、今ひとつ目的が見つからず、自分達がしたいというよりも「先生が言うから…」している子ども達もいたりすることもあります。このように行事としてお店屋さんごっこを行うと、保育の課題が見えてくる場合があります。それまで友達同士で思いや考えを出し合い、遊びをつくり上げていく楽しさを味わえる経験を十分していないと、突然「お店屋さんをするから、やりたいことを見つけて、協力しなさい」と言われても、子どもは戸惑うばかりでしょう。

年少では友達と過ごす楽しさを、年中では自分なりに思いや考えを言ってみる、それが友達に受けとめられる喜びを、年長組では友達と考えを出し合い、遊びをつくっていく喜びを経験させたいと考えます。こうした長いスパンで育ちを見通し、日々の遊びを充実させていくことで、初めて、お店屋さんごっこを通して経験させたいことが可能となります。

お店屋さんごっこに限らず、ふだんから、本園教育課程や指導計画と子どもの育ちを照らし合わせ、遊びのなかで育ちに必要な経験ができていくかどうか、丁寧に見ていき、援助していくことが必要となります。

年長 ほと組

進級当初から、遊びの中でお店屋さんをしている姿がよく見られた。飛行機屋さんや、ネックレス屋さん、ドーナツ屋さん、パフェ屋さんなど、気の合う友達と一緒に、その時作りたいものを中心にお店屋さんに発展していくことが多かった。また、大型積み木を使ってお化け屋敷を作り、クラスの友達はもちろん、小さい組の子ども達に声をかけて楽しんでもらう姿もあった。

お店屋さんごっこ当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・）や子どもの様子（☆）
11/16	金	・お店屋さんごっこの取り組みへ生かす経験として年長組全員で金曜日に行き、200円でお家の人へのお買い物をする。[エピソード①]
11/19	月	☆お店屋さんごっこなどの遊びをする。
11/20	火	↓
11/21	水	・昨年度までに経験した年長組によるお店さんのことを振り返って、自分がどんな店屋をしたいか、考える。
11/22	木	・昨年度のお店屋さんごっこや自分の経験を振り返りながら、クラスで5つの店屋が決まる。
11/26	月	☆自分のしたい店屋に分かれて、品物を作り始める。[エピソード②]
11/27	火	↓ (☆店屋をいろいろと変わったり、手伝ったりしている)
11/28	水	・お化け屋敷に使う大型積み木をみんなで遊戯室に運ぶ。[エピソード③]
11/29	木	・店で使う台をみんなで考える。[エピソード④]
		・残りの全ての店屋の道具や机を遊戯室に運び、店の構え方を考えたり品物を作ったりする。[エピソード⑤]
11/30	金	☆お店屋さんごっこの日に向けて、品物を作ったり、店を工夫したりする。
12/3	月	[エピソード⑥]
12/4	火	
12/5	水	↓
12/6	木	・お店屋さんごっこ当日（年中組が買いに来る日）[エピソード⑦]
12/7	金	・お店屋さんごっこ当日（年少組が買いに来る日、その後年長組がお店屋さんごっこを楽しむ）
12/10以降	月	☆店で出していた品物を、別の子ども達が作って遊ぶ。[エピソード⑧]

お店屋さんごっこ当日までのエピソード

エピソード① みんなで金曜市へお買いもの 11月16日

金曜市（きんよういち）は、高知市で行われている街路市の1つである。年長の子ども達は、毎年、11月にこの市に出かけ、お家の人を買って帰りたいものを買うことになっている。今年も各自財布に200円を入れて、出かけた。

金曜市では、道路の両側に20軒くらいの小さな出店が並んでいる。子ども達は、まず20軒のお店を1周して、どんなものがあるか見て回り、2周目には、自分でお店の人とやり取りをして買いたいものを買うことになっている。

子ども達は、スーパーで買い物することが多く、市に来ることはほとんどなかったからか、みんなどんなものがお店に並んでいるのだろうと覗きこみながら回っていた。市には、野菜や果物が多く、生花や乾物、穀物や豆類もあった。お目当ての物があると「おもちがある。後でここで買おう」「お母さんは、花にしようかなあ」など、友達と話しながら歩いて回っていた。

2周目は、まず乾物店を通った。「ちりめんじゃこや、わかめもおいしそうだねえ。ここで買う人



はいませんか」と担当が声をかけると、タケルが、「ぼく買いたい」と言った。「どれを買いたいの」と担当が聞くと、ちりめんじゃこを指差した。しかし、ちりめんじゃこは一皿200円であり、これを買ってしまうと、持っているお金を使い切ってしまう。担当が「これ買ったら他の物が買えなくなっちゃうけどいい？」「ちりめんじゃこを半分にしてもらって、100円で買うこともできるけど聞いてみる？」とタケルと相談してみた。「うん」と言ったタケルに、お店の人への話し方をアドバイスし、タケルは「これ、半分ください」と言った。お店の人は「はいはい」と、快く半分にしてくれ、「ちょっと、おまけね」と、半分より多めに袋に入れてくれた。袋に入れてくれている間、タケルは、100円玉をぎゅっと握りしめていた。その100円玉を渡すと、お店の人は「はい、ありがとう」と言って、袋に入ったちりめんじゃこをタケルに渡した。「ありがとう」と言って、受け取ったタケルは、とてもうれしそうだった。

<エピソード①より>

本物のお金を手にして自分でお店の人とやり取りをする経験は、緊張もするが、楽しいものになる。このような経験を通して、自分を誇らしく思い、自信を深め、小学校生活へ向けてより自立心を培うことを願っている。

また、この体験は、お店屋さんごっこにつながるものとして、毎年この時期に行っているものである。直接お店の人と、やり取りを経験するなかで、「どれにしますか？」「これですか？」「はいどうぞ」などというお店側の声かけを、今度は自分達のお店屋さんごっこで生かせるようになってほしいと思った。

このエピソードでは、子どもは買い物に満足した様子ではあったが、教師の援助としては、200円を全部使って買い物が1回で終わってしまうことを気遣って、子どもとお店屋さんとのやり取りに入り過ぎてしまったのではないだろうか。もっと、子ども自身がやりとりする言葉を選んでいけるよ

うな状況をつくるべきではなかったかと反省される。

エピソード② お店屋さんごっこの準備が始まって… 11月26日・27日

前週の週末に、クラスの子も達が集まった時、どんな店屋をしてみたいか聞いてみた。すると、昨年までにお店屋さんごっこのお客さんとして楽しんだ経験を思い出して、お化け屋敷や武器屋、ハンバーガー屋、ケーキ屋などがあがった。そして子ども達がしてみたいと思った店屋に必要なだろうと思われるものを26日の朝の環境として用意しておいた。



用意したのは、廃材や画用紙、お花紙などである。子ども達は自分のしてみたい場所に行って、店屋で売るものを作っていた。武器屋で1、2個作ったら、ハンバーガー屋の方に行ってハンバーガーを作ったり、ケーキ屋でたくさんケーキを作ったら、ハンバーガー屋のポテトを作ったり…と、子ども達は思い思いの場所で、友達と一緒に店の品物作りを楽しんでいた。



<エピソード②より>

子ども達が自分でしたいお店の品物を作ったり、満足したら別のお店屋さんの品物を作ったり、ということ繰り返しながら、お店屋さんごっこの当日までにしたい店屋を決めることができればよいと思い、はじめから店屋を固定することはしなかった。仲よしの友達と一緒に移動したり、自分がしてみたいと思って、1人でも替わってみたりと、それぞれの思いでいろいろな店屋を楽しんでいる子ども達が多かった。

エピソード③ 明るくしてるから大丈夫だよ 11月28日

保育室にお化け屋敷のコースをお試しで作っていたが、お店屋さんごっこは遊戯室で開くため、本格的にお化け屋敷を作る前にみんなで大型積み木を全て移動することにした。年長の積み木は大きなものが作れるようにと、ひとつひとつが他の学年よりも重く数も多い。なかには1人で運べないくらい大きなものもある。そこでクラス全員で協力して運ぶことになった。

全部運んだら、早速、お化け屋敷のチームがコースを作り始めた。ステージを使いたいということで、お化け屋敷のコースをステージの上で作り始めた。

ステージの上から作り始めたこと、保育室から運んだ大型積み木に遊戯室の大型積み木が加わったことで、コースも長く作ることができ、ステージから30cmほど下のフロアにもコースをつなげていくことになった。ステージ上の、くねくね曲がったコースから下りるところは、高さ20cm弱の平たい積み木を置いて階段にしていた。担任もコースに入らせてもらい、保育室よりも長く楽しくなったコースに驚き、構成遊びの好きな子ども達の発想に感心したが、唯一、階段を作ってステージから下りるところが、年少さんに危なくないだろうかかと心配になった。「この階



階段になる部分は、光を通す布を使って屋根にした

段、ももさんに危なくない？」と、尋ねると、ダイチは「ここは明るくしてるから大丈夫だよ」と言った。よく見ると、コースの屋根にする板の他に暗幕を使っていたのだが、階段の部分だけは保育室で使っていた布をかけて、光が通るようになっていた。そのため、階段の部分に光が入り、降りる位置がよく見えていた。

<エピソード③より>

思いがけずたくさんになった積み木で、思いを巡らせながらコースを作り、とても満足していた。特にステージから階段を作って降りるところは、気に入っていたのか、「先生見て！」と一番に見せて説明してくれた。教師は階段の段差を危惧したが、子ども達は子ども達なりに明るくすることを考えており、足元が見えないということは全くなく、むしろその部分だけ日が入り、コース全体も微妙な明るさになっていた。また、担任の話を聞いて、さらに年少組の先生に大丈夫かどうかを聞きに行く姿もあった。

エピソード④ お店屋さんごっこで使う台をみんなで考えて 11月29日

11月29日、他の店屋もみんなで遊戯室へ移動した。移動してみると、机やストアーハウスが必要だということに気がついた。机はたくさんあるので必要な数をグループで考えて運ぶことができた。また、クラスにひとつしかないストアーハウスを、保育室ではアクセサリー屋さんで使っていたが、仲よし広場にある2段の長い台も、クラスにひとつ借りることができるようになり、担任はこの台をどこの店屋で使ったらよいだろうかと考えた。この時、隣のクラスが、これらの物を使うに当たってみんなで相談したということを知った。そこではと組でもクラスのみんなに聞いてみることにした。子ども達は、担任からそのことを聞き、どの店屋にストアーハウスと2段の長い台を使ったらよいか真剣に考えていた。

「ストアーハウスは、ハンバーガー屋に使ったらいいと思う」と誰かが声をあげると、ダイチが「ネックレスをかける場所があったほうがいいから、アクセサリー屋さんの方がいいんじゃない」と言い、「そうだね～」との声がたくさん上がって、ストアーハウスは、アクセサリー屋で使うことが決まった。また、2段の長い台は、「並べるところがたくさんあるねえ～」と担任が言うと、「ここにケーキ並べたらいいんじゃない」と、フミオが言った。「並べるなら、おもちゃもいいんじゃない」との声もあったが、ケーキを並べた方が本物みたいということから、2段の長い台はケーキ屋が使うこととなった。そしてみんなで、これらの物も含めて全て遊戯室へ運んだ。



<エピソード④より>

遊戯室に作った品物を持って行ったことで、子ども達はその品物を置く場所が必要であることに気づいた。とりあえず机は運んだものの、ストアーハウスや2段の長い台も使用できることがわかり、みんなにどう使うかを投げかけた。この時、話し方によっては、自分達のお店で使いたいという気持ちが前面に出てしまうのではないだろうかと思い、「どのお店で、この台を使ったら一番いいのかなあ」と、全体を見通して考えるように言葉を付け加えた。そうしたことで、なぜストアーハウスがアクセサリー屋が一番適しているのかなど、よく考え、理由も子どもなりにみんなに伝えたりしながら決めていくことができた。ここでは、隣のクラスの担任とどんな様子なのか、どのようにしているのか、情報を交換しながら進めていったことも、よかったと思う。

エピソード⑤ ケーキ屋をもっと本物らしく 11月29日



2段の長い台が、みんなの力でケーキ屋のスペースに運び込まれ、子ども達は早速これまでに作ったケーキを少し並べてみた。保育室では、ロッカーの上のお盆に並べられていたケーキだったが、この2段の長い台に置いてみると、なんだか本物のケーキ屋みたいな雰囲気も感じられ、子ども達もうれしそうだった。さらにケーキを増やそうと作っていると、お化け屋敷グループのルミが来て、「本物のケーキ屋さんって、透明なガラスの中に入っちゃうよね」と言った。ケーキ屋のアツシが「ぼくも知っちゃう。見たことある」と言った。ちょっと首をかしげている子どももいたので、祖父母がパンやケーキのお店をしているダイチに話を聞いてみることにした。

ダイチは「本物のケーキはね。ガラスのケースに入っていて、こっち（内側）からケーキを取り出して、お客さんに渡すんだよ」とさらに説明してくれた。それを聞いて、マコが「それ作りたい」と言い出したので、教師が手伝いながら、透明のシートを使い、大型積み木と合わせて、ガラスのケース状のものを作った。そしてケーキ屋はこの台を使い、店屋をすることになった。使わなくなった2段の長い台は、その日のうちにみんなで話し合っ、ハンバーガー屋が使うことになった。



<エピソード⑤より>

今までにケーキ屋に行ったことがある子ども達も多く、店屋をしながら、その経験を思い出し、自分達の店屋に生かそうとする姿が見られた。年長らしい、より本物に近い形でやってみたいという子ども達の気持ちの表れではないだろうか。ここで、ルミの言ったガラスのケースがよくわからなかった子ども達も、ダイチが身振り手振りで説明してくれたことから、思い出すことができ、イメージもより鮮やかになったようだった。

エピソード⑥ アルバイトしてもらったらいっぱいできる 12月3日

ほとんど女兒ばかりが作っていたケーキ屋だったが、男児が4名入ってケーキを作っていたので、「ケーキ屋さんのお手伝い？」と教師が聞いてみると、「アルバイト」と言う返事だった。ミナが「5個作ったら、千円あげるが」と言って、横で男児が作っているのを見ながら、自分が紙で作った千円のお札を握っていた。ケーキもよく見ると、今まで女兒達がひとつひとつにイチゴや抹茶味、チョコ味とこだわって作っていたケーキではなく、銀のカップにお花紙をクシャッと丸めて置いただけのものや、毛糸を束ねて置いただけのものだった。話を聞いてみると「手伝ってもらったら、70個できるもん」とか、「もういっぱい作ったきいいが」などという言葉がケーキ屋の女兒達から返ってきた。

<エピソード⑥より>

男児の中には、商品作りに満足すると、他の遊びに向かってしまう姿もしばしば見られていた。これでは、お店屋さんごっこ当日に商品が少なくてすぐに売り切れてしまい、お客さんが残念に思うのではないかと、教師は心配していた。そこで、商品作りをやめて他の遊びをしようとしている男児達に、教師は「年少さん、年中さんの子ども達を合わせて、80人位いるよ」と、何度か話していた。すると、これまで、本物らしくひとつひとつ丁寧にケーキ作りをしていた女兒達が、男児達に向けた話を耳にして、



たくさん作らなくてはならないと思い、アルバイトを頼んで大量生産する方法を考えついたようであった。

女兒達がアルバイトを頼んだことは、先のことを見通し、自分達なりによい方法を考えるという、年長らしい姿であると思われる。しかし、小さい組の子ども達はどんなケーキが好きだろう、どんなトッピングをしたらおいしそうに見えるだろうなどと、“小さい組の子ども達が喜ぶ姿を想像しながら作ってほしい”というねらいももっていたので、女兒達に「どんなケーキをもらったら、年少さんや年中さんはうれしいかなあ」と聞いてみた。すると、女兒達は始めに丁寧に作っていたケーキを指差していた。

その後、ケーキ屋の女兒達は、補助教諭と一緒に、紙で作ったローソクやイチゴなどのフルーツ、ドングリや枯れ木の枝を、大量生産で作ったケーキの上に、楽しそうにトッピングしていた。クシャツとなっていたケーキもとてもおいしそうになった。

お店屋さんの紹介と当日の様子 12月6日 エピソード⑦

お化け屋敷

コースは、ステージも使い段差を利用した長い道となった。これまで小さな積み木や大きな積み木でいろいろなものを作って遊んでいたことから、自分達がイメージしたコースを自分達の考えで作り上げた。驚かせ方は、工夫をしており、中にお化けの絵を貼りつけたり、外からトントンと積み木をたたいて音を鳴らしたり、コースの下にガムテープの粘着部分を表にして貼りつけたり、お化けが隠れる場所を積み木で作って、そこから驚かせたりという多彩なものだった。特に、コースの床に貼ったガムテープは、コースに沿って点線のように長くつなげたものもあれば、渦巻きのように貼って、四つんばいになって通る時に、ベトベトしたいやな気持ちが味わいやすくなるようになっていた。



入り口で、荷物を預かり、楽しんだ後は、ゴールにぶら下げているいろいろな形に折った折り紙をプレゼントしていた。また行きたい人がいたら、入口まで案内し、やさしく「もう1回どうぞ」とスタートの合図を出していた。

アクセサリー屋とケーキ屋

前日に、突然、アクセサリー屋をしていた子ども達が、ケーキ屋とハンバーガー屋に移動してしまった。仲よしの友達と一緒にしたくなったり、人数が少なくなって違う店屋に行きたくなったりして、どうしても店屋を替わりたいということだった。そこで、みんなに相談したところ、ケーキ屋がアクセサリー屋も一緒にしてくれることとなった。当日はどちらの店屋も大繁盛で、特にケーキ屋は長い行列ができるほどであった。

最終的にたった1人の男児で頑張ったアツシも、コックの帽子をかぶって「どのケーキがいいですか」と聞きながら、とてもはりきっていた。



ハンバーガー屋

ハンバーガー屋の店員は、白い帽子をかぶっているということで、ヨシトが、教師に手伝ってもらいながら、大きな白い紙を折ってみんなの帽子を作った。また、レジを作ったり、キッズセット（仮称）のおまけを作ったりもしていた。ハンバーガー屋は上にメニューが書いてあるということで、メニューも作って上にぶら下げた。当日も、レジをする人、チキンナゲットを作る人、キッズセットのおもちゃを作る人というように分担し、時々交代してお店を進めていた。



おもちゃ屋



始めは、トイレットペーパーやラップの芯などで武器を作る武器屋だったが、ダンボールで作ったDSやPSPなども作り始め、その後もラジコンカーや、広告で作った棒の先のゴムにレシートの芯を引っ掛けて飛ばすもの（シャットバーと子どもが命名）も作り始め、お店の名前もおもちゃ屋に変わった。

特に、ラジコンカーは、作り方を載せた絵本の中から見つけて作り始めたものだったが、店屋の子ども達がとても気に入り、

ヒロは1日中ずっとラジコンを作ったり、家でも作ってきたりするほどであった。タイヤは、以前にペットボトルのキャップに目打ちで穴をあけて竹串をさして作ることを経験していたので、その方法をとっていたが、ペットボトルのキャップに穴をあけることが容易ではないため、たくさんのタイヤをもっと早く安全に作るため、竹串に片段ボールを巻きつけてタイヤにする方法を教師が提案した。すると子ども達だけで作り進めることが容易となっていた。

シャットバーは、始め道具をおもちゃとして売ろうと考え、レシートの芯と飛ばす棒をセットにして並べていた。しかしなかなか売れなかった。そこでお試しするコーナーを作り、遊んでもらうことを子ども



達が思いついた。また、的となる空き箱は、打っても下に落ちないように机のふちに空き箱を置き、そこをセロハンテープで机とつないで、打ち落としても下に落ちずに簡単に元に戻せるように工夫していた。このようなコーナーを設けたことで、そこに列ができ、シャットバーはどんどんと売れていった。

<エピソード⑦より>

どの店屋の子ども達も、小さい組の子ども達がお客さんとしてやってくると、年長らしくやさしく迎え、「どれにしますか?」「これがいい?」「ちょっと待ってね」などと言葉をかけながら、お店屋さんとしてやり取りを楽しんでいた。やり取りをしながら、足りなくなったものを作り足したり、お土産を渡したり、それぞれに役割を決めて活動しているグループがほとんどであり、その姿からは、ふだんの経験が生かされている様子がうかがえた。加えて、なかなか売れない商品があると、お試しコーナーに変更したり、どこへ行こうか迷っているお客さんに声をかけて自分のお店に来てもらったりする姿は、行事としてのお店屋さんごっこで育まれる“共通の目的をもって、力を合わせて活動に取り組み充実感を味わう”姿と捉えることができるのではないだろうか。

お店屋さんごっこを終えて

エピソード⑧ シャットバーやろう！ 12月11日・12日

お店屋さんごっこが終わって、隣のクラスのとモキが「先生、シャットバーの玉みたいなの（レシートの芯）ある？」と聞いてきた。「あるよ」と答えると、「ちょうだい」と言ったが、もう片付けの時間だったため、次の日に用意しておくことを約束して、部屋に帰ってもらった。そのこともあって、次の日はシャットバーを楽しめる環境を用意した。はと組の子ども達はその環境の中、朝からシャットバーを作って、的に向けて発射しながら遊んでいた。そこにとモキが来て、一緒にシャットバーを作り始めた。ふだんとモキと交流のないタケルやヨウタも、一緒に作ったり、箱の並べ方を変えたり、得点を考えたりしながら遊ぶ姿があった。



<エピソード⑧より>

とモキが声をかけてきてくれたことで、教師もまだ遊びたい子ども達のためにと環境を用意することに気づき、またそれが、ふだんあまり遊ぶことのなかった子ども達と一緒に遊ぶきっかけとなった。この遊びはしばらく続き、とモキの他にもさくら組からやってきて、はと組の子ども達と一緒にシャットバーで遊ぶ姿があった。遊戯室でクラスの壁をなくして取り組んだことで、隣のクラスの店の様子がわかり、お互いに興味をもち、遊んでみたいと思ったのではないだろうか。

全体を通して

店を構えるために使う台（ストアーハウスや段差のある台）の数は限られているため、今回のお店屋さんごっこを通して、みんなでどの店がどの台を使ったらよいかを話し合ったり決めてたり、ある店が品物の数が足りないといえば、別の店屋の子ども達を手伝ったりしてきた。このように、お店屋さんごっこというひとつの行事に向かって、クラスみんなで協力したり、考えを出し合ったりしたことで、まわりの友達との新たな関係が生まれたり、根気強く自分達力で作り上げる喜びを感じたと思われる。

いつも同じ友達と遊んでいたフウカは、別の友達とも遊びたいと思っていたが、なかなか自分から声がかかれずにいた。しかし同じ店屋で、いつも遊ばない女児達とケーキを一緒に作る活動を通して、少しずつその女児達と一緒にいる時間が増え、会話も広がり、それがふだんの遊びへとつながっていった。そしてそれが自信となり、いろいろな友達に自分から声をかけて遊ぶようになった。他にもこの活動がきっかけで、交友関係が変わったり広がったりした子どもがいた。

また、作りたいものがあるとすぐに教師を呼び、「一緒に作ってよ～」と教師の手を引いていたヒロは、ここでラジコンカーを1人で作り上げたことが自信となったのか、友達が作り飽きても、何個も何個も1人でラジコンカーを作っていた。そしてその後は、他のものを製作する際、教師の力を借りず、自分で考えて作るようになった。

大きな行事の中で、小グループに分かれて、自分達で考えながら進めていったこの活動は、ふだんかかわりの少ない友達に近づき、親しさを増していったと同時に、1つのものを作り上げた経験が自信となり、次の遊びにも生かされていった貴重な体験だったと思う。

しかし、このお店屋さんごっこを見通して11月中旬に年長児全員で行った金曜日での経験が、もっとお店屋さんごっこに生かせなかつたろうかと課題が残る。金曜日では、子ども達が、お店の構え方や品物の並べ方などを注意深く見ることができるような視点を示すことがあってもよかった。またお店屋さんごっこでは、金曜日のお店や、やり取りの様子を振り返ることも、子ども達のアイデアの幅を広げることにつながっていくだろう。年長担任同士が、金曜市の経験を次の活動に生かせるよう

によく話し合い、確認し合っておくことも大切だったと思う。次回の課題としたい。

〈文責 中屋〉

年長 さくら組

お店屋さん当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・）や子どもの様子（☆）
11/16	金	・お店屋さんごっこの取り組みへ生かす経験として年長組全員で金曜市に行き、200円でお家の人へのお買い物をする。
11/22	木	・やりたいお店屋さんを決める。 エピソード① ☆昨年のお店を思い出して決める子ども達が多かった。
11/26	月	・商品を作り始める。 エピソード②
11/27	火	
11/28	水	
11/29	木	
11/30	金	・作った品物や店を構えるのに必要なテーブルなどを遊戯室に引っ越す。 エピソード③ ☆とてもはりきって、一生懸命運んでいた。
12/3	月	・遊戯室で開店準備をする。 エピソード④
12/4	火	
12/5	水	
12/6	木	・お店屋さんごっこ当日（年中組が買いに来る日） エピソード⑤ ☆はりきって年中組の子ども達に接客していた。
12/7	金	・お店屋さんごっこ当日（年少組が買いに来る日。その後、年長組がお店屋さんごっこを楽しむ。） エピソード⑥

Episode

お店屋さんごっこ当日までのエピソード

エピソード① やりたいお店屋さんを決める 11月22日

お店屋さんごっこがあるほぼ2週間前、朝の会（※1）で12月の6日と7日にお店屋さんごっこがあること、昨年度は招待してもらったけれど、今度はみんなが店屋を開いて招待する番であることを知らせた。そして、子ども達にどんなお店屋さんをしたいか尋ねてみた。すると、「〇〇屋さん、一緒にやろう」などと声をかけ合ったりして、「ハンバーガー屋」「武器屋」「絵本屋」「クレーンゲーム屋」と教師にやりたい店屋の名前を教えてくれた。教師はホワイトボードに店屋の名前を書き、誰

が店屋の仲間なのか子ども達に尋ねて、店名の横に一人一人の顔写真（磁石を貼り付けてあるもの）を貼っていった。1枚1枚顔写真を貼っていくと、みんな食い入るように見つめていた。

昨年度の年長組がハンバーガー屋と武器屋をしていたので、その憧れから店屋に選んだのだろうかと思ひ、ハンバーガー屋を選んだ女の子に「ひょっとして、去年の年長さんがハンバーガー屋をしていたからやりたくなった？」と尋ねると、当然といった表情で「うん」という返事が帰ってきた。

<エピソード①より>

昨年度のお店屋さんごっこが印象強いことがうかがえたものの、やりたいお店屋さんを決める際に昨年度のお店屋さんごっこを想起させてすぐにやりたい店を尋ねたことには反省が残る。例えば「小さい組だったらどんな店を喜ぶだろう。男の子って、何が好きだろうね？ 女の子は？」と具体的に想起させてから、やりたい店を選ばせるとどうだったろうか。結果、同じになったとしても、「小さい組を喜ばせよう」というお店屋さんの目的が感じ取れたのではないだろうか。

※1 登園後にクラスのみんなで集まり、朝の挨拶をしたり、教師がその日の予定を知らせたり、歌を歌ったりし、1日の始まりをクラスのみんなで過ごす会。

エピソード② 商品を作り始める 11月26日～29日

26日（月）、朝の会で、お店屋さんの準備を始めることを知らせ、また、子ども達が見通しをもってお店屋さんごっこを始めることができるようにと考え、ホワイトボードに予め書いておいたお店屋さんごっこ当日までの簡単な日程表（お店屋さんごっこの日までそのままにしておいた）を見せた。そして、年少組、年中組の合計人数を伝え、毎日、少しずつ作っていきこうと知らせると、びっくりしたような表情、ぴんと来ていない表情など、様々であったが、子ども達は教師が用意しておいた材料で、早速お店屋さんの商品を作り始めた。



エピソード②-1 考えを出し合いながら作ることを楽しむ（ハンバーガー屋）

ハンバーガー屋の女の子達は、教師が用意しておいた材料を生かして、おしゃべりしながらハンバーガーにポテトやジュース、キッズセットなどを作っていた。ジュースの入れ物を要求されたので蓋付プラスチック容器と細いストローを渡すと、自分達で考えて、蓋に目打ちで穴を開けて、ストローを突き刺して入れ、中にはお花紙をふわふわに丸めて入れ、容器の側面に“おれんじジュース”などと、商品名をマジックで書いていた。キッズセットに、教師が「小さい組が喜ぶかな」と女の子達に言いながら、いつもはあまり使わない千代紙を出すと、目を輝かせてリボンやハートを折っていた。その後、足りなくなった千代紙を教師にもらったマサヨは、「小さい組が喜ぶでね」とにっこりしていた。

だんだんハンバーガーを作る子どもがいなくなり、数が足りないかなと考え、子ども達の目の前で数えてみて「足りないかなあ」と言ってみたが、子ども達からあまり反応はなく、みんな好きな物を作っていた。

<エピソード②-1より>

26日に子ども達を作りたいと言った物が実現できるように、材料を用意しておいた。キッズセットは実際にはいろいろなおもちゃなのだが、子どもにはあまりイメージはなかったようなので、教師

から千代紙を出してみた。小さい組の気持ちを考えることも大事にしている、「(きれいな千代紙をキッズセットとしてもらうことで) 小さい組が喜ぶかな」と言ってみた。すると、マサヨから「小さい組が喜ぶでね」という言葉が出たので、教師が意識的に小さい組の気持ちになってみる状況をつくることも大事だなと思った。

ハンバーガーよりも、ポテトなど他の物を作ることが楽しくなった子ども達であった。お店屋さんごっこ当日も作ることができるので、小さい組全員の数のハンバーガーを作る必要はないと思っていたが、小さい組の半数以上の数があれば当日あわてないかなと思い、「足りないかなあ」と声をかけてみた。しかし、子ども達からは返事はなかった。自分の作りたいものを作ることが楽しく、『〇個』必要だから作らなければ」といった見通しはあまりないんだなと感じた。

エピソード②-2 黙々と作り続ける (武器屋)

武器屋①の男の子達は、剣やブーメランを作り続けていた。途中、「そうだ、剣だったら、盾もいるんじゃない?」とカズヤが教師に言いに来たので、翌日、贈答用の空き箱など盾を作ることができそうな物や、作り方の見本となるような物を用意しておいた。すると、何人かの子供達が真似して作り始めた。子供達のイメージは“武器”であるが、あまり“戦い”のイメージが強調されるのもどうかと考えて、紙飛行機を商品にすることを子供達に提案してみた。しかし、誰も紙飛行機を作ろうとしなかった。武器屋の子供達は剣作りが一番好きなようで、「ああしよう、こうしよう」といった言葉はあまり聞かれず、黙々と剣作りをする姿がよく見られた。



<エピソード②-2より>

教師が提案した紙飛行機には、子供達は全く興味を示さなかった。紙飛行機を提案したのは、上記の理由の他に、お店屋さんごっこの前に、男の子達の間で紙飛行機が流行った時期があったことと、年中組が興味をもっている姿を見たからである。しかし、「武器屋なのになぜ紙飛行機?」と感じたのか、子供達からは反応がなかった。単に作りたくなかったのか、武器屋に紙飛行機はないと感じたのか、定かではないけれども、子供達が最初にもつイメージが大切だなと感じた。

武器屋①のグループは、1学期からよく遊ぶ仲間(メンバーはその日によって違うこともあるが)で、ヒロシをリーダーとしてよく遊んでいた。お店屋さんごっこの1か月程前に、ふだんの遊びのなかで武器屋のメンバーの半分以上が剣屋をしていたが、その時は、お互いに思いや考えを出し合いながら、商品を作ったり、値札をつけたり、お客さんを呼んだり、和気あいあいとしていた。しかし、この武器屋では思いや考えを出し合うというより、黙々と自分の作りたい物を作っているという感じであった。カズヤは考えたことを仲間ではなく、教師によく言いに来ていた。教師が提案したお店屋さんごっこは、ほぼ1週間以上に及ぶ遊びであることもあり、やりたくなかった時に開くお店屋さんとは、最初の意欲が違うこともあるだろう。しかし、友達同士で思いや考えを伝え合う様子が見られないのは、今は武器を作りためる時だと思っているのか、剣作りに夢中になっているのか、教師が提案したからやらなければならないと思っているのか、定かではないが、あまり楽しそうに見えないのが教師として不安であった。

エピソード②-3 新たな仲間と考えを出し合いながら (お菓子屋)

お店屋さんを決める日に休んでいたトモキは、27日に射的屋を始めようとしていた。しかし、はっきりしたイメージはないようだったので、教師がどんなふうにしたいか尋ねたり、この頃トモキが気に入っていたアメを作って、射的の景品にしてはどうかと提案したりした。すると、「あ、そうだ。

「トモくんお菓子屋さんする」と言い出し、ふだんからアイデアが溢れるトモキは折り紙を工夫して板チョコレートを作り始めた。アイデアが広がればと思い、ペットボトルの蓋を茶色の色紙で包み、上にシールを貼って作るチョコレートを提案すると、喜んで板チョコと一緒に作り始めた。そこに、トモキとは遊んだことのない、絵本屋のタエとアヤが仲間入りして、「これ〇〇チョコにせん?」「いいねえ」などと言い合いながら、楽しそうに作り始めた。



<エピソード②-3より>

お店屋さんごっこは、子ども達が主役なので、途中でやりたい店が変わっても、その思いは大事にしたいと思う。トモキのお菓子屋さん、これまで遊んだことのないタエとアヤが加わったことはうれしい驚きだった。特に「お店屋さんいやだ。おもしろくない」と言っていたタエなので余計であった。よほど、お菓子屋さんが魅力的だったのだろう。互いにどのようなチョコを作るか、楽しそうに言い合ったりしている様子から、このお菓子屋さんのなかでは、ねらいである「考えを出し合う」という経験は十分できていたように思う。

エピソード③ 遊戯室に引越し 11月30日

前日の29日、店を構えるにあたって、どのグループのお店屋さんがどのような物(保育室にある台や大型積み木など)を使うかについて、まず、グループごとに相談し、その後、子ども達みんなで相談して決めるようにした。これは、みんなでひとつのことを考えてみる機会にしたかったからである。



30日、朝の会で、前日決めた通りに遊戯室に店を構えること、そのために引越しをすることを知らせた。朝の会終了後、早速、子ども達はグループごとに運び始めた。教師があれこれ指示しなくても、子ども達だけでどんどん運び始めた。重くて子どもだけで運ぶのには危険な物は、教師や補助教諭と一緒に運ぶようにしたが、それ以外は全部子ども達が運んだ。子ども達が物を遊戯室に運んでいる時、「(お店さんの場所は)ここにする?」などと、店を構える場所を子ども達に相談しながら決めていくようにした。



ハンバーガー屋のグループは、よく女の子達がお店屋さんごっこをする時に使っているストアハウスと、自分達で必要と思った数のテーブルをどんどん運び、並べていき、これまで作りためた物や材料を並べていった。武器屋のグループは前日の話し合いで決まった大型積み木を、ひとつひとつが大きいので運ぶのには大変だろうと思われたが、不満も言わずに一生懸命運んでいた。

<エピソード③より>

店構えに使う物を決めたことは、クラスみんなでひとつの目的に向かっているという雰囲気が味わえたように思う。また、子ども達と店構えに使うものを決めたことで翌日の目的がはっきりし、グループ毎に力を合わせて物を運ぶことにつながったようにも思われる。ただ、使いたい物が重なった時は、じゃんけんで決めたので、ほと組のように「どのお店でこの台を使ったら一番いいのかなあ」などと声をかければ、クラス全体でひとつの目的に向かって考えようとする事につながったのではないかと反省している。

エピソード④ 遊戯室で開店準備 12月3～5日

店構えもでき、クレーンゲーム屋の子ども達以外は、足りない商品を作ったり、店を飾ったりするなどして、準備を始めた。教師の提案で、それぞれのお店ごとに看板や看板の台を作り、教師に手伝ってもらいながら、小さい組が見やすい場所に貼り付けた。武器屋ではリョウタが積み木を高く重ねて、画用紙に“ぶきや”と書いた看板を貼り付けていた。

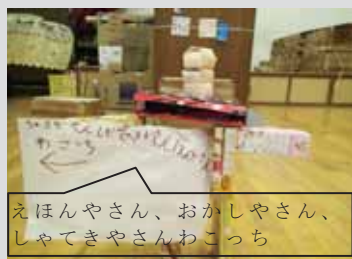


エピソード④-1 考えを出し合いながらお店屋さんに必要なものを作る

クレーンゲーム屋と武器屋

クレーンゲーム屋は、まだ吊るす方法や景品が決まっていなかった。12月4日に補助教諭にじっくり思いを聞いてもらったり、武器屋に満足したヒロシ達4人が、クレーンゲーム屋に仲間入りしたりしたことで、アイデアが広がり、無事、クレーンゲーム屋が完成した。仲間が増えたことで、「(折り紙で景品の) サンタさん作る」「荷物を預かる場所作ろう」など、和気あいあいとして準備が進んでいった。武器屋さんの子供達は仲間が抜けたことをどう思っていたかわからないが前週と同じく、剣やブーメランを黙々と作り続けていた。

絵本屋・お菓子屋・射的屋



絵本屋で1人になったチカラがお菓子屋に仲間入りしたり、カンタが射的屋を1人で始めたものの寂しく感じたりするなど、いろいろな経緯があり、子ども達と相談した結果、3つの店が合体することになった。射的屋だったカンタは、絵本屋で本を作り、ツトムはお菓子屋と絵本屋を行き来するなど、自然に交流していた。この店のメンバーはユニークなアイデアをどんどん生み出し、トモキは自分の店の場を知らせる案内のロボットを作って、遊戯室の床に置いたり、相談し合って手作りの牛乳パック製のジュース機を作ったりしていた。

絵本は、絵本にぴったりサイズの空き箱に絵本を縦に並べて書棚のように入れていた。手作り絵本の背表紙にタイトルや絵があるわけではないので、小さい組が選びやすいように表紙を表にして、立てかけてはどうかと、牛乳パックで作った表紙が見えるブックスタンドを見せた。すると、ツトムが強烈に「だめ」と言い、却下された。(しかし、教師が提案した物は後で使っていた)



エピソード④-2 自分達で工夫してお店さんを飾る (ハンバーガー屋)

ずいぶん商品もできていたせいか、することが見つからない様子の子供達もいたので、少しイメージが広がればと、造花の小さい花(保護者に頂いていた)を飾りにしないかと提案してみた。すると、早速、ジュース用の紙コップに飾り、紙コップが軽くて倒れそうになると、相談し合って小石を拾っ

て重りにしていた。そこで、店を飾ることに目覚めたのかシノが店をクリスマスにしたいと言い出し、まわりの子ども達も一緒に、以前にみんなで作った折り紙の雪の結晶や紙に描いた雪だるまを店の背後にあるカーテンに飾り付けていた。来客用のテーブルにテーブルクロスを敷きたいと言い出したり、前週、「ポスターやチラシがあると、お店屋さんのお知らせができるね」と教師が子ども達に知らせてあったためか、ユウコとミホが手書きのチラシを何十枚も作って、教師と一緒に小さい組に配りに行ったりした。(お店屋さんごっこの年少組のエピソード参照93ページ) ヒロミはメニュー表を一生懸命書いて、教師に看板の近くに飾ってもらおうと、満足そうだった。ナナ達は、ポテトの袋に本物らしい店のマークを「疲れた」と言うまで書き続けていた。当日使ったらいいと考えていた紙袋を子ども達に見せると、早速、商品を詰めだし、キッズセット(バーガー、ポテト、景品、ジュース)と名づけていくつも並べていた。



作る場所が雑然としているので、補助教諭に、子ども達と一緒に商品を作りやすいように並べることをお願いした。結果、子ども達はそれぞれの好きなことに夢中で、なかなか気が向かず、やっとヒロミと一緒に考えて整理したようである。

<エピソード④-1・④-2より>

ハンバーガー屋の女の子達のように、準備期間が長いと、お店屋さんへの意欲を持ち続けるようにすることは難しいと実感した。一方で、長い準備期間だからこそ、武器屋が半数クレーンゲーム屋に行ったりする姿が見られたりするなど、新たな仲間関係が広がるきっかけとなったように思う。クレーンゲーム屋のカナトは、保護者の話によると、ふだんあまり遊ばないヒロシ達が自分のお店屋さんの仲間になってくれたことがとてもうれしかったそうである。ただ、ヒロシ達が仲間入りする前に、カナト達がクレーンゲームで景品を取る方法が決まっていなかったことを、他の子ども達にどうしたらよいか相談していれば、クラスみんなで一緒に考える経験につながったかもしれないと思った。



ハンバーガー屋のクリスマスの飾りや、絵本屋・菓子屋・射的屋のジュースの機械、紙コップに花を生けたり、ポテトの袋に本物らしいロゴを描いたりするなど、〇〇屋さんをしようという目的のもとに、自分が思いついたこと、やりたいことをすることが、まずは楽しいのだと感じた。その楽しさがまわりに広がり、「こうしよう」「ああしよう」といったアイデアが生まれ、一緒に同じものを作っている、描いている一体感を味わっているようにも思った。絵本の並べ方のように、教師が必要だと感じて提案したことが却下されたときは、それほどお店屋さんへの思いが強く、遊びが自分達のものになっていることを感じた。一方、ハンバーガー屋の女の子達が店を整理することには気が向かなかったように、自分達はそれほど必要と感じていないことを教師が言っても響かないんだな、それならば教師が遊びの仲間として、率先して場を整理すればよかったかなと感じた。

ハンバーガー屋のクリスマスの飾りや、絵本屋・菓子屋・射的屋のジュースの機械、紙コップに花を生けたり、ポテトの袋に本物らしいロゴを描いたりするなど、〇〇屋さんをしようという目的のもとに、自分が思いついたこと、やりたいことをすることが、まずは楽しいのだと感じた。その楽しさがまわりに広がり、「こうしよう」「ああしよう」といったアイデアが生まれ、一緒に同じものを作っている、描いている一体感を味わっているようにも思った。絵本の並べ方のように、教師が必要だと感じて提案したことが却下されたときは、それほどお店屋さんへの思いが強く、遊びが自分達のものになっていることを感じた。一方、ハンバーガー屋の女の子達が店を整理することには気が向かなかったように、自分達はそれほど必要と感じていないことを教師が言っても響かないんだな、それならば教師が遊びの仲間として、率先して場を整理すればよかったかなと感じた。

お店屋さんごっこ当日

エピソード⑤ 年中組を招待して 12月6日

遊戯室で、同じ年長のはと組と合同で朝の会を開き、一緒に歌を歌ったり、長い針が〇〇になったら年中組が来るから、お迎えする準備をしようと、教師からの説明を聞いたりした。また、お互いに店を見ていないので、見せ合いっこもした。10分程度の朝の会が終了すると、子ども達は色めき立

ち、何度も入口の方を確認したり、「はやく」などの言葉が飛び交ったりしていた。

いよいよ年中組が来てくれた。ハンバーガー屋の子ども達は、前日に教師の勧めで決めた売る人、作る人に分かれて、「ハンバーガー一つ」「わかった」と、これまでで一番活気にあふれてお店屋さんを開いていた。ハンバーガーを作る子ども達も、パンの土台になる広告紙を、本当にパンをこねるように楽しそうに丸めていた。(ただ、キッズセットとして袋に詰めた商品は、キッズセットという注文がない限り売らなかったようで、たくさん余っていた)

武器屋の子ども達は、4人のグループでチームワークよく、それぞれにお客さんに対応していた。絵本屋・菓子屋・射的屋の子ども達は、じゃんけんで勝ったお客さんにチョコレート10個、負けたお客さんには、チョコレートはなしというルールをつくっていた。じゃんけんに負けた年中児は、戸惑った表情をしていた。教師は「それはかわい



そうだから、やめてあげて」とツトム達にしっかり伝えると、負けた子どもにもチョコ3個あげることにした。絵本も順調に売れたようで、カンタが「ぜ〜んぶ売れた」とうれしそうに言っていた。

クレーンゲーム屋は、年中さんの希望を聞いたり、時にはお店さんが「これにする?」と言ったりし、クレーンをお店さんが動かし、景品を釣り上げるという仕組みである。お金をもらったり、荷物を預かったりする台に座る人、クレーンで吊り上げる人、景品やお釣りを作る人に分かれていたが、だんだんお金が貯まってくると、ヒロシの発案で銀行が開かれることになった。急遽、教師と一緒に銀行の場所と看板を作ると、小さい組が銀行にも来てくれた。それとなく銀行の方に目をやっていると、ヒロシが教師の顔を見て「順調!」と親指を上げた。

商品が多いからか、魅力的なのか、1時間経ってもお客さんは来てくれ、何人かは先に休憩(と言って好きな遊びを始める)に入っていたが、半分以上の子ども達は、店屋さんに携わっていた。



エピソード⑥ 年少組を招待して 12月7日

前日同様、朝の会のあと、開店準備をした。教師が人数の多い(商品も十分ある)ハンバーガー屋に、前日全て売り切れてしまった絵本屋さんのお手伝いをお願いしたが、誰もする気持ちかなかった。カンタとチカラは、自分の描きたい物をゆっくり描いていたので、教師も手伝いながら、「ねえ、年少組さんだから、アンパンマンの表紙のノートにせん?」と言ってみた。しかし、その気はなく、1年生の算数の問題集を作っているカンタ。「年少組さん、まだ、足し算難しいと思うよ」と言うと、「うん、ももさんでもできるかもしれないよ」と明るく答え、足りないことは意識していない様子。なかなかお客さんが来ないためか、早々にお店さんをやめてしまう子ども達もいた。

<エピソード⑤・⑥より>

初日の年中組のお店さんごっこでは、子ども達がとてもはりきって、生き生きしていたように思う。50数名のお客さんが、喜んで来てくれたので、子ども達もうれしかったようだ。カンタの「ぜ〜んぶ売れた」という言葉から、年長組としての自信や誇りが感じられた。

2日目の年少組のお店屋さんでは、年中組の時と違って、お客さんの人数が半分であること、先生と一緒にないと安心して買い物ができないことで、なかなかお客さんが来ないこともあって、クレンゲーム屋やハンバーガー屋の子ども達の中には、遊びの目的が見つからず、早々にやめてしまったり、追いかけて合ったりする子ども達もいた。前日の年中組のお店屋さんで満足していることもあるのだろう。

年中組の時に売り切れ、絵本の数が足りなくなったことについて、教師は、朝の準備の時間で他のお店屋さんを手伝ってもらえばいいのではと考えたが、まわり子ども達には響かなかった。後は絵を描くだけのところまでの冊子にしておいて、他の店屋の子ども達にも絵を描くように勧めればよかったと、後になって考えた。年少組さんには申し訳なかったと思う。絵本のように時間がかかる物は、年少組の分を取り置きしておくべきであったとも思う。クレンゲーム屋の商品も少し足りなかった。あるいは、こうした年少組さんにとって申し訳ない状況であることを、年少組の立場に立ってみんなに考えさせ、足りない分をみんなで作るようにすれば、みんなで1つの目的に向かって力を合わせる気持ちが育ったかもしれない。



全体を通して

自分のしたいことをすることが楽しい

P.T.Aの仕事で、お店屋さんごっこを撮影に来ていた保護者から、「楽しそうですね」という感想を頂いた。どうして楽しそうに見えるのか考えてみると、自分が楽しいと思ったことをしているから、自分のアイデアが形になっていくから、自分のアイデアが友達に受けとめられたりしてお店屋さんを進めていくことが楽しいから、自分が作った商品を小さい組が買ってくれる満足感があるからではないだろうか。教師は、小さい組への思いやりや自信や誇りの気持ちを培ってほしいとか、友達と共通の目的をもって最後までやり遂げてほしいとか、クラスみんなで共通の目的をもってほしいなどというねらいをあげているけれど、それらは、自分が楽しくて初めて経験できることではないかと感じた。



ねらいが高度？

- 小さい組への思いやりの気持ちや年長組としての自信や誇りをもつ。
- 友達と共通の目的をもち、考えを出し合ったり、力を合わせたりし、最後までやりとげようとする。
- クラスみんなで共通の目的をもち、力を合わせて活動に取り組む充実感を味わう。

以上、3つのねらいを心において、お店屋さんごっこに取り組んできた。1つ目のねらいは、おそらく小さい組が商品をたくさん買ってくれたこと、喜んでくれたことで、自信や誇りをもつことができたように思う。一方、2つ目と3つ目のねらいは少し高度なのではないかと感じた。子どもは、最後までやり遂げようと思ってお店屋さんごっこに取り組んでいたのではないし、クラスみんなで共通の目的をもっていったかという、そうではないように思う。実際、自分が満足するとお店屋さんごっこをやめている姿も見られた。

しかし、自分の楽しいことが優先されながらも、お店屋さんを開いて小さい組を招待するという共通の目的をお店屋さんごっこ当日までもち続け、お店屋さん毎にアイデアを出し合ったり、重いものを運んだり、作る人、売る人に分かれたりするなどして、力を合わせ、お店屋さんを開くことができた。そのように捉え直してみると、ねらいが高度なような気がしたけれど、結果的には、最後までやり遂げた気持ちは味わえたのではないだろうか。

3つ目のねらいについては、エピソード⑥にあるように、クラス全体に困っていることを返していくようにすればクラスみんなで力を合わせている気持ちが味わえたかもしれない。しかし、“クラ

スのみんなで…力を合わせて活動に取り組む充実感を味わう” というのはやはり高度であったと思う。
「やめていい？」

お店屋さんの準備中、数名の女の子達が「先生、やめていい？」と聞きに来ることがあり、その度に「同じお店屋さんの友達に聞いてみて」と返していった。すると、「やめていい？」と遠慮がちに聞き、他の子ども達は楽しそうに作りながら「いいよ」と返事をしていた。ふだんの遊びの時にやめる、やめないで、もめることの多い女の子であるし、遊びの主体は子どもなのでそのように返してみたが、教師としては、子ども達の遊びなのに「やめていい？」と尋ねてくることがしっくりこなかった。他にも、ふだんはアイデアがあり、リーダーシップもとれるが、今ひとつ意欲的でない男の子もいた。仲間が自分の思い通りになってくれずに、戸惑っていた時期であったからだろうと推察される。

クラス全体としての活動を子ども達に投げかけると、様々な理由から、意欲的に取り組むことができない子ども達もいる。その理由を探りながら、“～ねばならぬ活動”というかわり方ではなく、子ども達が自らお店屋さんごっこに取り組みたくなるような環境づくりや、一人一人の気持ちに応じた援助をすることが今後の課題だろう。

お店屋さんごっこを契機に

お店屋さんごっこを通して、クレーンゲーム屋の子ども達のように新たな仲間関係が広がったり、事例には載せていないがふだん自分を発揮する姿があまり見られない子ども達が、商品作りに夢中になったりするなど、生き生きと遊ぶ姿が見られたことは、計画された行事としてのお店屋さんごっこのよさであると思われる。

〈文責 鎌倉〉

Episode

年中 うさぎ組

エピソード① お店屋さんごっこがあることを知る 11月27日・30日

ソウシが怒りながら部屋へと戻ってきたので話を聞くと、年長のさくら組に行った時に武器屋があったので、お店屋さんごっこだと思い買おうとしたら「だめだ」と言われ買えなかったと言う。今まではお店屋さんへ呼んでもらったなら売ってもらえたのに納得いかない様子だったので、ソウシと一緒にさくら組の武器屋をやっている男児の所へ話を聞きに行った。男児の話では今度お店屋さんごっこがあるから、そのために作っているということで、その日なら売れるということだった。ソウシは今ほしかったため、すぐには納得しなかったが、ソウシの気に入っている武器を作って置いておけることで、ある程度納得して、部屋に戻った。

その話をソウシから聞いたサユやチハルが、お店屋さんごっこに行くためにかばん（以前に好きな遊びの時に作ったことがある）とお金を作りたいと言い出したので、お店屋さんごっこにとあらかじめ準備しておいたリボンや色画用紙、スタンプ台やトイレットペーパーの芯（お金づくりの材料）を出した。サユやチハルが作っているのを見て他の娘がなぜ作っているのかを聞いてきたので、教師は先ほどソウシと聞いてきた話をした。それを聞いてまた他の娘達も作り始めた。男児も何人か何してるの？と質問はしてきたが、それ以上の興味はないようで娘の作っている様子を少し眺めただけであった。



11月30日金曜日に絵本の部屋に絵本をクラス全員で借りに行った時、お店屋さんごっこのハンバーガー屋さんの宣伝をしていたさくら組娘のグループに会った。さくら組娘にお店屋さんご

この日を知らせてもらい、実際にどのようなものを買っているのかチラシを配ってもらったり、具体的にメニューを説明してもらったことで、子ども達は興味がわいたようだった。クラスに戻ってからお店屋さんについての質問が相次いだので、サユ達が作ったかばんやお金を紹介すると他の子ども達も「作りたい」と言い始め、お弁当の後にたくさん子ども達が作り始めた。



<エピソード①より>

教師は以前からお店屋さんごっこがあることを教師が伝えるのではなく、子ども達が聞いて来たり、もしくは年長児からの告知があることでお店屋さんごっこを知り、そこから自分達で参加するためにはどうしたらいいのか考えてほしい、教師が参加までをお膳立てするのではなく、今までの経験を生かしてほしいと願っていた。ちょうどソウシがお店屋さんごっこの話を聞いてきて、それを聞いたサユやチハルが自分達なりに考えて作りたいものを教師に伝えてきたので、すぐにあらかじめお店屋さんごっこに必要なものとして用意しておいたものを出して、サユやチハルの思いが実現できるよう手伝った。サユやチハルはそれらを見て大変喜んで作るとすぐに肩にかけて、しばらくそのまま遊んでいた。また、それを見た子ども達も自分なりに考えて作ったり、作り方がわからない子ども達は、友達に聞いたり教師に質問したりしながら作る様子が見られていた。男児も気にはなるようだったが、ソウシ以外は誰もかばんを作ろうとは思わなかったようだった。

このかばんを作ったサユやチハルはふだんからよく自分達でもお店屋さんごっこをしており、お店屋のイメージをしやすかったのだろうと思われる。他の子ども達は金曜日に実際に自分がさくら組のハンバーガー屋さんから話を聞いたり、チラシをもらったりしたことで、具体的なイメージがつくられ、行ってみたいと思い準備をしたのだろう。この時点でもまだ作らない、行かないと言っていた子ども達もいたが、教師は作るようにとは言わずに、自分で行きたくなるのを待つことにした。

エピソード② お店屋さんに行きたい

お店屋さんごっこ前日にクラス全員で年長組が準備をしている遊戯室へ行き、お店屋さんごっこがどのようなものなのか、どんなものをお店屋さんに見せてもらった。子ども達はそれぞれ「これが買いたいな」「これは何をやるものかな」などと言いながら年長組に説明してもらっていた。子ども達は、保育室に帰ってからも「あれ買いたいな」と言い合う姿が見られていた。遊戯室に行く前には、お店屋さんごっこには行かないと言っていたマサミチやカズオ達もそれぞれ、武器屋さんやお化け屋敷に行きたいと言って、かばんとお金を作り始めた。他の子ども達も買いたいものが具体的に決まったことで、お金がたくさんいると思ったようで、追加でたくさん作り始めた。当日の朝お店屋さんごっこに行く直前までうさぎ組の子ども達のお金作りは続いた。



<エピソード②より>

2年保育の子ども達何人かは最初はお店屋さんごっこには参加しないと決めていた。これは、お店屋さんごっこへの参加が初めてであり、楽しいというより、そのための準備にかばんとお金を作ることが面倒くさいと感じたからだろうと考えた(かばんとお金を作らなくても参加できるのだが、子ども達の意識の中ではこの2つがいるということになっていた)。教師はなるべく具体的なイメージが

もてるよう子ども達に説明をしていったが、体験していないことは言葉で説明してもなかなか想像しにくいと思い、前日のお店屋さんへの下見へと誘った。下見に参加した子ども達の目はとても輝いていた。自分では作ることでできない年長児の作ったすてきな品物に心惹かれ、また説明をしてくれるその様子にも息をのんで引き込まれている様子が見られた。帰ってきてからすぐにかばんとお金を作り出したのは、年長児の店屋の品物をぜひほしいと強く思ったり、お店屋さんごっこの楽しさがわかったりして、参加したいという意欲が高まったのだろう。

エピソード③ お店屋さんごっこに行く

子ども達は当日ぎりぎりまでお金作りをしており、それぞれが楽しみにしていた。今年は遊戯室で2クラスが揃ってお店を開いていた。子ども達は遊戯室へ行って、たくさんのお店の中から自分の好きなところへ行き「これください」と言ったり、「いくらですか」と聞いたり、年長児に促されて指を差したりして品物を選び、買っていた。最初はなかなか買えなかった子ども達も40分を過ぎる頃にはやり取りに慣れて自分で買いたい物の所に並んだり、品物を買ったりしていた。子ども達は1時間近く全員でお店屋さんごっこを楽しんだ。



<エピソード③より>

子ども達にとってお店屋さんはとても魅力的で、買いたい物もたくさんあった。最初は緊張していたが、魅力的な品物に惹かれて、勇気を出してお店屋さんにはほしい物を言ったり、時には教師と一緒に言ってもらって、ほしい物を買っていた。また、買うだけでなく、ほと組のお化け屋敷などは何度も何度も行く姿が見られており、年中組にとってはとても楽しい時間であったことがうかがえる。長くいる間にお店屋さん徐々に慣れて、最終的にはどの子ども達も自分1人で品物を買えるようになった。また行きたいところにも十分行くことができていたように思う。

エピソード④ お店屋さんごっこ後のお化け屋敷

保育室でお店屋さんごっこを真似て遊ぶ姿はすぐには見られなかったのだが、お店屋さんごっこから約3か月後、年長児が行っていたような懐中電灯を使った複雑な通路で構成されたお化け屋敷が作られた。今まで懐中電灯は使用したことがなかったが、お店屋さんごっこでお化け屋敷を何度も楽しんできた男児が「懐中電灯を使いたい」と言ってきた。また、今までは一直線だったお化け屋敷が今回は途中で曲がったり、2か所出口が設けられていた。作っている子ども達の中で同じイメージがあるようで、複雑なものを作っていたにもかかわらず、意見が分かれることもなく、楽しそうに意見を出し合い、お互いに認め合いながら作られていた。

<エピソード④より>

3か月後に子ども達で作ったお化け屋敷を見ると、年長児の作ったお化け屋敷のよいところや工夫が取り入れられており、体験した年長のお化け屋敷を自分のものになっていると感じた。また、お化け屋敷の共通のイメージが子ども達の中でできているために、お化け屋敷作りもスムーズに行われていると感じた。

全体を通して

お店屋さんごっこでは、子ども達の気持ちやまわりの状況に合わせて、お店屋さんごっこへの参加を進めていった。お金や財布作りは、お店屋さんごっこがあることを教師が知らせて、みんなで一緒

に作ろうと誘う方法もあったが、今回は、研究テーマである「よく考えて行動する子ども」という視点から、自分達なりに考えたり、必要性を感じたりして作ってほしいと願っていた。

子どもの姿で印象的だったのは、お店屋さんの下見に行くまでは行く気がなかった子ども達が、帰ってくるなり“行かなくちゃ！”という様子でお金や財布を作り始めたことだった。どの子どもも行ってみたいお店があり、お店屋さんへ行くための準備が必要と感じたようだった。きっと年長組の品物がそれだけ魅力的だったのだろう。

行事では、子ども達に何を体験させたいのかというねらいや内容を考える際に、子どもが“やってみよう！”“（そのためには）どうしたらいいだろう”と自ら考えて行動する機会を教師が意識的にもつことで、子ども達のよりよい経験につなげていくことができるのではないだろうか。

〈文責 大野〉

Episode

年中 うめ組

エピソード① 同じ車を買って 12月6日

うめ組の子ども達は、年長組のお店屋さんごっこをととても楽しみにしており、それまでに年長組の真似っこをして自分達でイメージをふくらませてお店ごっこをしたり、色画用紙で財布やお金を作って行く準備をしたりして、遊ぶ姿がよく見られた。

いよいよお店屋さんごっこが開店する日、子ども達は、年長児が時間をかけて準備してくれた遊戯室にあるたくさんのお店を見に行った。全部のお店を子ども達全員で一度見てから、「好きなお店に買い物に行っていよいよ」と促すと、自分の行きたいお店にすぐに行く子どももいれば、教師と一緒にまわりたい気持ちの子ども達もいた。

ショウとトモユキが教師に、「先生、一緒に来て」と言ってきた。2人に手を引かれながら一緒に歩いて行くと、2人はおもちゃ屋の前で立ち止まり、教師に何か言ってほしいような雰囲気だった。教師は、「車、いくらですか？」「好きな物を選んでもいいですか？」など、2人が聞いてほしいようなことをいくつか質問した。おもちゃ屋の年長児達が具体的に答えてくれると、知りたいことがわかった2人は安心したようで、丁寧に作られた車をじっくりと選んで、1台ずつ買った。

その後2人は保育室に戻り、長椅子でコースを作って車を走らせたり、車に付いているひもを引っ張って走らせたりなど、いろいろな遊びを楽しんでいた。

その日の帰り前、みんなで集まって今日の楽しかったことを聞いた時、ショウは「お店屋さんで買った車で、トモユキ君と遊んだのが楽しかった」と言っていた。

<エピソード①より>

ショウとトモユキも、日頃は自分の気持ちを口にして言うことが少ない子どもだが、お店屋さんで売っている車はどうしてもほしかったのだろう、教師の手を引っ張って、お店まで連れて行くほどだった。無事買えた後は、ほしかった物が手に入ったのと、それを使って友達と一緒に遊べた楽しさから、「お店屋さんで買った車で、トモユキ君と遊んだのが楽しかった」と気持ちを素直に表現できたのだろう。

お店屋さんごっこの行事を通して、友達と一緒に動く楽しさと、同じものによさを感じていることに気づくうれしさを、2人は味わったのではないだろうか。また、自分達では作れそうにない車のおもちゃ



を、それを作った年長児から何とか買いたくて、教師の手を引っ張って連れて行った姿や、買った後に、長い時間熱心に遊び込んでいた姿などから、2人は年長児に対して、憧れの気持ちも抱いていたことがうかがえる。

エピソード② 自分達でもお店屋さんごっこ 12月7日

お店屋さんに行った次の日のこと、レイとミユキが教師に、「先生、前にやったお弁当屋さんの道具、まだある？」と聞いてきた。教師が、「結子先生（教育実習生）が出してくれたお弁当の材料？みんなが作った物、まだ取ってあるよ」と答えると、「私らぁでお弁当屋さんするき、出して！」とうれしそうに言ってきた。

11月始め（お店屋さんから1カ月前）までいた教育実習生が、提案し材料を出していたお弁当作りの材料（色画用紙や発泡スチロールなどで作ったごはんやおかず、プラスチック製のお弁当パック、「おべんとうやさん」と書かれた看板など）を、教師が教材室から出すと、レイとミユキは保育室の大きな積み木をテーブルの上に立て、積み木の上に渡した天板に「おべんとうやさん」の看板を貼って、お店のカウンターのようなものを作った。さらに2人は、積み木と積み木の間にパックに入ったお弁当を並べ、大きめの空き箱に色画用紙や折り紙の切れ端で作ったお金も入れて、お弁当屋さんを始めた。

場所ができ上がると2人は、「先生、お客さん呼んで来て」と言ってきた。教師が「レイちゃんとミユキちゃん、2人で『お弁当屋さんに来て下さい』って呼んだら、お客さんが来てくれるんじゃない？」と言うと、「私らぁ、お弁当作ったりお金作ったりせんといかんがって。先生、呼んで来て」と言うので、「わかった。じゃあ先生もお弁当屋さんになって、お客さんを呼ぼうか！」と答えて、「お弁当屋さんに来て下さい。おいしいお弁当がたくさんありますよー」とまわりに呼びかけた。声を聞いた子ども達がお店の前に集まって来たので、「ほら、ミユキちゃんレイちゃん、お客さんがいっぱい来たよ！」と教師が言うと、2人は「どれがいいですか？」「好きなの、選んでいい！」など、生き生きと対応を楽しんでいた。



<エピソード②より>

レイとミユキは、年長組のお店屋さんの楽しさを感じて、自分達でもお店屋さんを始めようとした。以前にやったことなどを思い出して、自分達でできる方法を考えていっていたので、教師は2人の思いを実現できるように、具体的な材料を出したり、売り買いの場面までお膳立てをしたりしていった。レイとミユキの2人は、今までも様々な形（折り紙屋さん、ダンスのショーなど）でお店屋さんのような遊びをしていたので、今回も教師が材料を出し、お客を呼ぶ役割をすると、後は自分達でお店の準備や売り買いを進めていくことができていた。子ども達によっては、お店作りを一緒に手伝ったり、売り買いのやりとりも一緒にやっていく援助や環境構成も必要になるだろう。このような援助で、お店屋さんの楽しさの醍醐味を味わったり、“自分達でもできるんだ！”という自信をつけていたりして、年長組でのたくさんの人達を対象としたお店屋さんごっこにつながっていくのだと思われる。

全体を通して

お店屋さんごっこの当日や、その前後の子ども達を見ていると、年長児が誘ってくれるお店屋さんごっこは、下の組の子ども達にとって、本当に刺激の多いものだなと感じた。お店屋さんごっこがまだ開いていない時でも、年長児が準備している様子を見ると、自分達もすぐにお店屋さんごっこを始めたりしていた。当日は何を買おうか迷ったり、友達と店内の遊戯室をぐるぐるとまわったりしながら、おめあての物が手に入ると、思い思いの場所で見せ合いっこやごっこ遊びを楽しむ様子が見られ

た。これはまさに、年長組のお店屋さんごっこには、目に飛び込んでくる充実した環境や、思わずやりとりをしたくなる雰囲気など、子ども達が真似て遊びたいことが凝縮されているということであろう。お店屋さんごっこに行くことを通して、どの子どもも当事者意識をもって生き生きと動くことができ、だからこそお店屋さんごっこが終わった後でも、自分達のしたい遊びとして続いていったのであろう。また、年長児が工夫を凝らして作った品物や、買う人の立場を考えてやさしく丁寧に接してくれるその姿は、自分達もあんなふうにやってみたい、そうなりたいという憧れの気持ちに自然とつながっていったと思われる。



〈文責 矢田〉

Episode

年少 もも組

エピソード① 前日までの事例「キッズセット、行きたい！」 11月30日

お店屋さんごっこの1週間前、朝の好きな遊びが終わり、年少組の子ども達は、教師と手遊びをしていた。ちょうどその時、年長さくら組の2人の女兒がたくさんの手作りチラシを持ってさくら組担任と一緒にやってきた。

さくら組2人の女兒は、緊張した面持ちで、チラシに目を落としながら「12月7日にお店屋さんがあります」などと話し始めた。チラシにはハンバーガー屋のロゴが書いてあり、2人は続けて「ハンバーガーやポテトがあります」と言った。もも組はそのお知らせを真剣に聞いたり、うれしそうに聞いたりしている様子であった。そこで、教師がもも組を代表して、「他にはどんな物が売っていますか」と尋ねた。するとさくら組の2人は顔を見合せながら、思い出すかのように「キッズセット、武器屋さん、おもちゃ屋さん…」などとゆっくり知らせてくれた。

タクミは思わず「全部ほしい」とつぶやいた。教師は「このまま行ってもいいですか」と尋ねた。さくら組の2人は「お金がいます」と答え、他のクラスにもお知らせをするため、急いでその場を去っていった。教師はもも組のみんなに投げかけるかのように「お金？



私、作れないなあ」と言った。すると、アヤが「つくっちゃお!!」と製作コーナーに行きながら言った。もも組の子ども達は、製作棚の引き出しから細長い色画用紙を個々に取りだした。ハサミやマーカーも用意して、お金を作り始めた。それぞれにハサミで切り落とし細長い色画用紙に、マーカーで

“100”などと数字を書く子どももいれば、なにやら数字のような記号のようなものを真剣に書いている子どもなどもあった。

少しして、教師が「お金、このままどうしよう…」と言いながら、困った表情をした。すると、ユウジが「かばんがあるけれど」と言いながら、別の遊びに使う物として用意していた新聞紙を折って作ったコップ型のかばんと1mくらいの長さに切った紙テープの束を室内の真ん中辺りに置いた。教師が「かばん屋さんでーす」と言いながら、長椅子などを用意し、かばん作りができるように環境を整えていった。お金ができた子ども達は、次々にかばん屋さんを集まってきた。アヤは、2本の紙テープをとり、1本ずつ紙テープをかばんの片面につけ、ショルダーバックのようにしていた。ユリカはかばんの真ん中に製作棚の引き出しから、お花の形に切り取ってある色画用紙を4つ取ってきて、つけていた。それを見たケイタはお花の形の色画用紙を2つつけていた。ユウジは、コップの中央に星の形の色画用紙をひとつつけてうれしそうに見せてくれた。形の色画用紙を付けたり、ひもの付け方を工夫したり、かばんにマーカーで色をつけたりと、オリジナルのかばんになっていった。



タクミはお金ができるとすぐに行きたいと、思わず「キッズセット、行きたい!」と言いながら室内を飛び出し、お店屋さんごっこがある遊戯室の方へ向かった。キラリは製作棚のクリーム色の細長い色画用紙と色紙で作られたコップを取りだしてきた。クリーム色の色画用紙をカットして、色紙で作られたコップに入れていき、黙々とポテト作りを楽しんでいた。どうやらすでにキッズセットのポテト作りの世界に入り込んでいたようだった。その後、アヤ、ヨウコ、モモコはお金とかばんがとても気に入って、持って帰った。

<エピソード①より>

年少児にはお店屋さんのお知らせを前日にしてはどうか

タクミはすぐにでもお店屋さんに行きたい様子だったり、アヤ、ヨウコ、モモコはお金とかばんが気に入り持って帰ったりした様子などがあつた。キラリの気分はすでにハンバーガーショップの店員さんだったのであろう。年少児はすぐにイメージの世界で遊びを楽しむことができる。お知らせは、今回のように1週間前のお知らせよりも、もう少し遅くてもよかったのではないだろうか。お店屋さん早く行きたい、すぐに楽しみたいなどといった年少児の気持ちを大事にした活動を展開していくことができるのではないかと思った。

エピソード② 前日までのエピソード 気分はお店屋さん 12月5日

子ども達は、お店屋さんごっこの前日、遊戯室に用意されているお店屋さんには、どのような品物が売っているのか見て回った。一通り見た後、保育室に帰ると、早速「〇〇屋さんしたい」との声が次々と聞こえてきた。

マサキは製作コーナーの引き出しから細長い色画用紙を取り出した。ハサミで色画用紙をいくつかに切り分け、マーカーで何かを描き、お店屋さんのチケットを作っているようだった。チケットを作ると、急いで遊戯室に向かった。マサキはチケットがあれば、お店屋さんで買い物ができると思ったようだ。

アヤとマリナは保育室の絵本コーナーから小さめの絵本を何冊か持ち出した。年中うめ組のテラス前に敷いてあつたマットとその上に置かれた長椅子が絵本屋さんとしてはぴったりの場所だと思ったようだ。氷ができるほど気温が低い日であつたが、長椅子の上に絵本をいくつも並べて、「いらっしゃいませー」と絵本屋さんを開い



ていた。教師が「ここはとても寒そうだし、お客さんがぜんぜん来ないから、もも組でしょうよ」と誘った。2人はニコニコしながら「ここでいいもんねー」と返した。うさぎ組（年中）の担任がその場を通りかかり、「何しているの？」と尋ねた。すると、うれしそうに2人は「お店屋さん」と返した。

ダイキ、ケイタ、ショウハイ、タクミ、ユウジは、もも組の製作コーナーの一角で、メダルと折り紙屋さんを始めた。しかし、特に買ってほしいというわけではなく、ただひたすら、品物を作ることが楽しい様子であった。



<エピソード②より>

刺激を受けたことをすぐに真似してみたくなる年少児

ダイキ達は、色紙や紙テープを使って品物を作る楽しさを味わっているようだった。5人で言葉をかわしながら、長いことメダルと折り紙屋さんが続いていた。

運動会が終わってから、それまで教師と一緒にないで行けなかった場所へ子ども達だけで出かける姿がたくさん見られていた。今回、年長児が行っていたお店屋さんごっこに刺激を受け、マサキは急いでチケットを作ると、遊戯室に向かった。アヤとマリナは絵本を売るにはどこがいいだろうと、いそいそともも組の絵本をいくつか持ち出し、うめ組の前にあるテラスを選んだ。自分がこうしたいと思ったり、教師とのやりとりよりも友達とのやりとりが楽しいと感じたりしている様子だった。マサキのように自分の考えたことを試したり、ダイキ達やアヤ達のように友達に自分の考えを言ったり行動に移したりして、お店屋さんごっこの雰囲気を楽しんでいる姿がたくさん見られた。

お店屋さんごっこ当日をただひたすら待ちわびるだけでなく、手前にお店屋さんの準備の様子を見に行かせてもらうことは、年少児にとってお店屋さんの雰囲気も経験できた貴重なひと時になったと感じた。

エピソード③ 当日のエピソード 年長児とのやりとり 12月7日

もも組のみんなが一緒にお店屋さんのある遊戯室へ出かけて行った。ユリは、遊戯室に入ると、緊張した面持ちだった。教師がじっとしているユリの様子を察して近寄ると、「緊張する」と言った。教師と一緒にお化け屋敷に行き、ゴールした後に景品をもらったり、年長児のカンタが「ぜひ、やってみてください」と言わんばかりに何度も差し出す出前くじ引き屋さんへのまね、くじ引きをしたりしているうちに、ユリはお店屋さんの雰囲気に慣れてきた。教師が近くにいなくても、年長女児2人と笑みを浮かべながら話している姿もでてきた。

ユリカは、ハンバーガー屋さんで、メニュー表に目を向けながら、「ハンバーガーください」と言った。年長児はすかさず、「ポテトもあります」とつなげた。ユリカがうなずくと「大きいのがいいですか、小さいのがいいですか」と年長児が聞いてきた。ユリカが「大きいのが」と言うと、年長児はすばやく注文された品を袋に入れ渡してくれた。その質問の仕方や手際のよい品物の渡し方は、まるで本物のお店員さんのようだった。ユリカの後ろで順番待ちをしていたケンも年長児の手際のよい返しによって、思い通りのジュースを得ることができ、次のお店屋さんへの移動をしながら飲む真似をしていた。



チカはお化け屋敷に入りたいが、どうしても1人では怖くて、入り口で戸惑っていた。すると、お化け屋敷担当の年長児が、年少担任のところへやってきて「あの子がお化け屋敷、1人じゃ怖いって。先生一緒に入っちゃったら？」と言いに来た。担任は、チカのもとへ行き、「一緒に入ろう」と誘った。チカは「やっぱり怖いよ、やめとく」と言った。

<エピソード③より>

はっきり言葉に出さなくても、察してくれる年長児

年少児がお店屋さんごっこに招待してもらった前日は、年中児がお店屋さんごっこに行っていた。年長児は年中児とのかかわりの中でやりとりが随分上手になっていたのかもしれない。ユリが立ちつくしていると、積極的に声をかけてくれたり、チカの表情や様子をすばやくキャッチして、年少担任にどのようにしたらよいか投げかけたりして察してくれた。そのような様子から、年少児は少しずつ自分を発揮していき、何度も遊戯室のお店屋さんに出かけて行く姿もみられた。とても居心地がよかったのではないだろうか。

年少児よりも思いを伝えることができるであろう年中児を前日に招待するのも日程としてはよかったのではないかと思われる。

エピソード④ 当日のエピソード 思わずかぶりつきたくなる 12月7日

買った物を入れている袋がいっぱいになった子ども達は、袋の口を広げて「せんせー、いっぱい」「もう、入らん」などうれしそうだった。

カズキやレイナ、アヤカはケーキ屋さんでほしい商品を指さすものの、年長児が忙しそうにしていると、その場でじっと順番を待っていた。自分のほしいものを手渡してもらおうと、思わず、袋の中を見て喜んだり、教師に見せてくれたりした。

ユウジは、お店屋さんごっこから帰ると、ままごとコーナーに置いているレジャーシートを「みんなで食べたいよ」と言いながら広げ、座ったかと思ったら、急いで買って来たハンバーガーにかぶりつく真似をした。買って来た絵本は「お母さんにあげる」とうれしそうに開いていた。

ままごとコーナーのじゅうたんの上では、アカネも大きな口を開けてハンバーガーを食べる真似をしていた。アヤカやケイタ、ケンヤもおもしろそうにジュースを飲む真似をしていた。

ユリカは買って来た商品を大事そうに抱えながら「おうちで食べたーい」と言っていた。ミキやマイコも指輪やネックレスなどラッピングしてもらった袋を開けるのが惜しくて袋ごと掲げながら、とてもうれしそうに見せてくれた。

ショウヘイは買って来た車に付いたリモコンを操作しながら「ここ押したら、タイヤがまっすぐで、ここ押したら曲がる」と知らせていた。

ユウジがもっていたマシンガンがほしいコウジは、ユウジのものをうばいとろうとした。同じ物がないか再度店にいったが、なく、違うもので納得していたが、保育室に戻るとやはりコウジのものが気になる様子だった。



<エピソード④より>

お店屋さんごっこのその後を楽しむ年少児

ほとんどの子ども達が保育室に戻ると、当たり前のように敷物を敷いたり、ままごとコーナーのじゅ

うたんの上に座ったりして、買って来た食べ物を食べる真似をする姿がたくさん見られた。本当にお店で買って来た商品をひとつひとつ本物のよう楽しんでいる様子であった。

友達とどこで食べようか相談し、年少組専用の大プールの中にござを敷いてピクニック気分を買った物を見せ合っている姿もあった。お店屋さんで買うことを楽しむだけでなく、買った商品を本物のように扱ったり、友達とごっこ遊びへと展開したりしていくことが自然とできる年少児だと感じた。

僕も同じ物がほしい

自分が買って来た物を保育室で広げたり、遊び始めたりすると、友達が持っている物がほしくなる子どももいる。ある程度同じ物や同じ形の物が必要だと感じた。もしくはコウジのように、保育室に戻った後の様子を察して、担任が同じような物を作ることを提案していくことも大切だと思った。そうすることによって、心も満たされ、かかわって遊ぶ姿も見られるだろう。子どもの気持ちを察し、教師が援助していく大切さを感じた。



エピソード⑤ 後日のエピソード お店屋さんの余韻を楽しんで 12月7日から13日

指輪づくり(7日~11日)

7日の保育後、保育室で個人面談をしていると、ミキが困った表情をして入ってきた。どうやら、お店屋さんごっこで買った品物をなくしたようだ。室内を探してみたが、ミキの物がなく、保護者とも相談し、月曜日と同じ素材の物で作ることにした。教師は年長担任に指輪や指輪の入れ物などの作り方を聞き、ひとつのコーナーとして出しておいた。

10日と11日は、半数近くの子ども達指輪作りをして楽しんだ。

ラジコン作り(13日)

ユウジが「ひもちょうだい」と言ってきた。手には空き箱で作った車があった。以前、お店屋さんごっこでショウハイが買って来たリモコン付きの車にしたいようだった。ひもをもらったユウジはうれしそうに自分で作った車に取り付け、できあがると、それに満足したのか持ち帰りしやすいようにビニール袋に入れていた。



<エピソード⑤より>

満足感を味わって

指輪は、モールとビーズを使うが、このような素材で指輪を作ることができることがわかったり、友達が持っていたラジコンを自分でも作ってみたいなど思ったりして作るなど、年少組の子ども達は、お店屋さんからたくさんの刺激ももらった。そして、満足いくまで作ったり、自分なりに真似たりし満足感を味わうことができたように思う。

全体を通して

年少児にお店屋さんごっこの開店日を知らせる日やタイミングを見極めることが大切であると感じた。一方で年少児は、お店屋さんごっこの雰囲気を実際に見たり遊んだり、買い物が終わった後の余韻を存分に味わっていたりしたように思う。その背景には、

- ・お店屋さんごっこの前日に、お店屋さんとはどのようなもので、どのような品物が売っているのか、などを実際に見せてもらったこと。

- ・年少児の保育室内の環境として、年少児が、お店屋さんごっこに触発されて、それほど加工しなくても見立てて遊ぶことのできるような素材をすぐに使えるような状態で用意しておいたこと。
- ・友達と同じ物や色がほしい年少児であることを意識して、素材棚にそれぞれの素材を整理して、たくさん入れておいたこと。

この3点が、より豊かに遊ぶことができる要因になっていったのではないかと考えられる。

〈文責 岡谷〉

お店屋さんごっこのエピソード全体を通じた考察

子ども達が主体

お店屋さんごっこについて話し合うなかで、年少、年中組がお金を好きなだけ作るのではなく、100円5枚までと決め、商品もすべて100円とし、5個まで買うことにしてはどうかという意見が出された。買い物をする年少、年中組も買い物をした商品を大事にすることにつながるし、年長組も年少、年中組の人数分作らなくてはと思わなくてもよいのではないかと考えたからである。しかし、そうすると、お金が必要になりそうだからと、お店屋さんごっこ当日に急ぎょ銀行ができたりしなくなるだろうし、おつりも渡せなくなるだろう。子ども達はおつりのお金を作ったり、渡したりすることでもお店屋さんになりきっているわけで、ごっことしての楽しみを奪うことにつながるのではないかという論議になった。

年長のエピソードで考察したように、自分のやりたいお店をやりたいようにすることが楽しい、自分達が経験したお店屋さんを再現することが楽しい、つまり自分達のイメージが発揮できているからこそ楽しいのであって、作るお金を制限することはお店屋さんのイメージを制限してしまうことにつながると考えられる。ここまで考えると、本園の考えるお店屋さんごっこが、どのお店屋さんにするかを子ども達が選び、教師もアイデアを出しながらではあるが、子ども達が作りたい商品を選び、その思いに合わせて、材料を用意したりするなど、あくまで子どもを主体にしていることを改めて考えさせられた。

教師の見通し

年長組のエピソードで「年少組と年中組、合わせて80個は必要…」と少し子ども達に言っただけで、それまで楽しく丁寧にケーキを作っていたのに、アルバイトをやとって、大量生産のようなケーキ作りが変わってしまったという反省があった。

数年間にわたるお店屋さんごっこの積み重ねもふまえて、みんなで話し合った結果、当日までにすべて数がそろっている必要はないのではないかと、足りない分は、小さい組を待たせても当日作ってもよいのではないだろうかと話し合った。80個という数にぴんと来ない子ども達もいるし、せっかく小さい組のことを考えて、工夫して作っていたのに、子ども達を追い込んでしまうことにつながり、本来のねらいから外れていくと考えたからである。教師にとって保育に見通しは必要であるが、子どもの気持ちやねらいにそったものである必要があると考えさせられた。

連続していく経験

お店屋さんごっこを、園全体の取り組みとして開くようになってから4年目になる。毎年のように、前年度のお店屋さんごっこで開かれたものが、ふだんの保育でも出てきている。今年も、昨年度の年長組の真っ暗なお化け屋敷に憧れて真似て作ったり、その時に使用したお化け屋敷に入るための懐中電灯を職員室に借りに行ったりする姿が見られた。

事例からは、年少組はお店屋さんごっこを真似てすぐ遊び始める姿が見られた。また、年中うさぎ組では、お店屋さんごっこの3か月後に、年長児が行っていたような懐中電灯を使った複雑な経路で構成されたお化け屋敷が作られた。お店屋さんごっこの経験が下の学年に引き継がれ、連続していき、園全体の子ども達の経験を豊かにしていくことを再確認した。

年長児の意欲がふくらむように

年長さくら組のエピソードで、お店屋さんごっこ2日目、人数の少ない年少組をお客さんとして迎えた時、なかなかお客さんが来ないことや、2日目で満足していたせいもあってか、早々にお店屋さんをやめてしまう子ども達もいた。

25年度のお店屋さんごっこの取り組みでは、日程の都合上、年少組、年中組とも同じ日にお買い物をすることにした。初めに年少組を招待し、ゆったりお買い物をしてもらい、その後、年中組を招待する計画であった。しかし、年少組だけでは人数が少ななかなかお客さんに来てもらえず、年長児から不満の声があがったので、年中組を招待する時間を繰り上げた。

以上のようにお客さんが来てこそ、年長児のお店屋さんごっこへの意欲がふくらむことを考えると、お店屋さんごっこは年少組、年中組とも、同じ日に招待することが望ましいのではないかと考え、次年度からも同日にすることにした。





クラスみんなで表現遊び
(最後の参観日)

🌸🌸🌸🌸🌸 クラスのみんなで表現遊び（最後の参観日）🌸🌸🌸🌸🌸

クラスみんなで表現遊び（最後の参観日）の経験の意味

気持ちをひとつに

子ども達はごっこ遊びを通して、まわりの友達と同じイメージの世界を楽しみ、自分なりの表現を楽しんだり、友達とのかかわりを楽しんだりしています。こうしたごっこの楽しみを、劇遊びやオペレッタなどクラス全体の活動として取り入れることで、クラスみんなが同じ話の世界をイメージして、演じたり、歌ったり、踊ったりするなどの表現を楽しみ、知らず知らずにクラスみんなが心をひとつにする喜びを味わうことを大事にしています。言い換えると、自分の役になりきって表現することを楽しんだり、やりとりを楽しんだり、時にはクラスみんなで同じ動きをしたり、歌ったりすることで、数人では味わうことのできない、集団ならではの迫力や躍動感を感じながら、心を合わせる喜びを経験してほしいと考えているのです。

ですから、教師のねらいとして、教師主導で完成した作品を保護者に見せることを主眼とするのではなく、子ども達がどの程度、表現の世界に入り込んで楽しんでいるかということを中心にしなければならぬと考えています。そして「明日もやろうよ」と、子ども達の楽しみとなるような行事にしたいと考えています。

年齢に応じて

年少組では、自分が楽しむことが中心ですので、お客さんを意識していません。みんなで気持ちをひとつにしているという意識もあまりないと思われそうですが、自分が楽しむことを中心にしながら、どこかで、みんなの気持ちがひとつになる感覚を味わうことができるようにしたいと思います。

年中組でも自分達が楽しいことが中心ですが、お客さんに見てもらおうことを意識し始め、緊張したり、はりきったりする姿も見られます。クラスみんなで同じ話の世界を楽しんだり、同じ動きをしたりすることを通して、年少組よりは“みんな”を意識し、心をひとつにする経験が味わいやすいように思います。

年長組では、お客さんに見られることを意識し、同じ役の仲間でどのように動いたらいいのか相談し合ったり、教師の意見に耳を傾け、はりきって演じようとしていたりします。クラスみんなで気持ちをひとつにする経験とともに「お家の人に見に来てもらおう、喜んでもらおう」というめあてに向かって、友達やクラスみんなで思いや考えを出し合う経験にもつなげたいと思います。

ねらい(○)・内容(■)

【年少組】

- 好きな役になりきって表現してみるなかで、クラスみんなと気持ちがひとつになっている感じを味わう。
- クラスみんなや先生と一緒に、好きな役になりきって、歌ったり、踊ったり、せりふを言ったりしてみる。
- 好きな役になって、まわりの友達と一緒にいることを楽しむ。

【年中組】

- クラスみんなや先生と一緒に表現を楽しむなかで、気持ちがひとつになる喜びを味わう。
- クラスみんなや先生と一緒に、歌ったり、踊ったり、せりふを言ったりすることを楽しむ。
- 表現しながら、友達とやりとりすることを楽しむ。

【年長組】

- クラスや学年のみんなで、気持ちをひとつにして活動に取り組む充実感を味わう。
- みんなで息を合わせて、歌ったり、踊ったり、せりふを言ったりする。
- 劇やオペレッタに必要な小道具や背景を、クラスみんなで作る。
- 友達と一緒に思いや考えを出し合いながら、劇遊びやオペレッタを進めていく。

環境構成と援助

やりたい気持ちが自然とふくらむように

クラスのみんなでの表現遊びが、「明日もやろうよ」と子ども達の楽しみとなるように、自然と興味をふくらむような雰囲気をつくるようにしています。

はじめに、子ども達の興味、関心やふだんの様子、教師の願いをもとに、どのような劇遊びやオペレッタの題材が子ども達には適当であるのか、検討して選びます。そして選んだ題材の絵本や紙芝居、ペープサートなどを見せたりして、お話の世界をイメージしやすいようにします。そして、好きな遊びの時間や子ども達全員が集まっている時などに、予め用意しておいたお面を用いて、教師が劇遊びやオペレッタを演じて見せます。子ども達が最初から参加するときもあれば、教師が一人何役もすることもあります。ふだんからごっこ遊びが大好きな子ども達は、お面をつけて自然にごっこ遊びを始めたり、ダンスが大好きな子ども達は、教師に「一緒に踊って」と頼んで、オペレッタを繰り返し楽しんだりします。そこで、子ども達がやりたい気持ちになった時に、いつでも劇遊びやオペレッタを楽しむことができるように、お面や背景、小道具など、子ども達が取り出しやすく、目に付く場所に置いておくようにしています。こうした遊びに参加しない子ども達もいますが、他の子ども達が演じたり、踊ったりしている姿をじっと見ていることがよくあります。おそらく興味はもっていて、見ながら楽しんでいると思われる。

好きな遊びのひとつとして、劇遊びやオペレッタを楽しみ始めた頃、クラスのみんなを誘って、一緒にやってみる機会を増やしていきます。最初のうちは役を固定せず、その時やりたい役を選ぶことができるように、お面の数を多く用意しておきます。また、子ども達の劇遊びやオペレッタへのイメージがふくらみ、表現する楽しさがよりふくらむように、ぴったりの衣装や小道具、背景などを教師が用意しておいたり、子ども達と一緒に作ったりしています。年長組では、子ども達から出てくるアイデアを取り入れ、ぴったりの素材を用意しておき、子ども達が自分で作る達成感を味わいやすいようにしています。

以上のように、「参観日があるから、みんなでやりましょう」という位置づけではなく、子ども達が自然に劇遊びやオペレッタを楽しむことができるようにしていき、徐々にクラス全体で遊ぶ楽しみのひとつとなっていくようにしています。そして、クラスみんなの楽しみとなった頃に、「お家の人に見てもらおう」というふう子ども達に話し、自分達が楽しんでいることを家の人に見てもらえる喜びが味わえるようにします。

平成23年度

年少 もも組

オペレッタ『てびくろ』を通して

教師の願い

もも組では日常のごっこ遊びを大切にしてきた。1学期には、ままごとなどの他に電車ごっこや魔女ごっこをした。魔女ごっこは教師の演じる魔女が子ども達に魔法をかけて動物にし、動物になった子ども達はその動物のイメージをふくらませながら教師の弾くピアノのリズムに合わせて表現する遊びである。2学期には子ども達が大好きな忍者に扮して遊んだり、忍者になりきり忍者ダンスを踊った。3学期には動物のお面づくりをし、自分の作ったお面の動物になりきって動物ごっこをしたりした。どれもその遊びの世界に入りながら、イメージを豊かにふくらませ、表現することを楽しんだり、みんなと心を合わせて遊ぶ楽しさを感じ取ることを大事にしてきた。そのため、3月の参観日でもオペレッタの形式を整えることをねらいとするのではなく、これらのことを大切にしたいと考えた。

題材を選んだ理由

今年度の年少組は、リズム遊びやダンスが非常に好きであったことから、参観日にはそれらの延長として、オペレッタにみんなで取り組んでみようと考えた。オペレッタの候補として、『三びきのこぶた』『てぶくろ』の2つを考えた。両方とも同じことの繰り返しや、オオカミ等の強い動物が出てくるドキドキ感があり、年少児にはぴったりではないかと考えた。最初教師はどちらにしようかと迷っていた。『三びきのこぶた』の方が単純で理解しやすく、また繰り返しオオカミが出てきて逃げるといふ鬼ごっこのようなゲーム性が高く楽しいことなども考慮して、まずは『三びきのこぶた』でオペレッタというものを感じ、楽しさを知ってほしいと考え『三びきのこぶた』を試みることにした。エピソード①にもあるように子ども達は大変喜んで『三びきのこぶた』のオペレッタをしていた。

しかし、教師はもっと子ども達の表現を引き出したいと考え、多くの動物が登場し、それぞれの子ども達が自由に役を選べ、自分なりに表現できる『てぶくろ』を参観日にクラスみんなでするオペレッタに選んだ。

参観日当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・）や子どもの様子（☆）
1/30	月	・『三びきのこぶた』の絵本の読み聞かせ
1/31	火	・ペープサート『三びきのこぶた』
2/1	水	・三びきのこぶたごっこと降園時にペープサート
2/2	木	
2/3	金	
2/6	月	
2/7	火	
2/8	水	
2/9	木	
2/10	金	・年中うめ組オペレッタ『やっぱりれんがのおうちだね』を見に行く。 ☆『三びきのこぶた』とほぼ同じたため、歌を口ずさみながら楽しく見る。
2/13	月	・年長組オペレッタ『いつまでもともだち』『ブレーメンのおんがくたい』を見に行く。 ☆クラスに帰ると、「すごい」「私も遊戯室でしてみたいな」と感想を言い合っていた。
2/14	火	・年中うさぎ組のオペレッタ『三びきのヤギのがらがらどん』を見に行く。 ☆オペレッタを見ながら、「この話知っている!」と喜んだり、クラスに帰ってから、しばらくダンスを真似て数人踊っていた。 ・教師が『てぶくろ』のペープサートをする。
2/15	水	・『てぶくろ』のオペレッタを好きな遊びの時間に初めてする。 ☆降園時間に教師に『てぶくろ』のペープサートをしてほしいとリクエストをした。 ・教師が『てぶくろ』のペープサートをする。
2/16	木	・『てぶくろ』のオペレッタ遊びを好きな遊びの時間にする。 ☆したい子ども達が誘い合っては、何度もしていた。

2/17	金	・床にビニールテープで手袋の形を作った。☆登園した子どもから、喜んで中に入っていた。	エピソード②
2/20	月	・教師が作った『てぶくろ』の壁面を貼る。☆手袋の中みたい、温かいなどと言って喜ぶ。	
2/21	火		
2/22	水		
2/23	木		
2/24	金		
2/27	月	・教師が作った『てぶくろ』のお面を出す。☆喜んでかぶってなりきる。	
2/28	火	・弁当前の集まりの時間にしたい子ども達で『てぶくろ』のオペレッタ遊びをする。	エピソード③
2/29	水	▼	
3/1	木		
3/2	金	(お別れ遠足のため行わず)	
3/5	月	・クラス全員で『てぶくろ』のオペレッタをする。 ☆自分や友達の表現を意識している様子があった。	
3/6	火	・クラス全員で『てぶくろ』のオペレッタをする。	
3/7	水	・好きな遊びの時間に『てぶくろ』のオペレッタをする。(誕生会のため全員では行わず)	
3/8	木	・参観日当日	エピソード④

Episode

参観日当日までのエピソード

エピソード① 『絵本からペープサートそしてオペレッタへ』 1月30日～2月1日

降園活動時に『三びきのこぶた』の絵本を読んだ。翌31日(火)の降園時には『三びきのこぶた』の話がもとになって作られているオペレッタ用のCD(※1 詳しくはうめ組事例参照)をかけて、ペープサートで演じて見せた。子ども達は、絵本を読んだ時よりも喜んで「オオカミがまた出てくる!」と言ったり、オオカミがレンガの家を息を吹くところでは「無理、無理!」と言ってオオカミがしょぼんとすると、お互いに顔を見合わせたりしながら大喜びした。

ペープサートを見て子ぶたの動きなどが具体化したようで、その日の降園後に、もも組前庭のハウスを子ぶたの家に見立て、三びきのこぶたごっこを何人かの子ども達がしていた。



2月1日(水)には、教師がダンボールを切り開いたものに、模造紙で絵を描いて貼って作った藁の家、木の家、レンガの家を使って初めてのオペレッタを楽しんだ。ペープサートと同じ絵柄だったため、どれが藁の家と説明しなくても、登園してきた子ども達は「藁の家がある〜」「こっちは木の家や」「ここはレンガ!」などと声を上げた。オペレッタのCDをかけると、すぐに藁の家に隠れ始めた。オオカミにはなりたくない様子で、「先生なって!」と頼まれたので教師がオオカミになった。教師は強そうに振る舞い藁の家を吹き飛ばした。「キャー」と歓声を上げながら逃げるこぶた役の子ども達を追いかける教師の様子を見て、「ぼくもやっちゃおう」とユタカ、ワタルがやってきた。その後もオオカミ役の子ども達が増え、こぶたとオオカミは同じ5、6人になった。オオカミ役の子ども達はオオカミになりきって声色を使うのを楽しんでおり、こぶた役の子ども達はキャーと逃げるのが楽しいようであった。

また、ペープサートにはなかったが、「オオカミにも家があるよ」とフミカが言い始めるとまわり子ども達も「先生作って!」と言ってきたので教師は子ども達と相談して、長椅子と一緒に運んでオオカミの家の場所を作り、明日はこぶたの家と同じようにダンボールと模造紙で家を作っておくことを約束した。終わりまで何度も「明日には家を作ってよ!」とフミカやモモに念押しされた。子ども達のリクエストにより、この日も降園活動時にペープサートを行った。

<エピソード①より>

ペープサートにCDを使用したのは、予定しているオペレッタ遊びで、子ども同士が同じようなイメージがつくりやすいことを第一にと考えたためである。ペープサートをした日の降園後に三びきのこぶたごっこ遊びを展開していたことに教師は大変驚いた。元々オペレッタ遊びにつなげたいと考えていたものであったが、子ども達から三びきのこぶたごっこが生まれたのは、やはり題材としてぴったりだったのだろうと考えた。教師は翌日藁の家等を用意してオペレッタに誘った。これらの物でさらに具体的な共通のイメージがつくられ、多くの子ども達が参加してみたいと思ったのではないかと思う。また、子ども達は教師が考える以上に想像をふくらませていたのでオオカミの家がほしいと思ったのだろう。オオカミはその後何度も自分の家にした場所に帰って行っては、こぶたの家に出かけて家を吹き飛ばすことを繰り返していた。

このオペレッタでは、3つの家をそれぞれの場所に建てて、次の家に逃げていくというところが楽しいものなのに、1つ目の家が吹き飛ばされると、同じ場所に2つ目のダンボールの家を立てるといように、同じ場所に立ててしまったため、次の家を目指して逃げ回る楽しさを子ども達が感じられなかった。室内に十分な広さがなかったことも要因のひとつである。オペレッタを子ども達が保育室で楽しむにはどのような環境設定でするのがよいのかを十分に考える必要があると思ひ反省した。

エピソード② 『てぶくろごっこ』 2月17日

『てぶくろ』の絵本を降園時に読み聞かせし、翌14日降園時に『てぶくろ』のCDをかけてペープサートをした。17日には床にビニールテープを手袋の形に貼っておいた。

17日、登園してきた子ども達は手袋の形をすぐに見つけて「先生、これ手袋?」と尋ねてきた。「そうだよ」と答えるとソウシはにこにこしながら、手袋の中に入って「先生、手袋の中に入ったよ!」と言っていた。

CDをかけると、子ども達はオペレッタに参加してきた。しかし、遠巻きに見る子どももいた。教師は「一緒にする?」と誘いはしたが無理強いはしないように、見てるだけでもいいということも伝えた。また、それぞれの動物の表現についてもCDブックには踊りとして細かく載っているが、子ども達一人一人の表現を大切にしたいと考えていたため踊りの指導などはしなかった。イクコは、ぴよんぴよんガエルがとても気に入っていたようで、ぴよんぴよんガエルの音楽がかかると、まるで本物のカエルのようにジャンプして進んだり、カズオはのっそりぐまの役をする時に、強そうに腕をくの字

に曲げて振り、足を大きな音で踏み鳴らしながらのっそりのっそりと動いていた。またマリはおしゃれキツネが気取った様子で踊っているところをターンしながら踊っていた。子ども達は1種類だけではなく何種類も自分のしたい動物になりきって参加していた。

<エピソード②より>

てぶくろごっこでは、自分なりの表現をしている子ども達が多く、今までのリズム遊びや、ごっこ遊びなどでの経験の積み重ねもあるのではと感じた。ぴよんぴよんガエルひとつとっても、子ども達の表現は違っており、イクコのように両手をついてカエルのようにして跳んだりする子どももいれば、立ったままジャンプして鳴き声を上げている子どももいて、どの子どもも登場人物になりきっていた。おしゃれギツネになっていたマミやミノリは、澄ました顔で踊っていて、すっかり顔つきまでなりきっており、年少児は衣装を着たり、お面をかぶっていなくてもなりきって遊べることに今更ながら教師は驚いた。

また、教師は子ども達が自分で考えたイメージを大切にしたいと思っていたため、それぞれの表現について子ども一人一人にすてきだと褒めることはあっても、まわりの子ども達に褒めて知らせることは控えていた。しかしそれは、子ども同士をつなげることや、表現方法の幅を広げるといった点ではどうだったのだろうかと思う。教師が評価してそれを知らせるという方法はやはり適切ではないと考えるが、子ども達自身が友達の表現を見て感じるということに重きをおいて、教師は友達のしている表現をまわりに知らせたらよかったのではないだろうか。一人一人が楽しむことを念頭に置いてはいたが、それにとらわれすぎて『てぶくろ』という同じ世界観をみんなで楽しむということへの援助が少なくなってしまうのではないだろうかと思った。

エピソード③ 「途中で役がいなくても困らないよ」 2月28日～

『てぶくろ』のオペレッタを始めてから1週間ほどたったとき、それまで好きな遊びの時間に好きな子ども達だけでしていたが、ミユとマオが「みんなでもしたい」と言ってきた。「みんなとしたいの？じゃあお弁当の前にしようか」と提案した。それから、『てぶくろ』のオペレッタを弁当前や降園時間など、クラスみんなが集まる時間に行った。最初は全員がしたいという気持ちではなく、何人かはしたくないと言っていたので、教師は「お客さん役で見ているといいんだよ」と声をかけた。何日かすると、今までしなかった子ども達も自分のしたい役で参加しだした。みんなの輪に入るのが苦手なトモユキは最初は保育室の外に飛び出して行っていたが、何日かすると保育室内で見るようになり、CDをかける役をしたりするようになった。

『てぶくろ』のオペレッタでは子ども達は好きな役を好きな時にやっていたので、劇中てぶくろの中に入っている、自分の好きな役の登場場面になると「今度は〇〇しよう～」とお面を脱ぎ替えていた。そうすると、てぶくろの中の役が誰もいなくなったりすることがあったので、教師は『てぶくろ』のオペレッタをした後に、子ども達に役を途中交代なしでやってみたらと提案した。子ども達は口々に「なんで？」「どうして？」と言ったので教師は「途中で役がいなくなると困るんじゃないかな？」と言った。するとさらに「なんで？」「困ってない」との声がたくさん返ってきた。そこで教師は「そうか、困っていたのは先生だけなんだね。ごめんごめん、今まで通り好きな役をやることにしよう」と言った。

<エピソード③より>

形式にとらわれないよう、子どもの表現を大切にしたいと思っていたのに、オペレッタの途中でてぶくろの中の役が全くいなくなることが気になっていた。子ども達はとても楽しんでいるのできつと気にならないのだろうとは思いながらどうするべきか何日か悩んだ。結果、子ども達に提案してみようと教師は決めて、子ども達に言ってみた。すると、子ども達はそもそもなぜそんなことを教師が言

い出したのか全くわからないといった様子であった。年少児は、劇中の整合性は全く気にならないのだと改めて感じたし、そこを重視してしまうことで、表現の楽しさなどが半減してしまうのはよくないと思い、すぐに子ども達の意見を尊重して好きな役を好きな時にするようにした。それは、参観日当日も同じだった。

エピソード④ 参観日当日の様子 3月8日

10時30分からもも組の保育室で、保護者に『てぶくろ』のオペレッタを参観をしてもらった。特に、見せることを意識したものではなかったため、保護者の方を向いて行うということはなく、もも組の子ども達がオペレッタを楽しんでいるのを参観してもらうというスタイルで行った。

<エピソード④より>

事前にお手紙や降園時にオペレッタのねらいや内容などを伝えていたこともあり、発表会形式ではないオペレッタを参観するということについての保護者の戸惑いもあまりなかったように思われる。また、おおむね好意的に捉えてもらったようだった。てぶくろごっこを始めたばかりの頃には傍観していたユウダイの保護者からは、「なかなか参加しない様子や少しずつ興味が出てきた最近の様子を先生から聞いていたけれど、当日は本当に楽しく踊っていたので、子ども達が自分からしたいと思って参加している様子がよくわかった」という感想を後日もらった。

全体を通して

取り組んだのはオペレッタであるが、年少児ということもあって、ひとつの作品を作り上げるということではなく、それぞれのイメージを豊かにふくらませ、表現することを楽しんだり、みんなと心を合わせて遊ぶ楽しさを感じたりすることを大切にしていって取り組んできた。

そのため“みんなでしなければならない”というような雰囲気にならないよう、気分が乗らない子どもには「お客さんになる？」などと声をかけていくことで、それぞれが無理のないかたちで徐々にオペレッタに参加できるようにしていき、まずはオペレッタ遊びの楽しさを十分感じられるように配慮してきた。年中や年長組のオペレッタを見ることで、見る楽しさや、あんなふうにしてみたいなという気持ちも育っていったように思う。

子ども達がオペレッタの楽しさを感じるようになると教師が誘わなくても、誰かが好きな遊びの時間にオペレッタを始めると近くにやってきて、好きな役になり参加をして子ども達が多くなった。自分なりの表現で役になりきる様子は、表現することを楽しんでいるのだろうと思えた。はたから見ると、きれいに揃った振付でもなく、一人一人が全く違う踊りや動きをしており、バラバラに見えるのだが、子ども達の中にある『てぶくろ』という大きなイメージは同じで、そこでみんながつながっているようだった。みんなでする最後のダンスの部分などで「こっちがあいているよ」と友達を呼んだり、お互いに顔を見合わせてにっこりしたりしていることから友達と心を合わせる楽しさも感じていたと思われる。それはオペレッタの形式を整えることを目的とするのではなく、自分なりの表現を楽しんでほしい、みんなと心を合わせて遊ぶ楽しさを感じてほしいという教師の願いも達成できたのではないだろうか。

また、オペレッタとしての形を重視していないことから、保護者にとっては戸惑いもあるだろうと考え、オペレッタの取り組みの最初から、ねらいや活動の様子などを折に触れ保護者に話したり手紙に出したりして知らせてきた。そのためか、終了後には形式的なことにこだわった意見はなく、子ども達の心の動きや活動への意欲、そして、当日の子ども達の活動を見て感じたことなどを教師に伝えてきた保護者が多くおり、オペレッタという行事を通して園の生活への理解が深まったと考える。

<文責 大野>

《引用・参考文献》

※絵本

- ・『三びきのこぶた』<こどものとも傑作集> 福音館書店 訳/瀬田貞二 画/山田三郎
- ・『てぶくろ』 福音館書店 絵/エウゲーニー・M・ラチョフ 訳/うちだりさこ

※オペレッタ

- ・『発表会はおまかせ 劇あそびとミニオペレッタ やっぱりレンガのおうちだね』 ひかりのくに株式会社 をアレンジして使用
- ・『てぶくろ』 株式会社メイト をアレンジして使用

年中 うさぎ組

オペレッタ『三びきのやぎのがらがらどん』を通して

教師の願い・題材を選んだ理由

うさぎ組では、最後の参観日に、『三びきのやぎのがらがらどん』のオペレッタをすることにした。このオペレッタを通して、子ども達みんなが同じイメージの世界を楽しみ、役になりきって表現するなかで、知らず知らずにクラスみんなで心を合わせる喜びを味わったり、いろいろな友達とやりとりを楽しんだりすることを大事にしたいと考えた。

『三びきのやぎのがらがらどん』を選んだのは、繰り返しのあるストーリーで、子ども達がイメージしやすいこと、加えて、最後にトロールを倒す大きいヤギが出てくるストーリーが、強いもの、大きいものに強い憧れがある男児にぴったりであると思ったからである。また、トロールに「食べないで」と懇願する小さいヤギや中くらいヤギには、かわいらしい雰囲気があり、女兒も進んで表現してみたくなるのではないかとも思ったからである。

参観日当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・）や子ども様子（☆）
1/30	月	・教師が演じる「三びきのやぎのがらがらどん」を見る。エピソード① ☆やりたい子どもが集まってがらがらどんごっこをする。
1/31	火	・クラスみんなでがらがらどんごっこをする。エピソード② ☆喜んで参加する子ども達もいれば、様子を見ている子ども達もいる。
2/1	水	・トロールの住んでいる“山の岩場”を背景に出してみる。エピソード③
2/2	木	
2/3	金	・やってみたい役を選んでみる。エピソード④
2/6	月	・年長組のオペレッタを見る。
2/7	火	・クラスみんなでがらがらどんごっこをする。 ☆喜んで参加する子ども達もいれば、様子を見ている子ども達もいる。
2/8	水	☆オペレッタの曲に合わせてカスタネットを鳴らす子ども達の姿が見られる。 エピソード⑤
2/9	木	↓

2/10	金	・クラスみんなでがらがらどんごっこをする。☆初めての全員参加 衣装をつけてみる エピソード⑥
2/13	月	
2/14	火	・お客さん(年少組)に見てもらってクラスみんなでがらがらどんごっこをする。(見せることを意識した配置で) エピソード⑦
2/15	水	
2/16	木	・お客さん(年長組・年中うめ組)に見てもらってクラスみんなでがらがらどんごっこをする。 (見せることを意識した配置で) エピソード⑦
2/17	金	参観日当日 エピソード⑧
2/20	月	☆参観日が終わった後も、好きな子ども達が集まってがらがらどんごっこをする。
2/21	火	
2/22	水	
2/23	木	
2/24	金	

Episode

参観日当日までのエピソード

エピソード① はじめてのがらがらどん 1月30日

片付けの時間、「弁当の前に、がらがらどんショーするよ」と子ども達に知らせておいた。弁当の用意ができ、着席した子ども達を前にして、オペレッタ『三びきのやぎのがらがらどん』のCD(セリフ入り)の曲をかけ、教師の1人4役で、お面を付け替えながら、橋に見立てた長椅子を渡ったり踊ったりして演じて見せた。にぎやかなクラスなので、お面を慌てて付け替える教師の一人舞台に、笑いが起こったりするかなと思っていたが、子ども達は息を呑むように、教師のオペレッタ(CDブックを生かして教師がアレンジしたもの)に見入っていた。

見終わった後、マミコが「マミコも、がらがらどんしたい」と言いに来たので、弁当の後ですることにした。弁当を食べ終わったマミコと教師がお面をかぶったりしていると、5~6名の女児達も仲間入りしてきた。女児達は、教師の動きを真剣に真似ていた。自分の好きな役だけする子どももいれば、トルル以外の何役もこなしている子どももいた。トルルの出番が近くなると、サトルやタケル、ヨシトもトルルのお面をかぶって「だれだ~橋をガタガタ鳴らすのは~」と仲間入りしてきた。サトルはトルルの出番が終わると、自分の好きな遊びに戻っていた。ヨシトとタケルはお客さん用に椅子を並べ、うめ組(隣のクラスの年中組)や年少組を呼んでいた。並べるだけで満足して、その後は自分の好きな遊びを始めていた。女児は興味をもった子どもが多く、入れ代わり立ち代わり、がらがらどんを教師と一緒にした。



帰りの準備の前にマミコが「この踊り、お母さん達に見せたい」と教師に言いに来たので、参観日があることを知らせ、その時に見せようかと話すと、マミコは納得したようにうなずいた。

<エピソード①より>

子ども達にオペレッタを見せることを見通して、前日にあたる金曜日に絵本『三びきのやぎのがらがらどん』を読み聞かせておいた。そして、がらがらどんのイメージをもったうえで、オペレッタに興味をもつことを願って、教師1人で演じて見せた。子ども達がじっと見ていた様子や、その後早速真似ていた様子から、子ども達が興味をもったことがわかった。「この踊り、お母さん達に見せたい」と言いに来たマミコは、昨年度年少組で『てぶくろ』のオペレッタを参観日に見てもらったことを思い出したのだろう。

エピソード② がらがらどんごっこ 1月31日

子ども達がオペレッタ『三びきのやぎのがらがらどん』ごっこ（以降がらがらどんごっこと呼ぶ）をしたい気持ちになるように、あらかじめ橋に見立てた長椅子やお面を出しておいたためか、登園後、5～6名の女児から「がらがらどんをやりたい」という声上がり、教師も一緒に仲間入りした（男児は15名中、最高で5名くらい参加。満足すると途中でやめていた）。保育室にいる子ども達は、自分の好きな遊びをしながら時折手を止めて、がらがらどんごっこを見ていた。

片付けの声かけをする時、教師は「弁当の前に、みんなでがらがらどんごっこをしようよ」と提案した。がらがらどんごっこに気持ちが動かない子ども達がいることも予想されたので、弁当用のテーブルを出しておき、自分の席でお客さんとなって、他の子ども達のがらがらどんごっこを見ることができるようにした。片付けが終わり、自分の弁当の席を決めた子ども達は、それぞれ自分の好きなお面をかぶったり、橋に見立てた長椅子を渡ってみたりしていた。リキ、リュウタロウ、ヒロ、ゲンキは自分の席に座っていた。カコは、弁当の席を選ぶ時に、一緒に座りたい仲よしと座れないことがいやで、気持ちを取り戻せずにじっと座っていた。予想以上に大きいヤギの希望者が多く、お面が足りなくなって、急きょ補助教諭に作ってもらったが、ダイチはその間気持ちがそれて、廊下で遊び出していた。

以上7名の子ども達は参加せず、18名でのがらがらどんごっことなった。教師は4役全て一緒にしながら、「(橋に見立てた)長椅子のこちらから上がろうか」「小さいヤギが『食べないで』と踊っている時はここで待とうね」「よし、トルルはここに隠れよう」というふうに、曲の流れに合わせて戸惑わずに動くことができるように手短かに知らせていった。

女児はほとんど小さいヤギになった。ココロとこの日初めて参加したタロウは中くらいのヤギを希望し、2人だけで教師を真似て中くらいのヤギになったが、とても恥ずかしそうだった。大きいヤギを希望した男の子達は初めてする子どもがほとんどであったが、大きいヤギになりきっていて、橋に見立てた長椅子が壊れそうなくらいに橋を踏みしめて渡っていた。大きいヤギ達は教師を真似るといふよりも仲間と一緒に動いたり、がらがらどんの世界に入って表現したりすることが楽しい様子で、最後のトルルとの戦いの場面では、教師の振り付けをほとんど真似ずに、橋を降りてトルルと戦う勢いだった。イクヤは教師を真似ず、橋のまわりで自分のがらがらどんの世界に入ったり、みんなの踊る様子をうれしそうに見たりしていた。よく参加していたトルル役の子は橋の下にもぐって準備万端。トルルが登場する物々しい音楽が鳴るとなりきって橋の下から出てきていた。トルルと仲直りをする最後の場面では、女児が教師を真似て手をつないでうれしそうにジャンプするなかで、大きいヤギの1人が“終わった”とばかりにヤギの面を脱いで片付けていると、何人もが右に倣えて面を脱いでいた。

弁当を食べている時、お客さんになってがらがらどんごっこを見ていたゲンキに、どうしてお客さんになったのか聞いてみた。すると、「恥ずかしい…」という返事。ふだんから元気いっぱい自己

主張もしっかりできるゲンキなので、少し意外に思いながら、どの役だったらやってみたいか聞いてみた。すると、トルルということだったので「恥ずかしいんだったら、トルルになって隠れることができる岩を作っちゃよきね（作っておくからね）」と約束した。この日の弁当の後も、女の子達を中心に、がらがらどんごっこが始まった。お客さんだったゲンキは、参加はしないが教師のトルルに何度もちょっかいを出しに来たりしていた。

<エピソード②より>

がらがらどんごっこという呼び名にしたのは、『三びきのヤギのがらがらどん』の呼び名が長いということもあるが、参観日に保護者に見せるための練習として行うオペレッタではなく、子ども達が日々遊んでいるごっこ遊びのように、自ら表現したいと思ったことをクラスみんなでやってほしいという教師の願いも込めたからである。

初めてクラス全員を誘ったので、がらがらどんごっこに参加しない子どもがいるだろうことは予想していた。初めてのことに緊張しやすい子ども達もいるし、直前に何か戸惑いがあると、気持ちを切り替えられない子ども達もいるからである。そこで、あえて強く誘わずにいた。ただ、お面が足りなくて気持ちがそれたダイチには申し訳ないことをした。

初めて大きいヤギになった男児達が、トルルとの戦いで、教師の真似をせず好きになりきっていたが、それほど役に入り込んでいることであるし、ここで訂正するのもおかしいように感じて、声をかけずにいた。その後、自分達で終わりを解釈してお面を脱いでやめていた時も少し驚いたが、子ども達には参観日にお家の人に見せるということは知らせていなかったもので、子どもの立場に立つと、終わりと思っても仕方ないだろうと思直した。

参加しなかったゲンキは「恥ずかしい」と言っていたが、弁当の後のがらがらどんごっこで、教師のトルルにちょっかいを出している姿を見て、本当はとっても興味があるんだなと感じた。

エピソード③ 山の岩場 2月1日

ダンボールに絵の具で岩場を描き、台に固定し、橋を並べた長椅子の近くに配置しておいた。これまでなかったダンボール製の岩場に、登園してきた子ども達は興味津々のようで、「変や〜」と言いながらも、後ろに隠れていた。いつものように女兒中心にがらがらどんごっこが始まると、イクヤはトルルのお面を岩場に2〜3個並べ、曲に合わせて動かしていた。ミナやユミはふだん小さいヤギや中くらいのヤギなのだが、この日はトルルのお面を、イクヤ達と一緒に動かしていた。



<エピソード③より>

山の岩場からトルルのお面を出している子ども達の姿を見ると、絵本のイメージ通りで、それを表そうとしているのだなあと感じた。イクヤをふくめ、オペレッタを始めた頃から、よく『三びきのやぎのがらがらどん』の絵本を見ている姿があり、子どものイメージを大事にしたいと思った。



エピソード④ 「ヒロくんも大きいヤギ」 2月3日

この週、全員を誘ってがらがらどんごっこを行なったのが1回だけだったけれども、うさぎ組最後の参観日にお家の人に見せるということ、子ども達に知らせておくことにした。オペレッタのねらいや内容を知らせるおたよりを保護者に出すので、子ども達が知らないのもどうかと思ったからである。

最後の参観日には、親子の触れ合いや、子ども達の遊びの楽しさにも共感してもらうため、鬼遊びなども計画していたので、弁当前の集まりの時間、子ども達に、うさぎ組最後の参観日（2月17日）には、お家の人と触れ合い遊びや鬼ごっこをして、一緒に遊ぼうと話した。また、うさぎ組みんなで遊んでいるがらがらどんごっこを、お家の人に見てもらおうと伝えた。

参観日の内容を伝えた後、がらがらどんの何の役をしたいのか聞いてみることにした。まだ、役を固定する必要はないと思ったが、数を把握しておいたほうが、舞台の配置や衣装などを考えるにあたって望ましいのではと考えたからである。「がらがらどんで、どの役やりたいか教えてくれる？ 変わってもいいよ。1番目のヤギをしたい人手を挙げて」と順番に聞いていった。30日にはお客さんだったリュウタロウやリキ、ゲンキが大きいヤギに手を挙げていた。手を挙げそびれていたヒロも「ヒロくんも大きいヤギ」と元気な声で言っていた。これまでトロールをしていた男児4名がみんな大きいヤギになったので、「トロール、誰もいないね。どうしよう？」と言う教師の言葉に「先生がやりや」とタケルが言い、まわりも賛同していたので教師がトロールをすることにした。

<エピソード④より>

1月30日に、クラスみんなを誘ったがらがらどんごっこでは参加しなかった子ども達が、みんな大きいヤギを選んだ。これまで好きな遊びの時間にまわりの友達に参加するのを見て、心が動いたのだろうか？ ヒロだけでなく、リュウタロウやリキ達も、上に手をぴんと挙げていたり、まわりの友達とにこにこしていたりする様子から、クラスの友達との仲間意識や強さに憧れる気持ちもあって、これまで恥ずかしかった気持ちがほどけたのではないだろうかとも考える。

トロールの役がいなくなって、教師は仲間に入るべきか、先生はトロールできないんだよと言うべきかと迷ったが、子ども達のごっこ遊びであることを大事にしてきたので、子どもが好きな役をやることを優先し、教師がトロールをすることにした。

エピソード⑤ 橋を鳴らす音をカスタネットで 2月8日

参観日にはがらがらどんごっこの他に、歌と一緒に楽器を鳴らす姿も見てもらおうと考えていたので、2週間前から保育室にカスタネットを置いていた。いつものように女兒中心にがらがらどんごっこが始まっていたところに、外遊びからフミオ達が帰ってきた。そして、棚に置いてあったカスタネットをオペレッタの音楽に合わせて鳴らし始めた。隣のクラスの仲間も加わって、全部で5~6名が夢中になってカスタネットを鳴らしていた。

<エピソード⑤より>

2日後の10日にみんなでがらがらどんごっこをした時、フミオが「(カスタネット) 叩いてもいい？」と尋ねてきたので、「いいよ」と返事をする、仲間がこぞってカスタネットを持ち、叩き始めた。とにかく音楽に合わせて叩くことが楽しい様子で、どの場面でも叩こうとしていた（それも結構上手にリズムに乗って叩いていた）が、せっかくの「食べないで」の曲調には合わないかなと考え、「橋を渡る時だけにせん？」と提案し、以後、がらがらどんごっこの時はヤギ達が橋を渡る音楽の時に、希望者の子どもがカスタネットを鳴らすことにした。

エピソード⑥ みんなの気持ちがひとつになったがらがらどんごっこ 2月7日・10日

7日には、全員を誘ってがらがらどんごっこを行なった。この日から、子ども達が自分の出番でない時にも、他の子どもの踊りを見たり、小さいヤギと中くらいのヤギが、大きいヤギとトルロが戦うのを応援したり、子ども達が一体感を味わうことができるようにと考え、橋に見立てた長椅子に加えて、子どもが座る椅子を橋と対面するようにU字型に配置するようにした。

7日に続いて、10日もみんなを誘ってがらがらどんごっこをすることにした。子ども達と一緒に橋に見立てた長椅子や、子ども達の座席用の椅子を並べた。トルロ役の子ども達がみんな大きいヤギになったことや、7日からほとんど全員が参加するようになったので、隣のクラスから借りておいた長椅子も並べ、Uの字型の橋になった。それでもオープニングで全員が舞台に立ってみた時、橋が足りないことがわかったので、「じゃあ、今日は足りない分を積み木で橋にしようか」と言い、中型積み木の直方体を3つくらい並べた。

オペレッタの途中、「いいこと考えた」という表情のダイチが、中型積み木を足して長椅子の橋につなげたので、橋は楕円形になった。子どもはあまり戸惑いもなく、いつもの場所から橋が上がっていたので、そのままにしておいた。

イクヤはこれまで自分なりに参加していたが、橋に上がることはなかった。この日は、参加しようとしなかったが、教師の強い勧めで大きいヤギの面をかぶっていた。教師は子ども達と一緒に踊りながら「イクヤくんも一緒にしようよ」と誘った。「わかったわえ」と少し反抗的な返事が来たので、どうかなと思っていたが、気がつく最後のフィナーレではイクヤも参加していた。この日は欠席者がいなかったことと、ダイチのアイデアで橋がつながって楕円形になっていたこともあり、フィナーレでは全員で（教師も）、大きい円になって手をつなぎ、橋の上でリズムに乗ってジャンプした。子ども達の表情もジャンプのように弾むような笑顔だった。最後までお家の人に見てもらおうと伝えていたので、フィナーレでやめる子どももおらず、みんなで手をつないで、音楽に合わせて、終わりのあいさつ（みんなで手をつないだまま両手を上げておいて、両手を下ろしながらお辞儀をする）も終わった。みんなほんわか笑顔だった。



<エピソード⑥より>

オペレッタの本の振り付けを参考にしているが、オープニングとエンディングの振り付けはみんなの心がひとつになるように手をつなぐようにした。また、以前このオペレッタをした時に、手をつないで音楽に合わせてジャンプすることがとても好きだったし、一体感が味わいやすいだろうと考えて、オープニングとエンディングではみんなで手をつないでジャンプするようにした。子ども達の表情を見ていると、本当に音楽に合わせてジャンプすることが楽しいようで、ジャンプによって心が弾み、手をつないで一緒にジャンプをすることで一体感を味わっているように感じた。

この日、偶然も手伝って全員が円になって手をつないでフィナーレを迎えられ、子ども達が知らず知らずのうちに心をひとつにする経験ができたのではないかと考えた。参観日は1週間先であるが、このオペレッタを通したねらいは達成できたように思った。

エピソード⑦ お客さんに見てもらって 2月14日・16日

14日には年少組が、16日には隣のうめ組（年中組）全員と、希望者の年長組の子ども達に見に来てもらった。お客さんに見に来てもらったほうが、子ども達もオペレッタをやりたい気持ちがよりふくらむのではないかと考えたからである。小さいヤギと中くらいのヤギの女の子達は緊張した面持ちで、いつもより「食べないで」と、はかなそうに見えた。大きいヤギ（男児15名、女児3名）も

教師の振り付けを真似るようになってきて、そのうえ、みんなで「めえ～」と声を張り上げて踊る楽しさがわかってきたのか、一体感のようなものが生まれていた。カスタネットを叩くタイミングや椅子の下に片付けるタイミングはこれまで教師が知らせていたが、男児達が「そろそろ出して」などと教え合っていた。教師は子ども達が緊張せずに元気よく演じることができるように、全ての役を端の方で演じていた。



フィナーレでも教師が端の方で演じていると「先生、手つながんが？」とリキが言ってきた。ヤギに謝ったトロールが、仲直りして、ヤギ達と手をつないでフィナーレを迎えるのだが、教師はそのことを忘れていたので、リキが教えてくれたのである。

終わった後に、お客さんになってくれた子ども達に感想を聞いてみた。すると、年長組の子ども達はオペレッタのよかったところを、一生懸命考えて語ってくれた。年長組のお褒めの言葉をうれし恥ずかしといった様子で聞いている子どももいたが、ほとんどの子ども達が、あまりぴんときていない様子だった。

<エピソード⑦より>

この週は、お家の方に見てもらいやすいことを考えて、橋に見立てた長椅子の配置を考えたり、踊る場所を名前シールで決めたりした。年中組は保育室でオペレッタをするので、保護者の方に見てもらいやすいように、橋を2箇所に分けることにした。後ろの長椅子と巧技台が全部で18名になった大きいヤギの橋。手前の巧技台が小さいヤギと中くらいのヤギの橋。(参観日当日は橋の絵を描いたダンボールは使用しなかった) 順番に並んで出やすいように、名前シールで子ども達の座席を決めておいた。(橋と対面して椅子をU字に並べた) 子ども達には、どうしてそのようにしたかを説明した。また、衣装も子ども達が好きそうな青、ピンク、白を用意した。最初は、役によって色を決めようと考えたが、女の子はピンクの希望者が多いようだったし、大きいヤギに3名女兒もいるので、あえて一緒にしなかった。(やはり女兒10名中9名ピンク、1名白、男児は全員青だった)

立ち位置や座席も決めたことで、参観日に保護者に見てもらいやすい環境になったと思うし、振り付けも揃ってきたが、場所の都合で橋を2つに分けたので、子ども達がみんなで手をつなぐ経験はできず、見せるためのオペレッタになってきたなど感じ、複雑であった。しかし、カスタネットを叩くタイミングなどを教え合ったり、教師に「手をつながんが？」と言ったりする様子から、子ども達の遊びになっていることを感じた。

お客さんと呼ばれに行く時ははりきっていたが、褒められてもぴんときていない様子から、見せたい気持ちよりも、自分達が楽しいことの方が中心なんだなと思った。

エピソード⑧ 参観日当日の様子 2月17日

これまでかかさず、がらがらどんごっこに参加してとても元気だったヨウタが、この日は体調不良で参加しなかった。でも、あとでは元気になり、母親の話によると、緊張したのかもしれないとのこと。

他の子ども達は、ちょっぴり緊張した様子の子もいれば、いつも通り元気いっぱい表現している子どももいた。保護者の話では、家でも踊っていた子どもが多く、幼稚園でお家の人に見てもらうことを楽しみにしていたこともうかがえた。保護者に園での様子を見てもらい、連携を図るための参観日だが、子ども達にとっても、大好きな保護者に見てもらえてうれしい日だったようだ。



全体を通して

子ども達が主役で、自分達の楽しみのための表現遊びをしたい、子ども達がやらされているというより、“今日もがらがらどんごっこしたい”という遊びにしたかった。大まかには1週目はオペレッタを知る時期、2週目は形にこだわらずにやってみる時期、3週目はお家の人に見てもらおうことを見通して配置などを考える時期の3つに分けることで、無理なく取り組むことができたように思う。

劇遊びか、音楽入りのCDを利用したオペレッタか、取り組むにあたって悩んだ。子ども達の言葉によるやりとりも経験させたいと考えていたからである。しかし、うさぎ組の子ども達、特に男児は発想も豊かで遊びも楽しく、仲間意識もあるが、その分自己もはっきり主張して譲らず、時折ぶつか



たり、遊びから集まりに気持ちを切り替えにくかったりする姿もあった。よほど上手に雰囲気づくりや環境構成をしたり、あるいは叱咤激励したりしないと、劇遊びにならないような気がした。そこでオペレッタの音楽の力を借りることにした。音楽が雰囲気づくりをしてくれるので、教師があれこれイメージを想起させなくても、子ども達は自然に役に入っていたように思う。がらがらどんごっこが始まるまでは、予想通り、男児は気持ちを切り替えにくく、わいわいしていたが、音楽がかかる

と一変して、仲間と声をかけ合ってカスタネットを叩いたり、役に入り込んだりしている姿から、子ども達には音楽入りCDを利用したオペレッタが合っていたように思う。強く、大きく見られたい気持ちがいっぱいの中児にとっては、強い大きいヤギが出てくるがらがらどんごっこを選んだことも適当であったと思う。

好きな遊びの時間に、好きな子ども達が行うがらがらどんごっこは女児から「やりたい」という声がよく上がっていた。参観日が終わっても1週間は、誘い合っていてがらがらどんごっこをしていた。女児が男児に比べて少なく、2学期に比べていろいろな友達とかかわる姿が見られていたが、その分、「今日、遊ぶ人おらん」と困っている子ども達もいたので、がらがらどんごっこで女児がつながったことはとてもうれしかった。



<文責 鎌倉>

《引用・参考文献》

※絵本

- ・『三びきのやぎのがらがらどん』福音館書店 作/北欧民話 絵/マーシャ・ブラウン 訳/瀬田貞二

※オペレッタ

- ・オペレッタ『さんびきのやぎのがらがらどん』株式会社メイト をアレンジして使用

オペレッタ『やっぱり レンガのおうちだね』を通して

教師の願い・題材を選んだ理由

うめ組では、2月17日にある年中最後の参観日で、『三びきのこぶた』をモチーフとした『やっぱり レンガのおうちだね』のオペレッタをすることにした。このオペレッタには、こぶたの代わりに森の動物達が登場する。たくさんの動物のなかで、自分の好きなものをイメージしてなりきることを楽しんだり、全員が同じイメージを共有しながらひとつの場所に集まることで、ふだんかかわったことのない子ども達ともかかわりがもてるのではないかと思ったからだ。また、オオカミという強い動物がいることで、強さに憧れのある男児もやってみてみたいと思えるのではないかと考えた。

参観日当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・） 子どもの様子（☆）
1/23	月	・紙芝居『三びきのこぶた』の読み聞かせをする。 ・手遊び『三匹のこぶた』をする。
1/24	火	}
1/25	水	
1/26	木	
1/27	金	
1/30	月	↓
1/31	火	・曲をかけて教師が演じてみる。☆踊りの好きな女兒は教師を真似てする。 エピソード②
2/1	水	
2/2	木	・お面をかぶりお弁当の前にやりたい子どもだけです。
2/3	金	
2/6	月	・藁の家、レンガの家を保育室に出す。木の家をみんなで塗る。 ☆家を使ってままごとをして楽しむ。 エピソード③
2/7	火	・衣装を着てやってみる。 ☆歌いながら演じる子どもが増えてきた。 エピソード④
2/8	水	
2/9	木	↓
2/10	金	・年少組の子ども達にお客さんになってもらい見てもらう。 エピソード⑤
2/13	月	
2/14	火	
2/15	水	↓
2/16	木	・年長組、隣の年中組の子ども達にお客さんになって見てもらう。
2/17	金	↓ ・参観日当日 エピソード⑥

参観日当日までのエピソード

エピソード① 『三びきのこぶた』の紙芝居を読んで 1月23日～27日

降園活動時に、うめ組全員を集めて『三びきのこぶた』の紙芝居を読むことにした。紙芝居を読むと子ども達はとても真剣な眼差しで紙芝居を見つめていた。オオカミがこぶたの家を次々に吹き飛ばすところや、三びきのこぶたが逃げていくところ、最後にオオカミが煮立った鍋の中に入るところなどがおもしろかったようで「先生、もう一回読んで！」と言われ、それから2、3日続けてお帰りの時間に『三びきのこぶた』を読んだ。また、紙芝居と同じように三びきのこぶたの手遊びも好きで、教師が始めるとみんな笑顔でしている。セイジやカナトは手遊びが気に入ったようで、手遊びの歌を歌いながら自分達なりに表現する様子も見られた。



<エピソード①より>

紙芝居を読むことで、子ども達の中で『三匹のこぶた』の話がイメージされやすかったのではなかったのではないかと思う。また、紙芝居だけでなく、動作化することで、よりオペレッタへとつなげやすくするために、手遊びでも三匹のこぶたを取り入れた。そうすることでより話に興味が出てきたようだった。ふだんの遊びのなかでも、セイジやカナトのように手遊びを作り変えて表現する姿もあったことから、自分達のイメージを自分達なりに表現してみたいと思ったのだと考えた。

エピソード② 「その動物しかしたくない」 1月31日



子ども達が遊んでいる時に教師が「オペレッタのダンスしてみるね」と言って音楽をかけてやってみた。すると、数人のダンスが好きな女児達が教師の踊りを見よう見真似でしようとする姿が見られた。「上手だね」と言うときここ笑いながら楽しそうにしている様子があった。何回かした後、「運動会のダンスがしたい」という声が出たので、そこからは子ども達の好きなダンスになっていった。男児は「ぼくは絶対やらん」と言って遊んでいたが、興味はあるようで教師や女児のオペレッタの様子を見ながら遊んでいた。この日、子ども達に「このオペレッタにはたくさんの森の動物が出てくるがやけど、何の動物が好き？」と少しでもみんな楽しんでできるように好きな動物を聞くことにした。子ども達は「うさぎ」や「りす」、「ライオン」といった自分の好きな動物をあげていた。仲よしの友達と同じにしたい子どもも多く、「私も！一緒にやろうね」と声をかける姿が見られた。

翌日、人気だった動物のお面を教師が作って出すと、ほとんどの子ども達は喜んだが、マサヨやタエは好きな動物がないことで「その動物しかしたくない」と言ってオペレッタには参加しなかった。マサヨは「馬」、タエは「パンダ」と言ったので、馬とパンダのお面を準備して翌日出した。すると、自分の好きな動物のお面をかぶってうれしそうに踊っている姿が見られた。

<エピソード②より>

好きな動物を子ども達に聞くようにしたことで、お面をかぶって演じることを楽しみにしている様子が見られていた。好きな動物のお面がなくてオペレッタに参加したくない子どももいたことから、子どもの好きな動物になりきりたい気持ちを大切にすべきであると改めて考えさせられた。その子どもの好きな動物のお面を作り渡すと、うれしそうにしていた。その様子を見ると、まずなるなら好きな動物がいいという気持ちが強いのではないかと思われた。マサヨやタエも2、3日後には仲よしの友達と同じお面をかぶって演じる姿もあったことから、好きな動物になりきって友達と一緒にオペレッタをするなかで、仲よしの友達と一緒に同じ動物になりきりたい気持ちが芽生えたのではないかと考えた。

エピソード③ 「ぼくは家を持つ役だから」 2月6日～2月9日

藁の家とレンガの家を以前に誕生会の出し物用で作ったものがあったので、それを保育室に出してみることにした。すると、お面をかぶって藁の家やレンガの家を使ってごっこ遊びを始める子どもの姿があった。木の家はなかったので補助教諭に下絵を描いてもらい、それを子ども達と一緒に絵の具で塗ることにした。線を気にせず、好きなように塗っている子どももいたが、「もっときれいに塗ろう」と言うミホやユツキの声がけで線を見ながら塗る子どもも増えた。



お弁当の前に全員を誘ってオペレッタをしていたが、やりたくない子ども達が数人いたので、観客になって見ることを教師が提案した。観客になった子ども達に「今日は観客さんにお仕事があるよ。動物さんが隠れやすいようにお家を持ってもらってもいい？」と言うと、観客になっていた子ども達はうれしそうに「やる!」と言って家を持っていた。それから何日かやらないという子どもには、家を持ってもらいながらやっていた。カンタは特に楽しんでおり、いつも藁の家を持ち、とてもうれしそうにしていた。動物役の子も達が隠れやすいように家を持ったり、オオカミが息を吹いたと同時に家を倒したりすることが楽しかったようだった。それを見ていた子ども達も家を持つことに魅力を感じたようで、家を持つ役になる子どもが多くなりつつあった。そこで、「今日からは全員でしてみよう」と教師が提案すると、家を持つことを喜んでいていたカンタが「ぼくは家を持つ役だから」と言ってなかなか入ってこなかった。動物の役をやりたそうに見てはいるのだが、その日からずっと観客としてオペレッタをするのを見ていた。「何かしたい役ない？」と声をかけてみても「やらん」と首を振っていた。カンタの母親から、カンタは最初にやった役から変えたらいけないと思っていたことと、動物をやるなら犬をやりたいということを教えてもらい、役を変わってもかまわないことを母親からも伝えてもらうようにした。教師からも同じようにカンタに伝えると、「うん! わかった」と言って犬のお面をかぶり、動物役の子も達と一緒に並んで楽しそうにやっていた。

<エピソード③より>

『やっぱり レンガのおうちだね』に出てくる藁の家、木の家、レンガの家の環境を用意したことで、より話の世界に入り込みやすかったのではないかと思われる。また、みんなが家に集まりぎゅうぎゅうになりながらもオオカミから隠れようすることも楽しむことができたのではないだろうか。家を観客が持つことを提案したのは、みんなですべてのひとりのことをする楽しさを味わってもらいたいと思ったからである。また、木の家を自分達で色を塗ったことで、「自分達で作ったんだ」という気持ちになったり、友達と一緒にする楽しさも味わったりすることで、そこからまたオペレッタをすることを楽しめるのではないかと考えたからだ。

カンタは最初にした家を持つ役が楽しかったのと、最初にした役から違う役に変えてはいけないうちから、やりたくても入りづらかったのではないかと感じた。教師の「全員でしてみよう」という提案はカンタにとっては不安になった言葉だったのだろうと思う。家を持ちたいという気持ちを受けとめていきながら、カンタと接していけばもっと楽しんで参加できたのではないだろうか。母親にも協力してもらい、違う役をしてもいいとわかったことで、安心して友達と一緒に参加をしていた。うめ組のほとんどの子ども達が日によって役を変えて、違う動物になることを楽しんでいて、仲がいい友達に合わせたり、自分の好きな動物にしてみたりしながらいろいろな動物になることを楽しんでいるようだった。そのこともあり、カンタの気持ちに気づくことが遅くなったように思う。子ども一人一人の気持ちに目を向けていくことでより多くの子ども達が楽しく表現できるのではないかと感じた。

エピソード④ 「いや！ 踊りたくない」歌いながら踊る子どもが増えてきたなかで 2月7日

ヒロシ、マサシ、カズヤ、ユウマの4人はずっと観客として歌いながら見ていた。「1回だけでも一緒に踊ってみん？」と誘うが「いや！ 踊りたくない」と言って、観客として参加をしていた。この日、片付けの時にヒロシ達4人がオオカミのお面をかぶって「オオカミだー！」と言って遊ぶ姿があった。教師は「よし、じゃあオオカミさん。オオカミさんの力で積み木を片付けてきて」と声をかけると「わかった！」と力強く返事をしてオオカミになりきって、積み木を片付けていた。その日以降、ヒロシ達はオオカミの役を毎日のようにやるようになった。オオカミが出てくるまでの動物達の出番の時も友達の踊りを見て楽しそうに踊る姿があった。

<エピソード④より>

最初は、友達や教師の前で表現することを恥ずかしがってずっと「踊りたくない」と言っていたヒロシ達だったが、観客で見ている時に、歌を歌ったり、前で演じている友達を見ながら一緒に真似る姿が見られていたので、やりたい気持ちもあるのだと感じた。そのなかで、オオカミが家を吹き飛ばす様子やレンガを吹き飛ばそうとしたが、息を吹きすぎて目がまわって倒れる様子などがおもしろかったのと、動物達を「食べちゃうぞー」と言いながら追いかける様子からオオカミが強いと感じたことでオオカミをやりたいと思ったようだ。片付けの時の教師の声がけから、よりオオカミになりきっている姿が見られた。また、友達が演じているのを見て真似ている様子から、恥ずかしさからやりたいけどやりたくないという葛藤があったのだと考えられる。しかし、一回やってみたことで、楽しさにも気づき、毎日のように楽しんでするようになったのだと思う。みんなでやる時にでも友達と一緒にする様子から、友達と一緒にひとつのことをする楽しさを味わっているのではないかと思われた。



エピソード⑤ お客さんに見に来てもらうことではりきっていた子ども達 2月9日・10日

9日、インフルエンザで長く休んでいたアキラが登園してきた。いつものようにお弁当前にオペレッタをやる準備を子ども達がしている様子を見ながら「何するが？」と声をかけてきた。「『やっぱりレンガのおうちだね』っていうのをみんなで今からするがやけど、アキラ君どうする？」と聞くと「俺はやらんき、見よる」と言って後ろにある積み木の上に座って仲よしのツトムやカントと一緒に見ていた。

10日、もも組の子ども達が観客として見に来てくれることになっていた。子ども達のほとんどが

はりきって「ももさんの椅子いくついるか聞きに行こう」と言ってもも組の人数を聞きに行ったり、「準備できたき、誰か呼びに行ってきた」と声をかけると「行く！」とほとんどの子ども達がうれしそうに走ってもも組の子ども達を呼びに行っていた。初めてうめ組以外の子ども達や教師に見てもらおうということもあり、この日はうめ組の観客は1人もおらず、長く休んで不安がっていたアキラもお面をかぶって、まわりの友達や前で演じる教師を見ながらやっていた。オペレッタが終わるともも組の子ども達から「おもしろかった」や「ありがとう」という言葉をもらい、「どういたしまして」「見に来てくれてありがとう」ととても満足したようにニコニコと笑いながら答えていた。

<エピソード⑤より>

アキラはオペレッタをやり始めた頃から休んでいたことで、みんながしていることがわからず、友達がしている中に入っていきづらかったのだと思われる。しかし、年少組の子ども達が見に来てくれると知り、どうやってするかもわからないまま不安もあったとは思いますが、うめ組の子ども達のほとんどがはりきっていたことでアキラも一緒にやってみようと思えたのではないだろうか。また、年少組の子ども達から「おもしろかった」や「ありがとう」という言葉をもらったことで、「もっと見せたい」という気持ちになったのではないかと思われた。また、うれしかったと同時に達成感も感じていたようで、子ども達それぞれがニコニコしていてとても満足していたように思う。椅子を用意したり、呼びに行ったりする姿から、とてもはりきっていることがわかった。

参観日前日にも年長組や隣の年中組の子ども達に見てもらい、緊張もしていたが誰かに見ってもらうことで、自信にもつながり、「がんばってやった！」という達成感も味わえるのだと感じた。また、子ども達の気持ちが「見てもらいたい」という気持ちになったのだと思われる。参観日当日には大好きな家の人に見てもらおうことでより満足感や達成感が味わえ、みんなでする楽しさも感じられるのではないかと考えた。

エピソード⑥ 参観日当日の様子 2月17日

お家の方に見てもらうことを楽しみにしていた子ども達だったが、当日になるととても緊張していたり、恥ずかしがっていたりしている子ども達が多かった。しかし、オペレッタの曲が始まるといつもより大きな声で歌ったり、大きく体を動かしたりする様子も見られて、とてもはりきっている姿が見られた。なかには、前日まではしていたけれど、見られるのが恥ずかしくて最初のうちはやっていない子どももいたが、曲が進むにつれて緊張もとけてきたようで、ほとんどの子ども達が笑顔で踊っている姿が見られた。特に、オオカミが追いかける場面は、動物もオオカミも一緒になって楽しそうに部屋の中を走っていて、自分達なりにイメージをしているいろいろな友達ともかかわれているなど感じた。



保護者からも「楽しそうにしている姿が見えてよかった」という声がたくさん聞かれ、子ども達の楽しそうにする姿が保護者にも伝わり、よかったと思う。

全体を通して

このオペレッタには、オオカミと森の動物達が登場する。強いものへの憧れがある男児も多く、オオカミがいることで男児にもぴったりの題材であったと思う。女兒はふだんの遊びのなかでも、自分の好きな曲をかけて好きなヒロインになりきって演じることを楽しんでいた。そこから、好きな動物になりきって演じることができたことは女兒にとってもちょうどよかったのではないだろうか。

お面をいつでもつけることができるように出しておく、お面をつけてその動物になりきってピクニックへ行ったり、ままごとをしたりする子どもの姿が見られたので、家も出してみた。すると、子ども達のイメージがふくらみ、オペレッタやままごとでも、隠れる場所になったり、家の中に友達と一緒に自分達の場所を作ったりする姿が見られた。このように、お面と家の両方を用意したことで、子ども達のイメージがふくらみ、子ども達がオペレッタだけでなくふだんの遊びのなかでも何かになりきる楽しさや、同じ場所で遊ぶ楽しさを味わえたように思う。このことから、オペレッタとふだんの遊びが相互に作用していく様子を目の当たりにし驚くとともに、オペレッタとふだんの遊びを切り離して考えるべきではないことがわかった。

オペレッタをお弁当の前にするということは決めていたが、子ども達から「やりたい」という声が出た日にやろうと考えていた。すると、「先生、今日はせんが？」や「今日もしたい」という声が毎日のようにあり、やりたい子ども達だけでやることになった。する子どもはだいたい決まっていたが、観客として見ていた子ども達も一緒に歌を歌ったり、踊りを踊ったりすることで全員がひとつのイメージをもってしていることが感じられた。

当日は、全員がオペレッタに参加し、保護者に見てもらうことでとてもはりきっている様子が見られた。オオカミと動物達が走る場面は、とても楽しそうにする姿があり、自分達なりにイメージをして表現していた。また、友達と一緒にイメージを共有して同じ動きをすることで、ふだんかかわれない友達ともかかわりがもてたのではないかと思われる。そして、年少組や年中、年長組の子ども達や、保護者に見てもらったことで達成感を味わい、自信をもつことにもつながったのではないかと感じる。

<文責 富田>

《引用・参考文献》

※紙芝居

- 『世界の名作 三びきのこぶた』 株式会社童心社 原作／イギリス民話 脚本／川崎大治 画／福田岩緒

※オペレッタ

- 『発表会はおまかせ 劇あそびとミニオペレッタ やっぱりレンガのおうちだね』 ひかりのくに株式会社 著／浅野ななみ をアレンジして使用

年長 はと組

オペレッタ『いつまでもともだち』を通して

教師の願い・題材選択の理由

今年度のはと組の子ども達は、クラス全体で何かをするという時にそれをいやがったりする様子がほとんどなく、自分なりに楽しさを見出して取り組むことができる子ども達が多かった。だが、一斉の中で一人一人の様子を注意深く見ていくと、そこまで乗り気ではないが、自分にとって居心地が悪いわけではないので、まわりにならってそこで過ごしているような子どもの姿も見受けられた。

今回のオペレッタでも、教師からの提案やペースで促せば、おそらく内心はいやでもやっていくのではないかと思われたので、そのような状態で何となく進めていくのではなく、一人一人の子どもが気持ちのうえできちんと参加して、いろいろなことに納得していきながら進めてほしいと願った。

そこで、これまでに子ども達が楽しんだ絵本をピックアップし、子ども達と一緒にオペレッタで何



をするかを決めていくようにした。その際、題材選択のポイントとして、以下の3つの点に配慮した。1つ目は、物語の登場人物が、役柄や性格なども含めて様々な個性をもっており、子ども達がそれらを自分で感じて選んでいけるような内容であるかということ。2つ目は、子ども達が、これまでに自分の中にため込んできた表現の経験を生かして、物語の登場人物になりきったり、自分なりの表現を楽しんだりすることができるような題材であるかということ。そして3つ目に、物語の構成が最終的にひとつの目的に向かっていくような内容であり、年長時期に育てていきたい“みんなでひとつのことをやり遂げる喜びを感じる”という目標に沿っているものであるかということである。

以上のような配慮をもとに進めていくなかで、例えば“どの役になりたいか？”という配役なども、できる限り子ども達の思いや意見を引き出して尊重していくようにし、一緒に考えていくようにした。なお、こちらから提案していった方がよいのではと教師が判断した際にも、子ども達がそれでいいと納得していけるように、できるだけわかりやすく説明を加えていくなどの配慮をしていった。

参観日当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・）や子どもの様子（☆）
1/17	火	・子ども達に、『いつまでもともだち』『ほがらか森のくぬぎの木』『うみにぽっかりくじらじま』の絵本を読み聞かせる。
1/18	水	↓
1/19	木	・子ども達と一緒に、どの絵本のオペレッタをやりたいかを話し合い、『いつまでもともだち』のオペレッタに決定する。 エピソード①
1/20	金	・子ども達に、初めてオペレッタの踊りを見せる。
1/23	月	・いろいろな役を試しながら、オペレッタの楽しさやおもしろさを感じていけるようにする。
1/24	火	↓
1/25	水	↓
1/26	木	↓
1/30	月	・子ども達が参観日当日にしたい役を決める。 エピソード③
1/31	火	☆それぞれの役で、動物のお面を作る。
2/1	水	☆舞台の背景（カシの木）を、絵の具で塗って作る。
2/2	木	・決まった配役で、遊戯室でオペレッタをする。
2/3	金	↓
2/6	月	☆それぞれの役の衣装に飾り付けをする。
2/7	火	☆舞台の背景（キラキラステージの星空）を、星の形を貼って作る。
2/8	水	・参観日当日に向けて、遊戯室でオペレッタをする。
2/9	木	↓
2/10	金	・下のクラスに見てもらう。
2/13	月	・年長組合同でリハーサル。
2/14	火	・参観日当日 エピソード④

参観日当日までのエピソード

エピソード① 子ども達と一緒にオペレッタを決める 1月17日～1月19日

1月17日・18日 子ども達に『ほがらか森のくぬぎの木』『いつまでもともだち』『うみにぼっかりくじらじま』の3冊を読み聞かせた。それぞれの物語の楽しさを味わったうえで、子ども達に、「みんなが好きだったこの絵本の中から、お家の人に見せる劇をどれにするか決めよう」と話した。みんなで集まった時に、まず「どれがいいと思う？」と聞いてみた。予想した通り希望が分かれたので、「こういう時、どうしたらいいやろうねえ？」と投げかけると、小学校に兄がいるダイスケが、「多数決で決めたらいい」と言った。教師が「ダイスケくん、難しいことよく知っちゃうね」と驚いて伝えると、他の子ども達から「どういうこと？」というような質問の声が上がった。教師は、「みんなで1つのものを決めたい時、もし意見がわかれてしまったら、一人一人が一番好きなものを紙に書いて、その紙の数が多いいものに決めるっていうやり方があるがよ。それが今、ダイスケ君が言った多数決っていうやり方。小学校のお兄さんやお姉さんがよくやりゆうね」と多数決のやり方を説明した。子ども達の中から「それで決めたい」という声が上がったが、教師は「そうか、やってみてもいいね。でもその決め方は、小学生のお兄さんやお姉さんでも難しいことがあるがよ。そのことをみんなができるやろか？」と共感しつつも、すぐにやろうとは言わなかった。子ども達何人かが、「できるき教えて」と言ってきたので、教師は「一番好きなものを選んで、その数が多いい方に決めるってことは、もしかしたら一番好きなものを書いたのに、自分の数が少なかったら代表にならないこともあるってことながよ。もしそうなったら、一番じゃないけど他のお話で劇やってあげられる？」と手振りをつけながらゆっくりと話した。そう話した結果、子ども達からは「それでいい」という声が聞かれたので、「じゃあ、自分の好きなものを書いて、選ばれた人はそうじゃない人に“ありがとう”の気持ちをちゃんと伝えてあげてね。それで選ばれなかった人は、残念だし悔しいと思うけど、違う劇だったら自分が何ができるか考えてみようね」と声をかけた。

1月19日 そのような相談をした翌日、子ども達に3つの絵本の名前を書いた用紙（子どもの氏名印もあらかじめ押しておいた）と鉛筆を配り、ホワイトボードに貼ったそれぞれの絵本の表紙のコピーと対応させながら、「3つの中から1つを選んで、（絵本の題名の）上の四角の中に○をしてね」と伝えた。

開票をその日の当番グループにお願いした。そして、教師がホワイトボードのそれぞれの絵の下に、子どもの名前入りのマグネットを貼っていった。段々と数が増えて、追い越したり抜かれたりする度にわあっと歓声が上がったが、結果、3つともあまり差がない形で、『いつまでもともだち』が少しだけ多かった。

全員の票が出終わった後で、教師は「じゃあ、はと組の劇は『いつまでもともだち』になったよ。選ばれた人は、他の人に“ありがとう”の気持ちを忘れずにね。選ばれなかった人は“やりたかったな”って気持ちがあると思うけど、この劇にもきっと好きな役があると思うき、先生楽しみにしてるからね」と伝えた。選ばれなかった子ども達に多少がっかりした感じはあったものの、「いやだ」とか「やりたくない」と言ってくる子どもの姿は幸いなかった。

<エピソード①より>

子ども達に納得してオペレッタを進めてほしいと思ったので、題材はみんなで一緒に決めることにした。前述の題材選択のポイントを考慮したうえで、精選した3つの絵本を子ども達に読み聞かせた。3つとも、物語のおもしろさがたくさんあり、登場人物も、“やってみよう”という魅力が感じられ

る役が多いので、子ども達の希望は分かれるだろうと予想された。また、3つを1つにしぼっていく方法については、ふだんの様子から、じゃんけんで決める、どうしてもやりたい子どもが他の子ども達にお願いして決める、教師も話に入ってみんなで一緒に相談する、などの方法が出るのが予想された。ただ、これまでに当番のグループをくじ引きで決めたり、大勢での遊びのなかで、長縄の跳んだ数など、多い少ないで競って遊んだりしたこともあるので、くじ引きや多数決という方法も出るかもしれないと感じていた。どちらにしても教師は、子ども達の様子や反応を見ながら、よりよい方法を一緒に模索し、子ども達が納得して決めていけるように、必要な環境づくりやかかわりをしていこうと考えていた。

実際には兄や姉がいる子どもが多いこともあり、多数決を行うことになった。そこで、年長児がそのやり方をよりよく理解して、結果にも納得することができ、決まった後にできるだけスムーズに気持ちを切り替えていくことができるよう、必要な支援を前もって準備していった。具体的には、絵本の名前入りの用紙に氏名印を押したものを準備し、○を書けば投票できるようにしたこと、そして、ホワイトボードには表紙のコピーを貼り、どの絵本の票が入ったかが一目でわかるようにしたこと、さらに「正」の字の代わりに一人一人のマグネットを貼っていき、クラスの子も実際に投票して、その結果、数が増えていっていることを実感できるようにしたことなどである。

年長児にとって、多数決がよい方法なのかどうかはわからないが、小学校以降でやっている方法を、幼稚園向きにアレンジすることで、不満や怒りといった負の感情が多くなるのではなく、ある程度納得して次に進むことはできた。教師にとっても、子ども達からその様子を見ることができたのは、今後、何かを決める時に、様々なやり方を予想したり、それに見合った準備をしていったりするためのよい経験となった。

エピソード② いろいろな役を何度でもやってみる 1月23日～1月26日

1月23日 子ども達に『いつまでもともだち』の絵本を読み聞かせ、教師がオペレッタをひと通り演じて見せた後、子ども達に「やってみたい役になってごらん」と言って、それぞれの役の場所を長椅子で用意した。すると、話の中でも女の子のイメージが強いリスのコリリンとウサギのミミコに女兒が集中し、男児は男の子のイメージのタヌキのコタロウにほとんどが集まった。ウサギにはミミタという男の子の役もあったが、ウサギの女の子のイメージが勝ってか男児はいなかった。小鳥のピリーは絵本の中でも出てくるシーンが少ないためか、それとも他の役ほど男の子のイメージがないためか、ナオコとホノカの2人だけだった。どちらかという悪者のイメージのサルのチョッピーは、まだ自分のやりたい役を探している感じのタイチとシンとリコの3人が「ここでいい」といるだけだった。教師は、「じゃあ、自分のやってみたい役をいろいろ試して、好きな役を決めようね」と伝え、人数は相当にアンバランスだったが、そのようなやり方で子ども達とオペレッタごっこを進めていった。



1月24日～1月26日、オペレッタの回を重ねていくうちに、チョッピーのおもしろい動きのダンスや、出たり入ったりなどの頻りに登場して場を盛り上げる役柄を、他の役で見ている子ども達もゲラゲラ笑って楽しみ、自分もやってみたいという子ども達がどんどん増えていった。一方小鳥のピリーは、教師から「ピリーは、みんなの楽器を合わせてハーモニーを作ってくれる大事な役だよ」とまとめ役のイメージを子ども達に与え、モールと割り箸で作ったタクトを用意した。出番も最後で何となくイメージの薄いピリーだったが、回を重ねるごとに徐々に増えていった。ウサギは、相変わらず女の子のイメージで（オペレッタの音楽や台詞もどちらかという女の子っぽい感じもあって）、ミミタになりたいという男児はなかなかいなかった。教師は、子ども達がいろいろな役のおもしろさを楽しんだうえで、ミミタの役にも目を向けてほしいと感じていたの



で、「誰か(ミミタの役に)なって」とはあえて言わず、「(ミミコ役の)女の子も、ミミタがいてくれたら頼もしいよね～」とミミコが演じている時に知らせていく程度にしていた。

<エピソード②より>

子ども達が自分から意欲をもって参加したり、演じたりするのが楽しくなっていくように、したい役は子ども達のその時の気持ちに沿うようにした。そのうえで、それぞれの役のよさやオペレッタ全体のバランスにも目が向かっていくように、いろいろなイメージを知らせたり、観客側としての意見を伝えたりしていった。

初め、なり手の少なかったサルとチョッピーは、回数を重ねるうちに悪さをするだけのイメージから、悪さもするが理由もあり、実はおもしろくユーモアもあるキャラクターであることが全体に浸透して、なりたい子ども達が増えてきた。そのような形で、他の役も、いろいろなよさやイメージの広がりを見つけていってほしいと感じた。



エピソード③ 配役を決める 1月30日

参観日がだんだんと近づいてきた頃、子ども達に「お家の人が見に来てくれる時の役を、そろそろ決めようか？」と投げかけた。オペレッタを始めた当初から、ホワイトボードに一人一人の名前入り磁石を貼っており、誰がどの役かわかるようにしていた。子ども達の磁石は、その日の気持ちによって様々に入れ替わり、この日までに、どの子どもも自分のやってみたい役をたくさん経験できたように思われた。

子ども達がこれに決めるという役は、役によって多少のばらつきはあるものの、ウサギのミミタ以外はどの役も2人以上人数がいた。そこで教師は、「ミミタの役、どうしようね？」と子ども達に聞いた。子ども達は少し困ったという表情だったので、「ウサギの踊りが、女の子はミミコのかわいい踊り方なんだけど、今のままじゃミミコだけが出てくるようなイメージじゃないかな？」と教師の思っていることを投げかけてみた。すると子ども達も、「うん、そう！」という感じでうなずいていたので、「それじゃあ、“男の子のミミタもいるよ！”ってことがわかるように、ミミタだけの踊り方を考えたらどうかな？」と提案すると、子ども達からも「それならいい」という声が上がった。そのように話したうえで、子ども達に「誰か、ミミタのかっこいい踊りを考えられそうな人、いないかな？」



と聞くと、タヌキのコタロウになっていたキョウイチとリュウノスケが、「ぼくらが、ミミタやってもいいで」と言って、ミミタの役になった。

全体での話が終わった後で、キョウイチとリュウノスケと踊り方について相談すると、「こういうふうにする！」とカゴを作るイメージの踊りを見せてくれたので、「いいね、“男の子のミミタ”って感じがするね！」と伝えてよさを共感し合った。

<エピソード③より>

参観日に向けて配役を決めるまでに、子ども達がいろいろな役を十分に楽しむことができているならば、自分のやりたい役だけでなく、全体の人数配分に目を向けたり、どうしたらよいかを自分なりに考えたりする気持ちが出てくるのではないかと思う。その土台を積み重ねたうえで、子ども達に提案をしていった。

エピソードに出てきたキョウイチとリュウノスケは、日頃からヒーローごっこや基地ごっこなど、自分達の共通のイメージを出し合って遊ぶ姿がよく見られていた。これまで教師は、その楽しさや工夫の様子に共感したり、一緒に楽しんだりしてきた。また2人には、3学期になってから、全体の場

で自分のできることを探していこうとする姿が見られるようになってきていた。だから今回も、自分達ができる方法はないかと考えることができたのだと思う。2人の姿を見て、オペレッタを自分達のものとして演じていこうとしているところをとでもうれしく思った。また2人には、題材選択のポイントとして教師が挙げていた、“みんなでひとつのことをやり遂げる喜び”の感情も芽生えてきていると感じられた。

エピソード④ 参観日当日の様子 2月14日

参観日は、お家の人に来てくれることもあり、集まるまでの時間は何となくそわそわしているような様子も見られた。しかし、みんなで集まって遊戯室に行く頃になると、子ども達からはそれまでの様子とは違って、“自分達のオペレッタを観てもらえる！”というわくわくした気持ちが感じられた。子ども達のなかには、アキオのように1月末から参観日の前の週（2/10）まで、入院のため欠席していた子どももいた。みんなと一緒にできる時間が



少ないので、教師も子ども達も心配していたが、保護者からの連絡により、本人も参観日に出席することを心待ちにしていることを知らせていただき、参観日の前日にアキオが登園してきた時には、子ども達も教師も本当に喜んだ。そのようなことも、子ども達にとっては改めて友達によさやつながりを感じられる機会になったようで、当日は、みんなでひとつのことを作り上げていく雰囲気を感じられた。

全体を通して

今回はと組では、“子ども達が主体的に参加し、それぞれに納得しながらオペレッタの取り組みを進めていく”ということを経験して行ってほしいと願って、参観日当日までの援助や環境構成を進めてきた。ともすれば教師のやり方に沿いがちな子ども達だが、できるだけ子ども達の思いや意見を引き出していくようにし、一緒に考えていきながら進めていくようにした。それによって子ども達は、参観日までのオペレッタの取り組みを、今までの行事や日々の生活の姿よりも、一層主体的に、よさを発揮して取り組むことができたのではないかと感じる。

オペレッタを演じていくなかで、エピソードで挙げた場面を含め、様々な状況を通して、子ども達は自分なりのやり方で、“みんなでひとつのことをやり遂げる喜びを感じる”という目標に向かうことができていたように思う。



<文責 矢田>

《引用・参考文献》

※絵本

- ・『うみにぼっかりくじらじま』 金の星社 作/さくらともこ 絵/若菜瑠
- ・『ほがらか森のくぬぎの木』 金の星社 作/すずきみゆき 絵/鈴木まもる
- ・『いつまでもともだち』 金の星社 作/新沢としひこ 絵/市居みか

※オペレッタ

- ・オペレッタ『いつまでもともだち～もりのキラキラステージ～』株式会社メイト をアレンジして使用

年長 さくら組

オペレッタ『ブレーメンのおんがくたい』を通して

教師の願い・題材を選んだ理由

日々子ども達の遊びのなかで、動物になって遊ぶ姿をよく目にした。ままごと遊びでは、お母さん役や子ども役の他に、必ずイヌ役やネコ役があり、他のごっこ遊びでも動物の役は取り合いになったり、複数の子ども達がしていたりすることもあった。そこで、3学期の参観日にするオペレッタでは、動物がたくさん出てくるものがよいと考えていた。

また1, 2学期、楽器に触れる機会をあまりとれずにいたので、オペレッタでは、音楽に関係するものができないだろうかとも考えた。2学期終わりに、学年で一緒に歌った曲を、隣のクラスの子も達が卓上鉄琴（以下鉄琴と称す）で、聞かせてくれた時、興味をもった子ども達から、演奏してみたいとの声も上がっていた。遊びの中で楽器に親しみ、興味をもったところで、ひとつの曲をみんなで演奏することで、音楽の楽しさや、誰かに聞いてもらう喜びを味わえるのではないかと考えた。

そこで、楽器遊びも含めながらオペレッタを楽しんでいける『ブレーメンのおんがくたい』を題材に選ぶことにした。

年長時期には、子ども達が主体的にみんなでつくり上げていくという体験を大切にしたい。楽器遊びやオペレッタ『ブレーメンのおんがくたい』において、子ども達の動物や楽器への興味を生かして、子ども達の主体的な取り組みになっていくような環境設定や声かけを工夫し、参観日に向けてクラスみんなでつくり上げる達成感を味わわせたいと考えた。

参観日当日までの取り組みの経過

日にち	曜日	取り組みの内容（・）や子どもの様子（☆）	
		【楽器遊び】	【『ブレーメンのおんがくたい』】
1/13	金	・保育室に楽器を出して、自由に手に取って遊べる環境を設定する。 エピソード①	
1/16	月		
1/17	火		
1/18	水	☆友達とひとつの曲に合わせて楽器を鳴らしてみる。エピソード② ・降園活動時、みんなで『ドレミの歌』に合わせて楽器を鳴らす。 ☆好きな楽器を思い思いに鳴らす。	・朝の会で『ブレーメンのおんがくたい』の絵本の読み聞かせをし、絵本を見やすい所に置いておく。
1/19	木	・保育室に、楽器に加えて『ブレーメンのおんがくたい』のお面を自由にとって遊べるように出しておく。	
		☆登園後からブレーメンのお面を付けて楽器遊びを始める。 ☆曲の中で思い思いに鳴らすとガチャガチャうるさくなるから、鳴らすところを決めようと言う。 エピソード③	☆好きな遊びの時間に、したい子ども達が集まって『ブレーメンのおんがくたい』の劇ごっこをする。 ↓ ・『オペレッタ ブレーメンのおんがくたい』を紹介する。

1/20	金	・保育室で、みんなが集まった時にオペレッタ『ブレーメンのおんがくたい』（以下『ブレーメンごっこ』と称す）をする。
1/23	月	・それぞれの楽器が入るところを決めて、みんなで合奏する。
1/25	水	☆小道具が必要だということで、少しずつ作り始める。【エピソード④】
1/30	月	・参観日に向けて、降園活動時『ブレーメンごっこ』の役を決める。
2/1	水	☆別の役がやりたいと言う子どもがでてくる。【エピソード⑤】
2/2	木	・いったん役を決めたものの、子どもの思いもあり、また好きな役になってよいことにする。 ☆家や木がほしいということで、背景に色塗りをする。【エピソード④】
2/3	金	・手作りの小道具や背景を使って、みんなで『ブレーメンごっこ』をする。 2/3から欠席者10名
2/6	月	↓ 楽器遊び・ブレーメンごっこ中断
2/7	火	学級閉鎖 ↓
2/8	水	・『ブレーメンごっこ』を遊戯室で始める。
2/9	木	・降園活動時、再度『ブレーメンごっこ』の役を話し合っ決めて決める。
2/10	金	・自分の役のお面や小道具を作る。【エピソード⑥】
2/13	月	・自分の役の衣装を作る。 ・年長2クラスで見せ合う。下の学年も見に来る。
2/14	火	・参観日当日

Episode

参観日当日までのエピソード

エピソード① 初めて楽器を手にして 1月13日

3学期が始まって1週間が過ぎた日の朝、楽器（タンバリン・鈴・カスタネット・トライアングル・ウッドブロック・鉄琴・木琴・ハンドベル）を保育室内に出して、子ども達が興味のある楽器を手にとって自由に音遊びを楽しめる環境を設定した。登園した子ども達は、



これまで使ったことのない楽器を目にし、「わあ〜」と言いながらうれしそうに楽器の近くに集まった。そして思い思いの楽器を手にとって音を鳴らしていた。



朝の会で、これまでの経験をもとに、楽器の使い方を確認したので、鳴らし方に戸惑う子どもはほとんどいなかった。楽器は、音だけが鳴る打楽器よりも、メロディーの鳴る鉄琴や木琴、ハンドベルが人気であった。子ども達に曲に合わせることを楽しんでもらいたい思いもあったので、簡単にメロディー演奏ができる『きらきらぼし』の曲を、わかりやすく演奏で

きるように、鉄琴やハンドベルの音階と同じ色で分けた音階名を表示した楽譜にし、傍に置いておいたことも興味をもつきっかけになったかもしれない。子ども達は楽譜を見ながらメロディーを楽しんでいた。また少し挑戦したくなった時に音階のわかりやすい曲としてチャレンジできる『ドレミの歌』の楽譜も用意して、子ども達がもっと違う曲を奏でたくなった時にすぐに出せるようにしておいた。

案の定、子ども達から「先生、音楽の本ない？」と聞いてきたので、『ドレミの歌』の楽譜も渡した。するとそれを見ながら、『ドレミの歌』のメロディーにゆっくりと挑戦し始めた。

<エピソード①より>

楽譜を用意していたことにより、音階のある楽器への興味が深まったようだった。『きらきらぼし』のメロディーの音は隣り合っていることが多く、演奏しやすいこと、今までによく聞いたことのある曲であること、1曲がとても短いことなどから、習い事で音楽をしていなくても、ゆっくりと挑戦して最後までメロディーを奏でることができたようだった。特に女兒が興味をもち、少し難しく長い曲の『ドレミの歌』に挑戦する姿も少なくなかった。楽譜に音階と同じ色のマークを付けることで、色を見ながら叩くことができ、あまり抵抗なく演奏できたのではないかと思う。

エピソード② みんなと一緒にひとつの曲を 1月18日



具合が悪くしばらく休んでいたマサシが、登園するなり保育室内の楽器を見て、わあーと言わんばかり、目をキラキラさせてウッドブロックや鈴を手に取っていた。隣では、ヨシオが『きらきらぼし』を鉄琴で演奏していたのだが、マサシはカスタネットを両手に持ち、ヨシオの演奏する『きらきらぼし』の曲に合わせて、カチカチと鳴らし始めた。今まで個々に演奏することはあったが、ヨシオとマサシのように『きらきらぼし』を、友達と異なった楽器で合奏する場面を初めて見たので、担任もうれしくて、

演奏が終わった後すぐに「すてき！先生も入れて！」と鈴を手にした。そこにシツが「私もする」と言って木琴を持ってきた。続けていると、その隣でカコの鉄琴と、アサコ、ヒナのハンドベルで『きらきらぼし』を合奏し始めたのが聞こえてきた。“みんなですると楽しいね”という雰囲気になり、マサシが「さくら組みんなでしたい」と言い始め、帰りにみんなで合奏してみるようになった。



降園活動時、みんなが思い思いの楽器を手にし、教師のピアノ『ドレミの歌』に合わせて楽器を鳴らした。この時は個々に自由に音を出しての演奏となった。感想を聞いてみると、「楽しかった」「おもしろかった」「またしたい」という声がたくさん出た。これまでたくさんの楽器を使って、みんなでするとひとつの曲を演奏したことがほとんどなかったため、いろいろな楽器を個々に選んで楽しんでほしいという思いもあり、あえてリズム叩きの声かけ（どのように叩くといいか）などはしなかった。

教師が「音楽隊みたいだね」と言うと、朝の会で絵本『ブレーメンのおんがくたい』の読み聞かせをしていたからか、子ども達から「ブレーメンだ！」との声が上がった。そこで、楽器に親しんで楽しそうにしていた子ども達と一緒にできたらいいなと用意していた『ブレーメンのおんがくたい』の登場人物達のお面を見せた。そして次の日はこのお面をつけて『ブレーメンのおんがくたい』をしようということになった。すると、マサシが、「家がいる」と言い、ユキヒロが「机と椅子もいる」と言った。ケンイチが「机はここにあるよ」とままごと用の机をさして教えてくれた。

<エピソード②より>

マサシが久しぶりに登園して、楽器がたくさんある環境に初めて出会った日に、少し前から楽器に親しんで、『きらきらぼし』が演奏できるようになっていたヨシオが鉄琴演奏をしていたことで、マサシもヨシオに近づき、ヨシオの鉄琴に合わせて、カスタネットを叩いたのではないだろうか。初めて友達と合奏している場面を見逃さずに、教師が「すてき！」と声をかけたこと、それを聞いて、他の子ども達も合奏をし始めたことで、みんなで演奏してみたいという気持ちにもつながったと思われる。

また、朝の会で、絵本『ブレーメンのおんがくたい』を読み、その絵本を子ども達の目のつくところに置いていたことも、子ども達を『ブレーメンのおんがくたい』のイメージにつなげるきっかけになったのではないだろうか。

エピソード③ 「ガチャガチャうるさい」 1月19日～

朝からお面を出していたので、子ども達はそれを付けて楽器を演奏していた。そのうちに「ブレーメンがしたい」と言って、数人の女兒が『ブレーメンのおんがくたい』の絵本を見ながら、劇遊びをし始めた。この遊びに教師も入りながら、一通り最後まで絵本『ブレーメンのおんがくたい』を楽しんだ。終わった後も楽しそうにしていたので、興味をもった女兒達に、オペレッタ『ブレーメンのおんがくたい』を紹介した。女兒達は喜んで、教師と一緒にメロディーに合わせて踊りを楽しんだ。

弁当前にみんなが集まった時、『ブレーメンのおんがくたい』のお面を付けて、『ドレミの歌』を演奏した。これまで通り叩きたい所で思い思いに音を出すやり方で1回合奏し、もう一度したいと言うので、鳴らしたい楽器を替えて、再度演奏した。演奏後に感想を聞いてみると、今までは「楽しかった」「またしたい」「次は〇〇

(違う楽器を使って)をしたい」などという感想だったが、この日はマサハルが「ガチャガチャうるさかった」と言った。「速くて、できなかった」「どこで鳴らしたらいいかわからなかった」という感想も上がった。それを聞いたヨシオが「叩くところを決めたらいい」と言い、他の子どもからも「順番にしたらいい」などの声が上がった。

そこで次の週からは、リズム打ちを決めたり、楽器毎に演奏する場所を決めて、合奏することとなり、「ガチャガチャうるさかった」と言っていたマサハルもニコニコ笑顔で友達と叩く場所を確認しながら、合奏していた。



<エピソード③より>

お面は、絵本や子ども達のイメージを大切に、補助教諭にクレパスで描いてもらい、それをカラーコピーして、たくさん用意しておいた。たくさん用意しておくことで、自分の好きな役を選んだり、違う役にもすぐに替わったりすることができると思ったからだ。こちらの予想通り、朝からそのお面をつけて、楽器を鳴らし始め、さらに友達と話しながらいろいろなお面に替えたりして、楽器を演奏していた。

また、昨日読んだ『ブレーメンのおんがくたい』の絵本を目につくところに置いていたことで、自然と劇遊びも始まった。教師が入ることで、やっと最後までいく状況ではあったが、絵本を見ながら「次はイヌ」「次はトリ」などと登場人物を自分達で確認して劇遊びを進めていた。

マサハルの「ガチャガチャうるさい」という感想は、誰かが気づいてくれたらいいな、と教師も思っていたのだが、口にはしなかった言葉であった。始めから教師が各楽器の演奏形態を全て決めてしま

うのは、初めて合奏を経験する子ども達に、やらされている感を与えてしまい、やる気をそいでしまうのではないかと懸念したからである。自分達で考えてやってみるということを大切にしたいという教師の願いもあった。

エピソード④ 「金貨がいるね」「木もいるね」 1月25日・2月2日

『ブレーメンごっこ』をみんなでしていくうちに、子ども達から背景や小道具の案がどんどん出てきた。「泥棒のごちそうがいる」「泥棒の金貨と宝箱がいる」「泥棒の家を描く」「木もいる」など、自分達で作りたいと言う。できるだけ子ども達のイメージに沿って、子ども達が自分達で作りにくいように、金貨の型のダンボールを切りぬいておいたり、家や木の背景を準備して、子ども達が絵の具で色塗りができるようにしておいたりした。子ども達はそれを見るなり、「作りたい!」「色塗りをしたい!」と集まって、作り始めた。背景の色は、子ども達同士で相談し、決まった色を教師が出して色塗りを進めた。でき上がったら早速使ってみたくて、背景を置いたり、料理や金貨を並べたりして、みんなでオペレッタを楽しんだ。



『ブレーメンのおんがくたい』をみんなでしようとした日から、子ども達が必要なものをいろいろと話していたので、教師も子ども達の思いを受けて準備を進めやすかった。みんなで『ブレーメンごっこ』をしようという気持ちが高まっているなかでの、小道具や背景の準備だったので、さらにいろいろなアイデアが出て、準備している子ども達も楽しそうであった。

<エピソード④より>

『ブレーメンのおんがくたい』をみんなでしようとした日から、子ども達が必要なものをいろいろと話していたので、教師も子ども達の思いを受けて準備を進めやすかった。みんなで『ブレーメンごっこ』をしようという気持ちが高まっているなかでの、小道具や背景の準備だったので、さらにいろいろなアイデアが出て、準備している子ども達も楽しそうであった。

エピソード⑤ 「やっぱり泥棒がやりたい」 1月30日～

今まで自分の好きな役になって『ブレーメンごっこ』を楽しんでいたが、そろそろ参観日に向けて配役を決めて、動きを覚えたり、お面や衣装を考えたりしたいと思い、1月30日にみんなで話し合っ、配役を決めた。しかし2日後(2月1日)、トリ役になっていたミナコが「泥棒をしたい」と言ってきた。もうみんなで相談して決めていたし、ミナコがトリ役をやめると、3人しかいないトリ役が2人になってしまうので、そのままトリをしてみようよと伝えてしまった。この少し前にトリ役のリエは「イヌに替わりたい」と言い、イヌ役のカズは「泥棒がいい」と言ってきた。この2人にも「もうみんなで話し合っ、決めてから、がんばってみようか」と言っていた。誰かを替えてしまうと、他のみんなも替わってしまい、参観日にできるようになるのか、心配だったからである。この日のオペレッタでは、ミナコは2月から卒園に向けて入ってきてくれている補助教諭にずっとくっついてたままで、『ブレーメンごっこ』には参加せずに、ぶつぶつ言いながら見ていた。何度か誘ってみたが、やりたくないとのことだった。

しかし、それはやりたくないのではなく、やはりこれまでしていなかった泥棒をやってみたいというものだった。教師の都合で参観日という目の前の発表会に焦点を当ててしまい、本来のねらいである“子ども達が楽しみながらオペレッタをする”というものから、遠ざかっていたことに、ミナコの態度を見て気づかされた。そこで、次の日は、「したい役があったら替えてもいいよ」と、また

流動的にした。替わりたいと思っていた子ども達は喜んだ。そして、ミナコは泥棒になり、その他4名の女兒も泥棒に入った。他にも役を移動した子ども達がいた。どの子どもも昨日とは違ってまた生き生きとした表情で、オペレッタを楽しんでいた。

2月9日、もう配役を決めようと再度話し合いをすると、ミナコは満足したのか、元の「トリになる」と言った。他の女兒達も元の役に戻っていった。替わりたいと言っていたリエとカズだけは、始めに決定していた役と違う役を選んだ。

<エピソード⑤より>

保護者に見てもらおう行事を意識し、本来子ども達が自ら楽しんでオペレッタをするというねらいから遠ざかってしまっていた。悪者役のイメージのある泥棒をしたいという女兒はおらず、役をいろいろ替えてもいい時でさえ、していなかった。しかし、泥棒の軽快で楽しい踊りに心揺さぶられ、してみたいと思うようになったようだった。ちょうどそう思い始める少し前に配役を決めてしまったことが、今回の結果を招いてしまった。ストーリーや曲、踊りを十分に子ども達がわかったところで、もっといろいろな役に挑戦できるように声かけをし、このストーリーを十分に楽しめるように配慮していればよかったと反省させられた。子ども自身のやりたいと思う純粋な気持ちを大切にしたいとも思った。

エピソード⑥ お面や衣装作り 2月10日

今回、お面や衣装は、子ども達の手作りにした。お面は、輪郭を準備しておき、目や口ひげなどは、自分達で色画用紙を切りぬいて、貼り付けていった。セロハンテープやマジックは使わずに、ハサミと糊だけで作成した。また、衣装もカラーのビニールパックを本体とし、キラキラテープやお花紙、リボンなどを付け、思い思いに飾れるようにした。世界にひとつしかない衣装はお気に入り、身に着けては喜んでいた。



<エピソード⑥より>

衣装やお面など、自分で身に着けるものは、自分でアレンジしながら作ろうと予定していた。自分の役を大切に思ってほしい、自分が決めた役をもっと楽しんでほしいとも思ったからである。また、今回お面に関してはセロハンテープやマジックを使わずに糊のみで作ることにした。これまでは、簡単に使えるセロハンテープやマジックなどを使ってきたが、2月3日の節分で鬼のお面を作った時に、顔のパーツを自分で切って糊づけした経験もあり、今回も糊づけに挑戦した。動物の輪郭や耳など複雑な形のパーツは切りぬいておき、糊づけする位置を自分で考えるようにして、目や口などは自分で考えて切るようにした。どのお面も子ども達のイメージや個性があふれ、すてきなものとなっていた。



エピソード⑦ 参観日当日の様子 2月14日

朝から緊張している子ども達もいるだろうと思っていたが、大型積木を廊下やテラスに並べて巨大迷路を作ったり、折り紙で作りたいものを作ったりして、いつものように楽しそうに遊んでいた。準備で衣装を身に着け始めても、楽しみでうれしい気持ちが表情にも表れていた。しかし、はと組の発表の後、自分達の出番が近づくと表情も少々緊張した様子になり、教師の手をぎゅ〜と握ったり、「先生、今度はさくら組の番？」と聞いてきたりしていた。いよいよさくら組の番。舞台のセッティングを終え、カズヤの「せーの」掛け声のあと、『プレーメンのおんがくたい』の題名をみんなで気

持ちをひとつにして声に出し、さくら組のオペレッタがスタートした。インフルエンザがクラスで流行し、当日やっと全員がそろそろ状態だったが、家の人が見に来てくれているということもあり、それぞれが見てもらう楽しさや緊張感を味わいながら、友達と舞台袖で声をかけ合ったり、舞台の道具を移動する際、力を合わせたりしていた。終わった後は、「先生、楽しかった」「間違えなかった」などと言い、それぞれが達成したという喜びを味わっていたようだった。



全体を通して

3学期初め、楽器を保育室に出し、子ども達が自然に楽器に親しめるような環境設定や言葉がけを考えて行ってきた。年長なので、担任が「こうしよう」「ああしよう」と言うのではなく、自分達が「こうしたい」という気持ちを大切に取組んできた。子ども達から「みんなと一緒に音楽(合奏)をしたい」と言い、『ブレーメンごっこ』も「みんなでしたら楽しそうだから、みんなでしたい」と言ってクラスのみんなですることが決まり、「家や木(背景)がいる」「泥棒の金貨やごちそうもある」と言う声の下、子ども達と一緒に作り上げてきた。最後は衣装も自分達で考えて、世界にひとつしかないものを作った。子ども達の思いがこのブレーメンに十分反映されるようにと、教師も援助の仕方を考えながら行ってきた。その結果、子ども達は生き生きと活動していたように思う。その分、子ども達の演じ終えた後の満足した様子や笑顔に、担任も年長としての成長を感じた。これまで、欠席が増えたり、学級閉鎖になったりと参観日前にいろいろなことがあったので、参観日で発表する遊戯室へ移動して『ブレーメンごっこ』を行った回数は、ほとんどなかったが、保育室で何度も『ブレーメンごっこ』を楽しんでいたのが、当日も充実した活動となった。



また、今回子ども達が自分達でいろいろとアイデアを出しながら進めてきたこと、教師がどのような願いをもって、オペレッタを進めてきたかということ、学級通信で保護者に知らせたこと、よかったと思う。見せることを意識してしまいがちであるが、子ども達が楽しいと思える環境や言葉がけを大切にできたことは、子ども達のやる気をつなげていき、できた喜びがより大きくなることにつながったのではないかと振り返る。



<文責 中屋>

《引用・参考文献》

※絵本

- 『ブレーメンのおんがくたい』偕成社 作/グリム 文/村岡花子 絵/中谷千代子

※オペレッタ

- オペレッタ『ハッピー ハッピー バースデー』 分冊『ブレーメンのおんがくたい』株式会社メイト をアレンジして使用

“クラスのみinnで表現遊び（最後の参観日）”のエピソード全体を通じた考察

子ども達を選んだり決めたりする

本研究では教師が「こうしよう」「ああしよう」と言うのではなく、自分達で「こうしたい」という気持ちを大切にしてきた。年長はと組の事例では、どのオペレッタにするか子ども達が決めるなど、“子ども達为主体的に参加し、それぞれに納得しながら劇の取り組みを進めていく”こと、年長さくら組の事例では、『ブレーメンのおんがくたい』を子ども達からやりたいという声が上がったり、オペレッタの背景や小道具など、子ども達から必要だという思いが出てきてから子ども達と一緒に作るようにしたりすることなどである。年中うめ組の事例では、子ども達から「今日もしたい」という声が上がってから、クラスのみinnでオペレッタをするようにしていた。また、同じくうめ組の事例では、恥ずかしさから、なかなかオペレッタに参加しなかった子ども達に対して、お客さんで参加するように促し、何日かしてオペレッタの楽しさを感じている様子を捉えた時に、子ども達の心が動く言葉をかけたことで、自分達からオペレッタに参加するようになったエピソードもあった。年少組では、『てぶくろ』のオペレッタで、好きな役を好きな時にしていた子ども達に、教師が役を途中で交代しない方がいいのではと提案するが、子ども達からは疑問の声や「(途中で、てぶくろの中に誰もいなくても)全然困らない」という声上がり、参観日当日も好きな役を好きな時にするようにしていた。

行事の主体は子ども達にあるので、教師はねらいや大まかな予想にもとづいて、環境を整えたり、援助したりしていくが、クラスのみinnで行う表現遊びを通して、充実感や満足感を味わえるように、子ども達自身が選んだり、決めたりできるようにしていくことを大切にしたいと考える。

交流を大事に

ここ数年、互いのクラスのオペレッタを、計画的に見せ合うようにしている。こうすることで、互いに刺激をもらって、遊びを豊かにしてほしいと考えているからである。年中うさぎ組の事例にあったように、どのクラスでも、好きな遊びの時間にオペレッタや劇遊びを始めると、お客さんを呼ぼうとすることが多い。お客さんに見てもらおうと、がぜん演じる意欲が増すようだ。年長組では、小さい組の手を引いて、やさしく案内したり、椅子を並べたり、チケットを作ったり、おみやげを作ったりするなど、友達同士相談し合って、遊びを進めていく姿も見られる。

24年度の取り組みでは、年中組のオペレッタに憧れた年少組が、参観日が終わっても、仲よし広場（子ども達が交流できるように舞台を置いている場所）で年中組のオペレッタに仲間入りし、自分達が年中組になっても、同じオペレッタとしようとする姿も見られた。

このように、“クラスのみinnで表現遊び”の取り組みを通じて、園全体で自然と交流し、互いに刺激をもらい合い、友達同士で遊びをつくっていくような経験も大事に考えている。

自分なりの表現を大切にするには

全学年、最後の参観日にはクラスのみinnで表現遊びをしようとしてから4年になる。事例にあるように、“クラスのみinnで表現遊び”では、音楽入りのオペレッタをアレンジし、取り組むクラスがほとんどであった。事例を検討するなかで、音楽入りのオペレッタはCDから流れる音楽で雰囲気づくりがされ、子ども達がすぐ話の世界に入り込んで、表現しやすく、教師としても取り組みやすい。しかし、CDから流れる音源を頼りにしたオペレッタでは、劇遊びのように自分なりに表現したり、自分なりにセリフを言ったりするなど、自分でイメージをふくらませたり、考えたりする経験はできにくい。友達同士相談し合って、セリフや動きを決めていくという経験も少ない。

オペレッタをするにしても、劇遊びをするにしても、どのような経験を大事にしていくのか、子どもの育ちや興味関心を丁寧に見たうえで、判断していかなければならない。

本園の参観日について

本園では、年間を通じて様々な参観日を行なっています。5月には、ふだん園に来られない方を中心として、親子で一緒に遊びを楽しむ日曜参観日があり、入園、進級当初の子ども達の様子を保護者に知ってもらう機会としています。6月にはふだんの遊びや生活の様子を見てもらう参観日があり、遊びを中心とした本園の保育について理解を深めてもらう機会としています。9月のプール参観日では、保護者にプール遊びの様子を見てもらい、プール終りの一日を親子で楽しむことができるようにしています。11月にはクラスで製作遊びや集団遊びを行う姿を見てもらったり、親子で製作をしたり、弁当の様子を見てもらったりする機会にしています。

“クラスみんなで表現遊び(最後の参観日)”では、劇遊びやオペレッタ、歌などの表現遊びをクラスみんなで楽しんでいる姿を見てもらう機会としています。





卒園に向けて

卒園に向けて

進級、卒園を控えた2月下旬、本園では卒園に向けた取り組みが始まります。まず、年長組では、小さい組やお世話になった先生をレストランに招待する“レストランごっこ”があります。年少組、年中組は、お世話になった年長組へ“お別れ会”で渡す卒園祝いのプレゼントを作ります。そうして3月の上旬に“お別れ遠足”があり、その後、年長組は卒園式への取り組みを始め、お別れ会、卒園式へと続きます。卒園式には年少組、年中組は出席しません。年中組は自分の自画像を描いて、卒園式会場に飾り、おめでとうの気持ちを伝えることになっています。

レストランごっこ

レストランごっこの経験の意味

レストランごっこでは、カレーとクッキー（本当に食べることができる）を作って、年少児、年中児やお世話になった教職員を招待します。レストランごっこの前々日にクッキーを作り、前日にカレーを作り、当日に年少児、年中児や教職員を招待する、という流れになっています。また、レストランごっこの前日には、年少児、年中児にレストランごっこを楽しみにしてもらうために、そしてレストランらしい雰囲気を味わってもらうために、カレーやクッキーなどの絵を描いた招待状を作って、年少児、年中児に渡しに行きます。

年長組にとってのレストランごっこ

レストランごっこでは、グループで相談し合ったり、力を合わせたりすることも大事にしています。クッキー作りでは、グループごとに教師から説明があったクッキーの作り方の表を、お互いに確認し合いながら材料を混ぜ合わせたり、交代で生地をこねたり、型を抜いたりしていきます。レストランごっこ当日には、年少児、年中児や先生を招待するテーブルに、グループごとに園内の草花を摘んで飾ったり、色紙などで年少児、年中児へのおみやげを作ったりします。

年少児、年中児に思いやりの気持ちをもってかかわってほしい、そうすることで大きくなった自分に対して自信をもってほしい、誇りに思ってもらいたいと考え、レストランごっこの開催時、年少児、年中児を直接呼びに行き、手をつないでテーブルまで案内します。年少児、年中児は前日にももらった招待状を持って行きます。そして、年長児は招待状を受け取ると、カレーやクッキー、ジュースの乗ったお盆を持ってきます。年少児、年中児が食べている間も、「ジュースはいりますか?」「おかわりはありますか?」と声をかけたり、おかわりを運んだり、食べ終わった子どものお盆を片付けたりします。食べ終わった子どもにはおみやげを渡したり、一緒に遊んだり、部屋に連れて帰ったりします。年少児、年中児が全員帰ると、次は待ちに待った自分達がカレーを食べる番となります。

こうした取り組みを通して、学年のみんなでひとつの目的に向かって力を合わせているという感覚も味わってほしいと考えます。

年少組、年中組にとってのレストランごっこ

年少組、年中組はクッキーが焼けるいい匂いがしてくると、クッキーを作っている遊戯室の窓から覗き込んだりするなど、楽しみにしている様子がうかがえます。レストラン前日に招待状を年長組からもらうと、とてもうれしくて、大事に道具箱にしまっては取り出して眺めたり、手に持ったまま遊んだりする子ども達もいるほどです。レストランごっこ当日は年長組が至れり尽くせりでお世話をしてくれ、うれしいけれどもちょっぴり緊張も見せます。でも担任が感想を尋ねると、「おいしかったー」とどの子どもも笑顔で答えます。レストランごっこを通して、年長組へ憧れの気持ちをもったり、感謝の気持ちをもったりしてほしいと考えます。特に年中組では次は自分達の番という、年長組の遊びや生活への期待をもってほしいと考えます。

ねらい(○)・内容(■)

【年長組】

- これまでの経験を生かしながら、グループで協力し合って活動に取り組む。
- 大きくなった自分を誇りに思ったり、自信をもったりする。
- グループや学年でひとつの目的に向かって力を合わせる喜びを味わう。
- グループで協力し合って、クッキーを作ったり、レストランの場を飾ったり、おみやげを作ったりする。
- 遊びや生活のなかで経験したことを生かしながら、カレー作りで野菜を切ったり、クッキーを作ったりする。
- レストランごっこ当日、年少児、年中児のお世話を進んでしようとする。

【年少組・年中組】

- 年長組への憧れの気持ちや感謝の気持ちをもつ。
- 年長組の遊びや生活への期待をもつ(年中組)。
- クッキー作りなどを見たり、招待状を受け取ったりする。
- レストランに招待されて、カレーやクッキーなどをおいしく食べたり、年長組にお世話してもらったりする。
- 先生と一緒に年長組にお礼を言ってみる。

Episode

平成24年度

年長 はと組

エピソード① クッキー作り(レストランごっこ前々日)「みんなでやったらいい」 2月26日

朝の身支度を済ませた子どもから、教師や観察実習に来ている大学生に手伝ってもらいながらエプロンや三角巾を着けた。前週教師が試し焼きしたクッキーと一緒に食べたこともあって、作るのをとても楽しみにしていた。マミコが「私、クッキー作ったことがある」と言うと、ルミが「私もお母さんと一緒に作ったことあるよ」と言い、保育室内では、クッキーの話題がところどころで聞かれた。



みんながエプロンなどの身支度を済ませると、手洗いをして遊戯室(クッキーをみんなで作るために準備した場所)に行き、まず作り方を聞いた。その後、各グループに分かれてクッキー作りが始まった。

クッキーは、少人数で協力して作ってほしいと思い、4~5人のグループで作ることにしていた。



グループ分けは、初めてのことに不安になったり、戸惑ったりする子ども達は仲よしと一緒にし、新しい友達関係を作っていくしてほしい子ども達は、日頃かわりの少ない友達と一緒にするようにした。そのなかで、アツシは、何でも積極的に行える子どもであるが、自分の行動を強く批判されると反発し、活動が中断してしまうことが多いので、やさしく声をかけたりできる雰囲気の子と一緒のグループにした。

アツシは説明の後、自分達を作るテーブルに着くなり、一番始めにすることになっていた『バターをバター屋さんに取りに行く』をしに行っ

た。アツシは「バター取ってきたよ」と、みんながいるテーブルの上にバターを置いて、「次はなんだっけ？」と教師に聞いた。教師は、説明した後であるし、自分達で気づき考えながら作ってほしいとも思っていたので、あえてどうしたらいいかわず「何だったかなあ？」と問いかけ直した。すると、アツシは「あ〜！」と思い出したように、作る順の描いてある掲示物を見に行き、「次は砂糖、ぼくが取ってくる」と、また1人で取りに行った。残ったみんなはただ待っているだけだった。しかしコユキだけは、アツシが砂糖を取りに行く様子を目で追いながら、「アツシくんだけ…」と、つぶやくように言った。アツシが砂糖屋さんで砂糖をもらってきて「はい、砂糖」と言って、バターの時と同じようにまたグループのテーブルに置いた。アツシがうれしそうにしていると、コユキが今度は本人を前にして「アツシくんばかり」と言った。アツシは、言われたことに腹が立ったようで、「だって、誰もやらんやんか」と言って、横を向いてしまった。

教師は近くで見ていたので、「アツシくんもやりたかったんだよね」と、横を向いてすねている様子のアツシに話しかけた。その後で「でも、みんなもしたいね」と他の3人にも話しかけた。そして「どうしたらいいかなあ」と尋ねてみた。するとヒロが「みんなでやったらいい」と言った。教師は、アツシにも考えてほしいと思い、「アツシくん、どうしたらみんなでできるかなあ？」と聞いてみた。すると「順番にやったらいいんだろ」とちょっと強い口調で言ったが、コユキは少しほっとした様子であった。

それから、まだ何もしていないコユキがバターと砂糖を混ぜ、アツシは少し離れたところで、それを見守っていた。他の2人もコユキがうれしそうに混ぜている様子を見ていた。

しばらく他のグループの様子を見て、アツシのグループに戻ってみると、アツシはスズネが生地を混ぜている様子を見ながら、「11, 12…」と数えていた。どうして数えているのか聞いてみると、「順番にすることにしたが、30で交代」と言った。「いい考えだねえ」と教師が言うと、アツシは「おれが考えた！」と、得意気に言った。その顔は、とてもうれしそうだった。

その後も、生地をこねる時にみんなで大きなボウルに手を入れて一緒に混ぜたりする様子も見られた。4人ともとても楽しそうだった。このあと2回目のクッキー作りでも、4人が分担して材料をそろえたり作ったりする姿が見られた。



<エピソード①より>

本物のクッキー作りは、日常の保育ではできない事なので、子ども達はとても楽しみにしていたようだ。アツシも、朝からクッキー作りをととても楽しみにしていたので、はりきりすぎて、まわりの友達の思いに気づかず、自分がしたい気持ちが前面に出ていたようだった。教師はクッキー作りで、“これまでの経験を生かしながら、グループで協力し合って活動に取り組む”というねらいをたてていた。グループのみんなで協力してクッキーを作ることを、アツシ自身に気づいてほしいと思っていた。ふだんから、自分の行動を批判させると反発し、怒ることが多いので、なおさら、自分で気づいてほしいと願っていた。

そこで、アツシ以外の子ども達が、不満そうにしている様子は感じたが、あえて間に入らず、少し見守ってみた。また、「アツシくんばかり」と不満をぶつけたコユキの言葉に、アツシが「だって、誰もやらんもん」と言って横を向いてしまった時も、本人の気持ちを受けとめる言葉がけにとどめておいた。アツシにすれば、まるで悪気はなかった。コユキに不満をぶつけられたことは心外で、ぷんとしてしまったのだろう。アツシは少しの間怒っていたものの、友達の思いにも気づいたようで、みんなが順番にできるように、自分からアイデアを出していた。その後も4人で分担してクッキー作りを行っていた姿から、“グループで協力し合って活動に取り組む”経験はできたように思われる。

“協力する”というねらいに子ども達を導くためには、“協力する”ことを言い聞かせたりするの

ではなく、問題となる場面や状況を察知し、個々の子ども達を理解して教師がかかわり、子ども達自身にその方法を考えさせていくことも大切であると感じた。

<文責 中屋>

エピソード② 花摘み（レストランごっこ当日） 2月28日

10時からのレストランごっこに備えて、レストランのテーブルを飾る草花を摘みに行くことにした。まずは教師の用意したヨーグルトやプリンの空きカップをアルミホイルでくるみ、底に少し水を入れて、外に草花を探しに出かけた。

ユウタが「先生、この花取って（摘んで）いい？」と尋ねた花は、用務員さんがクラス前のテラスに植えてくれていたパンジーであった。パンジーは花壇の花であることから、むやみに取ってしまうのはよくないと考えた教師は、「花壇のお花だから、取るのはやめておこうか」と話した。



まだ肌寒い時期で、なかなか花も探しづらいだろうなとも思ったが、先週、裏の畑でフキノトウを見つけてたくさん摘んでいた女兒がいたことを思い出し、「裏の畑に、フキノトウがあったんじゃない？ あれを摘んでもいいかもね」と言ってみた。すると、「行く、行く」とほとんどの子ども達が裏の畑に行った。フキノトウはかなり大きくなっていて、「あった、あった」「これがフキノトウよ」と、初めてフキノトウを見る友達に、マミコは指差しながら教えてあげていた。

フキノトウを摘んだものの、やはり色のついた花もほしくて、ホトケノザを摘んでいたルミを見て、ココロが「ココロちゃんも花がほしい」と言った。ルミはすぐに「ココロちゃん、ここに咲いちゅうよ」と、そこから数歩のホトケノザが咲いていた場所に行き、1本摘んであげた。ココロは喜んでそれをもらい、自分でも何本か摘んでカップに入れていた。



ソウタは、もっと摘みたいと言って、広い園庭に行った。やはりあまり花らしい花はなく、花壇のきれいなパンジーが目につき、ほしそうにじっと見ていた。教師は昨年度、花瓶に生けて飾るのならと、子ども達と花壇の花を1輪摘んだ経験を思い出し、「花壇のお花を摘んでいいか、副園長先生に聞いてみる？」と尋ねた。するとソウタはうなずき、パンジーを摘んでもいいか、副園長先生に聞いてみた。副園長先生は「レストランでテーブルに飾るのね。テーブルに飾るんだったらいいよ」とやさしく答えてくれた。「ヤッター！」と喜んでいる子ども達に、たくさん摘むのはいけないと思い1人1輪にしようかと伝えた。そこにいた子ども達は、どの色にしようかとじっくり選んで、ひとつ決めて摘み、うれしそうにカップに入れていた。1輪の花でカップはとても華やかになった。ルミは、「これ飾ったら、もも組さん達も喜ぶね」とうれしそうだった。

数人の子ども達で年中棟の前まで来た時、隣の年少組の庭にもありそうだから行ってみたいということになり、花を探しに年少組の前庭に入った。すると年少組の子ども達や年少組の担任が近寄ってきて「何してるの？」と聞いてきた。フミオが「花を摘みに来た」と答えたので、レストランごっこのテーブルに飾ることを年長の担任が付け加えた。

年少の担任は、サクランボの花の咲いた枝を少し切ってくれたり、地面に咲いている草花と一緒に摘んでくれたりした。年少組のカズキも一緒に摘んで、ニコッと笑いながら「はい」と年長の担任に手渡してくれた。カップも草花でいっぱいになり、満足した年長の子ども達は「あとで（レストランに）来てね～」「これ机の上に置くからね～」などと言いながら、年少組の子ども達や教師に手を振り、はと組に戻った。

<エピソード②より>

2人の年長担任で、花を摘んでテーブルを飾る活動を計画し準備したが、子ども達は、この草花摘みがとても楽しかったようであった。友達が花がなくて困っていたら、花が咲いているところを教えてあげたり、上記のエピソードにはなかったが、摘んだものを分けてあげたりする姿もあった。今の時期にしか見られないフキノトウなどの草花にも目を向け、手に取る経験ができたのもよかった。



また花壇の花を摘むときに、むやみに花壇の花を摘まずに、担任に摘んでいいか聞きに来たり、ほしいけれど、じっと見つめているだけだったりする年長児の道徳心を認める声かけがあるとよかった。教師が1人1輪と決めたが、もっと子ども達と一緒に考えながら決めてもよかったのではないだろうか、言葉がけに課題が残った。

レストランを開く手前に行ったこの活動は、花を摘んでカップに入れることが目的でありながら、レストランのテーブルをきれいに飾りたい、来る人に喜んでもらいたい、という意識につながるものになったのではないかと思われる。

<文責 中屋>

エピソード③ 「うさぎ（年中）組の時とおんなじ味がする」

レストランごっこが始まり、年少児、年中児、教師を招待し終わると、やっと年長組の子ども達が、自分達で作ったカレーやクッキーを食べる時がきた。自分で配膳をし、年長児全員で「いただきます」を言って、食べ始めた。

コユキはカレーを、すぐにおかわりしそうな勢いで食べて、2杯目をもらいに行った。スズネは、ゆっくりとカレーを食べていた。「おいしいね」と教師が言うと、「うん、これうさぎ組の時とおんなじ味がする」と言っておいしそうにカレーを食べた。



<エピソード③より>

カレーを食べる時の年長児の子ども達は、年中組と年少組を迎えたことによって、満足した様子だった。どの子どもも「おいしい」と言って食べ、おかわりしている子どももいた。スズネが、「年中組の時とおんなじ味がする」と言ったのは、うさぎ組の時に食べた年長組の作ったカレーもおいしかったことを覚えていて、どちらもすごくおいしいと言いたかったのだと思われる。お客さんとしてごちそうになる経験も、招待する側の経験も、年中から年長へつながる大切なものであると思った。



<文責 中屋>

年長 さくら組

エピソード① クッキー作り（レストランごっこ前々日） 2月26日

子ども達はクッキー作りをととても楽しみにしていて、最初、全員に向けて作り方の説明があったときも、一生懸命聞いている様子うかがえた。説明の後、グループごとに分かれてクッキーを作り始

めるのだが、26名を4～5名の6グループに分け、協力する楽しさが味わえるようにと、ふだんからよく遊んでいる子ども同士をグループにしてみた。



グループごとにクッキー作りが始まると、ホワイトボードに貼ってある、作り方の手順を確認しながら、バターや卵、砂糖などを、置いてあるテーブルから取って来たり、「こうするんじゃない？」と互いに話し合ったりして進めている様子が見られた。パウルや混ぜる物（しゃもじ、割り箸）など必要な物は、年長なので交代して使えるように数を決めていて、誰がどの道具で使うか、もめそうになることもあったが、大体はじゃんけんをしたり、「私もしたい」などと話し合って順番に使ったりしていた。バターと卵、砂糖を入れて混ぜる時、交代し合い、誰かが混ぜようとするともう1人がパウルを押さえて…と自然に役割分担も行ってた。ふるいで小麦粉をふるうのも砂場で培っているからか、お手の物で、1人が小麦粉を入れて、もう1人がふるって…とここでも自然に役割分担をしていた。なかにはふるいから落ちる粉の感触を手で楽しんでいる子ども達もいた。型が抜ける状態になるまで生地をまとめるのは大変だが、交代し合って根気よくこね続けていたのには驚かされた。

生地がまとまり、いよいよ型を抜く段階に入ると、どれくらい分け合うかで多少もめるけれども、生地をまとめるときより順番待ちも少なくなり、大喜びでいろいろな型を抜き始めた。トッピングもそれぞれに工夫して飾り付けていた。



ナナはあまりに集中して、腰をぐっと曲げてクッキーの型を抜いたり、トッピングをしたりしていたので、あとで「疲れた」とこぼしていた。ミホは終始笑顔で、「ミホちゃん、ずっと笑いゆうね。楽しい？」と尋ねると、「楽しい」と弾むように答えていた。すべてのグループがクッキー作りを2回し、ほぼ2時間以上経っていたが、ほとんどの子どもがやめずに、集中して作り続けていた。



<エピソード①より>

クッキー作りには、型を抜いたり、トッピングをしたりするなど、自分なりの工夫をたっぷりできる楽しさがある。また、材料を混ぜたり、こねたりするなど、その感触を楽しみながら形が変化していく様子を楽しむことができる。“感触”や“形が変化していくこと”は、子ども達にとって根源的に気持ちを惹きつけられるものであり、また、年少組、年中組の時から、土や砂、粘土などでたっぷり楽しんできたものでもある。子ども達にはその意識はなくても、土や砂に水を混ぜてちょうど硬さの団子を作ったり、砂で作ったケーキの上に、ふるいでサラサラの砂をかけたりして遊んだ経験が、クッキー作りに生かされているだろう。



このように子ども達にとって楽しさがたっぷり含まれているクッキー作りを、グループごとに行うように設定したり、あえて道具の数を絞ったりすることで、同じ目的に向かって、グループで力を合わせる経験につながっていったと思われる。

<文責 鎌倉>

エピソード② カレー作りと会場準備（レストランごっこ前日） 2月27日

カレー作りは、子ども達は7月のお泊まり幼稚園で経験している。今回は2回目になるが、朝からはりきって野菜を洗ったり、玉ねぎの皮をむいたりする様子が見られた。ピーラーを使っての皮むき

をする前に、いったんレストラン会場である遊戯室に集まり、安全な道具の使い方の説明を受けてから、活動を始めた。みんな注意深くピーラーで皮をむいたり、好きな野菜のところに並んでは、教師と一緒に野菜を切ったりし始めた。野菜を切ることについては興味の差が大きく、最後の数人になるまで、ずっと野菜を切り続けた子ども達もいれば、すぐに満足する子ども達も毎年いる。それを見通して、野菜切りに満足した子ども達には、レストラン会場の準備をお願いするようにしている。まだ、包丁を使っている子ども達もいるので、全部ではないけれども、テーブルを2台1組にして並べたり、各クラスから椅子を運んだり、テーブルクロスを子ども達の手で敷いたりした。子ども達は「よし、次はうさぎ組に椅子取りに行こう」と遊戯室をはりきって出て行ったり、「先生、椅子あとどれくらい?」「(テーブル2台1組ごとに)椅子は7つずつだね」などと教師に尋ねたり、「ここ(椅子)足りんで」など子ども達同士で教え合ったりしながら、はりきって準備していた。テーブルクロスは敷いてみたい子どもが多く、1人1枚はなかったので「2人1組になって敷いてね」と声をかけなければいけないほどだった。



まだ包丁を使っている子ども達もいたが、会場準備がほぼ終わったところで、みんなを集めて、「じゃあ、明日、がんばろうね」と言うと、それぞれにうなずいていた。

<エピソード②より>

カレー作りでは、煮込みは職員が行なっている。子ども達は皮をむいたり、野菜を切ったりすることで、“自分もできた”という自信を味わっているように思われる。

どの子ども達もレストランに向かって力を合わせているという感覚を味わってほしいので、野菜切りに満足した子ども達を会場準備に誘っている。子ども達の手で会場が徐々に作られていくのは達成感があるようで、どの子ども達もはりきって行っていた。明日への意欲も膨らんだように思われる。



<文責 鎌倉>

エピソード③ 3日目 レストランごっこ(当日) 2月28日

朝はグループ毎に花を摘んで、自分のお世話するテーブルに花を飾った。そして、ひと遊びして10時30分、遊戯室に集まって、小さい組をもてなすための説明を聞いた。どのような順番でお盆の上に物を載せて配膳するのか、子ども達は教師の動きを一生懸命見ていた。20分間ほどの説明のあと、最初は年少組へ迎えに行き、その10分後、年中組へ迎えに行くことになっていた。教師が子ども達を並ばせようと思って「年



中組へ迎えに行くよ」と言った途端、年中組担当グループは喜んで迎えに行き、教師があとを追いかけていったほどだった。

お手伝いの保護者や実習生に配膳してもらった子ども達は、お盆を落とさないようにと思っているのだろう、いつにない慎重な様子で小さい組のところへお盆を運び、



グループごとに「召し上がれ」と声をかけた。年長の子も達のなかには、進んでお世話しようとする子ども達もいれば、最初に説明があったもののどうしたらよいかわからない子ども達もいたので、飲み物が少なくなっていることを知らせたり、『「おいしいですか?』って聞いてみる?』と促したりした。「おかわりい



かですか?』と進んで尋ねて運んだり、招待した教師の「もういいよ〜」の声も耳に入らず、おかわりを持ってこようとした子ども達もいたりした。小さい組が食べ終わった後は、色紙を折ってあげたり、余ったクッキーの袋の口を閉じてあげたり、子ども達なりにお世話をしようとする姿がよく見られた。中には、「ぼくらのカレーまだ?』と、お世話よりも、待ちかねている子ども達もいた。



<エピソード③より>

進んでお世話をしようとする子ども達もいれば、教師に促されてかかわってみようとする子ども達や、自分の食べる番のほうに気がなっていた子ども達もいたが、小さい組にカレーセット（カレーライス、クッキー、コップ、スプーン）が載ったお盆を慎重に運んでいる様子や、座っている小さい組に自分の声が届くように、顔を近づけるようにして「おかわりいかがですか」などと言っている様子を見ると、はりきっているなあと感じた。レストランの日を迎え、小さい組のお世話をすることで、大きくなった自分を誇らしく感じる事ができたのではないだろうか。

<文責 鎌倉>

エピソード④ 昨年の経験を思い出して

1、レストランごっこを翌週に控えた木曜日（2/21）、子ども達がレストランごっこを楽しみにできるように、前日に教師が試作したクッキーを子ども達に1枚ずつ渡して食べたときのこと。「去年は年長さんが作ってくれたけど、今度はみんながこのクッキーを作るんだよ」と話していると、「前はクッキーの上に飾りがあった」とミサが言った。この日食べたクッキーには、トッピングがなかったのだが、子ども達が年中組の時に食べたクッキーには、チョコチップなどのトッピングがあったので、それを思い出したようだ。

2、レストランごっこの前日、カレー作り（野菜の皮をむいたり、教師と一緒に包丁で切ってみたりする）をしたり、レストラン会場に椅子を運んで、「いよいよ、明日だね」という雰囲気ができあがったとき、ヒロトが「おみやげ作らんといかん」と教師に言いに来た。昨年、レストランごっこでカレーを食べた後、年長さんが色紙のおみやげを作ってくれたことを思い出したようだ。

3、毎年、レストランのテーブルには、子ども達が園内の花を摘んで飾るようにしている。レストランごっこ当日の朝、子ども達全員に、昨年のレストランごっこの様子を思い出させながら、グループごとに花を摘んで、テーブルに飾るように話した。教師の用意していたカップにアルミホイルをかぶせ、お手製の花生けを作り、その中に嬉々としてフキノトウやヤエムグラ、オオイヌノフグリなどを摘んでは入れていた。そのとき、子ども達から、「去年は、カップの水がまけちゃった（こぼれていた）」という声が聞こえてきた。昨年もカップで花生けを作っていたようで、その軽さなどが原因で、水がこぼれてしまっていたようだ。

<エピソード④より>

おみやげのエピソードは、教師としては覚えていてほしかったことであるが、クッキーのトッピングのことや、花生けの水がこぼれていたことなど、こちらがそう意識していないことについても、子ども達が覚えていることに驚かされた。そんな細かなことまで覚えているのだから、きっと年長さんがレストランごっこで「おかわりいかがですか？」などとやさしくかかわってくれたということも、言葉には出さないまでも覚えている子ども達もいると思われる。

年中組の時の経験を思い出して、「自分の番だ」とはりきることは、意欲的にレストランごっこに取り組むことにつながるのだな、そのなかで自信をもったり、誇りを感じたりするようになるのだなと思った。そして、経験が連続していくことを意識した取り組みや援助をしなくてはいけないと改めて考えさせられた。

<文責 鎌倉>

年中 うめ組

年長組が招待してくれるレストランごっこを楽しみにしながら過ごす

エピソード① 紙粘土でクッキー作りごっこをする 2月22日

次の週から、年長組のレストランごっこの準備が始まる頃、教師は子ども達に『くっきーだあいすき』の絵本を読み、子ども達に年長組がしてくれるレストランごっこの内容（2日前からクッキーやカレーライスを作って準備してくれること、招待状を作って持って来てくれること、当日は遊戯室のレストランで食べさせてくれることなど）を話した。その後、「みんなも、紙粘土で年長組さんみたいにクッキーを作ってみる？」と教師が聞くと、たくさん子ども達が「作る！」「やってみたい！」と言ったので、紙粘土や型抜きを出して、クッキー作りごっこを楽しんだ。教師は、子ども達と型抜きでクッキーの形を作っていくながら、「年長組さんが作るクッキーってどれくらいの厚さなんやろうね？」とか、「いくつくらい作るがやろうね？」など、実際のクッキー作りを思い浮かべながら作っていくことができるように声をかけていった。子ども達は、教師があらかじめ1人分として丸めておいた紙粘土のかたまり（1袋の4分の1くらいの大きさ）を使って自分の好きなクッキーの形を作り、広告紙を中に敷いた道具箱のふた（名前が書かれているので誰の物がわかり、紙粘土を置くのにちょうどよい大きさ）に入れてテラスで乾かした。

子ども達が作り終わった際に、教師がそれぞれの子どものクッキーの形を見てみると、多少厚い形はあるものの、逆に薄すぎるものはなく、子ども達が実際のクッキーをイメージしながら作ったように感じられた。

エピソード② レストランごっこのクッキーを焼いている様子を見に行く 2月26日

年長組のレストランごっこの準備（この日はクッキー作り）が終わった日の午後（保育中）、うめ組の保育室までクッキーを焼くにおいがしてきた。午前中に年長児が小麦粉からクッキーの生地を作り、形を抜くまでをしており、午後からは補助教諭がそれをオープンで焼いていたからである。うめ組の子ども達のなかには、クッキーを焼いている遊戯室まで行って、入口の扉の窓から中をうかがっている子どももいた。そこで教師は、子ども達に「年長組の先生にお願いして、本物のクッキーを見せてもらおうか？」と話した。すると子ども達は、「見たい！」と大喜びだった。遊戯室に入る前に、教師が「クッキーに埃が付いたりしないように、“抜き足、差し足、忍び足”で見ようね」と言うと、子ども達はそおと気をつけながら歩き、並べられているクッキーの生地やクッキーを焼い

ているオープン、そして、焼き上がったクッキーをじっくり見てまわった。遊戯室から保育室に帰る時に、教師が「みんなの作った紙粘土のクッキーも、早く焼けて固まったらいいね」と言うと、週末に作った自分のクッキーの形をそっと触って、乾いているかどうかを確かめている子ども達の姿も見られた。

エピソード③ 石粉粘土で年長組へのプレゼントを作る 2月27日

レストランごっこの前日、年長児達はエプロンと三角巾を付けて、年中組前の水道で野菜を洗ったり、玉ねぎの皮むきをしたりしていたので、教師はうめ組の子ども達にその様子を知らせていった。その後、子ども達と集まった際に、「年長組さんがみんなのためにクッキーもカレーも用意してくれているから、お礼にプレゼントを作ってあげようよ!」と提案した。そして、石粉粘土で作ったブローチの見本を見せながら「みんなは(紙粘土の)クッキーを作るのがとても上手になったき、年長組さんがびっくりするようなきれいな形を作って、裏に名札みたいにピンを付けたら、とってもすてきなプレゼントになると思うよ」と見本を見せながら話すと、子ども達は紙粘土のクッキー作りの時よりも丁寧に形を抜いて、年長組へのプレゼントを作っていた。

エピソード④ 年長児からレストランごっこの券をもらう 2月27日

レストランごっこ前日の降園前、明日の準備ができあがった年長児が、招待状を持ってうめ組に来てくれることになっていた。教師は子ども達に、「明日のレストランごっこの券(招待状)よりもわかりやすいのではと思いこの表現にした)を、年長組さんが片付けの後に持って来てくれるよ」と知らせると、子ども達はいつもよりも意欲的に片付けや帰りの用意をする様子が見られた。教師の読む絵本を見ながら待っていると、招待状を手を持った年長児達が入って来て、年中児一人一人にきちんと手渡してくれた。もらう時にはふだんとは違って緊張した面持ちの子ども達だったが、年長児が保育室からいなくなると招待状に描かれているカレーライスやクッキーの絵をほころんだ表情で見入ったり、端に書かれている年長児の名前を見て、「私は〇〇ちゃんからもらった」、「ぼくには□□って書いてある」など言い合ったりしていた。教師が「大事なレストランごっこの券、幼稚園のどこにしまっておいたらいいと思う?」と聞くと、子ども達は自分の道具箱入れや通園かばんを掛けるロッカーに、大事にしまっておいた。

レストランごっこ当日、いよいよ食べに行く時間になってみんなで保育室に集まると、どの子どもも大事そうに招待状を持っていた。招待状を無くしている子どもは誰もいなかった。

<エピソード①②③④より>

年長組が招待してくれるレストランごっこを、年中児のうめ組の子ども達に伝えていくにあたって、教師はレストランごっこを年長組の行事としてではなく、自分(達)にもかかわりの深い行事であると感じて行ってほしいと願っていた。そこで、レストランごっこ当日に招待されて参加するだけでなく、エピソード①にあるように、自分なりに思いをめぐらせながら同じような内容(クッキー作りなど)の遊びをしてみたり、エピソード②のように、でき上がるまでの途中の段階を見せてもらったりした。そのようにすることで、レストランごっこまでの流れを自分の経験のように疑似体験したり、レストランごっこができあがっていくためにはこんなこともしているんだというような、見方の広がりも生まれたりしたのではないかと思われる。そういった積み重ねを通して、エピソード③のように、年長児への感謝の気持ちがよりふくらんだり、エピソード④のように、レストランごっこ当日に至るまでの行動(招待状をもらうために片付けや帰りの用意を進んでする、レストランごっこに行くため

に自分から集まるなど)も、より意欲に満ちたものになっていくと感じられた。

<文責 矢田>

年中 うさぎ組

エピソード① 「何しゆうがやろう？」 2月26日

仲よし広場で遊んでいた子ども達が保育室へ帰って来て、教師に「先生、年長さんがエプロンをして遊戯室に行ったよ。ねえ、何しゆうがやろう？」と聞いてきたので、教師も「なんだろうね。見に行ってみる？」と言って興味がある子ども達を誘って遊戯室へと行った。ソウシが年長児に「何しゆうが？」と尋ねると「クッキーを作りゆう」という答えが返ってきた。年長児に「作りゆうの見せてね」と言うと、年長児はどんな材料を入れたのか、どういう手順で作るかなどをポウルの中身を見せてくれたり、小麦粉の袋を持ってきて見せてくれたりした。それを聞いたタクヤは「ぼくからも年長になったらできるか？」と教師に尋ねたので「そうよ、楽しみやね」と返事をした。その言葉を聞いたナツキが「でも、作り方がわからん」と心配そうに言った。すると、クッキーを作っていた年長児のアツシが「ほら、あそこに貼っちゅうろう」と前にあるホワイトボードを指差した。ホワイトボードには作り方が簡単にわかりやすく絵で描かれた紙が貼ってあった。アツシが「あれを見たら簡単で」と言うと、ナツキはうなずきながらも、まだ少し心配そうな顔をしていた。そこで「どうしたの？」と聞くと「こんなにできんかも」と言った。年長児が作っている様子をすごいと思い、こんなふうに作りたいと思った



ようだが、慎重なナツキは無理かもと思ったようだ。それを聞いたアツシが「年長になったらできるで」とはっきりとナツキに向かって言ったので、ナツキは少しだけ笑顔になった。そこで教師も「年長さんの終わりにはもう小学生になるぐらいやき、その頃になったら上手にできると思うので、ほらこの間のプローチ作りの型抜きも、なっちゃん上手にしよったろう」と続けていった。すると安心したようで、クッキー作りをまた熱心に見始めた。

その後、クラスでの集まりの時間に、ソウシやナツキ達とクッキー作りを見に遊戯室に行った話をした。自分達も見に行きたいと言った子ども達が多数いたので、今度はクラス全員で遊戯室へクッキーを焼いているところを見に行った。

<エピソード①より>

子ども達は年長児のしていることに興味津々であった。年長児が誇らしげにいろいろと見せてくれるながら、具体的に説明してくれたことや、4月からは自分達が年長児になるということの自覚や期待が芽生えていたことから、年長児の様子を憧れの気持ちをもって見ながら、年長児のクッキー作りの姿に来年度の自分を想像して、重ね合わせていたのではないかと思う。ナツキは、慎重な性格のために楽しそうという思いより不安が先行したようだったが、実際に今クッキーを作っているアツシの「年長になったらできるで」という自信をもった言葉がけにより、期待をもつことができるようになったと思われる。

<文責 大野>

エピソード② レストランごっこがあることを知る 2月26日

保育室に帰って来てから、子ども達のなかで、あのクッキーは一体誰が食べるのだろうかという話題になった。遊戯室に行った時にはクッキーを作っている様子や作り方が子ども達は気になっていたようで、何のために作っているのかを質問していなかった。教師が子ども達に教えてもよいが、子ども達が自ら年長児に聞いた方がよいと思い、教師は年長のはと組の担任に相談した。その結果、その日の降園活動の時間に年長児の誰かに来てもらい、うさぎ組の子ども達がいろいろな質問をすることになった。

降園活動時間になって、年長児のダイチがやって来た。「あれは誰が食べるの?」「(年長児の)お母さんへのプレゼントなの?」などの質問が出ると、ダイチは落ち着いた様子ではっきりと「クッキーは、もも組さんとうさぎ組さんとうめ組さんに食べてもらうために作っています」と答えた。「いつ食べられるの?」という質問には「あさってレストランごっこをするので来てください」と言った。「レストランごっこってなんですか?」という質問がさらにそれから出た。それには「本当のレストランみたいに、クッキーとカレーを食べてもらおう」と言ったので、それを聞いたタケルが驚いた様子で「カレーも食べられるの?」と聞くと「カレーは明日作ります」と答えた。そこで、教師が「じゃあ、レストランごっこはカレーとクッキーですか?」とダイチにさらに聞くと「カレーとクッキーとジュースをします」と言ったので、「レストランごっこって本当の?」とうさぎ組の子ども達が口々に聞き始めた。ダイチは「そうです。この間のお店屋さんごっこみたいに、今度は本物のレストランをします」と言った。すると、今まで半信半疑で聞いていたらしい子ども達は、思わず跳びあがってピョンピョン跳ねながら両手を挙げて「やったー」と喜んだ。その様子を見て、今までは緊張気味に答えていたダイチの表情がほぐれた。その後ユタカが「あさってどこに行ったらいいの? はと組?」と聞いた。それには「遊戯室でします。明日招待状を持ってくるので、そのもらった招待状を持って来てください」とダイチは言った。子ども達は招待状がもらえることを喜び、あさってを楽しみにして、ダイチにお礼を言って部屋へ戻ってもらった。



教師は子ども達が先ほど跳びあがって喜んだ様子から、さぞかし楽しみだろうと思いをかけると「レストランごっこ、楽しみ」というたくさんの声が返ってきた。その時ユタカが「先生、レストランごっこ来年はぼく達がするんだよね」と言ったので「そうだね」と答えると、タクヤも「そうで、ぼくらが作るがで」と言い、「カレー作ったことある」「私はクッキーお母さんとこの間作ったよ」など、他の子ども達からも続いてたくさん声があがった。

<エピソード②より>

本当に食べることができるレストランに招待してくれることがわかってから、子ども達はレストランごっこがとても楽しみになったようだった。背景には12月に行ったお店屋さんごっこでの経験もあると感じた。お店屋さんごっこはどの子ども達も年長児のお店を心から楽しんでいた。それらのことから子ども達はそれぞれが期待を膨らませていたのだが、ユタカが「先生、レストランごっこ来年はぼく達がするんだよね」と言ったことにより、それまで浮き足立っていたクラスの様子が少し変わった。その発言を聞いたタクヤが続けて「そうで、ぼくらが作るがで」と言ったことがさらにそれを後

押ししたようで、昼前にクッキー作りを見たことや、来年度は自分達が年長になることなどを思い浮かべて、今までの家庭での経験などを話してみたりと、来年度への期待も入り混じった喜びとなったようだった。

<文責 大野>

エピソード③ レストランの招待状をもらう 2月27日

降園活動時に、はと組がうさぎ組にレストランの招待状を渡しに来た。招待状をもらったうさぎ組の子ども達はとてもうれしそうに、それぞれの招待状を友達に見せ合う姿が見られた。なくすとレストランに参加できないかもと年長児に言われていたので、見せ合うとすぐ大事そうに自分の道具箱に入れていた。道具箱の中に入れたら終わりではなく、自分のもらった招待状がどんなだったのか、明日はいつ頃食べられるのだろうかなど話をしていた。



<エピソード③より>

はと組(年長組)が招待状を持ってやって来ると、子ども達は「招待状持って来たで」とうれしそうな表情になった。また、もらった後はとても大事そうに抱えて道具箱にしまっていたことから、それぞれが明日のレストランごっこをととても楽しみにしている様子がわかった。

<文責 大野>

エピソード④ 「すごいおいしい!」 2月28日



レストランごっこの当日は、朝から何度も招待状を出して眺めたり、友達同士で見せ合って楽しみにしている姿があった。うさぎ組全員でそろって、年長児が迎えに来てくれるのを待つ間も、みんなで輪になりレストランごっこを楽しみにしている話で盛り上がっていた。

遊戯室に行く時には、年長児に手を引かれ、少し恥ずかしそうに、けれどうれしそうな表情をしていた。近くにいた年長児のタカノリに教師が「年長さんありがとう。とってもうさぎ組楽しみにしてたよ」と伝えると、緊張した表情

から笑顔になり、年中児の手をつなぎ連れていった。

テーブルに着くと、年長児が甲斐甲斐しく世話をし始めたのを見て、うれしいけれど恥ずかしいといった表情の子ども達が多くおり、また年長児も一生懸命で緊張気味だった。

ところが、テーブルにカレーセットが配られると、子ども達は見る見るうちにうれしそうな顔に変わり、表情もすっかりほぐれ「すごい」「おいしそう」などの声が自然と出てきた。教師も「すごいね。本当のレストランみたいやねえ。おいしそう!これ作ったが?」とテーブルについている年長児に向かって尋ねると、「そう、これぼくが切ったがで、この玉ねぎもすごいたくさん切ったで」「ぼくもたくさん切ったがで」という声が



返ってきた。「それは、すごいねえ、おいしそうやねえ」と教師が言うと、年中児のミエも教師の言葉にうなずきながら「すごいねえ～」と言い、隣にいたサキもうん、うんとうなずいた。

全員にカレーがそろって食べ始めたので、教師は一口食べて「すごいおいしいね」と言った。すると同じテーブルのうさぎ組の子ども達も口々に「おいしい」と言い始めたので、年中児の食べる様子を真剣に見ていた年長児にも笑顔が見られた。ヒロキに「どうだった？」と教師が聞くと、ヒロキが満面の笑みを浮かべて「おいしい！」と言いながら拍手をし始めた。他の子ども達もヒロキをみて次々と拍手をし始め、同じテーブルに座っている全員が拍手をして「おいしい」などと感想を言うと、特に緊張していた年長児のスズネがにっこりと笑みを浮かべた。うさぎ組の子ども達は何度も「おいしいおいしい」「すごい上手」と言いながら食べていた。その度に年長児も「おかわりあるきね、持ってきちゃうきね」などと声をかけていた。



降園活動時に子ども達に感想を聞くと「すごくおいしかったから、おかわりした」との声が出た。また「来年自分達が年長のはと組になったらやりたい」と意気込んで言う子ども達もいた。

<エピソード④より>

子ども達はレストランごっこをととても楽しみにしていたが、実際に年長児と接するとお互いに緊張している様子が見られた。しかし、カレーとクッキーが出てくると、「食べたい!」「うれしい!」「年長さんすごい!」などという気持ちがたくさん湧き出てきて、自然と表情や態度、言葉に表れてきたように思う。また、その反応を教師もさらに引き出して、お互いをつなげていきたいと思い、言葉がけを行っていった。年長児の一生懸命な気持ちとうさぎ組の子ども達の素直な気持ちがつながった瞬間は、うれしさを共有する大切な機会になったと思う。

<文責 大野>

年少 もも組

エピソード① 年長がクッキーを作っていた日 2月26日

この日、年長児が午前中に遊戯室でクッキーを作っていた。昼食後、遊戯室付近を通ったミキは、教師に「いいにおいがする」とつぶやいた。そこで、教師はミキを抱えて遊戯室の中をドアのガラス越しに一緒にのぞいてみた。焼ける前のクッキーがたくさん並んでいたのが見えた。教師はミキに「中に入って見せてもらう?」と言うと、ミキはびっくりしたような表情をして、「えっ、中に入ってもいいの?」と言った。教師は早速ミキと一緒に年長担任に確認しに行き、みんなで



見に行く時間を決めた。すると、ミキは遊びに手がつかないようで、「早く見に行きたーい」と小刻みに身体をはずませていた。

遊戯室に入る前に、教師が「お口チャックで行こうか」「お鼻ククンはいいよね」と投げかけた。すると子ども達の中には「つばがついたらいかんき!(いけないから)」と言い、口にチャックをしてはりきっている様子の子どもが見

られた。みんなで口を閉じて遊戯室内に入ると、声は出さないものの、驚きの表情になる子どもや口が自然と開く子どもなどがいた。教師は、クッキーの場から少し離れた所に全員を集め「お口開いていいよ。どうだった？」と尋ねた。すると子ども達が口々に「おいしそう」「食べたい」と言った。



レイナが両手でハートの形を作りながら、「ハートの形があった」と言うと、マコは、両手を勢いよく上に挙げながら「お星様もあった」などと驚きの表情で話した。そこで、教師は「いいにおいがしているから」と言い、食べている真似をしてみた。すると、子ども達も食べる真似をし、「おいしい」と笑顔になった。

ダイキは、「クッキー、自分で選べるんじゃない？ 多分そう」と、年長がどのようにしてプレゼントしてくれるのか想像をしているようだった。

<エピソード①より>

イメージの世界を楽しむ子ども達

年少児は、日頃の遊びの中で、園庭の泥で作ったカップアイスやチョコレートケーキがおいしそうに思わず食べそうになったり、本当に口を汚してしまったりするほど、イメージの世界に入り込むことができる。今回、クッキーのおいしそうなおに誘われて、思わず食べる真似をした年少児から「おいしい」との声ももれた。教師は、子ども達のつぶやきを大切にされた。子どもから「これ、自分達が食べることができるかな」「自分達がもらえるのかな」などと質問があれば、年長児に聞きに行くなどしたであろう。先々のレストランごっこの期待を膨らませるよりもその場の雰囲気を大切にしたいと考えたが、子ども達から質問が出なければ、教師から少し投げかけてもよかったかもしれない。

<文責 岡谷>

エピソード② 招待状をもらった子ども達 2月27日

教師が「もうすぐ、年長さんが何かすてきな物を届けてくれるかもしれない」と言うと、ミキはすかさず、「クッキー？」と言っていた。教師は「うーん、どうかな。お片付けしたら、きっと何か持って来てくれるはず」と言った。するとダイキは自分が出したものでなくても懸命に片付けをしていた。



帰り支度をしていた年少児の前に年長児がずらりと並び、「明日レストランごっこがあります。これを持って来てください」と知らせた。教師が「レストランごっこって何ですか」と尋ねると、オサムも「レストランって何？」とつぶやいていた。年長児が「これを持ってきたら、カレーとクッキーとジュースがあります」とつなげた。教師は「えー、これを持っていくと、カレーやクッキーやジュースが飲めるが!？」と驚いてみせた。すると、ヨウコが「お金がいる」とつぶやいた。すかさず、年長のダイキが「無料です」と答えた。教師が「お金がいらないけど、これがないと食べられないんだって。大事だね。なくしちゃったらいけないから、お道具箱の上に置いておく？」と言うと、すぐに道具箱の上に置きに行った。

<エピソード②より>

“きっと大事な物なんだ”といった雰囲気を感じとる

年少児にとって“レストランごっこ”は、初めての経験なので、今ひとつ何のことなんだろう？といった様子の子も多かったようだ。しかし、招待状は、レストランごっこに行くためには、きっと大事な物だといった雰囲気を感じとっていたようで、誰一人、かばんに入れて持ち帰ったり、別のところに持って行ったりする子どもはいなかった。単に教師が「明日のレストランごっこの招待状で

す」と招待状を配るのではなく、年長児が訪れてきて「何事だ？」と興味をもったり、話を聞いたり、直接招待状を受け取ったりする体験活動が大事だと思った。

ヨウコはお店屋さんごっこの経験を思い出したのか「お金がいる」とつぶやいていた。年長の話を聞いて、自分なりによく考えているなど感心した。

＜文責 岡谷＞

エピソード③ 楽しみにしていた“レストランごっこ” 2月28日

年少児達が園庭で遊んでいると、年長児がアルミで包まれたカップに色とりどりの花を挿して持ち歩いていた。年長担任が「何かすてきなお花があるか、見せてもらっていいですか？」と言いながら、年少棟の園庭に数名の年長児と一緒に入ってきた。年少児達は何事だろうといった感じで、年長児の後を追った。何やら花を探しているらしいとわかると、アイビーやつやのあるフキの葉などを手にし、年長児に渡そうとする子どももいた。もっとないかなと子ども達と教師が探していると、サクランボの花のつぼみがふくらみかけていることに気がつき、その様子を年少児と年長児が入り混じりながら見たり、カップに挿したりしていた。



年長児が年長棟へ戻るのを見ながら、年少児は「何しゆうがやろう（何をしているの）」「なんで集めゆうが（何故、集めているのだろう）」と教師に尋ねてきた。教師は「レストランごっこの時に使うのかなあ？」と言った。年少児は少し不思議そうな顔をしていた。



教師が「もうすぐレストランごっこが始まるよ、お片付けしようか」と言うと、子ども達の中には、自分が出したものでなくとも、懸命に片付ける姿があった。テラスに並ぶ時、招待状を持ってきていない子どもは、友達が招待状を持っている事に気づき、急いで取りに行っていた。年長児が迎えに来てくれ、1人もしくは2人の手を引いてくれた。年少児達は、少し緊張した面持ちだった。

遊戯室の自分の席に案内され、少したってから、自分の目の前にカレーセット（お盆の上にカレーライス、ジュース用コップ、袋入りクッキー、スプーン）が届くと満面の笑みになる子ども達だった。ひとつのテーブルに全員分のカレー



セットが用意され、年長児数名が一列に並んで、「ようこそレストランへ。…召し上がれ」と言うと、年少児達は、勢いよくカレーを食べ始めた。年長フミオはカレーがついたコウジのあごを拭いてくれた。口のまわりにカレーがついているタクミやケン姿を見た年長ソウタも、丁寧にティッシュで拭いてくれた。「おかわりいる？」「ジュースもあるからね」「おいしい？」などと次々に言葉をかけてくれたり、お世話をしてくれたりする年長児にタクミは思わず「年長さん、やさしい…」と教師に知らせていた。教師もつなげて「ほんと、年長さんやさしいね」と言った。

テーブルの真ん中には、年長児が午前中に集めていた園内にあるいろいろな種類の花が生けられていた。「あっ、年長さんが集めていたお花はここに飾るためだったんだね」と教師が言うと、子ども達はじっと花を見つめていた。

食べ終わったコウジに年長ミナは、プレゼント用のミニ絵本を読み聞かせしてくれた。教師は「ミナちゃん、たくさん字が書いてあるけど、読めるんだね。すごいね」と声をかけた。年長ユミは、もも組の欠席している子を気にかけてくれ、「休んでいるのは、男の子？ 女の子？」と尋ねてきた。教師は「男の子が1人で、女の子が2人」と言った。ユミは少し考えている様子で、黄緑の色紙をとると、「パクパク」を作り「これ、男の子用」と言い、今度はピンクの色紙を何度も折って、「はい、4つ

葉のクローバー」などと言いながら、3つの作品を手渡してくれた。また、タクミが「飛行機ほしい」と言うと、ユミが折ってくれた。年長フミオは、「飛ばすところに案内するから、来て!」と手をひいてくれた。遊戯室からの帰りも年少児を部屋まで連れて行ってくれ、かばんの中にクッキーやプレゼントを入れてくれ、年少児達は幸せな気分いっぱいだった。

最後に年少児全員で「レストランごっこに誘ってくれてありがとう」と言った。

<エピソード③より>

年少児、年長児それぞれの気持ちを大事にするために

年少児にはお世話をしてくれたことをうれしく受けとめられるように、そして来年、再来年とぼんやりとでもいいから、このクッキーのいいにおいやお世話してもらった心地よさを忘れずにいてほしいなと思い、投げかける言葉を選びながら保育にあたった。年少児達の中には、年長さんってすごいな、やさしいなといった気持ちがふくらんだのではないだろうか。

年長児には、お世話する喜びやこんなことができるといった誇らしい気持ちなどをもつことができるよう、かかわってみた。より年長さんの自信や誇りにつながるように、教師が年長児のクラスに行くなどして、感想を伝える機会があるとよかったのではないかと思った。



<文責 岡谷>

お別れ遠足

お別れ遠足の経験の意味

レストランごっこのあと、3月の初めに、お別れ遠足に行きます。バスで植物園に行って、木々や草花を見ながら、年長児が年中児、年少児と手をつないで歩いたり、すべての学年が混ざり合っ、お弁当を食べたり、探検に出かけたりして楽しい1日を過ごします。

ねらい(○)・内容(■)

【年長組】 【年中組】 【年少組】

- 年長児と年中児、年少児が互いに別れが近いことを知り、全学年で遠足を通しての交流を楽しむ。
- 異年齢で手をつないで、植物園を散策し、園にはない自然や展示物を楽しむ。
- 全学年が混ざり合っ、一緒にお弁当を食べる。

Episode

平成24年度

年少 もも組

エピソード① 年長児との交流 3月1日

本園では、3月のお別れ遠足は、幼稚園から車で30分程の植物園に貸し切りバスを使って行っている。この日は、曇り空からのスタートとなり、昼食時には雨となった。年長児は山登りの計画があったため、それぞれのクラスで手をつないで行動していた。だが、昼食時からだけでも3学年が入り混じって交流することができるようにと思い、「年長さんから『一緒に食べよう』と声かけてほしい」

と全体に投げかけてみた。兄が年長組にいるダイキは複数の年長児に囲まれて昼食をとっていた。しかし、ほとんどの子ども達が、同じクラスの気の合う友達とシートをつなぎ合わせていた。

何らかのかたちで年長児と交流できるとよいのではないかと思い、スタンプラリーを計画し、実施したところ、お別れ遠足に参加した観察実習生（1回生）の実習日誌に「年少さんで（スタンプラリーの）シールの集め方がわからない子がいました。近くにいた年長さんが、声をかけ、手を引いて一緒に回っていたことに感動しました」と書かれてあった。

また、バスに乗る前の年少児のリュックサックが柱と柱の間に挟



まった時、瞬時に年長のミドリが助けようとしていた姿が見られたり、「年長組の子ども達としっかり手をつないで、



お話ししながら、楽しそうだった」「バスに戻る時も、年長さんが手を引いてくれて、一緒に話をしながら歩いている姿を見ることができたし、雨にぬれないように声かけをしている子もいました」という内容が実習日誌に記載されてあったりした。

<エピソード①より>

年長児との交流を図ることができるように

昼食時、教師が「年長さんから『一緒に食べよう』と声かけてほしい」という投げかけは、年長の気持ちからすると受け入れがたいような様子であった。きっと遠足に行く前や道中に、仲間関係が深まるこの時期だからこそ、気の合う友達同士で、“一緒に食べよう！！”と約束していた子どもが多かったのではないだろうか。中には、年下の子ども達を誘って食べ始めたとしても、子ども達同士で気を遣って、なかなか昼食時間を楽しむことが難しい子どももいたかもしれない。教師がお別れ遠足のねらいを意識して「年長さんから『一緒に食べよう』と声かけてほしい」と言うのであれば、遠足に行く前に年長の各担任が、あらかじめ子ども達に話しておくとうよかったのではないだろうか。また、「年長さんから『一緒に食べよう』と声かけてほしい」と投げかけるのではなく、「年下の子ども達が入るスペースを空けて敷物を敷いてね」といった投げかけをすると、自然と3学年が混じり合って昼食を取ることができたのではないだろうか。

一方で、スタンプラリーを取り入れたことによって、年長児とのかかわりが見られた。また、バスに戻る時に年長児と手をつなぐようにしたことで、年長児が年少児を思いやる姿もあり、意識的にかかわるきっかけをつくったことはよかったと思われる。

<文責 岡谷>

年長 はと組

エピソード① 「次は、これ（ゲー）出して」

お弁当を食べた後、全園児でスタンプラリーをした。はと組担任は、じゃんけんで勝った子どもにスタンプラリーのシールをあげるようになっていた。なかなか勝てない子どももいるので、じゃんけんをする前に、「先生は、石になるよ～」 「次は先生の手は、ハサミです」などと言い、教師が次は何を出すのかが、子どもに伝わるようにした。しかし、年少組のケンは、「ハサミです」という教師の

言葉に戸惑っている様子だった。するとさっき教師に勝って、シールをもらったユウタが、手をグーの形にして、教師に見えないように隠しながらケンに見せ、「次は、これ(グー)出して」と小さな声で言った。ケンは、ユウタの話の聞こえと少しニヤッと笑って、グーを出した。教師はチョキを出し、「負けた～」と座り込んだ。それを見て、ケンは「ヤッター！」と飛び上がった。その横でユウタは「ねっ(グーで勝てたでしょ)」とケンにうれしそうに言っていた。その後も、年少児や年中児が来ると、こっそり教えてあげる姿があった。



＜エピソード①より＞

スタンプラリーは今年度初めて行ったものであったが、当日は雨も降り、屋内でのお弁当になったことから、このちょっとしたゲームがとてもよかった。全園児が弁当を食べている場所で、挑戦してみたい子どもから自分のペースでゲームに参加できるので、知らないうちに各学年が混じり合い、よい交流の場となったのではないだろうか。ユウタも目の前で戸惑っている年少組のケンを見て、自然と助けてあげる気持ちがわいたようだ。

＜文責 中屋＞

お別れ会

お別れ会の経験の意味

卒園式前日に年長組とのお別れ会があります。この日は、年少児、年中児が作ったプレゼントを年長児に渡したり、歌のプレゼントをしたりします。お返しに年長児から卒園式の時に歌う歌を披露し、最後に、年少児、年中児と年長児が握手をしながらお別れをします。

プレゼント作り

年中児から年長児へのプレゼントはブローチと決まっています。プレゼントとしてふさわしいように、ブローチは少し固めの石粉粘土を使います。教師の力を借りながら、こね、型を抜き、乾いた後に色を塗るといった数日かかる作業を要しますが、作ることで自分が楽しく、「年長組さんが喜ぶね」という教師の声を聞きながらうれしそうに作ります。卒園式では、年長児がこのブローチを胸元につけて、式にのぞむことになっています。

年少児から年長児へのプレゼントは決まっておらず、その時の担任の判断に任されています。年少児は「年長児が卒園する」ということをよく理解していませんが、お店屋さんごっこやレストランごっこなどやさしくしてもらったことを思い出させながら、プレゼントを作ることができるようにしています。

このようにプレゼント作りやお別れ会を通して、年長組へのこれまでの感謝の気持ちをもったり、表したりしてほしいと考えます。

ねらい(○)・内容(■)

【年少組・年中組】

- 年長組とお別れが近いことを知り、感謝の気持ちをもつ。
- 年長組にやさしくしてもらったことを思い出し、感謝の気持ちをもってプレゼントを作る。
- お別れ会で年長組のために歌を歌ったり、作ったプレゼントを渡したりする。

【年長組】

- 卒園を祝ってくれる年少組、年中組に感謝の気持ちをもつ。
- 年少組、年中組のプレゼントを感謝の気持ちを込めて受け取り、お礼に歌のプレゼントをする。

年少 もも組

お別れ会に向けて

エピソード① プレゼント作りをする一年長児との思い出ー 2月26日

教師が、もうすぐ年長組とお別れをする話をした。「みんながうめ組やうさぎ組になったら、年長さんは、お隣の小学校に行くよ。すぐに会いたくても会えなくなるから、寂しいね」と話し始めると、子ども達は何のことだろうといった不思議な表情で話を聞いていた。続けて教師が「みんな、覚えてる？ 年長さんが4月に手をつないでここまで連れて来てくれたこと」と言うと、数名の子どもの手が挙がった。ユリカはうなずきながら手を挙げていた。「他に年長さんとの思い出って何かあるかな」と尋ねると、マリカが「おもちつき？」と言った。おもちつきは、年長とのかかわりがあった行事ではなかったが、教師は「そうねえ、みんなでワイワイ楽しかったもんね」と続けた。



<エピソード①より>

意欲的にプレゼント作りができるように

教師の話を聞いていた子ども達の表情は、“何の話をしているのだろう…”といった不思議な表情だった。また、子ども達のなかからは年長児との思い出話がほとんど出てこなかった。

今回、教師が話した“年長組が卒園し、小学校に入学する”等の話は、年少児にとって想像することが難しい。プレゼントを作るとしたら、年長児との出来事を思い出すことができるようお店屋さんごっこに招待してもらった話などもしてはどうだったのだろうか。年少児がお礼にプレゼントを作ってみようかと気持ちをより膨らませることが大事だったのではないだろうか。

<文責 岡谷>

エピソード② プレゼント作り 2月26日

年少児が達成感や満足感を味わうことができ、これまでの糊や色紙を折るなどと細かい製作に親しんできたことから、細かい飾り付けをするフォトフレーム作りに挑戦することにした。まずは、子ども達がデコシールという少し表面が膨らんでいるキラキラした飾りのシール（1つの作品に18個）をフォトフレームのまわりに



ちりばめた。枠

のまわりに均等に貼ろうとする子どもや枠の1カ所にかためて貼る子どもなど様々であった。デコシールを付け終わると、今度はフォトフレームに木工ボンドをゼリー用のプラスチックスプーンで少しつけ、スパンコールをちりばめていった。たくさん飾りを付ける子どもや星のスパンコールばかり付ける子どもなど、それぞれにこだわって作り上げた。ミキは自



分もほしくなったようで、自分の爪に1つキラキラしたデコシールを貼りつけ、うれしそうにしていた。年長組へのつばやきを聞くことができなかったが、とても集中して作っていた。教師は、個々に「年長さん、喜んでくれるかな」「キラキラして、すてきだね」「お別れ会の時に渡すのが楽しみだね」などと話した。

<エピソード②より>

言葉がけや気持ちを膨らませるために

ミキが爪にデコシールを貼っているのを見せてくれた時、「自分もほしくなるくらい、すてきなプレゼントができたね！」などと投げかけたり、子ども達を作っている時に「年長さん、喜んでくれるかな」と言いながら寄り添ったりすることを大切にするとよかったと思った。製作している最中は、木工ボンドの量が多くてあちこちについてしまい困っている子どものところへ行ったり、どのように飾り付けしていこうか悩んでいる子どもの様子が気になったりして、年長への思いを抱くための言葉がけをたくさんするゆとりがなかった。製作が終わった後でもよいので、みんなが作ったプレゼントを眺めながら、年長さんがどのように思うかなど話をすると、より子ども達の気持ちのなかにも“作ってよかったな”“喜んでくれるかな”などの思いをふくらませることができたのではないかと思った。

<文責 岡谷>

エピソード③ お別れ会当日 3月15日

前日の降園時に、教師は「明日はいよいよ、みんなが年長さんに心をこめて作ったフォトフレームを渡す日だよ」「だまって渡す？」と尋ねると、子ども達は首を横に振ったり「ダメー」と言ったりして、話をよく聞いていた。「何て言って渡すと喜んでくれるかな」と問いかけた。するとヨウコが両手の上にフォトフレームをのせるような格好をして、手を前に差し出しながら「かわいい声で『はい、どうぞ』って言ったらい」と言っていた。教師は「そうだね、そうやって渡したら、年長さん、きっと喜んでくれるね」とヨウコの思いを受けとめた。

当日、お別れ会がある遊戯室へ向かう前に、教師は子ども達に「何て言って渡すか決めた？」と言うと、子ども達は何度も“うん、うん”とうなずいていた。

いざ、渡すとなると緊張していたようで、表情がこわばっていた。しかし、渡した後の子ども達はうれしそうで、元気に担任の所へ戻ってきた。

年少組と年中組がプレゼント渡しを終えた後、年長組が『いつまでもともだち』を歌ってくれた。さっきまで友達にちょっかいを出すなどゴソゴソしていたコウジだが、歌い始めた年長にくぎ付けになっていた。年長組が歌い終わるとショウヘイは「涙が出そうになった」と言っていた。

最後に年長児と握手をして帰ることになっていた。教師は握手をするまでの間に「今から年長さんと握手をしていくよ」「元気でね」とか『遊んでくれてありがとう』とか『また、幼稚園にも遊びに来てね』って言うといいかななどと話した。しかし、子ども達はうなずいているものの、難しいかな…と思った教師は、「そんなことを思いながら握手していこうね」とつなげた。

<エピソード③より>

司会の合間に年少児は年長児へ“こういう思いでフォトフレームを作りました”と話したり、年少児が渡す際の心の準備をしたりするために“年少さん、何て言って渡すか決めた？”などと言ったりするとよりお別れ会のねらいに近づけたのではないかと思った。

お別れ会をする前にも、なぜ今日は全園児が集まっているかを話すとよかったと思われる。

<文責 岡谷>

年中 うさぎ組

お別れ会に向けて

エピソード① 年長さんへのプレゼントを作ろう 2月25日

登園してきた子ども達に、年長さんへのプレゼントとして、ブローチを作ってみようという話をしながら、石粉粘土を出すと、すぐに作ってみたいとたくさん子ども達がやってきた。「型を抜くのがクッキーみたい」と言いながら、観察実習生や教師に手伝ってもらい生地をのばした。作ってから、プレゼント用と別に自分用にひとつ作ったものを持って帰ってよいことにした。

その日の弁当前に年長組にしてもらったことなどを子ども達と一緒に思い出してみた。困っている時にやさしくしてくれたことや、お店屋さんをしてもらったことなどたくさん思い出がでた。「年長さんにはいろいろなことをしてもらったね。年長組さんありがとうの気持ちを込めて、朝みんなで作ったブローチをプレゼントしたいね」と話をした。

子ども達も、そう思ったようで教師の言葉にうなずいている子ども達がたくさんいた。教師は、年長児が来月に卒園式をすること、卒園式ではみんなが作ったブローチを付けることを話した。すると単なるプレゼントではなく、卒園式に使う大事なブローチであるということがわかったようで、教師の話が終わった後も、自分の作ったブローチについて子ども達同士で「〇〇の形がある」「きれいにできた」「喜ぶと思う」などの話をしていた。

<エピソード①より>

この日の朝、ブローチを作り始めた時、それぞれに「年長さん、きっと喜ぶね」「どんなブローチが好きかな？」などと声をかけるようにした。しかし、前日に子ども達に今日のブローチ作りについてもっと説明をして、子ども達の意見を聞いたり、年長組への感謝の思いを引き出してから活動に取り組むべきだったと反省した。

すでにブローチを作り始めていたが、色づけなどが明日以降にも残っているため、もう作り始めてはいたが、弁当前にクラスで年長児との思い出についての話をした。子ども達は特に12月に行ったお店屋さんごっここの思い出を語っている子どもが多く、そこから自然とそのお返しをしたいと思うことが多かったようだった。

<文責 大野>

エピソード② 色塗りとブローチ選び 2月28日

石粉粘土での型はいろいろな種類で抜いており、子ども達が好きな色で塗れるようにいろいろな色を用意していたのだが、多くの子ども達が、最初に選んだ絵の具の色ですべてのブローチを塗ろうとしていたので、「もし自分が年長さんだったらどんなものをどんな色で塗ってるのをもらったらうれしいかな？」等と相手の気持ちにも気づくように声かけをしながら色付けをしていった。すべて塗った後で子ども達にブローチにするのは作った型の中から1人1つになること、ブローチの金具を付けるのは少し難しいので、教師が付けることになることと伝え、さらにどれをブローチにするのかはきれいなことはもちろんだが、男女の数の違いや、ブローチの厚みも関係あるので教師に任せてほしいと伝えると、すぐに「プレゼントだからいいよ」という声があがった。



<エピソード②より>

最初色塗りを始めた時は、自分の楽しさが中心になっていたようだったので、それぞれの子どもに、

プレゼントする相手のことを思い浮かべられるような言葉がけをしていった。そうすると、丁寧に塗ったり、色を慎重に選んだりする姿が見られていた。子ども達なりに、年長児にプレゼントすることを考えて製作している様子がよくわかった。

また、製作したものをブローチに仕上げるのに、教師に選ばせてほしいと言ったときは子ども達が反対するのではないかと思っていた。しかしそういった声はなく、あっさり「プレゼントだからいいよ」という声が上がリ、拍子抜けしたのだが、もしかしたら教師の話の仕方が悪く子ども達は具体的にイメージできなかったのではなかったのか？ 手間がかかっても子ども達と一緒にどれにするか選んだ方がよかったのではないだろうか等と考えた。

<文責 大野>

エピソード③ 「あれ、ない」 3月8日

石粉粘土で作った型を1人1つ選んで持って帰るようにしていたのだが、カズオが「あれ、ぼくがない」と言った。カズオはどうやら教師がブローチ用に選んだ黄緑の舟が気に入っていたらしかった。教師はカズオに「よくできているから、お兄さん喜ぶかなあと思って舟を選んだのだけれど替える？」と聞くとカズオはすぐに、「そうだね、それをお兄さんにあげる方がいいよ」と言った。後で選ぼうとしたサクラも同じように「私のお花のは？」と教師に尋ねてきたので、教師はブローチ用にと選んでおいた、サクラが作った花を出してきた。サクラはプレゼント用だとわかってはいる様子だったが、とても持って帰りたいようにしていたので、教師はサクラの気持ちに共感しながら「とってもよくできているものね。こっち（他の花）もいいかもしれないね、どうする？ お花の方を持って帰る？」と聞いた。サクラは2つの花を見比べてから、しばらく口を真一文字に結んでじっと考えていた。教師はサクラの判断を尊重しようとしていた。サクラは顔をあげて「こっちでいい」と言ってブローチ用の花ではない方の粘土を持って帰った。

<エピソード③より>

前回の説明の時に、もしかして子ども達はわからなかったのでは？と思った通り、カズオとサクラ以外にも何人もの子ども達が自分の作ったものが1つ足りないなどと言ったりしていた。その都度教師が説明していくと、前回の話を思い出したり、そうだったのか残念という表情をしたりする子ども達がいた。その中でもカズオとサクラはとても対照的だった。カズオは先生に言われたからといった様子ではなく、本当に心からそれをあげた方がよいだろうと思っているようだったし、サクラは本当はあげたくないのだけれど、どうしようかと悩んでいるようだった。最後にサクラは、教師の選んでいた花をあげることにしたのだが、選んだ時に言った「こっちでいい」という言葉に教師は非常に悩んだ。本当は花を持って帰らなかったサクラが、やはり教師の意向に沿わなくてはいけないと思って選び「こっちでいい」と言ったのであればそれは感謝のプレゼントと少し違ったものになっているのではないか、<エピソード②より>で書いたようにやはり子ども達と一緒に相談しながら選ぶべきだったのではないかなどと思った。

<文責 大野>

エピソード④ プレゼントをラッピングする 3月14日

お別れ会前日、できあがったブローチを自分でラッピングすることにした。フミカがブローチを袋に入れながら「これ喜んでくれるかなあ」と言った。それを聞いた横にいたソウシが自分の作った赤いハートを見せながら「喜んでくれるろう。ソウシもお姉さん喜んでくれると思う」と言った。教師も「すごくすてきやき、喜んでくれると思うよ」と言うと、フミカは笑顔になり「そうだねえ」と言った。

<エピソード④より>

子ども達はできあがったブローチを見て「あっ、これぼくのや！」などうれしそうな表情でラッピングしていた。フミカはブローチを入れながら渡す年長児のことを考えて「喜んでくれるかなあ」と思わず口に出たのだろう。ちょうど横にいたソウシがフミカのブローチを見ながら、自分のブローチを見せて「喜んでくれるろう」と自信たっぷりに言ったことで、フミカもそうかもしれないと思うことができたのだろう。

<文責 大野>

エピソード⑤ お別れ会当日 3月15日

お別れ会へ行くためにそれぞれに自分が作ったプレゼントを持ち、列に並んでいたとき、子ども達はお互いに自分の作ったブローチを見せ合っていた。その時は笑顔だったのだが、お別れ会で渡す時には緊張していたようで、ありがとうと感謝の気持ちを込めて声をかけようとクラスで話していたが、ほとんどの子ども達は黙って渡していた。何人かの年長児が「ありがとう」と声をかけてくれると、やっと笑顔になっていた。

その後、年長児がお別れの歌のプレゼントとして『いつまでもともだち』の歌を歌うと、聞いていたフミカが教師に近づいて「年長さんの歌を聞いたら、なんだかさみしくなっちゃった」と言った。歌詞をよく聞いていて今までの思い出をいろいろと思い出していたようだった。

<エピソード⑤より>

年長児への感謝の気持ちをもってブローチ作りをしてきたが、いざ渡す時にその気持ちを伝えるということが難しいと感じた。うさぎ組の子ども達に感謝の気持ちはあるもののなかなか言葉が出ず、黙ってしまっていたので教師がそこで適切な援助をできればよかったのだが、まだ渡す相手を見つけれない子ども達と一緒に渡す相手を探していたため、できなかった。もう少しスムーズに渡せる方法を考えておくことで、もっと子ども達の気持ちを伝えたり、年長児への感謝の言葉を引き出したりできたのではと思った。

<エピソード①②③④⑤より> お別れ会を通して

お別れ会、卒園式に向けてのブローチ作りに取り組むことで、ねらいにあるような年長への感謝の気持ちを表すことはできたと思うが、まだまだ自己中心的な思考である年中児にとって、相手のことを考えて作ったりするということは思っていたよりも難しいと感じた。もちろん年長児に感謝の気持ちはそれぞれもっているのだが、それをブローチ作りで表すこと自体が高度すぎるのではないかも感じた。ブローチは作るのに時間も手間もかかる。石粉粘土で、壊れない厚みできれいに作ろうとすると、硬くて紙粘土より難しい。子ども達は自分が作ったものなので愛着がでてきて、持って帰りたいと考えているようだった。そして、型を抜いたものを複数個作っていることが、さらに問題を複雑にしていると感じた。1人1つしか作らないほうが子どもにとってはシンプルでわかりやすいのではないだろうか。複数ある中から、プレゼント用を先に選ぶということが、果たして年中児の発達に合っているものなのか、プレゼントの作り方や内容を検討する必要があるのではないかと感じた。

<文責 大野>

年中 うめ組

お別れ会に向けて

エピソード① 年長組への贈る歌を年少組の子ども達と歌う 3月1日

1年間で最後の遠足（お別れ遠足）の日、うめ組の子ども達は年少組の子ども達と行き帰りのバスが一緒だった。目的地である植物園に向かうのバスの中で、教師が「年長組さんが小学校に行く前に、『げんきでね』って言ってあげるお別れ会があって、その時にもも組さんとうめ組さんとうさぎ組さんで『カレンダーマーチ』っていう歌を歌ってあげるがよ。今日はもも組さんとうめ組さんが一緒のバスだから、このバスの中でこっそり歌ってみようか？」と提案した。うめ組の子ども達はこれまでに何度も歌っていて、その表情には自信や落ち着きを感じられたので、教師は「うめ組さんは参観日の時も歌ったから、（歌詞を）覚えているよね？ だから、もも組さんが覚えられるようにゆっくり歌ってあげようね」と促した。すると、うめ組の子ども達は、クラスで歌っている時よりもゆっくりとしたテンポで歌ってあげていた。

<エピソード①より>

年長組のお別れ会があることを、遠足のバスの中で伝えたのは、次のような教師の願いがあったためである。バスの中は年長児がいない状態だったので、内緒の話（「こっそり歌ってみようか？」）という位置づけで、子ども達に共通の意識や仲間意識を感じてほしいと願っていたこと、また、バスの中という状況だけで見ると、うめ組の子ども達は年齢が一番上なので、年少組の子ども達よりも経験が多い（『カレンダーマーチ』の歌もよく知っている）ことや、年長組に近づいていることを感じてほしいと願っていた。子ども達の様子を振り返ると、クラスの中で伝えるよりも、今回の状況の方が教師の願っていた意識の芽生えや望ましい姿がよく見られたように感じる。

<文責 矢田>

年長 はと組

エピソード① 「これ知っちゅう」 3月15日

お別れ会では、年少・年中組の子ども達から、手作りの心のこもったプレゼントをもらった。その後、年少・年中組からのプレゼントの歌『カレンダーマーチ』が始まった。メロディーが聞こえてくると、ソウタは「これ知っちゅう」と言いながら、一緒に歌い始めた。まわりにいたはと組の子ども達も、一緒に歌い始めた。みんなうれしそうに、歌っていている年少・年中組のを見ながら歌っていた。



年長組からの歌のプレゼントは、卒園式で歌う『いつまでもともだち』だった。今度は年長児が、年少・年中組の方を向いて、一生懸命歌っていた。

<文責 中屋>

卒園式

卒園式の経験の意味

【年長組】

子ども達には大きくなった喜びや自信、誇りをもって卒園してほしいと考えます。そこで、卒園式では、修了証書をもらうとき、花のアーチの下で自分の名前を言ってから、園長先生に修了証書をいただきます。その後、証書を掲げて見守る保護者の前を歩きます。拍手をもらいながら歩くその表情は、毎年とても誇らしそうです。

また、幼稚園で一番楽しかったことの思い出を友達と一緒に、あるいは1人で、見守る保護者や他の子ども達の前で言います。とても緊張している様子の子も達ですが、言い終えた後の子ども達の表情はとても満足そうです。約1時間の卒園式で、元気な子ども達には動きたい気持ちもありますが、大きくなった自分を見てもらう、お祝いしてもらう大切な機会であることを知らせながら、卒園式の取り組みを行うようにしています。そして、「さすが年長組さん」といった態度で卒園式に参加できるようにすることで、大きくなった喜びや自信、誇りをもってほしいと考えます。

【年中組】

本園では、年長組だけで卒園式を行います。そこで、年中組の子ども達には、年長組の子ども達に対して「卒園おめでとう」の気持ちをもつために、自画像を描いて、卒園式会場に飾るようにしています。そして卒園式前日のお別れ会の時、翌日に同じ場所で卒園式があること、飾られている自画像が年中児のかわりに“卒園おめでとう”の気持ちを伝えることを子ども達に知らせています。年少児には今ひとつ理解できないと思われるかもしれませんが、実際に飾られている自画像を見ることで、年中児、年長児にはその意図が理解できると思われるます。年長児にも年中児が祝ってくれてうれしいという気持ちを感じてほしいと思います。

ねらい(○)・内容(■)

【年長組】

- 大きくなった自分を誇りに思ったり、自信をもったりする。
- お家の人に大きく立派になった自分の姿を見てもらおうという思いをもち、自分だけのことでなく、みんなのことを考えて行動しようとする。
- お家の人、先生達、年少児、年中児の“おめでとう”と祝う気持ちをうれしく感じる。
- 自分の名前をしっかりと言い、園長先生に証書をいただく。
- 年長組の遊びや生活のなかで一番楽しかった思い出を言う。
- みんなの卒園を祝う式であることを考え、式にふさわしい態度でのぞもうとする。

【年中組】

- 年長組に“卒園おめでとう”の気持ちをもつ。
- 卒園を祝いたいという思いをもって、自画像を描く。

年長 さくら組

エピソード① 練習の時から誇らしげな子ども達 3月

式当日のほぼ2週間前から始めた卒園式の練習。待ち時間が少ないように、各クラスでの練習から始めた。最初から、子ども達に卒園式のもつ意味がわかるように知らせることを大事にした。「みんなはお店屋さんや、レストランごっこで小さい組のお世話もできる、お兄さん、お姉さんになったから、その立派な姿を見てもらう日なんだよ」など、証書のもつ意味もふくめて知らせると、ふだんはにぎやかなクラスだけれど、みんな神妙に聞いていた。その後、証書をもらう練習から行ったが、舞台の上での待ち方もとても上手で、証書が入っている練習用の筒を胸に抱いている顔は、なんだかとても誇らしそうだった。

エピソード② 式当日 3月19日

卒園式は10時から始まるが、準備のために9時25分頃からトイレに行って保育室前の廊下に並びようにした。みんなが集まる間、式で歌う歌を歌ったり、緊張せずに自分の名前を言えるように「自分の名前を大きな声で言ってみよう」と促したりした。また「立派なところを見せて、お家の人を喜ばせようね」などと声もかけてみた。全員が揃い、そろそろ式場付近まで出発しようとしたとき、カンタが列から出てきて「みんな、がんばるぞ～」と言い、その声にみんなも「オー！」と応じた。続いて数人、それぞれ言葉は違うけれども、卒園式をがんばろうという内容のかけ声をし、みんなも応じていた。

式が始まると、証書をもらう時に自分の名前を言うことや、思い出の一言を言うのは恥ずかしくてたまらないと思っていたであろう子ども達も、緊張しながらも、いつも以上にがんばっていた。また、式の練習の時は長い時間に耐え兼ねて、手前に説明してあっても、「まだ終わらんが？」と、教師に尋ねてきたリョウタは、態度も立派で、お祝いのお話をしてくださるお客さまの問いかけにも「はい」と大きな声で返事をしていた。保護者の話によると、式当日の朝、「がんばる」と言っていたそうである。

<エピソード①②より>

卒園式の練習は、証書をもらう時など待ち時間も長く、どうしても体が動いてしまう子ども達もいる。元気な子ども達には我慢の時間かもしれないが、“お兄ちゃん、お姉ちゃんになった姿、立派な姿を見てもらって、お家の人を喜ばせよう”と子ども達に繰り返し伝え、式らしい雰囲気をつくってきたことで、子ども達もがんばることができたように思う。しかし、本来卒園式は、大きくなった自分に誇りや自信をもったりするものであり、保護者を喜ばせることを中心にねらっているわけではない。教師は子ども達に、「喜ばせよう」と繰り返し声をかけたが、別の言葉で、自分達が大きくなったことを感じるようにすべきだったと思う。

「みんな、がんばるぞ～」のかけ声は、10月の運動会の頃、リレーの時に子ども達に教師が言うように促したことが最初であった。すると、2月の参観日に、隣のはと組と合同でオペレッタを行った時には、カンタが自ら「みんな、がんばろうな」とクラスのみんなの前で言ったので、続けて学年みんなの前でも言ってもらった。このような経験が「さあ今からみんなでがんばろう」という雰囲気の時に、自然に言葉が出てきたのだろう。

さくら組だけでなく、学年全体としても、練習より落ち着いた雰囲気ではがんばっていたように思う。運動会から、学年で気持ちをひとつにしてきたことが、卒園式の経験にも生きてきたように思われる。「1人がふざけたり勝手なことをしたりすると、みんなががんばっている気持ちがお家の人に伝わらない」という言葉を、2月の参観日からはと組担任が繰り返し子ども達に伝えたことも大きいのだろう。

練習の時、やる気のなかったリョウタが式当日はりきっていたのは、2月の参観日のときに、舞台そでで少しふざけていたところを母親に注意され、がっかりしていたので、卒園式では大好きなお家の人によいところを見せたかったのかもしれない。

<文責 鎌倉>

年中 うめ組

大きくなった自分や次になる年長組を感じながら自分の絵（自画像）を描く

エピソード① 大きくなった自分の絵を画用紙に描く 3月4日・5日

お別れ遠足が終わった週明けに、『ちいさなふく、ちいさなぼく』と『なぞってみると』の2冊を、日を分けて子ども達と読んだ。そのうえで教師は、「みんなは赤ちゃんの時から比べるとすごく大きくなったよね。顔も手も足も全部大きくなっていると思うけど、どれくらい大きくなったかな？」と問いかけた。そして、四ツ切の画用紙を見せて、「みんなの身体はこの紙よりももっと大きいけど、幼稚園で一番大きい画用紙はこれしかないがよ。だからこの紙の上から下までをめいっぱい使って、僕の、私の身体はこんなに大きくなったよって自分の絵を描いてみようよ！」と促した。

子ども達に画用紙を渡す際に、あらかじめ横向きに3つの折り目を付けておき、それぞれの折り目を大きさの目安にしながら、頭・身体・脚と順番に画用紙の端から端までを使って描くことができるように工夫をしておいた。子ども達のなかには、自分の身体の大きさを確認しながら描いている子どもや、実際に掌や足を画用紙の上に置き、それらをなぞって本当の大きさを描いている子どももいた。

クレパスで身体の輪郭や服の色を描いた後に、絵の具を使って色を塗り、教師が絵のまわりを切り取って大きくなった自分の絵を完成させた。

<エピソード①より>

子ども達は、これまでの生活やその節目となる行事を通して、だんだんと自分が大きくなっていることや、幼稚園で一番上の年長組に近づいていることを意識してきていると教師は感じていた。そこで、その意識をより具体的に感じられるように、関連する絵本を読んだりして、大きくなった自分の絵を描くことを子ども達と一緒に進めていった。画用紙にあらかじめ折り目を付けたり、実際に掌や足を画用紙に乗せてなぞって描くのをとめなかったりしたのは、より実際の自分に近い大きさや形を描いてほしいと願ったからである。その結果、四ツ切の画用紙には収まりきらずに紙を足した子どもや、なぞった掌や足が他の部位に比べると大きくて、多少アンバランスな全体像になった子どももいたが、教師は形よりも大きくなった自分をより表現できている様子を認めていくようにした。

<文責 矢田>

年長児の“卒園”の意味を自分なりに感じる

エピソード② 卒園式のリハーサルを見に行く 3月12日

子ども達が自画像を描いた次の週に、年長組の担任にお願いをして、卒園式のリハーサルをうめ組の子ども達に見せてもらうことにした。他の行事とは違って厳かな雰囲気の場合なので、子ども達に

も「年長組さんが小学校に行くために真剣に練習しているから、口を閉じて静かに見ようね」と伝えて、リハーサルをしている遊戯室の中に静かに入り、壁際の椅子に座って年長児のしているのを見た。子ども達が椅子に座った時に、ちょうど年長児が園長先生から修了証書もらう時であったので、子ども達は年長児が1人ずつ証書の筒をもらうのを興味津々で見ている。

卒園式の練習を見た後で、子ども達から感想を聞くと、「年長組さん、大きな声で自分の名前を言っていた!」「園長先生、何で1人目だけ(証書の文章を)読んだが?」「男と女で(修了証書の筒の)色が違ってた!」など、気づいたことや疑問に感じたことを思い思いに言って、よく見ている様子がわかった。教師は「そうだね」「何でだろうね?」など子ども達と共感したり一緒に考えたりしたうえで、「年長組さん、立派な小学生になるためにがんばってたよね。“証書もらって本当の小学生になるよ!”っていう本番の日は3月の19日やき、みんなはもう幼稚園がお休みになっちゃうがよ。だから、みんなはいないけど、“年長組さんががんばってね!”っていう気持ちや“次は自分達が年長組になってがんばるよ!”っていう気持ちが伝わるように、みんなの描いた絵を遊戯室に飾ってあげようよ」と伝えた。子ども達からも、「うん、そうしよう!」「いいね!」という同意の声が聞かれた。

<エピソード②より>

本園では、年中児は卒園式に参加しないので、卒園式や卒園するということが一体どんなものなのかということが、実際自分が年長組になって、その立場にならないと意識しづらいと感じる。今回のように卒園式のリハーサルを見せてもらうと、子ども達は、(卒園式の取り組みは)ふだんの園生活とは全く雰囲気が違うということ強く感じていたようだ。それは、子ども達から卒園式の感想を聞いた時にも明らかであった。年長組の園生活が終わりに近づき、次が小学校という立場になった時、なぜこんなにふだんとは違うのか、ぴしっとしたことをしなければいけないのかということはいま理解はできないが、年長組が終わって小学校に行くということは、それだけすごいことなんだということを肌で感じる機会にはなっていると思われる。そういった雰囲気のなかに、苦痛を感じるほどではなく、心地よい刺激として感じられるくらいの立場(見学者)で自分が参加することで、年長組に対して「おめでとう!」という感情が湧いたり、“次は自分達の番だな”という意識が少しずつ芽生えていくのではないだろうか。

<文責 矢田>

“卒園に向けて”のエピソード全体を通じた考察

年中組の取り組みについて

これまでの卒園に向けての年中組の取り組みは、2月下旬にレストランに招待してもらい、お礼にブローチを作り、3月上旬には、卒園式に参加できない自分の代わりに「卒園おめでとう」の気持ちを伝える自画像を作成するという流れで行ってきた。全体を通して事例を考察するなかで、卒園に向けての年中組の取り組みを以下のように見直すことにした。

ブローチ作り～年長組の感謝の思いと自分の物にしたいという両方の思いを大事にするために～

年長児にプレゼントするブローチを作る石粉粘土は、紙粘土よりも質感がよく、できあがり美しいので、プレゼントとして使用してきた。しかしうさぎ組のエピソードによると、子どもが1人できれいに型を抜くのは難しく、また自分で作った物に愛着がわき、持って帰りたくなることなどから、プレゼントの作り方や内容を検討する必要があることが考察されていた。たくさん抜いたブローチの中から1～2個プレゼント用として選ぶので、プレゼント用として作成したものなのに、余ったブローチをその後どのように扱うかについても、職員の中で意見が分かれるところであった。

そこで、うめ組がブローチ作りの前に紙粘土でクッキーを作った事例をもとに、プレゼント作りの方法を次のように見直すことにした。まず、レストランごっこのクッキー作りを見学した後、レスト

ランごっこへの期待をふくらませるとともに、自分達もクッキー作りの真似を楽しむことができるように、紙粘土でのクッキー作りを子ども達に経験させることにした。また、紙粘土で作ったクッキーは遊びに使ったり、自分で作った物を持って帰ったりできるようにすることにした。そして、レストランごっこに招待してもらった後、年長組への感謝を込めて、石粉粘土でのブローチを1人1個または2個（予備も含めて）、すべてプレゼント用として、担任と一緒に年長組への思いを込めて丁寧に作ることにした。

以上のように、子ども達が年長組のクッキー作りの真似を紙粘土ですることによって、来年は自分達を作るんだという期待をもたせるとともに、型をいっぱい抜きたい気持ちや、作った物を自分の物にしたいく気持ちを満足させることができる。こうした満足感を味わっているため、年長児へのプレゼントとしての石粉粘土でのブローチ作りは、1～2個でも感謝の思いを込めて作るができると思われる。

子ども達の意識の流れを大切に

自画像

卒園式に参加できない代わりに年中組の子ども達が描く自画像は、実際の卒園式のイメージができない子ども達に動機をもたせるところに、苦慮をしていたところでもある。中には、自画像を描くことだけでも難しく感じる子どもがいる。また、卒園式の前日に、卒園式と同じ会場で行うお別れ会で、掲示している自画像を見せても“おめでとう”の気持ちを表すための自画像であるという意識が子ども達の中にあっただろうか判断に迷うところであった。

そこで、うめ組の取り組みを参考に、まずはもうすぐ年長組になる大きくなった自分を自画像に描くことにした。その後、卒園式の練習を見学に行き、卒園式へのイメージがふくらんだところで、大きくなった自分を描いた絵を、卒園式当日参加しない自分達の代わりに、卒園式の練習を実際に見せてから自画像を掲示することで、“卒園おめでとう”の気持ちを込めて遊戯室に飾ることを子ども達に知らせるようにした。このようにすることで、もうすぐ年長組であるという大きくなった自分を意識させ、進級への憧れや期待をふくらませながら、無理なく自画像作成に取り組ませることができる。そして、年長児への“卒園おめでとう”の気持ちをもちやすくすることができると思われる。

プレゼント作りをするにあたって

年少組のエピソードで、年長児への“ありがとう”の思いをもってプレゼント作りを始めることができるように、年長組がもうすぐ卒園し会えなくなることや、4月に保育室まで連れてきてくれたこと（新学期の出迎え9ページ参照）を思い出させていた。しかし、子ども達には、卒園の意味が理解できなかったり、4月の出迎えはほとんど覚えていなかったりして、感謝の気持ちをもってプレゼントを作るというねらいの援助としては、どうだったろうかと反省されていた。

年中うさぎ組のエピソードでは、ブローチ作りをした後に、年長組へ感謝の思いを引き出したり、年中組がプレゼントするブローチは、卒園式に使う大事な物であることを説明したりしたことが反省されていた。

お店屋さんごっこ（紀要69ページ参照）やレストランごっこ（紀要137ページ参照）など、年長児がお世話してくれたことが、年少児、年中児にとって、とても楽しい経験となったことを思い出させてから、お礼にプレゼントを作ろうともっていった方が望ましい。そうすることで、プレゼントを作り始めてからも、年長児への感謝の気持ちが意識されやすいのではないだろうか。

全体のねらいと子ども達一人一人へのねらいをもつ

2月～3月は、最後の参観日に始まり、卒園に向けての取り組み（レストランごっこ、お別れ遠足、卒園式）があって、年長児は大活躍の時期である。しかし、教師の方は、ともすると行事の準備に追われ、また、練習すればするほど形になる年長児なので、教師にもつい力が入りがちだが、本来、行事のなかで何を大事にするべきか、子ども達に何を育てたいのか、見失いがちになることもある。

年長はと組のレストランごっこのエピソード①では、クッキー作りにはりきりすぎて、まわりの友達の思いに気づかずに行動していたアツシに対して、教師がすぐに介入するのではなく、自分で気づくようなかかわりをしていた。“これまでの経験を生かしながら、グループで協力し合って活動に取り組む”というクラス全体へのねらいをもちながら、アツシの育ちを把握し、このように育てほしいという願いももっていたからこそ、適当な援助ができたと思われる。

年長さくら組の卒園式のエピソード①では、「家の人を喜ばそう」と繰り返し声をかけたが、卒園式は本来大きくなった自分を誇りに思ったり、自信をもったりすることを大事にしているのので、別の言葉をかけるべきであったと反省している。

卒園に向けての行事だけでなく、他の行事でも同様であるが、クラス全体へのねらいをもつとともに、子ども達一人一人への理解を深め、願いをもったうえで、環境を構成したり、援助をしたりする必要性を再確認できた。

第3部

研究の成果と今後の課題

第3部 研究の成果と今後の課題

第1節 研究の成果

ねらいが共有化された

研究当初、ねらいを立てたうえで保育をし、事例を記録し、考察するという方法で研究を進めてきた。ところが、考察を進めるうちに、教師一人一人のねらいの捉え方には“ずれ”があることが明らかになり、ねらいで表している一文には限界があると思われた。そこで、行事ひとつひとつの冒頭に、“経験の意味”として、ねらいを説明する文章を付け加えるようにした。こうすることで、ねらいに表していることがどこから来ているのか、本園では何を大事にしているのか、具体的に、ねらいにも反映され、教師間でねらいが本当の意味で共有化されたことは成果であると思われる。

保育における行事への取り組み方がわかりやすくなった

各行事において、行事への過程や行事そのもののエピソードを検討することによって、行事に視点を置きながら、発達の連続性を捉えることができた。そして、たとえば、“お店屋さんごっこ”の年長組や“クラスのみんなで表現遊び（最後の参観日）”などでは、行事にいたる経験の過程やエピソードを時系列に沿って表したことによって、行事前からの子どもへの援助や環境構成のめやすを立てやすくなった。それによって、教師が、子ども達の様子に合わせてアレンジして保育しやすくなった。

行事のねらいを保護者に伝えやすくなった

行事の前には、行事を通して子ども達に何を育てようとしているのか、保護者に伝えるようにしている。しかし本研究前は、行事のねらいが明文化されているものが少なく、ねらいがレジュメに記されていても、上記のように教師一人一人のねらいの捉え方にはずれがあり、園として何を大事にしているか保護者には伝わりにくかったのではないだろうか。本研究で、経験の意味を見直したことで、保護者にも行事のねらいが伝えやすくなった。

行事というと、華やかさや出来栄を評価する一般的風潮があり、実際に保護者から「物足りない」といったような意見が出たこともあった。これまでは、その説明の根拠を必ずしも明確にし得なかったが、本研究でねらいを明らかにしたので、「行事を通してこんな子どもを育みたいと考えます」「こんなことを大事にしています」と自信をもって伝えやすくなった。もちろん、慢心はせず、このねらいでよいのだろうか、あるいは取り組み方はどうだろうか、子ども達一人一人の心は育っているのだろうか、常にいろいろな視点で行事を振り返る必要があるだろう。

本園の行事の捉え方を確認することができた

行事は、子ども達の遊びや生活を豊かにしたり、意欲的にしたりするものであると考える。運動会や参観日、卒園式など、保護者に見てもらおう行事についても、

保護者に“見せるため”という位置づけではなく、子ども達にとって見てもらうことが楽しみとなり、期待がもてるような行事として捉えることができた。

本研究においては、子ども達にとって楽しみとなるような行事となるために、ふだんの遊びや生活と切り離して行事だけを取り入れるのではなく、ふだんの遊びや生活を豊かにするもののひとつとして取り入れた。

また、本研究では、行事の内容にもよるが、子ども達にとって楽しみのひとつである行事ならば、子どもが自分で選んだり、自分で決めたりすることができる自由度の高い行事にしたいと考えた。たとえば、“クラスのみinnで表現遊び（最後の参観日）”では役を自分で決めること、“お店屋さんごっこ”ではやりたい店を自分で選んだり、工夫やアイデアを自分で、または自分達で考えようとしていたりすることである。こうすることで、行事を通して、本園の教育目標であるよく考えて行動する子どもの育ちが見られた。

以上のように、行事は子ども達の楽しみとしてあるべきであり、楽しいから子ども達が主体的に参加し、自分で選んだり、決めたり、考えたりすることができ、楽しいから最後まで取り組んでいるうちに、ねらいが達成されていくような、そんな行事が本園としては望ましいことを共通理解した。

第2節 今後の課題

指導計画の作成に向けて

新入園児の出迎え、水遊び・プール遊び（プール参観日）、運動会、お店屋さんごっこ、クラスのみinnで表現遊び（最後の参観日）。本研究では以上6つの行事を取り上げて、行事や行事までの過程のエピソードを中心に研究を進めてきた。研究したことを生かして、計画的に保育に取り組めるようになった。今後、この研究をもとに、指導計画にまとめていきたい。

行事における“よく考えて行動する子ども”の姿の課題

本研究ではサブテーマとして、“よく考えて行動する子どもを育む行事”をあげていた。これは、もともと“発達の連続性をふまえて経験の意味を問う”というテーマが、行事だけではなく、遊びについても研究したいという願いがあったこと、また、本園の教育目標である“よく考えて行動する子ども”という視点で行事も研究するべきではないかと考えたことから、掲げられたサブテーマである。しかし、研究の中で、“よく考えて行動する”姿がエピソードとして記録されることが少なかった。行事のなかでも、友達とかかわるなかで、また集団の一員として、よく考えて行動することにつながる姿はある。今後、指導計画を作成するにあたって、“よく考えて行動する子ども”を育む視点で行事をさらに検討していきたい。

おわりに

幼稚園では、1年間にたくさんの行事があります。子ども達は日々の遊びを楽しみながら、いつもとはちょっと違う日である行事も楽しみにしています。私達教師は、行事を楽しみに思う一方で、正直なところ“行事に追われている感”というものも、もっているのではないのでしょうか。

毎年、マニュアルを引き継ぎ前の年と同じように行事を行っていけば、その“追われている感”は軽減されるのではないかと思われます。そうやってこなしていてもよい行事もいくつかはあるでしょう。でも、“よく考えて行動する子どもを育む行事”を行うためには、子どもの実態を把握し、興味関心に合った形で行事の取り組みを進めていくことが大切です。本園では、行事で何をするかは、ほぼ担任に任されており、担任は、今年は何をどんなふうに進めていこうと頭を悩ませていました。そして、その年の子ども達にとってよかれと思う取り組みをしてきましたが、園全体を通して見たとき、その取り組み方が発達の連続性をふまえたものであったか、また、その行事の取り組みにどんな経験の意味があるのかが見通せていたかという、不十分であったと思われます。

そこで、個々の担任で行事について考えるのではなく、園全体でそれぞれの学年のそれぞれの行事の経験の意味を考え、それが、3学年通したとき発達を連続して捉えられているか考えていこうということになりました。それぞれの行事の経験の意味が明確なものになれば、行事のねらいもはっきりし、子どもへの投げかけ方、かわり方もわかりやすくなります。そして、どのような取り組みをすればいいかの悩みが少なくなり、負担感も軽くなると思われます。

このような方法で5年間行事のあり方から発達の連続性を見通していくために、エピソードや記録、写真をまとめ、考察してます。その年の子どもの実態や担任の考え方によって、年度によって少しずつ取り組み方は異なると思いますが、経験の意味やねらいがはっきりしたことで、年々行事の見通しが持ちやすくなってきました。

最後になりましたが、本研究について、前半3年間適切なご支援とご指導をいただきました上田淑子先生（元高知大学教育学部非常勤講師）をはじめ、たくさんの皆様にお礼を申し上げるとともに、今後とも、ご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

高知大学教育学部附属幼稚園
副園長 谷脇 のぞみ

研究同人

山 中 文
谷 脇 のぞみ
鎌 倉 正 子
中 屋 江利子
矢 田 崇 洋
岡 谷 里 香
都 築 郁 子
大 野 千 絵
富 田 千 秋
山 中 倫 代
峯 智 子
近 森 希 有
梶 原 佑 佳

裏 垣 博
加 藤 みのり
反 橋 直 子

研究協力者

上 田 淑 子 (甲南女子大学人間科学部総合子ども学科 准教授)

協力者

高 橋 和 恵
山 田 美和子
土 居 千 里
浦 田 仁
北 川 弘 子

発達の連続性をふまえて経験の意味を問う
～よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方～

平成25年度

発行日 平成26年2月6日

編集・発行 高知大学教育学部附属幼稚園

〒780-0915 高知市小津町10-26

TEL 088-822-6417 FAX 088-822-6412

ホームページ <http://ozu.cc.kochi-u.ac.jp/~kinder>

発達の連続性をふまえて経験の意味を問う

～よく考えて行動する子どもを育む行事のあり方～

高知大学教育学部附属幼稚園